

南島原市文化財調査報告書 第4集

原 城 跡 IV

— 平成13～20年度の調査 —
— 過年度調査のまとめ —

2 0 1 0

長崎県南島原市教育委員会



原城跡全景 (航空写真)



原城本丸跡全景（航空写真）



〔寛永十五年島原之乱図〕金子理濺著 南蛮文化館所蔵



本丸正門検出状況（航空写真）



本丸正門検出状況（東から）



本丸第二門検出状況（航空写真）



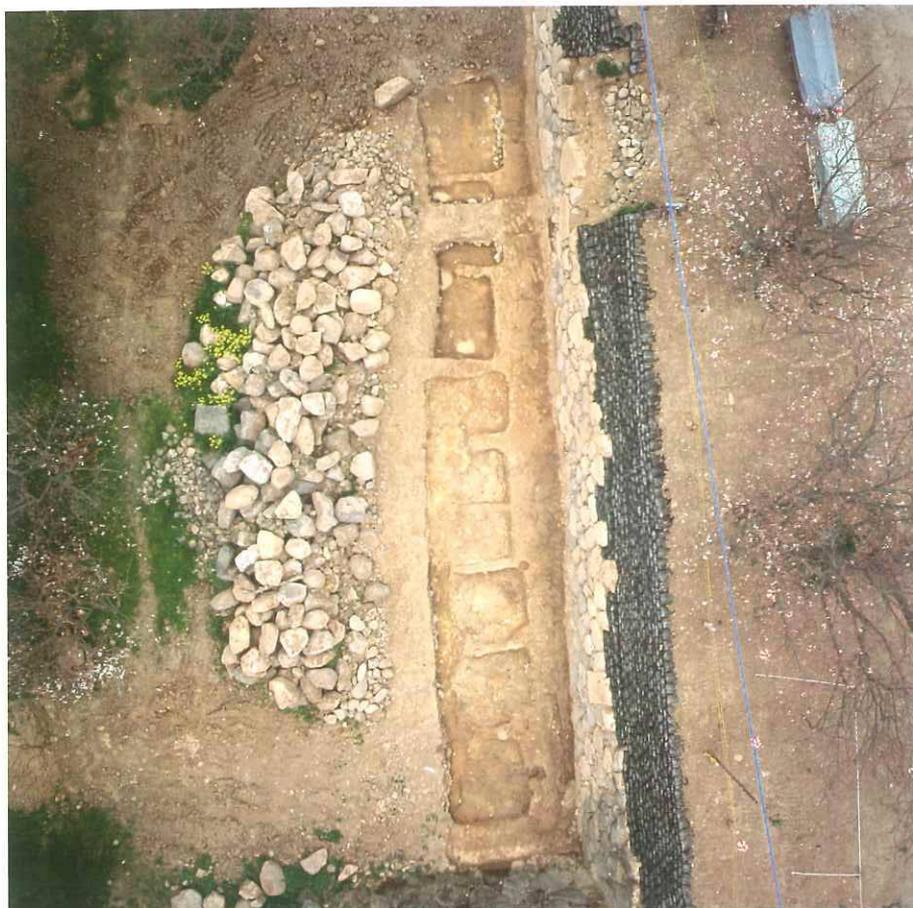
本丸第二門検出状況（南から）



本丸正門隅角石検出状況（南東から）



本丸正門水路検出状況（北から）



竪穴建物跡群検出状況（航空写真）



三の丸調査区全景（航空写真）



原城大手近景



大手地区検出の集石遺構（破却）

発刊にあたって

平成4年度より原城跡の発掘を進めて来たが、早くも20年近くの歳月が経過した。

今回、平成13年度から20年度にかけて実施した調査の報告と、調査開始以来の纏めを併せて本書を発刊する運びとなった。

御承知の様に、原城跡は寛永14年（1637）から翌年にかけて起こった島原天草の乱の主戦場であり終焉の地でもあるが、調査では、当初の予想を遙かに上回る発見があった。森岳城へ持ち去られたと考えられていた石垣の多くが現地に残り、原城の城郭建築を、実際の遺構に即して検討する事が可能となった。出土した数多くのキリシタン遺物は、此の争いに宗教的な関わりがあった側面を認識させ、出土遺物の大半を占める貿易品を含めた陶磁器類は、有馬氏全盛時代の経済的豊かさを彷彿とさせる。

一方、乱後、城の破壊に伴って埋め込まれた多くの亡骸は争いの凄まじさを見せつけ、余りの無惨さに胸塞がる思いを禁じ得なかった。

原城跡の調査は、情報量の豊かさと多様な価値観から、成果と共に多くの課題を抱える事となった。得られた情報は的確に処理し、解り易い形で公開・活用する事が必須だが、情報量の多さは、執筆者が丹誠を込めて書き上げた過去3冊の調査報告書と本書を併せても充分とは言い難いほどである。限定的な地区でのみ行われてきた調査範囲を広げ、全体像を把握する課題も残されているが、既存の情報を精査し速やかに公開する手立ても必要であろう。

地域振興の視点から原城跡に寄せられる期待も大きい。是までの情報整理と共に管理の徹底と整備が急務である。平成22年度に予定している整備基本計画の策定には多くの方々の御意見を承りたい。

原城跡は幾万もの命を散らした戦場の遺跡である。一揆軍・幕府軍という立場や宗教、思想信条を超えて、戦の残酷さ虚しさを訴えてくる。

此の意味を深く理解し、継承する人材を育むことこそ、原城跡を後世へ伝えていく要である。文化財保護の一取組に留まらず、教育行政の一端を担う者として肝に銘じたい。

調査の御指導を戴いた諸先生方や文化庁、長崎県教育庁など多くの関係者の御協力に厚く御礼申し上げ発刊の言葉としたい。

平成22年3月31日

南島原市教育委員会
教育長 菅 弘賢

例 言

1. 本書は、長崎県南島原市にある国指定史跡原城跡の文化財調査報告書である。本書の前半部分は平成13年度～平成20年度までの発掘調査報告であり、後半部分は既報告の平成4年度～平成12年度の調査も含めて成果を総集し、今後の調査、整備、研究に資することを目的としている。なお調査報告は平成13年度～平成18年度に実施した本丸地区調査を一括報告し、平成19年度に実施した三の丸地区調査についても検出遺構、出土遺物が少ないことと調査担当区分の兼ね合いから併せて章立てしている。平成20年度に実施した大手地区調査については、別途章立てしている。

2. 発掘調査は国庫補助事業として実施したものであり、平成13年度から平成20年度における各年度の調査期間は次のとおりである。なお既報告である平成4年度～平成12年度の状況については省略する。旧南有馬町（現南島原市）が刊行している『原城跡』『原城跡Ⅱ』『原城跡Ⅲ』を参照されたい。（以下の項目においても同様）

平成13年度	平成13年8月1日～平成14年3月29日
平成14年度	平成14年8月1日～平成15年3月31日
平成15年度	平成15年8月1日～平成16年3月31日
平成16年度	平成16年4月1日～平成17年3月31日
平成17年度	平成17年4月1日～平成18年3月31日
平成18年度	平成18年4月1日～平成19年3月31日
平成19年度	平成19年4月1日～平成20年3月31日
平成20年度	平成20年12月17日～平成21年3月31日

3. 平成13年度から平成20年度における各年度の調査組織および体制は次のとおりである。役職名は調査当時のものであり、現職の状況については省略する。

平成13年度

調査主体	南有馬町
総括	菅 弘賢 南有馬町教育委員会教育長
調査指導	本中 眞 文化庁文化財保護部記念物課
	田川 肇 長崎県教育庁学芸文化課 文化財指導監
調査担当	松本慎二 南有馬町教育委員会 学芸員

平成14年度

調査主体	南有馬町
総括	菅 弘賢 南有馬町教育委員会教育長
調査指導	伊藤正義 文化庁文化財保護部記念物課
	田川 肇 長崎県教育庁学芸文化課 文化財指導監
調査担当	松本慎二 南有馬町教育委員会 学芸員

平成15年度

調査主体 南有馬町
総括 菅 弘賢 南有馬町教育委員会教育長
調査指導 磯村幸男 文化庁文化財保護部記念物課
田川 肇 長崎県教育庁学芸文化課 文化財指導監
調査担当 松本慎二 南有馬町教育委員会 学芸員

平成16年度

調査主体 南有馬町
総括 菅 弘賢 南有馬町教育委員会教育長
調査指導 本中 眞 文化庁文化財保護部記念物課
高野晋司 長崎県教育庁学芸文化課 文化財指導監
調査担当 松本慎二 南有馬町教育委員会 学芸員

平成17年度

調査主体 南有馬町
総括 菅 弘賢 南有馬町教育委員会教育長
調査指導 本中 眞 文化庁文化財保護部記念物課
高野晋司 長崎県教育庁学芸文化課 文化財指導監
調査担当 松本慎二 南有馬町教育委員会 学芸員

平成18年度

調査主体 南島原市
総括 菅 弘賢 南島原市教育委員会教育長
調査指導 本中 眞 文化庁文化財保護部記念物課
高野晋司 長崎県教育庁学芸文化課 文化財指導監
調査担当 松本慎二 南島原市教育委員会文化財課 副参事

平成19年度

調査主体 南島原市
総括 菅 弘賢 南島原市教育委員会教育長
調査指導 本中 眞 文化庁文化財保護部記念物課
中尾篤志 長崎県教育庁学芸文化課 主任文化財保護主事
調査担当 松本慎二 南島原市教育委員会文化財課 副参事

平成20年度

調査主体 南島原市
総括 菅 弘賢 南島原市教育委員会教育長
調査指導 三宅克弘 文化庁文化財保護部記念物課
伊藤修一 長崎県教育庁学芸文化課 指導主事
中尾篤志 長崎県教育庁学芸文化課 主任文化財保護主事
調査担当 伊藤健司 南島原市教育委員会文化財課 主査

4. 平成13年度から平成20年度における現地調査での測量は、各年度の調査担当が発掘作業員の協力を得て行ったが、一部の測量については次のとおり委託業務として実施した。
平成13年度における本丸大榊形虎口撮影図化は、アジア航測株式会社長崎営業所に委託した。
平成14年度における本丸榊形虎口撮影図化は、アジア航測株式会社長崎営業所に委託した。
平成16年度における本丸榊形虎口石垣撮影図化は、アジア航測株式会社長崎営業所に委託した。
平成17年度における本丸石垣撮影図化は、アジア航測株式会社長崎営業所に委託した。
平成19年度における石垣撮影図化は、アジア航測株式会社長崎営業所に委託した。
平成20年度における遺構等平面図作成は(株)九州文化財研究所に委託した。
5. 調査時における写真撮影は各年度の調査担当が行った。
6. 平成13年度から平成20年度の調査に係る整理作業は主に原城文化センターで行い、関係者と作業分担は次のとおりである。
出土遺物の注記及び接合は壹岐美由紀（旧姓：中村）、本多瑠美、佐藤さおりが行い、実測図作成と拓本は壹岐、本多、佐藤、橋本幸男（文化財調査員）、伊藤が行った。トレースは壹岐、本多、内山貴有（文化財調査員）が行った。
遺物の写真撮影は原則として各年度の調査担当者が行ったが、平成19年度調査出土の土器類については伊藤が撮影した。
7. 本調査報告書に係る記録写真、図面等は原城文化センターに保管している。また出土遺物は原城文化センターおよび旧坂下小学校に保管している。
8. 調査時の方位は、平成13年度から平成19年度が磁北、平成20年度が真北である。
9. 発掘調査、整理作業ならびに本書の刊行にあたっては、文化庁、長崎県教育庁学芸文化課、平成17年度以前においては旧南有馬町の原城跡調査整備指導委員会、平成18年度以降は南島原市の文化財専門ならびに文化財保護審議会をはじめとして大変多くの方々に貴重な指導、助言、協力を賜った。謝辞については、報告項目別に述べさせて頂いている。
10. 本報告は松本、橋本、内山、伊藤が分担執筆し、執筆者名は本文目次および文末に記した。
11. 附編について平尾良光氏、魯視玆氏、田島俊彦氏に玉稿を賜った。
12. 本書の編集は伊藤による。

目次

巻頭図版
発刊にあたって
例言

本文目次

第1章	原城跡周辺の地理的環境（伊藤）	1
第2章	原城跡周辺の歴史的環境（伊藤）	4
第3章	平成13～19年度の調査（本丸地区・三の丸地区）	10
第1節	調査概要・遺構（松本）	10
第2節	出土遺物	33
1.	土器類（伊藤）	33
2.	貿易陶磁器（松本）	37
3.	国産陶磁器（松本）	54
4.	瓦（松本）	63
5.	キリシタン関係遺物（松本）	68
第4章	平成20年度の調査（大手地区）	77
第1節	調査の概要（伊藤）	77
第2節	遺構・土層（伊藤）	77
第3節	遺物（伊藤）	91
第4節	考察・小結（伊藤）	100
第5章	過年度調査のまとめ	103
第1節	原城の築城（松本）	103
第2節	原城の石垣（松本）	109
第3節	原城の破却（松本）	130
第4節	陶磁器・土器類の組成について（橋本・内山・伊藤）	135
第5節	瓦（橋本）	139
第6節	キリシタン関係遺物（松本）	164
第7節	原城跡出土人骨について（松本）	176
第8節	原城跡の保存と整備（松本）	178

写真図版

附編1	原城跡出土のキリスト教関連製品の鉛同位体比分析（魯禎玟・平尾良光）	239
附編2	原城本丸の石垣について（田島俊彦）	249

報告書抄録

挿 図 目 次

第1章	第1図	原城跡の位置	2
	第2図	原城跡周辺図	3
第2章	第1図	市内主要遺跡・関連遺跡分布図	5
第3章	第1図	本丸調査区位置図(広域)	11~12
	第2図	本丸調査区位置図	13~14
	第3図	竪穴建物跡群遺構図	15
	第4図	土坑遺構図	17
	第5図	本丸門遺構図及び石垣25・27立面図	18
	第6図	本丸正門破却遺構平面及び断面図	19
	第7図	本丸第二門破却遺構平面及び断面図	20
	第8図	本丸正門遺構平面図	22
	第9図	本丸第二門遺構図	24
	第10図	原城本丸石垣10・28・29立面図	25
	第11図	破却石垣堆積状況図	26
	第12図	本丸虎口空間帯遺構配置図	27~28
	第13図	三の丸調査区位置図	30
	第14図	検出石垣平面及び立面図	31
	第15図	出土遺物(土器類)①	34
	第16図	出土遺物(土器類)②	35
	第17図	出土遺物(貿易磁器)①	38
	第18図	出土遺物(貿易磁器)②	39
	第19図	出土遺物(貿易磁器)③	43
	第20図	出土遺物(貿易磁器)④	44
	第21図	出土遺物(貿易磁器)⑤	45
	第22図	出土遺物(貿易磁器)⑥	46
	第23図	出土遺物(貿易磁器)⑦	47
	第24図	出土遺物(貿易磁器)⑧	48
	第25図	出土遺物(貿易磁器)⑨	50
	第26図	出土遺物(貿易磁器)⑩	51
	第27図	出土遺物(貿易陶器)	53
	第28図	出土遺物(日本磁器)	55
	第29図	出土遺物(日本陶器)①	58
	第30図	出土遺物(日本陶器)②	59
	第31図	出土遺物(日本陶器)③	60
	第32図	出土遺物(日本陶器)④	61

	第33図	出土遺物（日本陶器）⑤	62
	第34図	出土遺物（鯨瓦）①	65
	第35図	出土遺物（鯨瓦）②	66
	第36図	出土遺物（飾り瓦）	67
	第37図	出土遺物（十字架／メダイ）	71
	第38図	出土遺物（ロザリオの珠／花十字紋瓦）	72
第4章	第1図	調査区位置図	78
	第2図	調査区配置図	79
	第3図	『綿考輯録』巻55 原城諸手仕寄之図	80
	第4図	A-1区・A-2区 集石遺構検出状況	84
	第5図	A-1区・A-2区 集石遺構断割り（石畳検出）状況	85
	第6図	A-1区東壁土層図	86
	第7図	A-1区サブトレンチ2東壁土層図	86
	第8図	A-1区サブトレンチ3南壁土層図	86
	第9図	A-2区南壁土層図	86
	第10図	A-3区西壁土層・遺構平面図	86
	第11図	A-4区西壁土層・遺構平面図	86
	第12図	A-5区西壁土層・遺構平面図	87
	第13図	A-6区遺構平面図	87
	第14図	A-7区西壁土層・遺構平面図	87
	第15図	A-8区西壁土層・遺構平面図	87
	第16図	A-9区西壁土層・遺構平面図	87
	第17図	A区石畳等検出状況平面図	88
	第18図	A-2・A-9区間北壁土層図	89
	第19図	B-1区土層および調査区平面図	90
	第20図	B-2区土層および調査区平面図	90
	第21図	集石遺構に伴う出土遺物	92
	第22図	調査区の出土遺物①	93
	第23図	調査区の出土遺物②	94
	第24図	出土銃弾の法量分布図	97
第5章			
第2節	第1図	本丸石垣配置図	119~120
	第2図	原城本丸石垣①	121
	第3図	原城本丸石垣②	122
	第4図	原城本丸石垣③	123
	第5図	原城本丸石垣④	124
	第6図	原城本丸石垣⑤	125

	第7図	原城本丸石垣⑥	126
第5節	第1図	軒丸瓦①	140
	第2図	軒丸瓦②	144
	第3図	軒丸瓦③	145
	第4図	軒丸瓦④	146
	第5図	丸瓦①	148
	第6図	丸瓦②	149
	第7図	丸瓦③	150
	第8図	軒平瓦①	154
	第9図	軒平瓦②/平瓦①	155
	第10図	平瓦②/道具瓦	157
	第11図	鯨瓦	158
第6節	第1図	十字架①	168
	第2図	十字架②	169
	第3図	十字架③	170
	第4図	十字架④	171
	第5図	十字架⑤	172
	第6図	メダイ	173
第8節	第1図	本丸跡保護工事実施状況平面図/保護工事状況写真①	180
	第2図	保護工事状況写真②	181
	第3図	保護工事状況写真③	182
	第4図	保護工事状況写真④	183
	第5図	保護工事状況写真⑤	184
附編1	図1	原城跡出土キリスト教関連製品の鉛同位体比	245
	図2	図1の拡大図1	245
	図3	図1の拡大図2	246
	図4	原城跡出土キリスト教関連製品の鉛同位体比	246
	図5	図4の拡大図1	247
	図6	図4の拡大図2	247
附編2	図1	原城築城時における取り残し石垣石(残石=岩塊・巨礫)の分布図	252

表 目 次

第1章	表1	原城付近の火山層序	1
第2章	表1	市内主要遺跡・関連遺跡一覧表	6
第3章	表1	遺物観察表(土器類)	36

	表 2	遺物観察表 (貿易磁器①)	73
	表 3	遺物観察表 (貿易磁器②/貿易陶器)	74
	表 4	遺物観察表 (日本磁器/日本陶器)	75
	表 5	遺物観察表 (十字架/メダイ/ロザリオの珠)	76
第 4 章	表 1	出土遺物集計表	91
	表 2	遺物観察表 (集石遺構に伴う遺物)	98
	表 3	遺物観察表 (石器)	98
	表 4	遺物観察表 (弥生土器・須恵器・土師器)	98
	表 5	遺物観察表 (陶磁器類)	99
	表 6	遺物観察表 (瓦)	99
	表 7	遺物観察表 (土製品)	99
	表 8	遺物観察表 (銃弾)	99
第 5 章			
第 2 節	表 1	原城本丸 散在石垣石の岩質	128
	表 2	原城本丸 築石の岩質	129
第 4 節	表 1	貿易陶磁器類集計表	136
	表 2	国産陶磁器・土器類集計表	137
第 5 節	表 1	軒丸瓦観察表	162
	表 2	丸瓦観察表	162
	表 3	軒平瓦観察表	163
	表 4	平瓦観察表	163
	表 5	道具瓦観察表	163
第 6 節	表 1	十字架観察表	175
	表 2	メダイ観察表	175
附編 1	表 1	原城跡出土のキリスト教関連遺物の鉛同位体比值	243~244
附編 2	表 1	島原半島南部の火山層序表	253
	表 2	原城石垣石に使用されている岩石の比重	260

写真図版目次

卷頭図版 1	原城跡全景 (航空写真)
卷頭図版 2	原城本丸跡全景 (航空写真)
卷頭図版 3	「寛永十五年島原之乱図」金子理澁著 南蛮文化館所蔵
卷頭図版 4	本丸正門検出状況 (航空写真) / 本丸正門検出状況 (東から)
卷頭図版 5	本丸第二門検出状況 (航空写真) / 本丸第二門検出状況 (南から)
卷頭図版 6	本丸正門隅角石検出状況 (南東から) / 本丸正門水路検出状況 (北から)
卷頭図版 7	竪穴建物跡群検出状況 (航空写真) / 三の丸調査区全景 (航空写真)

巻頭図版 8 原城大手近景／大手地区検出の集石遺構（破却）

図版 1	平成13年度～19年度の調査（本丸地区／三の丸地区）①	187
図版 2	平成13年度～20年度の調査（本丸地区／三の丸地区）②	188
図版 3	平成13年度～21年度の調査（本丸地区／三の丸地区）③	189
図版 4	平成13年度～22年度の調査（本丸地区／三の丸地区）④	190
図版 5	平成13年度～23年度の調査（本丸地区／三の丸地区）⑤	191
図版 6	平成13年度～24年度の調査（本丸地区／三の丸地区）⑥	192
図版 7	平成13年度～25年度の調査（本丸地区／三の丸地区）⑦	193
図版 8	平成13年度～26年度の調査（本丸地区／三の丸地区）⑧	194
図版 9	平成13年度～27年度の調査（本丸地区／三の丸地区）⑨	195
図版10	平成13年度～28年度の調査（本丸地区／三の丸地区）⑩	196
図版11	平成13年度～19年度の出土遺物（土器類）①	197
図版12	平成13年度～19年度の出土遺物（土器類）②	198
図版13	平成13年度～19年度の出土遺物（土器類）③	199
図版14	平成13年度～19年度の出土遺物（土器類）④	200
図版15	平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）①	201
図版16	平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）②	202
図版17	平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）③	203
図版18	平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）④	204
図版19	平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑤	205
図版20	平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑥	206
図版21	平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑦	207
図版22	平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑧	208
図版23	平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑨	209
図版24	平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑩	210
図版25	平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑪	211
図版26	平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶器）	212
図版27	平成13年度～19年度の出土遺物（日本磁器）	213
図版28	平成13年度～19年度の出土遺物（日本陶器）①	214
図版29	平成13年度～19年度の出土遺物（日本陶器）②	215
図版30	平成13年度～19年度の出土遺物（日本陶器）③	216
図版31	平成13年度～19年度の出土遺物（鯨瓦）	217
図版32	平成13年度～19年度の出土遺物（鯨瓦／飾り瓦）	218
図版33	平成13年度～19年度の出土遺物（十字架）	219
図版34	平成13年度～19年度の出土遺物（メダイ・花十字紋瓦）	220
図版35	平成13年度～19年度の出土遺物（ロザリオの珠）①	221
図版36	平成13年度～19年度の出土遺物（ロザリオの珠）②	222

図版37	平成20年度の調査（大手地区）①	223
図版38	平成20年度の調査（大手地区）②	224
図版39	平成20年度の調査（大手地区）③	225
図版40	平成20年度の調査（大手地区）④	226
図版41	平成20年度の調査（大手地区）⑤	227
図版42	平成20年度の調査（大手地区）⑥	228
図版43	平成20年度の出土遺物（集石遺構に伴う遺物）	229
図版44	平成20年度の出土遺物（集石遺構に伴う遺物／石器・弥生土器）	230
図版45	平成20年度の出土遺物（須恵器）	231
図版46	平成20年度の出土遺物（土師質土器・土師器）	232
図版47	平成20年度の出土遺物（陶器）	233
図版48	平成20年度の出土遺物（国産磁器）	234
図版49	平成20年度の出土遺物（貿易磁器）	235
図版50	平成20年度の出土遺物（瓦）	236
図版51	平成20年度の出土遺物（土錘／銃弾）	237

第1章 原城跡周辺の地理的環境

原城跡は長崎県島原半島の南東部、南島原市南有馬町大江名から浦田名にかけての海岸付近に位置する。寛永十四年（1637）から寛永十五年（1638）にかけて起こった「島原・天草の乱」の主戦場かつ終焉の地としてつとに広く知られ、昭和13年5月30日に国の史跡として指定されている。遺跡の規模及び史跡指定範囲は、北東から南西にかけて約1.3km、北西から南東にかけて約0.5kmの広がりがあり、範囲面積はおよそ42万㎡と広大である。有明海に接する標高30m程の崖上に築かれた本丸を起点として、北方に二ノ丸、三ノ丸、西方に鳩山出丸、南方には天草丸といった郭群が起伏の少ない微高地上に展開している。原城跡付近の地層形成については田島俊彦氏の論説に詳しいが^(註1)、こうした地形は約9万年前の阿蘇火山噴火による大規模火砕流（Aso-4火砕流）が、基盤をなす口之津層群の起伏を埋めることによって形成されたと考えられている。そもそも島原半島には地質学、とりわけ火山性にまつわる面で貴重とされる地点・地域が多く、平成21年には「島原半島ジオパーク」が「洞爺湖有珠山」「糸魚川」と共に“地質の世界遺産”と称される世界ジオパークに国内初認定を受けたところである。およそ原城の田尻門跡と推定されている付近であるが、原城跡東二ノ丸の海岸に面した露頭においては、先ほどの口之津層群とAso-4火砕流堆積層の不整合を露頭に見ることができる。これもまた地質の分野で大変貴重とされ、原城跡も「島原半島ジオパーク」の主要なジオポイントの一つとして位置付けられている。原城跡からの視界は大変に良く、雲仙山系の山々や有明海を介した対岸には熊本県の宇土半島方面などを眺めよく見渡すことができる。とりわけ一揆が計画されたと伝えられる湯島、通称“談合島”は間近に望むことができる。原城跡から周囲へ目を向けていくと平野

表1 原城付近の火山層序（註1文献より引用）

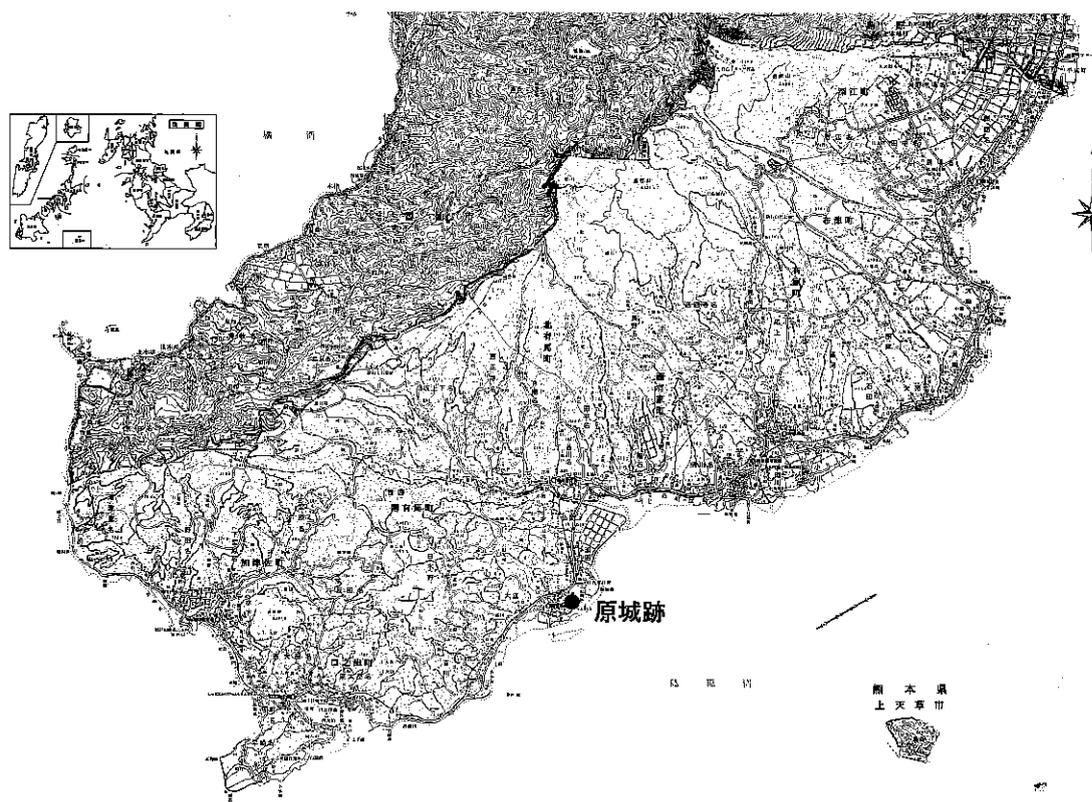
地質系統		層厚	地質と地質時代	記号
沖積層		0.3m~3m	沖積地 田・畑の表土層	a
阿蘇火砕流堆積物		0.7m~20m	阿蘇-4火砕流=07~09万年前 阿蘇-3火砕流=11~12万年前	Apf
北有馬層 更新世 中期 ~前期	大江貝層	12m±	海棲貝化石層	☆Osh
	中礫岩層	1m~5m±	チャート混じり中礫岩層	Kpc
	粗粒凝灰岩層 凝灰質泥岩層	5m±	1.43±0.27FT Ma（南串山層）	Kct
	基底礫岩層	5m±	角閃石~輝石安山岩類 ~玄武岩類の火山円礫岩層	Kbc
大屋層上部層 更新世 中期	含貝化石中礫岩層 ~シルト岩層	3m+	二枚貝化石を含む 中礫岩層~シルト岩層	Oum
	有馬火砕流堆積物	5m±	1.76±0.22 FT Ma（大屋火砕流）	Awt
大屋層下部層 更新世 前期	ラピリストーン層 ~粗粒凝灰岩層	12m±	黄白色一角閃石安山岩質 凝灰角礫岩層~ 水中火砕流堆積物	Olt
	細粒凝灰岩層~ 火山性シルト岩層	10m+	灰緑色一角閃石安山岩質 細粒質凝灰岩層 ~火山性シルト岩層	Ols

註 FT：放射年代測定法（フィッシュン・トラック法） Ma：Mega ans の略 百万年の単位

部はあまり無く、遺跡の北方を流れる有間川河口付近に幾らかの沖積地が広がっている程度である。史跡から西方の山あいには、「日本の棚田百選」に選ばれた白木野地区の谷水棚田が広がる。棚田の景観というのは非常に美しいものだが、農業生産の効率性という一面だけで捉えれば決して有利なものではない。このような周辺地形の特徴も間接的には「鳥原天草一揆」の起こった背景とあながち無関係ではなかったのかも知れない。気候は概ね温暖な地域であり、「市の木」に指定されている亜熱帯性植物のアコウは、緯度的にみて本市あたりが植生分布の北限をなすようである。

(伊藤)

註1 田島俊彦 1996「原城地域の地質」南有馬町文化財調査報告書第2集「原城跡」南有馬町教育委員会表1の補足をしておくと、北有馬層以下の層が文中の「口之津層群」に対応している。



第1図 原城跡の位置



第2図 原城跡周辺図 ※太線は史跡範囲

第2章 原城跡周辺の歴史的環境

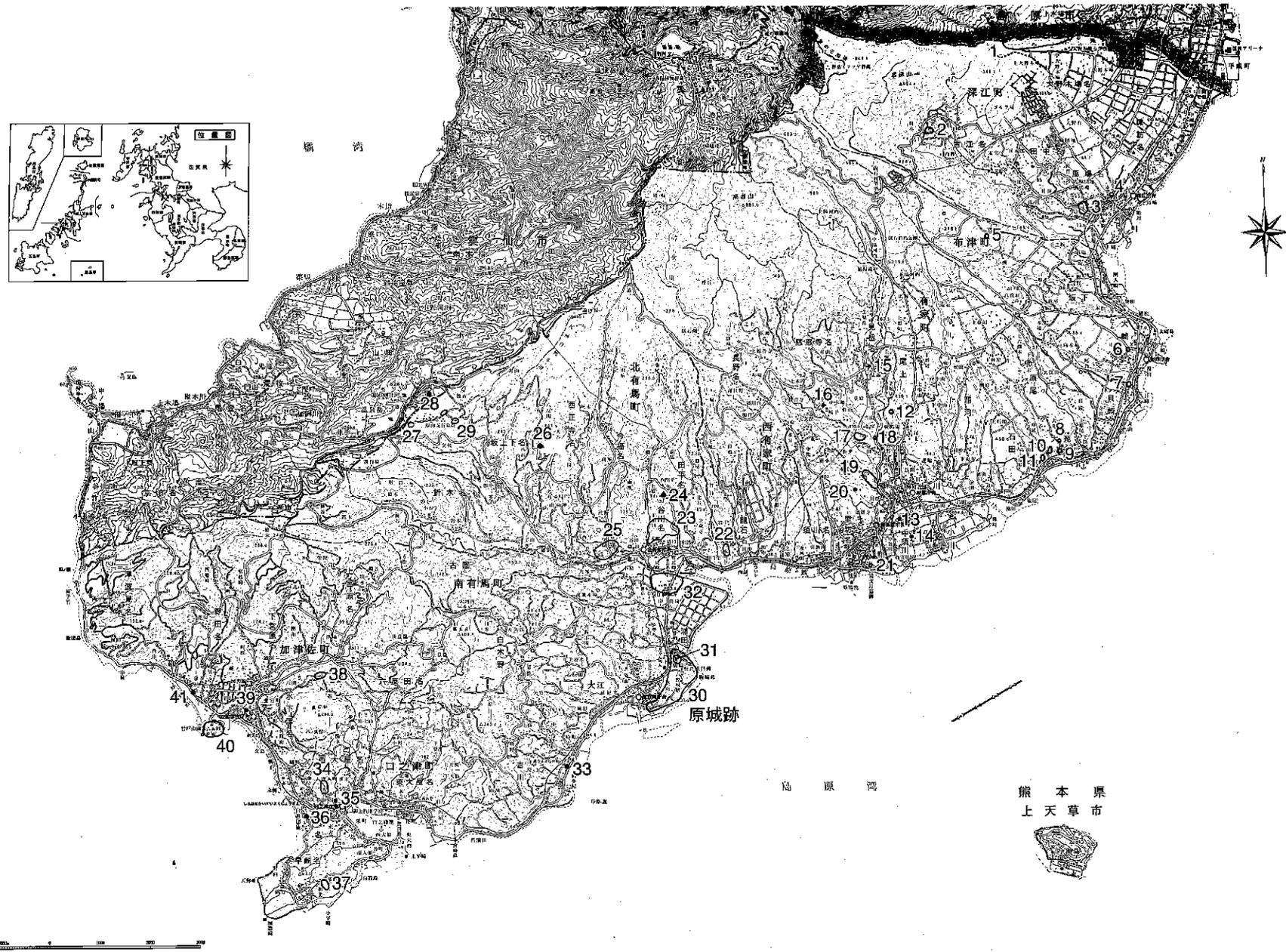
原城跡の所在する長崎県南島原市には180余りの周知遺跡があり、ここでは市内の主な遺跡を取り上げながら当地域の歴史性を概観しておきたい。時代別では縄文時代や弥生時代の遺跡が特に多く、「山ノ寺式土器」の標識名となっている山ノ寺梶木遺跡や原山支石墓群は、日本考古学史のうえでも著名な遺跡として挙げられる。山ノ寺梶木遺跡は昭和30年代の発掘調査等によって敷石住居跡、合口甕棺、石斧などの石器類、また土製紡錘車、組織痕土器、粉痕土器などが発見されたことから縄文稲作の問題と関わり注目を集めた。原山支石墓群は戦後の開墾によって発見された三群からなる国内最大規模の支石墓群であり、第2支石墓群および第3支石墓群が国史跡に指定されている。縄文・弥生移行期の埋葬習俗を考察するうえで重要な遺跡である。

近年調査が行われた主な遺跡としては権現脇遺跡が挙げられる。水無川上流域の砂防事業に伴って調査されたものであり、縄文時代後・晩期から弥生時代前期を主とする大量の遺物に加え、火砕サージや火砕流の熱風による倒木痕など火山活動の痕跡が調査時に発見され、地質学、火山学の面からも注目されている。

原城跡に程近い遺跡としては、北岡金比羅祀遺跡および今福遺跡が代表的である。いずれも有間川沖積地に築かれた遺跡である。北岡金比羅祀遺跡は昭和50年代の圃場整備事業に伴って調査がなされており、弥生時代前期末～中期前半頃の土器、合口甕棺や有柄式鉄剣形石剣などが出土している。今福遺跡の盛期は弥生時代中期～古墳時代初頭と中世の2時期にあるとされ、前者に関係するものとして竪穴式住居跡2棟、ドングリ貯蔵穴1基、甕棺墓5基および環濠の一部と考えられる「V」字溝などが発見されている。出土遺物には北部九州系および中九州系の搬入土器や、小形仿製鏡・銅鏃・ガラス製小玉・碧玉製管玉・立岩産石庖丁などがあり、有明海を介した交流・交易が想定されている。また、縄文時代からの伝統を引く貝類捕獲用の礫器と石庖丁が出土していることから、半農半漁型の集落であったこと、そして平野に乏しい当地域にあって稲作に比重をかけた事が、今福遺跡を地域の中心集落に発展させた要因であるとの報告がなされている。本書で取り上げる原城跡においても、北三の丸付近で弥生時代の浦田観音東側遺跡が重複しており、遅くとも弥生時代終末期頃には「原台地」の土地利用が開始されたことを窺い知ることができる。この点については平成19年度に実施した原城跡発掘調査の出土遺物からみることができる。古墳はあまり多くない。遺跡としての登録は数件あるが、古墳時代後期頃の小規模円墳で横穴式石室が残る布津の天ヶ瀬古墳が、古墳としての姿を留める唯一の例といえる。古代の状況については、遺跡のうえからはあまり明瞭でない。

ここまでは原城の時代より遙かに溯った遺跡を取り上げたが、大陸から近い為に支石墓などの外来文化が伝わりやすい点や、有明海に面するという地理的特徴から海を介した対外交流が盛んであるという点は、後の時代にあってもこの地域の歴史形成に大きな影響を与える要因であり、共通項として理解される。以下においては、有馬氏の台頭する中世以降の状況について見ていきたい。

肥前有馬氏の起こりについては『藤原姓有馬家世系譜』等の記録から、鎌倉時代（建保期）の藤原経澄をその始祖とし、出自については常陸より地頭職として高来郡有馬荘に補任されたと紹介される場合も多いが、実際のところ定かでない。外山幹夫氏は『深江文書』の記録などから、在地の開発領主からの発展を指摘されている。有馬氏代々の居城である日野江城跡の築造時期も関連するが、鎌倉



第1図 市内主要遺跡・関連遺跡分布図

表1 市内主要遺跡・関連遺跡一覧表

番号	遺跡名称	所在地(町名より)	種別	立地	時代	備考
1	権現脇遺跡	深江町大野木場名	遺物包含地	丘陵	縄文	
2	山ノ寺梶木遺跡	深江町田中名字山寺	遺物包含地	丘陵	縄文	
3	深江城跡	深江町馬場名立馬場	城跡	台地	中世	
4	井手口キリシタン墓碑	深江町馬場名井手口	キリシタン墓碑	丘陵	中・近	
5	鬼の岩屋古墳(天ヶ瀬古墳)	布津町坂下名西天ヶ瀬	古墳	台地	古墳	
6	布津町キリシタン墓碑群	布津町乙	キリシタン墓碑	丘陵	中世	県史跡
7	布津城跡	布津町貝崎名城山	城跡	台地	中世	
8	陣之内キリシタン墓碑	有家町大苑名城陣之内	キリシタン墓碑	扇状台地	近世	
9	大苑城跡	有家町大苑名城陣之内	城跡	海岸段丘	中世	
10	鳥辻の保塁	有家町大苑名城ノ原	城跡	扇状台地	中世	
11	堂崎城跡	有家町石田名古城	城跡	扇状台地	中世	
12	有家町尾上のキリシタン墓碑 有家町力野のキリシタン墓碑	有家町尾上名 (キリシタン史跡公園)	キリシタン墓碑	扇状台地	近世	県史跡
13	有家町中須川のキリシタン墓碑	有家町中須川名	キリシタン墓碑	平野	近世	県史跡
14	有家町小川のキリシタン墓碑	有家町小川名	キリシタン墓碑	平野	近世	県史跡
15	見岳キリシタン墓碑	西有家町見岳名養台寺	キリシタン墓碑	台地	近世	
16	慈恩寺(城平)キリシタン墓碑	西有家町慈恩寺名慈恩寺	キリシタン墓碑	台地	近世	
17	大垣城跡	西有家町慈恩寺名本ノ松	城跡	台地	中世	
18	岸田キリシタン墓碑	西有家町慈恩寺名岸田	キリシタン墓碑	台地	近世	
19	有家城跡	西有家町里坊名字本丸平	城跡	台地	中世	
20	里坊のキリシタン墓碑	西有家町里坊名切支谷	キリシタン墓碑	台地	近世	県史跡
21	吉利支丹墓碑	西有家町須川名松原	キリシタン墓碑	扇状地	近世	国史跡
22	小松崎城	西有家町龍石名松崎	城跡	台地	中世	
23	日野江城跡	北有馬町大字谷川名	城跡	丘陵	中世	国史跡
24	谷川のキリシタン墓碑	北有馬町谷川名字中屋敷	キリシタン墓碑	丘陵	近世	県史跡
25	今福遺跡	北有馬町今福名今福	遺物包含地	河岸段丘	弥古中ほか	
26	西正寺のキリシタン墓碑	北有馬町西正寺名	キリシタン墓碑	丘陵	近世	県史跡
27	原山第1遺跡	北有馬町坂上下名字原山	墳墓	台地	縄文	
28	原山支石墓群(第2遺跡)	北有馬町坂上下名字新田	墳墓	台地	縄文	国史跡
29	原山支石墓群(第3遺跡)	北有馬町坂上下名字原ノ尻河	墳墓	台地	縄文	国史跡
30	原城跡	南有馬町大江名~浦田名	城跡	台地	中・近	国史跡
31	浦田観音東側遺跡	南有馬町浦田名字北三の丸	遺物包含地	丘陵	弥生	
32	金比羅神社遺跡	南有馬町北岡名宮の脇茂	墳墓	平野	弥・奈	
33	南有馬町吉川のキリシタン墓碑	南有馬町吉川名字東田原	キリシタン墓碑	平地	近世	県指定
34	口之津城跡	口之津町西大屋名城山脇	城跡	台地	中世	
35	南蛮船来航の地	口之津町西大屋名字唐人町	史跡	平地	中世	県史跡
36	口之津町白浜のキリシタン墓碑	口之津町町名白浜	キリシタン墓碑	海浜	近世	県史跡
37	早崎城跡	口之津町早崎名城平	城跡	丘陵	中世	
38	古城跡	加津佐町六反田名	城跡	台地	中世	
39	加津佐町須崎のキリシタン墓碑	加津佐町水月名字須崎	キリシタン墓碑	沖積地	近世	県史跡
40	岩戸山樹叢	加津佐町岩戸山	天然記念物	-	-	国指定
41	加津佐町砂原のキリシタン墓碑	加津佐町野田名字砂原付	キリシタン墓碑	海浜	近世	県史跡

時代とするものもあれば、南北朝期の戦乱期に求める見方も一方で強い。いずれにしても発掘調査等による検証作業は必要である。その発掘調査であるが、平成7年度より旧北有馬町教育委員会により二ノ丸地区を中心に数回行われ、仏塔や切石を用いた独特な階段遺構、100m規模の直線階段遺構の検出、九州で4例目となった金箔瓦の出土を始め、多くの遺構・遺物の発見がなされている(※1)。

関連する遺跡として、有馬氏の出城とされる城跡が市内には点在している。

16世紀の中頃に至り、この地域の歴史は大きな転機を迎える。すなわち南蛮船の来航であるが、有馬義貞（義直）の求めによりルイス・デ・アルメイダが島原半島で布教を開始したことを契機に、1567年からは口之津が本格的なポルトガル船の入港地となっている。1580年に受洗しドン・プロタジオを名乗った有馬晴信は、キリスト教の積極的な庇護を図った人物として有馬氏歴代当主の中でも最も広く知られる。彼の治世下において、この地に華開いたキリシタン文化は絶頂期を迎えるが、その最たるものは天正年間における遣欧使節団（天正遣欧少年使節）の派遣といって過言ではないであろう。当時のヨーロッパ諸国では、極東の日本と言う国は存在すら定かに知られていなかった。そうした状況下において、セミナリヨに学び、深い知識と教養を備えた少年たちが突如使節として現れたわけであるから、相当なる驚きと熱烈な歓迎をもって受け入れられたようである。使節団の成果に関する詳細については割愛するが、彼らが持ち帰ったものの中に活版印刷機があり、加津佐の地で日本初の活版印刷が行われたというエピソードを一点だけ紹介しておきたい。ところで晴信が受洗した背景には、領国経営の行き詰まりによるイエズス会への支援要請という意味合いと、一方のイエズス会にとっても日本における重要な活動拠点を確保しておきたいとの思惑があり、双方の利害関係が合致したことによるとの大石一久氏の指摘がある。また関連として、市内にはキリシタン文化の定着を示すキリシタン墓碑が数多く点在しているが、銘によって年代の確認できるものはいずれも慶長期以降のものである。つまり布教の開始から、それが墓碑の形態に反映されるまで数十年の開きがあるわけだが、この点について大石氏は、布教の開始段階においては墓制の変更に対して柔軟な方針がとられたのだろうと指摘している。いずれの論も理にかなっており興味深い。

布教の着実な浸透は、反面で仏教徒にとっての受難を意味するものでもあった。この当時の寺社仏閣や仏像などの破壊は熾烈を極めたようである。例えばルイス・フロイスの『日本史』には、加津佐の岩殿山（現在の岩戸山）の洞窟において、破壊を免れるために各地の寺院から持ち込まれた多くの仏像を、司祭館で用いる薪とすべくフロイス自らの手によって破壊した事や、大きくて持ちだせないものには火を放った様子などが詳細に記されている。ところで『日本史』には市内各地の様子が記されているが、先の岩戸山もそうであるし、またセミナリヨが置かれた北有馬町八良尾の山深い光景など、彼の見た情景を今日においても可視的に追体験できるような場所が多い。異教徒に対する強烈な嫌悪感と偏見は否めないが、フロイスの洞察力と表現力そのものは極めて優れていたようである。

原城の築城時期については本書の後半でも詳述されているが、『島原半島史』において林充吉氏が述べた明応五年（1496）の築城、築城主は有馬貴純とする説が広く用いられてきた感がある。この説については、『藤原姓有馬家世系譜』が貴純の没年を明応三年としているために矛盾を孕んでいるとの指摘も多い。また世系譜の史料的価値自体を疑問視する見方もあり、その検証は必要である。少なくとも調査において検出され、現在姿をみることのできる本丸に限っては遺構・遺物の特徴、イエズス会の記録などから慶長期の築城として疑いようのないものとなっている。城跡全体として捉えた場合には、発掘調査を踏まえて検証していく必要があるだろう。

この後、「島原天草の乱（一揆）」に至るまでの大きな動きとしては、岡本大八事件（慶長十四・1609）による晴信の失脚、晴信の長男直純の日向転封（慶長十九・1614）、松倉重政の日野江城入城、元和元年（1615）の一国一城令を受けた日野江城・原城の廃城と森岳城の築城（元和四年～同七年）

といったものがある。一揆はこれより20年ほど後の、寛永十四年（1637）十月から翌十五年（1638）二月にかけて起こったものである。一揆の大まかな経過を述べておくと、有馬村の領民による代官殺害に端を発するもので、一揆軍は島原半島南部の南目（みなみめ）地方の領民を中心に組織された。島原半島での蜂起から程なく、一揆は肥後・天草へも飛び火し富岡城も一時包囲されるが、落城には至っていない。やがて天草の一揆勢は島原半島へ合流し、局面は原城の籠城戦へと移る。一揆は次第に持久戦と化した。城内の食糧や弾薬が尽きた末、二月二十八日に幕府軍の総攻撃によって終結したとされる。通説的に、原城に籠城した一揆軍の数は3万7千人で、山田右衛門作（えもさく）ただ一人を除く老若男女が全て殺害されたと伝えられてきた。しかし関連史料の分析を行った服部英雄氏によれば、3万7千の数的根拠は伝聞記事によるものが多く、原城総攻めの際の籠城者数を2万7千とする史料もあることから、実際には逃げ出していた者も多かったとされる。また細川家の記録からは生け捕りの者も多く、乱の終結後に一揆勢の全てが直ちに殺されたという見方には問題があることを指摘されている。対する幕府方は、諸藩の連合からなる12万超の軍勢によって鎮圧にあたっている。いずれにしても、当地域がこの戦いによって壊滅的な打撃を被ったことは事実であり、乱後には讃岐の小豆島や九州などの諸地域からの移住が行われている。

領民を蜂起に至らしめた背景は重層的で、藩の圧政や飢饉の影響という農民一揆としての性格と、キリシタン迫害への反動という宗教的要素が組み合わさっていたが、一揆後における幕府の公式見解としてはキリシタンの反乱として処理された。ただし、島原藩主の松倉勝家は改易処分の後に斬首となっており、幕府も藩の失政を重く受け止めていたことが理解できる。原城跡より国道251号線を挟んだ周囲には、乱時に幕府軍の陣場として用いられた丘陵群が展開している。原城跡とともに、これらの調査や保護も課題となっている。

「島原天草の乱」以降の主な出来事に2点ほど触れておく。寛政四年（1792）に起こった雲仙普賢岳の噴火災害は「島原大変肥後迷惑」としてよく知られる。眉山の山体崩壊により起こった大津波は、対岸の肥後にまで甚大な被害を及ぼし、さらに返しの津波が島原半島を襲っている。災害による死者・行方不明者は15,000人に及ぶと伝えられる。津波による多くの犠牲者は半島の沿岸地域にうち上げられたようであり、これを悼んだ島原藩によって半島各地に「流死菩提供養塔（寛政地変供養塔）」が建立された。南島原市内においては、布津町大崎、西有家町須川、南有馬町浦田に供養塔が今も残る。記憶に新しい雲仙普賢岳の平成噴火は、寛政地変からほぼ200年後の平成2年（1990）に起こったものである。本章の冒頭で紹介している権現脇遺跡の調査も、平成噴火後の復興事業に伴うものであり、当地域が豊かな自然の恩恵を受けてきた一方で、時としては火山の脅威に曝されてきた事が理解できる。

有馬氏の時代に、外国船の寄港地あるいは朱印船貿易における出航地として主要な役割を果たした口之津であるが、明治時代にも三池炭鉱（福岡県大牟田市）の石炭輸出港として大きな繁栄期を迎える。当時、遠浅の有明海に面した三池港には大型船が入港できなかったため、口之津が中継港として大きな役割を果たした。明治後半期に最盛期を迎え、当時は全国でも屈指の輸出高を誇る港として空前の活況を呈したようである。そうした繁栄の陰においては、「からゆきさん」と呼ばれる貧困の為に海外へ身を売られていく若い女性たちの姿もあった。『まぼろしの邪馬台国』の著者として知られる故・宮崎康平氏の作に『島原の子守唄』というものがあるが、これは「からゆきさん」の悲哀をう

たったものとされる。明治末に三池港が整備されたことにより中継港としての役割を終えていくが、口之津の多くの人々が三井財閥により船員として採用されたことから、その後も船員の町として暫くは活況を呈した。明治期に開設された長崎税関口之津支署庁舎の洋館風建物は今も残っており、長崎県の指定有形文化財となっている。また昭和50年代からは口之津歴史民俗資料館として活用に使われており、各時代の口之津の活況が偲ばれる資料が数多く展示されている^(※2)。現在の口之津であるが、島原半島と天草とを結ぶ定期フェリーが就航しており、地域海上交通の要衝としての役割を日々果たし続けている。

(伊藤)

※1 調査報告書も刊行されているが、調査成果の整理については未だ必要な部分が多くあり、現在市で取り組んでいる。平成22年度に、以後の調査も踏まえた報告書を刊行する予定としている。なお日野江城跡については、平成17年度に旧北有馬町などによる桜植樹に伴う無断現状変更が行われた。史跡の管理を所管すべき自治体による遺跡破壊という異例の事態であった。同じ年度の末に合併して発足した南島原市においても、この問題は極めて重く受け止めており、文化財保護の徹底に努めているところである。

※2 口之津歴史民俗資料館長の原田建夫氏より、口之津の歴史に関する教示を頂いた。

【参考・引用文献】

- 大石一久 2008「天正遣欧使節」服部英雄・千田嘉博・宮武正澄 編『原城と島原の乱』新人物往来社
- 高野晋司 編 1981『国指定史跡原山支石墓群環境整備事業報告書』北有馬町教育委員会
- 外山幹夫 1998「史跡日野江城跡の概要」木村岳士 編『日野江城跡』北有馬町文化財調査報告書第2集
北有馬町教育委員会
- 長崎県教育委員会 編 1997『原始古代の長崎県』資料編Ⅱ
- 長崎県教育委員会 編 1994『長崎県遺跡地図』一島原市・南高来郡地区一 長崎県文化財調査報告書第111集
- 中村質 1996「原城跡の概要」松本慎二 編『原城跡』南有馬町文化財調査報告書第2集 南有馬町教育委員会
- 服部英雄 2000「原城と有明海・東シナ海」石井進・服部英雄 編『原城発掘—西海の王土から殉教の舞台へ—』
新人物往来社
- 古田正隆 編 1981『北岡金比羅祀遺跡調査報告』南有馬町文化財調査報告書第1集 南有馬町教育委員会
- 本多和典 編 2006『権現脇遺跡』深江町文化財調査報告書第2集 深江町教育委員会
- 本多和典 編 2007『権現脇遺跡』赤松谷川1号床固工事に伴う発掘調査 南島原市文化財調査報告書第1集
南島原市教育委員会
- 松田毅一・川崎桃太 訳 2000『完訳フロイス日本史』9～12(大村純忠・有馬晴信編Ⅰ～Ⅳ) 中公文庫
- 松本慎二 編 2004『原城跡Ⅱ』南有馬町文化財調査報告書第3集
- 宮崎貴夫 編 1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第77集 長崎県教育委員会

第3章 平成13～19年度の調査（本丸地区・三の丸地区）

第1節 調査概要・遺構

(1) 平成13年度の調査概要・遺構

調査は平成12年度の本丸A区の調査によって検出した本丸虎口の北側部分において、本丸大柵形虎口から本丸へと向かう城道の全容解明のため、本丸B区である本丸虎口北側広場を調査した。

本丸虎口を構成する北側面の石垣である石垣21沿いに調査坑（TP67～72）と北側広場を設定し実施した。また、大柵形虎口を構成する石垣13の前面にある平坦な空間に調査坑（TP73）を設定、南側の本丸西側の石垣14前面広場部分には調査坑（TP74～76）を設定し実施した。

検出した遺構は、本丸虎口北側の石垣21に沿ってある城道部分と思われる所から、巨大な土坑を掘りこんで、石垣に使用した石材をその中に投棄している状況を確認した。土坑は本丸への入り口である柵形虎口への進行方向にある石垣21に沿って2箇所あり、中にはグリ石などがびっしり充填している状況である。

本丸西側に位置する、破却され埋め込まれていた石垣の前面広場部分から、南北方向の石垣14沿いに方形の竪穴建物跡が9区画連なって検出した。床面は焼けており、中からは多くの陶磁器や瓦、人骨などが出土した。

石垣13の前面空間では、石垣に沿って東側から西側に傾斜している地山を階段状に3区画に削平し、それぞれの空間からは陶磁器が多く出土した。

土 坑

検出した土坑は2ヵ所あり、整理上東側の土坑を第1、西側の土坑を第2と付した。第1土坑は、東西約5m、南北に約4mを測る不整円形で、中に石垣に使用した石材が充填されている。第2土坑は、南北に約5m、東西に4mを測る不整長方形の土坑で、中に石垣に使用した石材が充填されている。土坑は島原の乱後、原城を破却する際に掘り込まれた穴であると思われる。

石垣14（第3図）

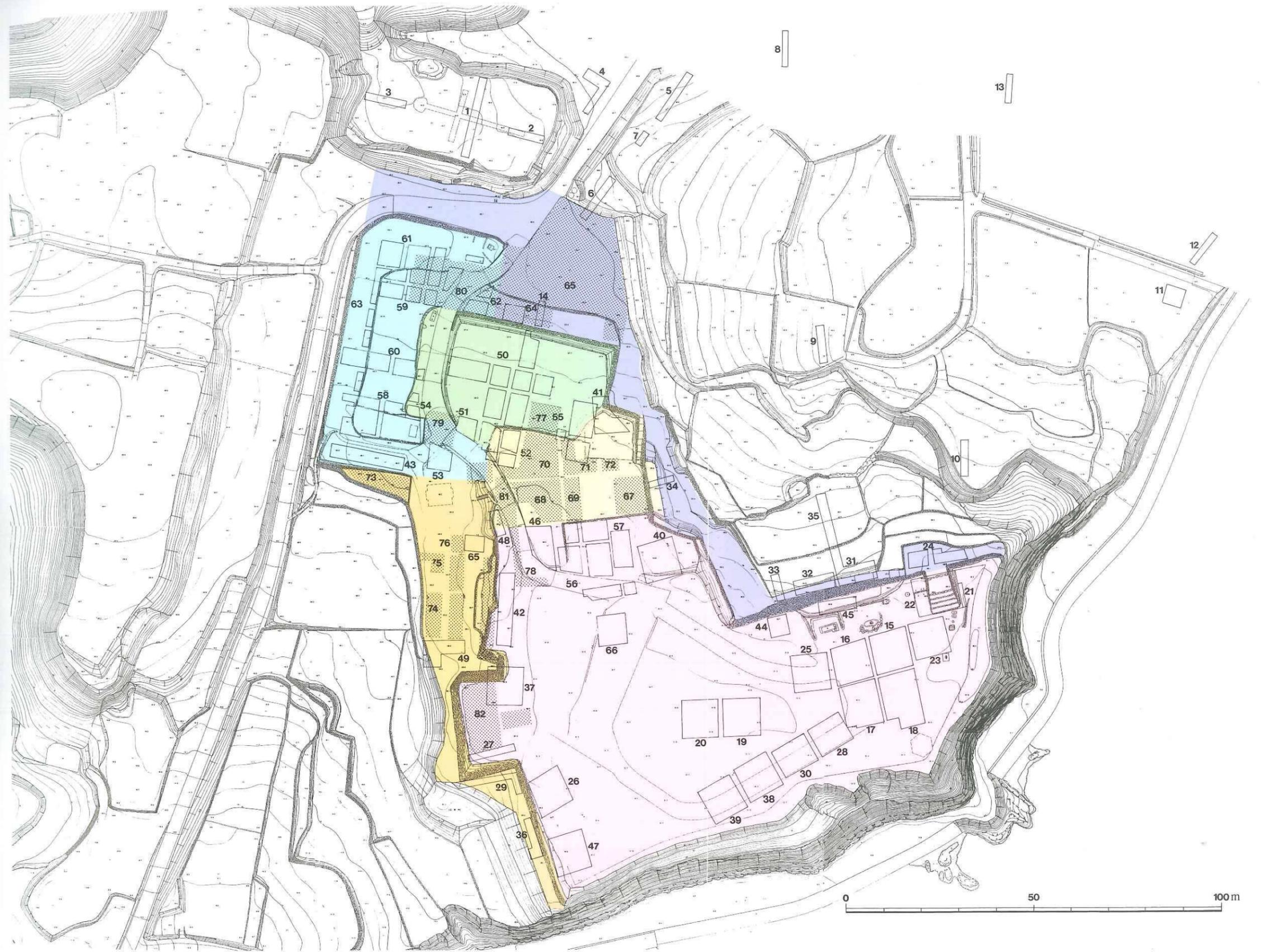
本丸A区西側の石垣15との交差部である内隅部から北側に延長する石垣14を検出した。破却により埋め込まれた石垣の残存部分で、総延長は約35mである。石垣15との内隅部の残存高は約4mをはかり、北側に行くほど低くなり、北側端での残存高は約1mである。残存石垣の石材は、デイサイト、玄武岩、複輝石安山岩であり、玄武岩の使用量が多い。石材の大きさは、全体的に大きめの石が多く使用されており、平均高は72.8cm、平均幅は、48.4cmの石材である。最大の石材は高さ約120cm、幅約120cmの巨石を使用している。

石材の表面観察から、石材には石灰藻・海藻類・セルプラ・貝殻など潮間帯の付着物が見られる。



1:4500

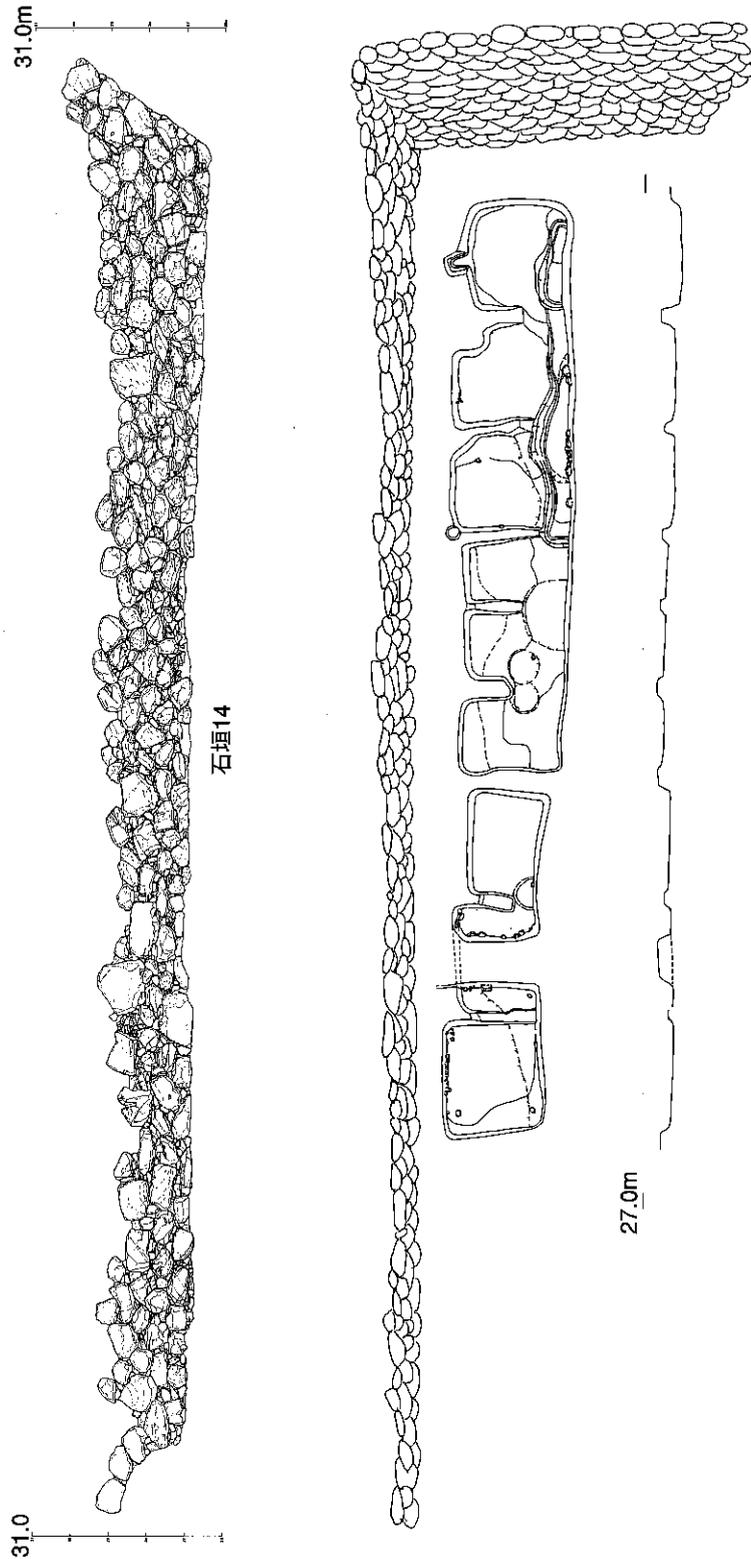
第1図 本丸調査区位置図 (広域)



第2図 本丸調査区位置図

竪穴建物跡群 (第3図)

本丸A区西側において、石垣14沿いに検出した竪穴建物跡群は、一辺が約2mから3mを測る方形の竪穴建物跡で、その建物跡が石垣14に沿って南北方向に9区画連なっていた。石垣側には幅約1mの通路と思われる空間が石垣に沿ってあり、西側は畑による耕作などで削平されている。



第3図 竪穴建物跡群遺構図

(2) 平成14年度の調査概要と遺構

調査は、昨年度本丸A区の本丸虎口北側広場で検出した巨大土坑の調査と、本丸A区で検出した、本丸虎口を構成する門前広場空間のプラン確認のため調査坑（TP78）を、大枡形虎口第2折部分を横断している、本丸への登城道路として設置されていた道路部分で、大枡形虎口の最初の開口部と思われる所を横断している部分に調査坑（TP80）を、大枡形虎口第2折部分を横断しているところに調査坑（TP79）を設定し実施した。

検出した遺構は、昨年度調査で上面部分を確認していた巨大土坑の第1と第2で、本丸虎口北側の城道部分と思われる所から、巨大な土坑を掘りこんで、石垣に使用した石材をその中に投棄している痕跡を検出した。土坑は本丸への入り口である枡形虎口への進行方向に沿うように2箇所あり、中からは多くのグリ石や陶磁器、瓦、人骨などが出土した。

また、本丸A区の本丸虎口の前面空間からは、本丸虎口を構成する石垣25の延長石垣を検出し、さらに内隅部で南北に折れる石垣26を検出した。

本丸D区の本丸大枡形虎口では、本丸最初の門と想定される場所と第2折れ部分において、通路空間部分に石垣の石材などの瓦礫が充填されているのを検出した。通路部分両側には石垣が存在し、明らかに城道であることがわかった。

土坑-1（第4図）

第1土坑は、東西約5m、南北に約4mを測る不整円形で、中に石垣に使用した石材が充填されている。深さ約1mで、陶磁器や瓦、人骨なども出土した。石垣に使用されていたと思われる巨石材18個が入る。巨石については移動及び取り上げも行っていない。土坑は島原の乱後、原城を破却する際に掘り込まれた穴であると思われる。

土坑-2（第4図）

第2土坑は、南北に約5m、東西に4mを測る不整長方形の土坑で、中に石垣に使用した石材が充填されている。石垣に使用されていたと思われる巨石材20個が入る。巨石については移動及び取り上げも行っていない。深さ約1mで、第1土坑と同じく陶磁器や瓦、人骨なども出土した。

石垣25（第5図）

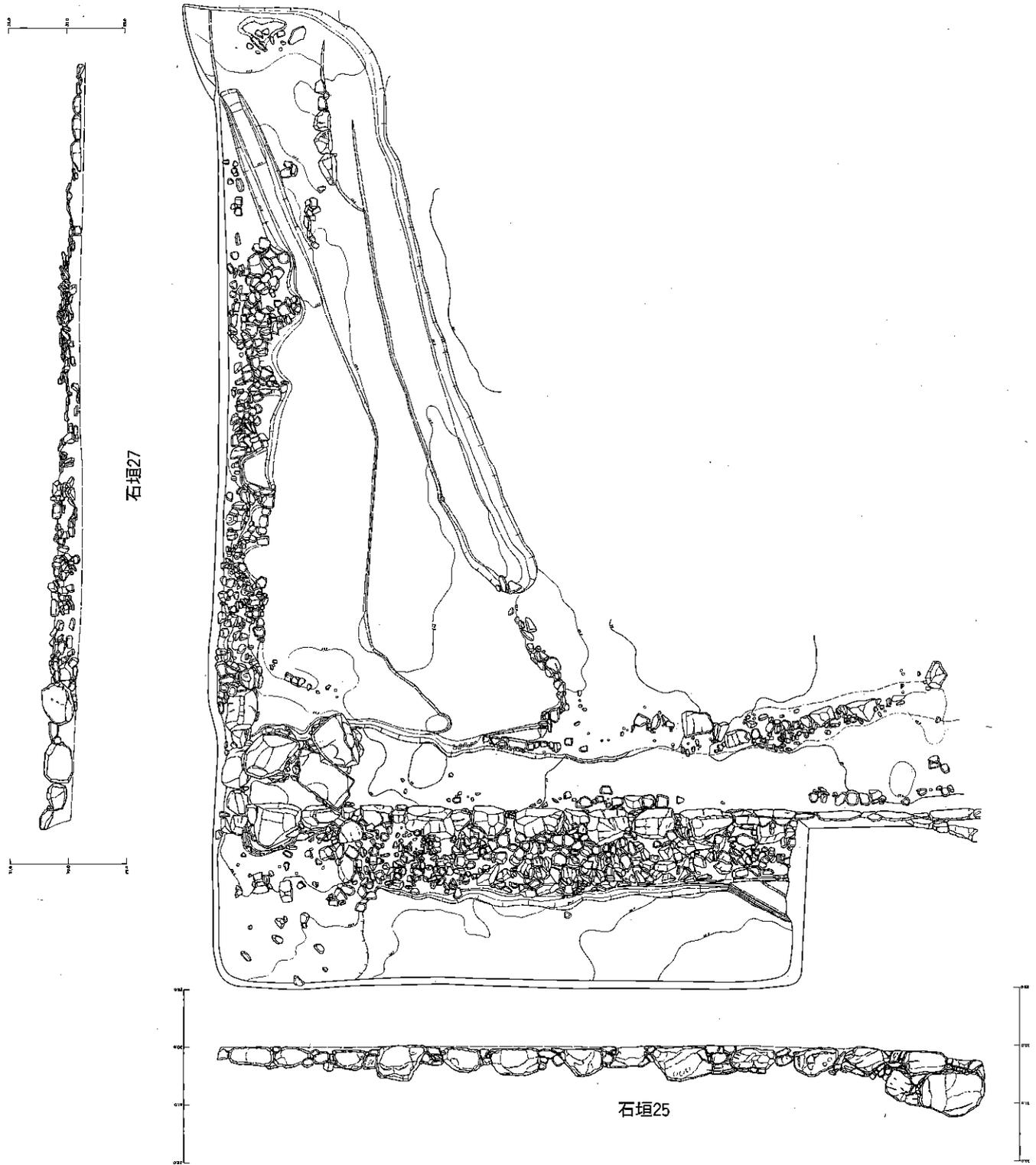
本丸A区の本丸虎口を構成する石垣の一部分で、本丸からみて右側の石塁を張り出した外枡形の対面にある石垣である。基底石のみであり、隅角部の算木は不明であるが、一部「鏡石」も存在する。石垣25前には礎石もあることから、門に伴う建築物と関連する石垣である。

石垣27（第5図）

石垣25の内隅部から北側に折れる石垣である。内隅部の基底石のみであり、築石と間石を含め7石しか残存しておらず、残り北側延長部は基底石痕と思われる窪みがある。基底石痕は内隅部より10mまでは確認できたが、それ以降は削平され確認できなかった。石垣の番号を「石垣27」とした。



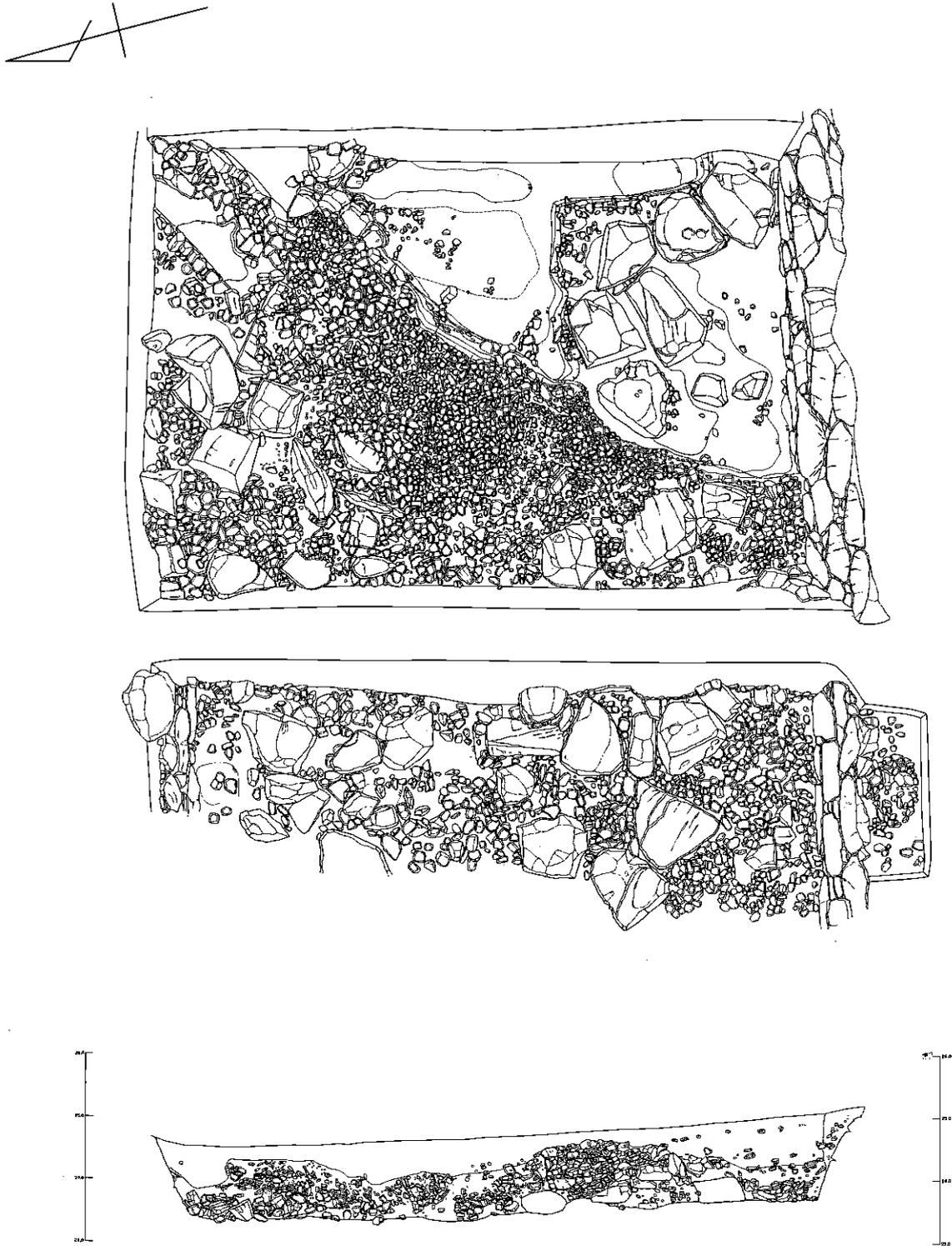
第4图 土坑遺構図



第5図 本丸門遺構図及び石垣25・27立面図

(3) 平成15年度の調査概要と遺構

調査は昨年度、大柵形虎口の最初の開口部および第2折部分において、石垣の石材を充填した破却の状態や石垣などを確認しているところの調査を主に行った。この場所は石垣の石材で充填されており、まず、その石材の取り上げを行なった。また、大柵形第2折部分から本丸虎口へ向かう城道の確認のため TP79の南側上段部分に調査坑（TP81）を設定し実施した。



第6図 本丸正門破却遺構平面及び断面図

検出した遺構は、大柵形虎口の最初の開口部においては、石垣の石材を埋め込んだ破却の状況を検出（第7図）、また、第2折部分では階段遺構や石垣を検出した（第8図）。



第7図 本丸第二門破却遺構平面及び断面図

階段遺構

階段遺構は、石垣19と石垣26に挟まれた平坦部分から東方向に上がる構造になる。破壊により殆どの踏み石は外されているが、一段目の5石がと二段目の2石の踏石が残る。階段の北側端、石垣19との間に幅約50cmの溝があるが上部分は破壊により不明である。城道としての空間は幅約6m、階段の幅は約4.7m、踏み面は約70cm、蹴上げ高は約20cmである。

(4) 平成16年度の調査概要と遺構

大枅形虎口の最初の開口部分と第2折部分の調査である。昨年度の調査において、石垣の石材などで充填されている空間から、石垣の巨石は残し人頭大の石（グリ石）と土砂のみ取り上げ、階段遺構および溝状遺構などを検出した。しかし、石垣の巨石はこの空間からは移動させていないので、最初の開口部および第2折部分の詳細な状況は不明であった。今年度は、これらの石材を移動させ調査を実施した。

検出した遺構は、最初の開口部である空間からは、床面から礎石、溝遺構、階段遺構、玉砂利を検出し門であることがわかった。この部分を本丸正門と呼称する。

第2折部分からは、床面から玉砂利、溝遺構を検出し第2門である可能性が高くなった。

本丸正門（第8図）

本丸大枅形虎口の最初の開口部に位置する。南北に石垣および石塁が築かれ東西に開口するプランで、櫓門と推定できる礎石列および階段や溝遺構が検出され、その規模から本丸の正門であることがわかった。本丸正面入口の石垣間に、幅約9mの開口部となり東を向く。

礎石

検出した8基の礎石は門の柱を支えるためのものと考えられる。礎石列は、南北に2列、4基ずつの礎石が並ぶ。礎石から見た柱間は、1間が6尺5寸（1m97cm）の京間を基準とする桁行4間、梁行2間を測り、枅形を構成する石垣の間におさまる形となる。礎石の位置から、正面4間のうち中央2間には扉が入り、両脇各1間のいずれかにも扉が入っていた可能性がある。

礎石の規模は、大きなもので130cm×120cm、小さいもので80cm×80cmであるが、そのうち、正面の4基の礎石が大きい。石材は全て玄武岩である。

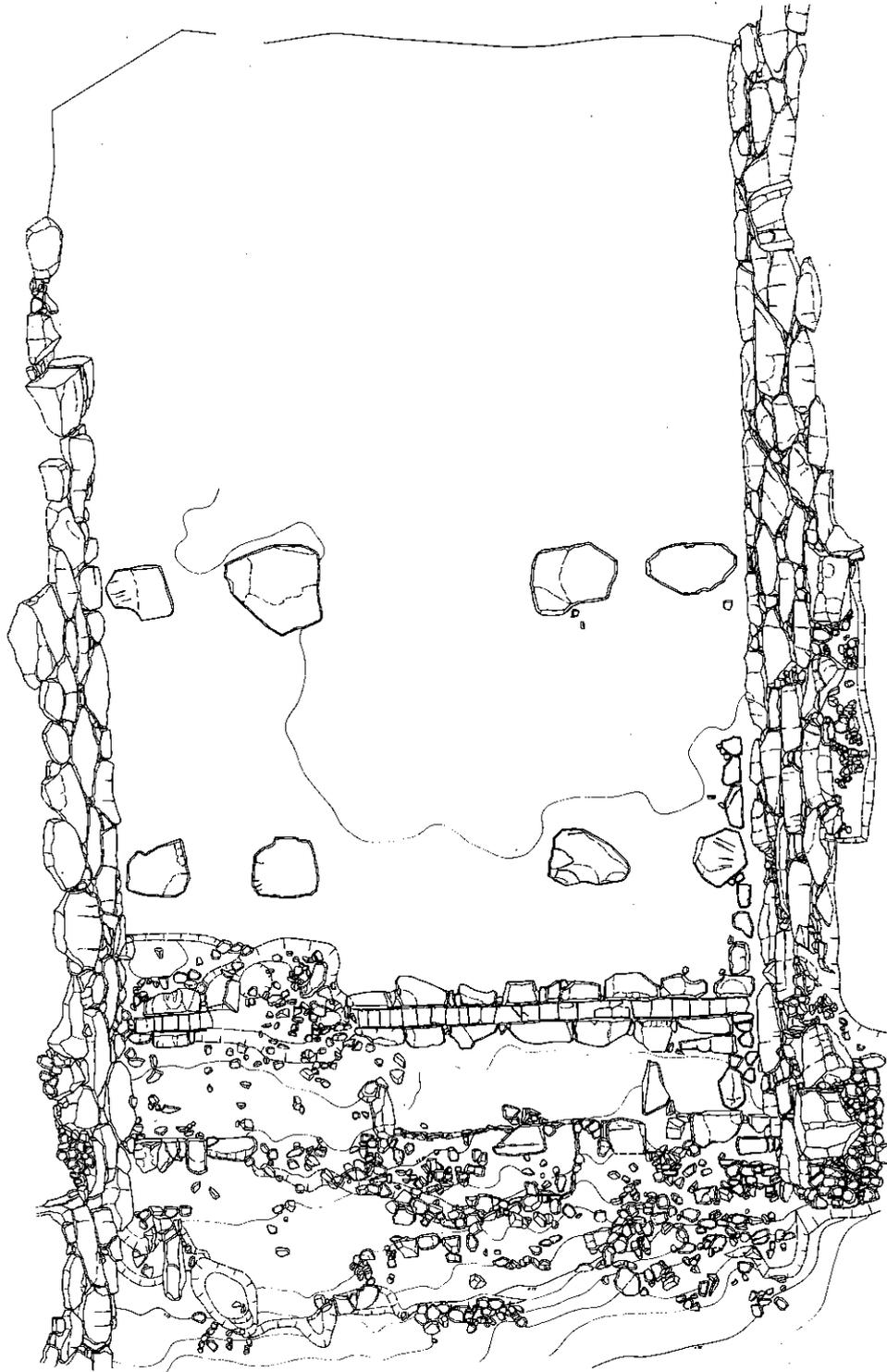
階段遺構

正面礎石列から7.5m内部に入り、西に向かって上る階段を検出した。破壊により殆どの踏み石は外されているが、一段目の6石が残る。二階目以降については破壊されスロープ状になる。階段の幅は南北に約9m、踏み面は約1m、蹴上げ高は約30cmである。

石組水路

正面礎石列から約6m内部に入り階段遺構の前面で、南北に横断する水路を検出した。水路の長さは南北に約9mを測り、水路北側に溜枅状の掘り込みがある。側壁には石材を用い、底部には平瓦を

敷いている。水路始点は門を構成する石垣10側からで、底面は北側に向かって傾斜している。水路の幅は約30cm、深さは石垣10側で17cm、溜め枡状土坑側で約25cmを測り、8cmの傾斜である。北側の石垣28から南側に向かって傾斜する水路の幅は約30cm、深さは石垣側で約18cm、溜め枡状土坑側で約23cmを測り、5cmの傾斜である。



第8図 本丸正門遺構平面図

(5) 平成17年度の調査概要と遺構

平成16年度で検出した本丸正門と第2門の調査である。一部の床面に玉砂利などが検出されたため、それぞれの床面を掘り下げ玉砂利の検出と下部の状況確認のための調査を行った。また、石垣10の前面にある犬走り状の一部を掘り下げる調査を行なった。

検出した遺構は、本丸正門においては、門正面の石垣隅角部や溜枿遺構を検出した。石垣10の前面からは大量の石垣石材が充填された中から、一揆軍の死者と思われる人骨も出土した。第2門では、平成11年度に門前面から検出した、水路の延長部を検出した。水路は、第2門を構成する両石垣に沿って造られ、両脇に断面が長方形の平たい石材を並べ溝の縁としている。

水路

水路は、第2門を構成する両側の石垣（石垣19・26）に沿って造られ、両脇に断面が長方形の平たい石材を並べ溝の縁としている。水路の幅は約30cm、東方向に上がる階段に取り付く構造になる。石垣19沿いの水路は、階段に直線的に取り付き、石垣26沿いの水路は、階段手前でいったんL字形に折れる構造になっている。階段の両脇水路は破壊により不明であるが、両脇には水路があったようである。

石垣10（第10図）

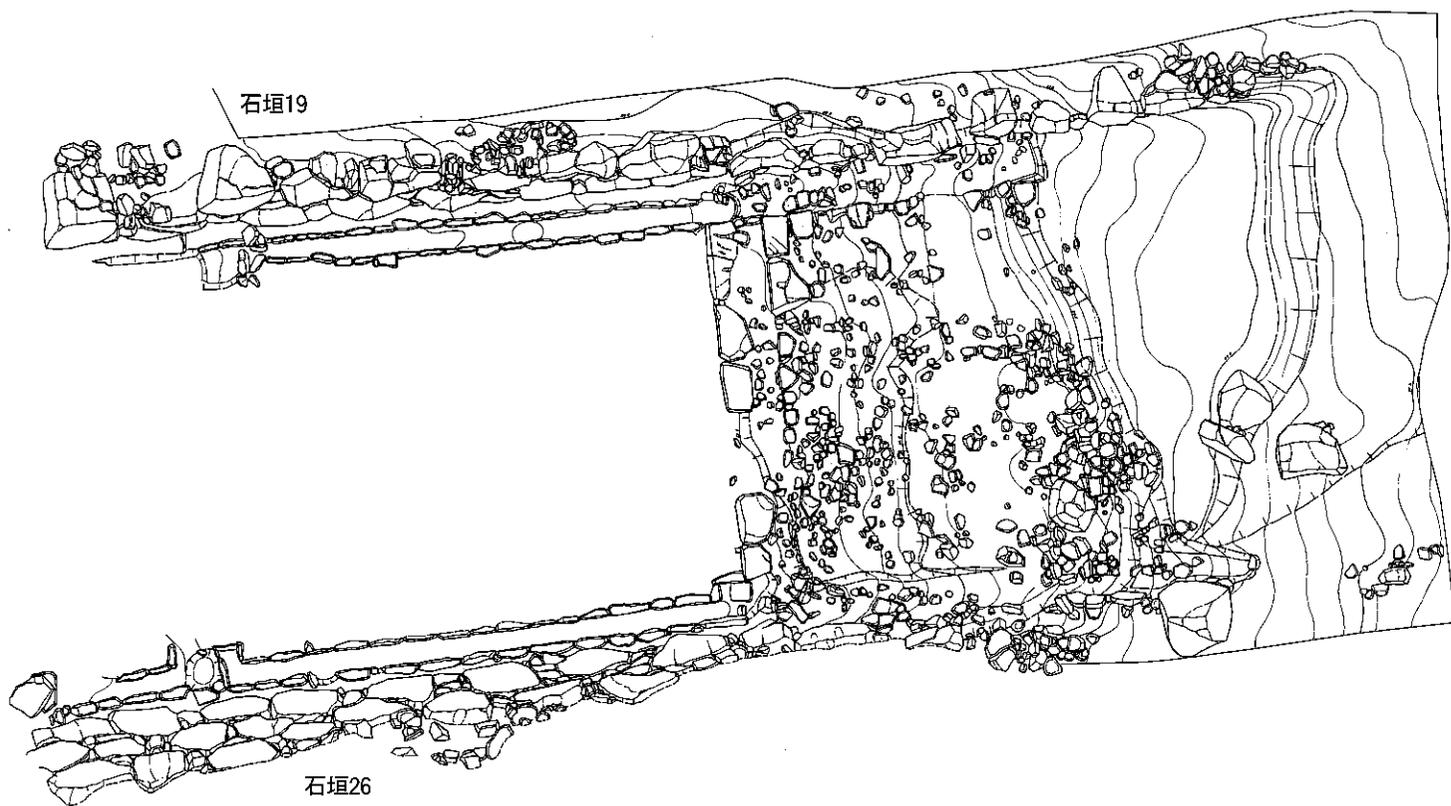
本丸正門を構成する石垣で、二の丸から見ると正面に見える長い石垣である。石垣は東西に並び、東側は既存の石垣10として存在していたが、西部は本丸正門の破却に伴い埋め込まれた石垣であった。検出した石垣の西端は、石垣20との隅角部となっており、大部分が破壊され角石は基底石を含め2石が残るだけで、上部の算木積み状況は不明である。天端部分は完全に壊されており、築城当時の石垣の高さは不明である。

石垣28（第10図）

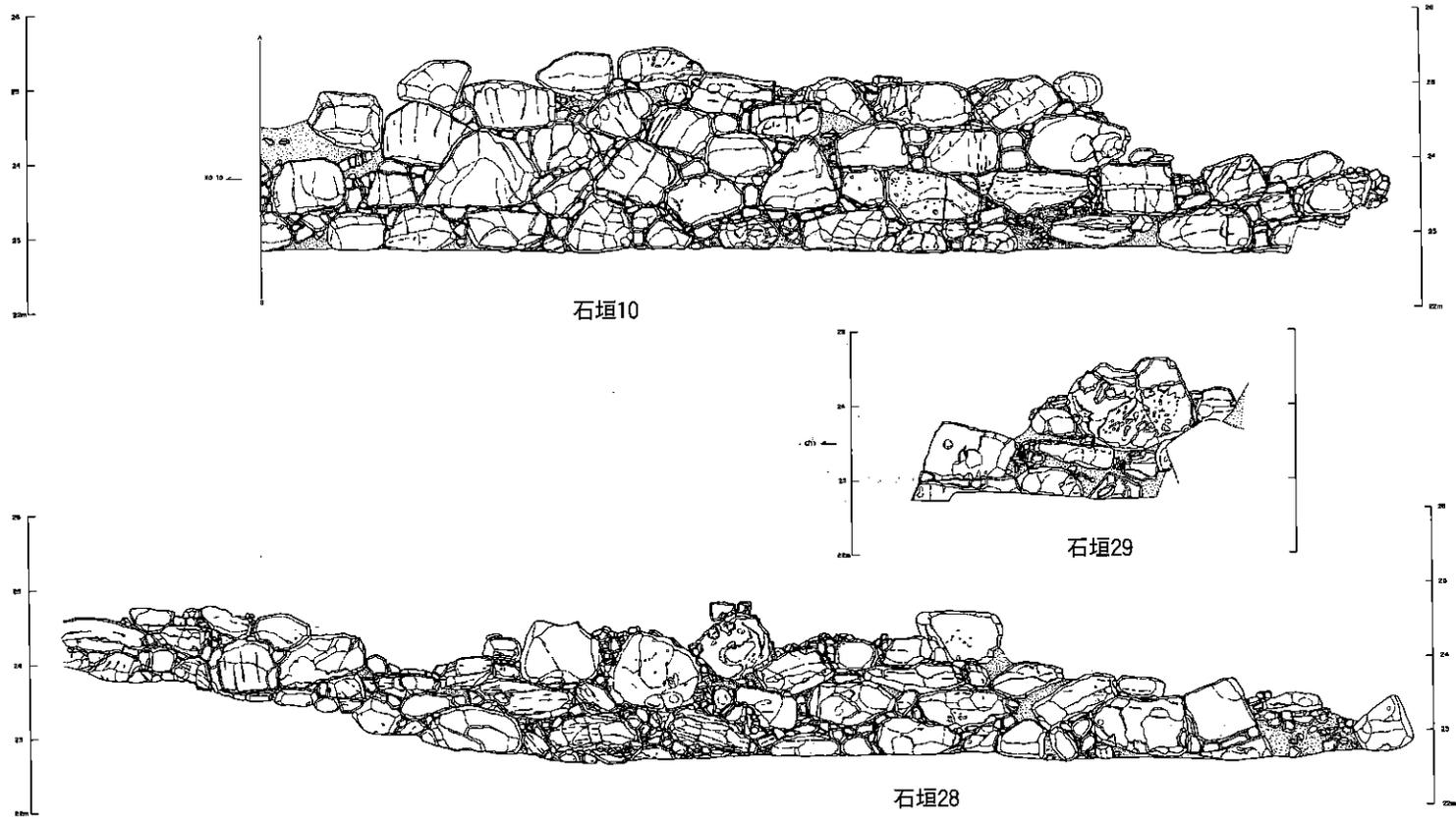
本丸正門の、外柵形を構成する内部空間の石垣である。石垣は東西に並び、東端は隅角部である。門の空間には礎石もあることから、門に伴う建築物と関連する石垣である。築石のほとんどが玄武岩で構成されており、割面をもたない自然石である。隅角部は、大部分が破壊され角石は基底石を含め2石が残るだけで、上部の算木積み状況は不明である。天端部分も完全に壊されており、築城当時の石垣の高さは不明である。石垣の番号を「石垣28」とした。

石垣29（第10図）

本丸正門の、外柵形を構成する石垣の隅角部を検出した。石垣の北側半分は未堀であるが、南北方向に並んでいるのが確認できる。隅角部は、大部分が破壊され角石は基底石を含め2石が残るだけで、上部の算木積み状況は不明である。天端部分は完全に壊されており、築城当時の石垣の高さは不明である。石垣の東面、城内では特に正面性の強い場所で限定的に使用される「意匠」重視の石積み様式である「鏡積み」石垣を検出した。石材は高さ約120cm、幅約170cmの巨石を使用している。石垣の番号を「石垣29」とした。



第9図 本丸第二門遺構図

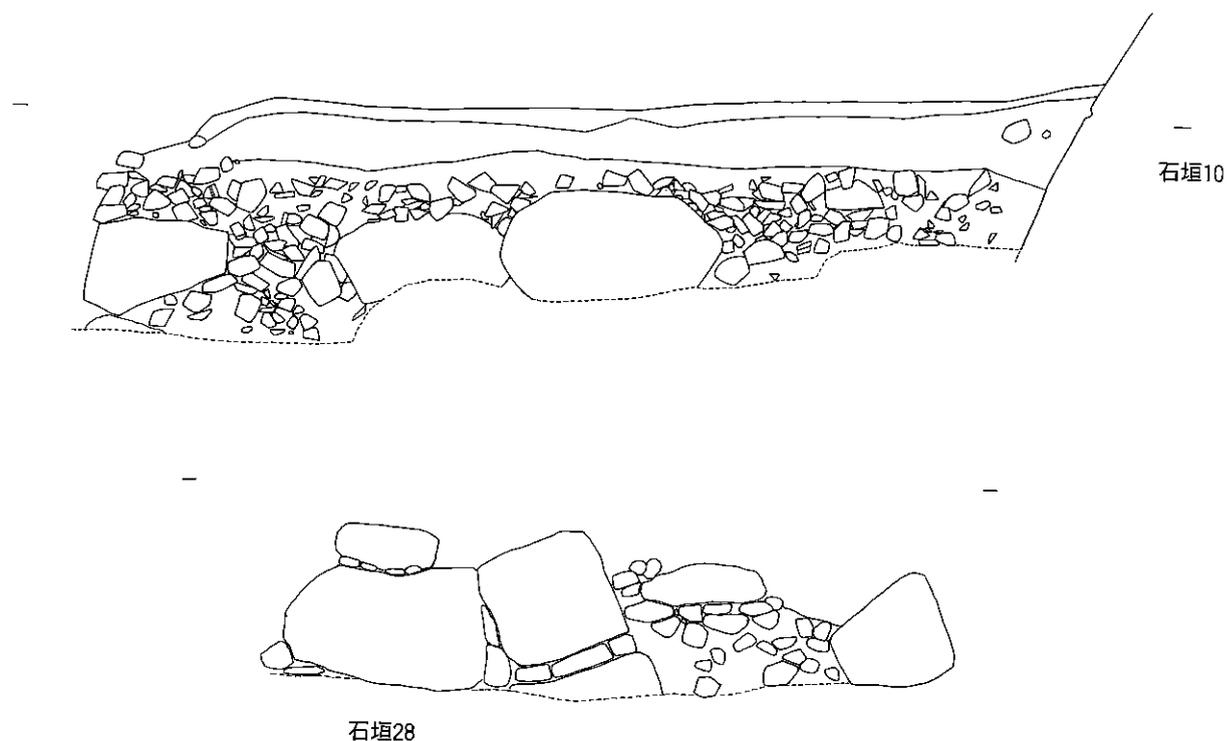


第10図 原城本丸石垣10・28・29立面図

(6) 平成18年度の調査概要と遺構

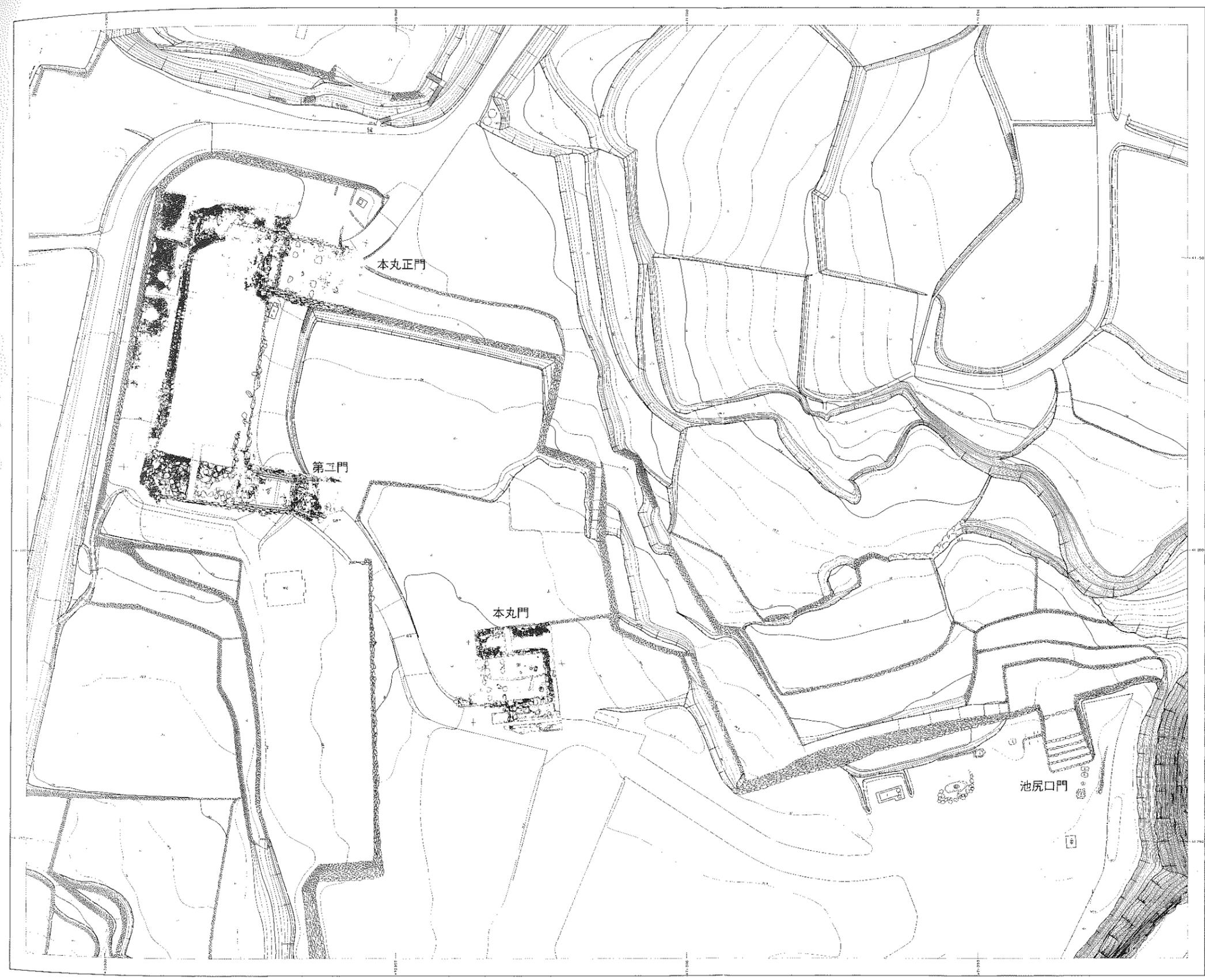
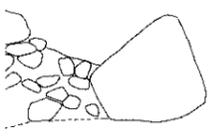
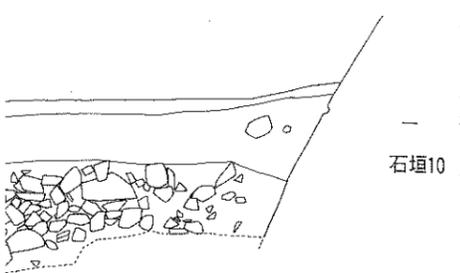
本丸正門前に広がる空間で、二の丸から本丸地区に入った最初の空間である。調査は、本丸正門前広場の施設遺構確認の調査である。特に昨年検出した石垣29の前面と石垣10の前面の調査では、石垣前の破却状況も確認できた。壊した石垣の築石を引きずり出し、石垣と平行に並べた状況を確認した。石垣と築石の間はある程度の空間があり、たくさんの石材や土砂が充填されていた。その石を境に石材が存在しないことから、これらの為は、石垣破壊の時に、裏込め石や土砂などの堆積物の崩れを防止するための作業と思われる、原城特有な破却の状況である。

また、石垣29の隅角部の間石に使用されている宝篋印塔の塔身を確認した。塔身は複輝石安産岩である。



第11図 破却石垣堆積状況図

初の空間である。調査は、本丸正門前
 前面と石垣10の前面の調査では、石垣
 ，石垣と平行に並べた状況を確認した。
 砂が充填されていた。その石を境に石
 込め石や土砂などの堆積物の崩れを防
 身を確認した。塔身は複輝石安産岩で



第12図 本丸虎口空間帯遺構配置図

(7) 平成19年度の調査概要と遺構

原城の三の丸は、原城の北部一体の約2万㎡に及ぶ広大な地区である。東側には大手門跡があり、原城の重要な地区であるが、築城期の状況は不明である。「島原の乱」期の資料で三の丸は、南北220間、東西122間、高さ7間半とされ、約3,500人で守備したと記されている。原城の東側は有明海、西側は一面泥土であり、唯一三の丸の西側が通行可能であったといわれている。そのため、幕府軍との最初の激戦地でもあり、その後、三の丸を攻略した幕府軍は二の丸を経て、本丸へと進撃したのである。現在は、ほとんどが畑地であり、中央部に板倉重昌碑が立てられている。

調査は、板倉碑の周辺部で門遺構や島原の乱期の遺構の確認のために行った。検出した遺構は、板倉重昌碑付近北側広場の法面部分より、石垣遺構を検出した。構築時期は不明であるが、有馬氏時代に構築されたものと思われる。出土遺物は、瓦、陶磁器、土器、火縄銃の鉛玉が出土している。

石垣 (第14図)

石垣は、TP2の西側でL字状に折れ曲った法面部より検出した。裏込め石を伴う石垣であり、幅約3m、高さ約1m、裏込め石幅約1mを計る。天端部分はなく高さは不明である。使用石材は、規格性の乏しい小ぶりの自然石を使用して、直立型石垣に仕立てているという特徴があり、中世城郭の石垣としての特徴であるため有馬氏時代に構築されたものと思われる。

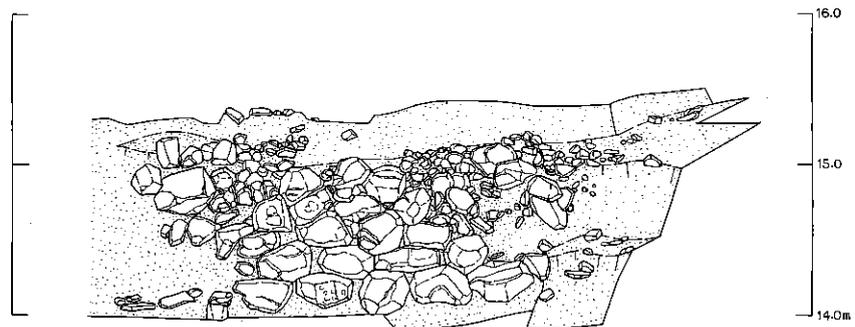
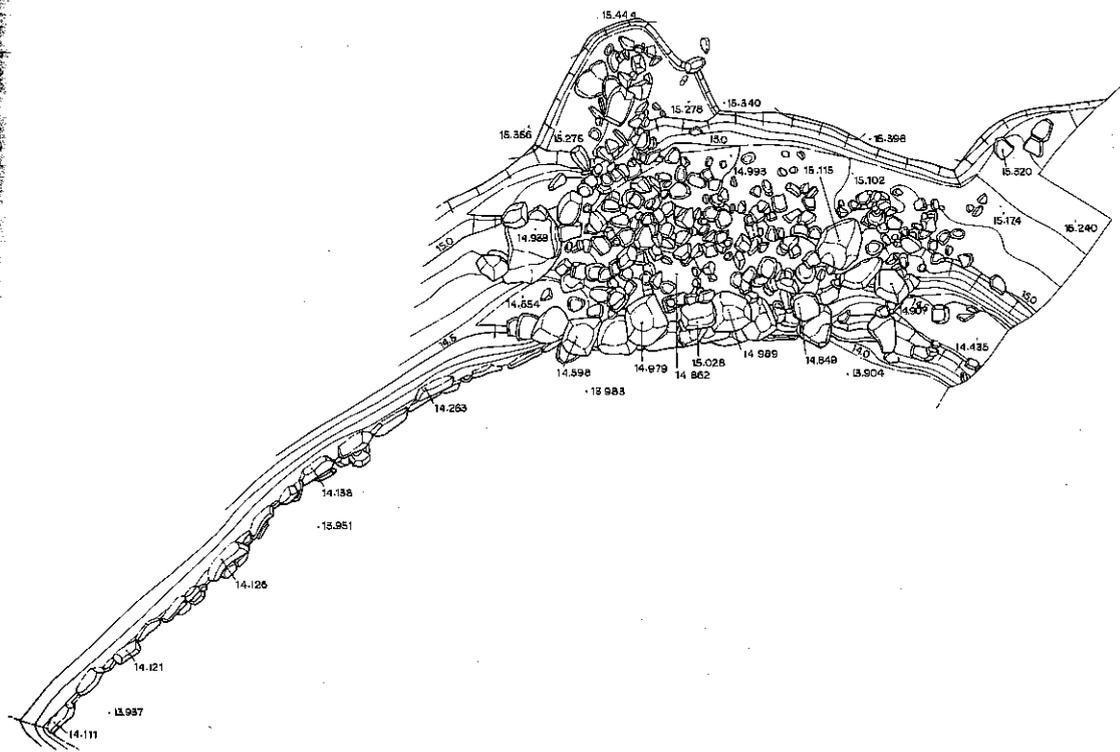
土器

TP1において地山確認のため調査トレンチの一部を東西方向に幅約1m、長さ約10mで掘り下げた。

表面の耕作土下は、整地層であり地山までは約1mを計る。表面下約0.8mで土坑状の穴に廃棄されたような状態で土器片が多数出土した。この土器片は、隣接する弥生時代の遺跡である浦田観音東側遺跡の関係資料と思われる。性質上城郭との関連は薄いと思われるが、原城地域の変遷がわかる貴重な資料である。土器の詳細については、2節の出土遺物の項で報告する。



TP1・土器出土状況



第14図 検出石垣平面及び立面図

(8) 小 結

調査は、昭和52年（1977）策定の「原城跡管理保存計画」に基づく保存環境整備事業の一環で、平成4年（1992）度から本丸地区を中心に実施してきたが、平成18年度の調査で本丸地区の調査に一区切りをつけ、平成19年度より三の丸地区の調査へと移行した。本丸地区の調査においては、これまでに多くの遺構、遺物が出土している。特に十字架、メダイ、ロザリオの珠などのキリシタン関係遺物は島原の乱にまつわる資料である。また、一揆後の幕府による現地処理で、壊され埋め込まれた虎口や櫓台石垣、原城本丸の正面玄関に相当する虎口などが検出され、原城築城時の遺構や島原の乱に対する幕府の対応を示す資料を発見した。他に火縄銃の玉、輸入陶磁器、瓦など、築城当時から乱で封印されるまでの原城を物語る資料がある。

発掘調査によって検出した虎口遺構や石垣遺構、キリシタン関係遺物などは「原城」の姿を現しただけでなく、「島原の乱」を考察するうえでかなり貴重な資料となった。今まで勝者であった幕府側の文字史料や絵画資料でしか研究されなかった島原・天草一揆を、敗者である一揆軍側から見つめ、考え直すことができるようになったことは、画期的なことであった。

出土したキリシタン遺物は、16世紀後半から17世紀初頭にかけて、イエズス会によってわが国に到達、あるいはその影響下で製作されたものであると思われるが、それぞれの時代的区分や特徴は把握されていないのが現状である。しかし、近年の調査で出土事例が報告され、考古学的、美術史的、科学的観点から次第に明らかになってきている。さらなる出土事例を期待し比較検証を行い、キリスト教の布教の実態などを含め、総合的な解明ができると思われる。

検出した虎口遺構や石垣遺構などは、不明であった原城築城の時期についても解明でき、新しい築城工事は1599年には着手され1604年の秋頃までには完成していたと、イエズス会宣教師の報告が、検出した石垣や出土した遺物からもこの時期と一致することが判明した。

有馬氏の城郭が劇的に変化したのが、文禄・慶長の役後の豊臣氏系統の城郭の技法を取り入れたことによるもので、有馬氏の大名家としての権力構造の変化、地域社会の変化と連動しており、原城の巨大さは、有馬氏がこの城への本拠機能の一本化を構想していたのではないかと、家臣団屋敷の統合と城下町機能の一部吸収を行った可能性も指摘された（2008千田）。また原城の構造は、本丸に限定して、豊臣氏系統の城郭に習った総石垣の近世城郭の構築に勤め、全体構造は九州城郭のトラッド・プランを継承し、その曲輪群内部に城下機能をも取り込んだ構造であると推測された（2008宮武）。

このように、有馬氏の城づくりの変化をつかむには、日野江城・原城の調査だけでなく、戦国期に有馬氏が築いた陣城などの城郭及び城下町を含めた総合的な視点から考える必要がある。

原城の調査は現在本丸地区だけに限られ、二の丸、三の丸やそれぞれの曲輪に付随する各虎口などに関しては三の丸地区の大手門調査に取り掛かったところである。今後それらの調査による成果の検討によって新たな展開ができるだろう。また、隣接する有馬氏の本城である日野江城の調査をふまえ、この両城を比較し近隣の地域を含め総合的にみることによって、16世紀後半から17世紀初頭キリスト教界が栄え島原の乱で終焉を迎えた有馬の地が、いかに日本史上で重要な役割を果たしていたのかその実態が解明できるとと思われる。

（松本）

【参考文献】

長崎県南島原市監修 服部・千田・宮武編集『原城と島原の乱—有馬の城・外交・祈り』新人物往来社 2008

第2節 出土遺物

平成13年度から平成19年度の調査において出土した遺物の総数は約35,660点である。特に多量に出土したのは陶磁器類で27,800点である。次に瓦が多く7,500点出土している。遺物の種類、年代に考慮し、以下において概要を説明する。

1. 土器類 (第15・16図)

1～22は平成19年度の三の丸地区調査のTP1から出土した土器類であり、そのうち1～18が弥生土器、19～22が中世以降の遺物である。原城跡から弥生土器が出土しているという状況については、冒頭の歴史的環境でも少し触れたが、史跡範囲内に重複している浦田観音東側遺跡に伴う遺物が出土したのと考えられる。遺物の時期については後でも少し触れるが、弥生時代終末期頃のもの为主とみられる。なお量的には300点ほど出土しているが、ほとんどが細片資料であるため、特徴の判るものを抽出して図化している。

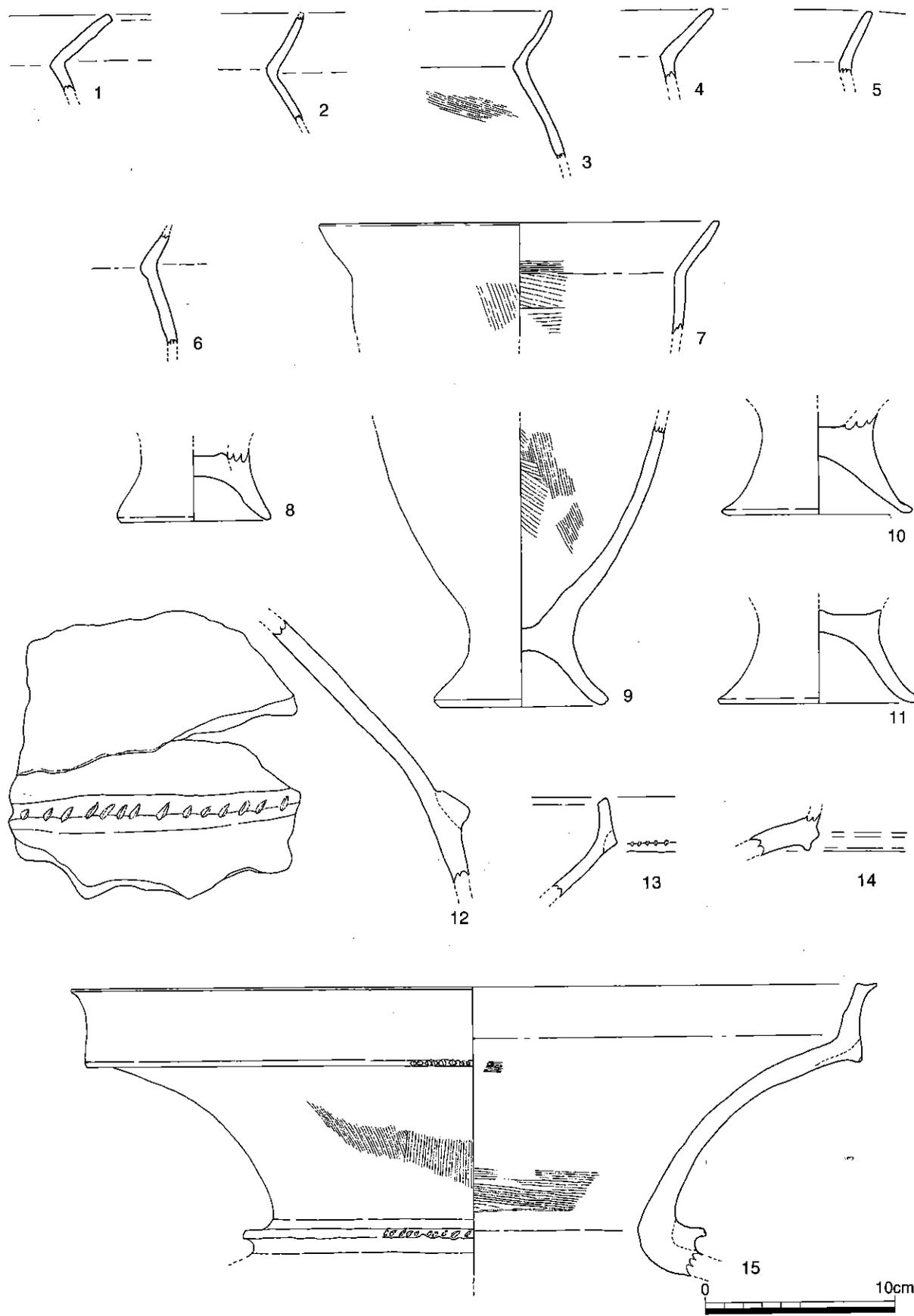
1～12は甕形土器である。1～7は口縁部付近の破片であり、いずれも「く」の字状を呈する。全体的に口縁の立ち上がりが高く、体部の張りが弱い為、頸部の屈曲は緩やかなものとなっている。口縁の形状は直線的なもの(1・4・5)と、やや内湾気味のもの(2・3・6・7)がみられる。8～11は台付甕の脚台ないし体部から脚台にかけての資料である。8は脚台が短めであり、弱く外反して開く。9～11は外反の度合いが強く、開きも大きい。12は大型品の肩部片である。外面には断面三角形の突帯を巡らせ、頂部には工具による斜位の刻みが施される。

13～16は壺形土器と考えられるものであり、13～15は口縁部付近の資料である。13は複合口縁タイプのものであり、一次口縁が直線的に開き、二次口縁が内傾気味に短く立ち上がる。一次口縁と二次口縁の境界は外面において明瞭であるが、内面においては緩やかである。屈曲部の外面には刻目が施される。14は残りが悪くはつきりしないが、便宜的に壺として扱った。二次口縁にあたる部分の外面には強い指ナデによる凹線状の文様がみられる。15は複合口縁タイプの広口壺であり、復元口径が約42.0cmとなる大型品である。一次口縁は外反して大きく開き、二次口縁は直立気味に立ち上がりわずかに外反する。口縁端部は強い指ナデによって外側へつまみ出されている。二次口縁下端には刻目が施される。口縁部と体部の境には突帯が巡らされ、強いナデにより断面はいびつな台形状を呈する。頂部には斜位の刻目が施される。16は大型の壺の底部と考えられるものである。底は凸レンズ状を呈する。

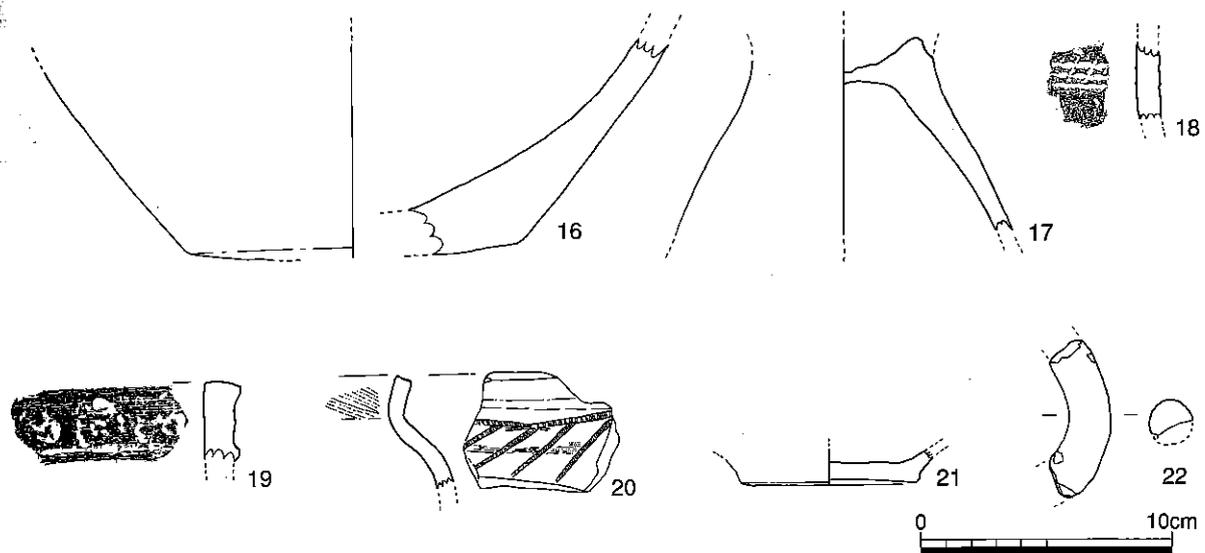
17は高杯形土器の脚部であり、やや内湾気味に開く形状のものである。18は器台形土器の一部と考えられるものである。外面には3条のヘラ描き沈線が残っており、加えて斜位の短線文が施されている。

19・20は瓦質土器である。19は火鉢の口縁であり、外面には花状の印文が施されている。20は短頸壺状の形態を呈するものである。体部外面においては斜位の列点文が巡らされ、その上位には同じ列点文を横位に組み合わせた文様が施される。21は土師器の杯底部である。磨滅が著しいが、底面には糸切り痕が残る。22は把手状土製品である。

過去の原城跡の調査における弥生土器の報告例はないため、TP1出土弥生土器の位置づけを従来の編年観に従って簡単にみておきたい。島原半島南部地域の弥生時代後期における土器の様式編年は、



第15図 出土遺物（土器類）①（S=1/3）



第16図 出土遺物（土器類）②（S=1/3）

1980年代に宮崎貴夫氏が南島原市北有馬町に所在する今福遺跡の資料で設定したものが代表的である。近年においては、古門雅高氏が今福遺跡以外の資料も用い、特に甕形土器・高杯形土器の型式分類と変化を中心に先行研究の再検討にあたった研究事例がある。TP1出土資料の様相を大まかに捉えると、甕形土器の形態については「く」字口縁の屈曲が緩く、口縁の立ち上がりは強くなる傾向がある。脚台は8を除いては開きが大きく、いわゆる「踏ん張りの強い」形状となっている。このような傾向の甕に、13・15といった直立気味の二次口縁を持つ複合口縁タイプの広口壺が伴っている状況を宮崎・古門両氏の編年観と様式レベルで照らしてみるならば、宮崎編年の「後V期」（後期終末）、古門編年の「後期IV期」（後期終末～古墳時代初頭）あたりが最も近く、TP1出土の資料には弥生時代後期終末を中心とした年代観が与えられる。また両氏の設定された様式観が極めて妥当性の高いものであることの裏付けに、TP1出土資料はなっていると言えよう。ただTP1の資料は遺構内からの出土ではなく、中世の遺物も僅かながら混在している点は気がかりである。例えば18のような器台片は宮崎編年における「後III期」（後期中葉）から出現しているものであり、各型式のもつ変化の時間幅の整理も今後の課題であるだろう。古門氏が課題として掲げ、先行研究の再検討にあたる契機とされた事でもあるが、一括性に優れ量的にも纏まった資料による編年の確立、他地域との併行関係の整理といった課題は依然として残る^(※1)。

さてTP1出土の弥生土器は、少ないながらも器種のセットが揃っており大型破片も含んでいた。海浜に接した台地という原城跡の立地は、生活にも適したと考えられ、また資料そのものが別の地域から流れ込んだとも考えにくい。そうした点を考慮するならば、少なくとも「原台地」の土地利用が弥生時代後期終末頃には開始されていた可能性が高いと言えよう。

原城跡というと「島原・天草の乱」の印象が非常に強いが、この遺跡、土地そのものがどのような歴史の変遷を辿ったかという、地域内での時間軸に沿った整理も重要な課題である。これらの資料は、そうした点にあらためて目を向けさせる。極めて当然の事ではあるが、原城跡一帯が城として存在した時代とは異なる遺構・遺物も十分に出土し得るという点に対して、周到な注意をもって今後の調査

に臨む必要がある。

(伊藤)

※1 未報告であるが近年の開発事業に伴う調査において、当該期を含む良好な資料が環濠内より出土している。整理作業を通じて、これまでの編年の検証と補完が進められるものと期待している。

【参考文献】

- 宮崎貴夫 編 1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第77集 長崎県教育委員会
 宮崎貴夫 編 1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会
 古門雅高「有明海西岸地域における弥生時代後期の土器」古門雅高 編 2004『下木場遺跡』長崎県文化財調査報告書第179集 長崎県教育委員会 および『西海考古』第6号 正林護先生喜寿記念号 2005 西海考古同人会に所収

表1 遺物観察表(土器類)

図	番号	出土地点	種別	器種等	文様・調整		色調		焼成	胎土	備考
					内面	外面	内面	外面			
15	1	TP1	弥生土器	甕形土器	ナデ(磨減)	ナデ(磨減)	橙色	橙色	良好	石英・長石・角閃石	
	2	TP1	弥生土器	甕形土器	磨減	磨減	橙色	橙色	良好	石英・長石・角閃石	
	3	TP1	弥生土器	甕形土器	口縁:ナデ 体部:ハケ目	ナデ(磨減)	橙色	橙色	良好	石英・長石・角閃石・赤色粒子	
	4	TP1	弥生土器	甕形土器	磨減	磨減	橙色	橙色	良好	石英・長石・角閃石	
	5	TP1	弥生土器	甕形土器	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良好	石英・長石・角閃石	
	6	TP1	弥生土器	甕形土器	ナデ(磨減)	ナデ(磨減)	明黄褐色	橙色	良好	石英・長石・角閃石	
	7	TP1	弥生土器	甕形土器	ナデ	ハケ目→ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	石英・長石・角閃石	
	8	TP1	弥生土器	甕形土器	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良好	石英・長石・角閃石	
	9	TP1	弥生土器	甕形土器	ハケ目	ハケ目(磨減)	にぶい黄褐色	橙色	良好	石英・長石・角閃石	
	10	TP1	弥生土器	甕形土器	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	良好	石英・長石・角閃石	
	11	TP1	弥生土器	甕形土器	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良好	石英・長石・角閃石	
	12	TP1	弥生土器	甕形土器	ハケ目(磨減)	ハケ目(磨減)	明黄褐色	橙色	良好	石英・長石・角閃石・赤色粒子	
	13	TP1	弥生土器	壺形土器	ナデ	ナデ	黒褐色	橙色	良好	石英・長石・角閃石	
	14	TP1	弥生土器	壺形土器	ナデ(磨減)	ナデ(磨減)	橙色	橙色	良好	石英・長石・角閃石・赤色粒子	
	16	15	TP1	弥生土器	壺形土器	ハケ目 横ナデ	ハケ目 横ナデ	明黄褐色	明黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・赤色粒子
16		TP1	弥生土器	壺形土器	ハケ目(磨減)	ハケ目(磨減)	黄褐色	黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・赤色粒子	
17		TP1	弥生土器	高坏形土器	磨減	磨減	明黄褐色	明黄褐色	良好	石英・長石・角閃石	
18		TP1	弥生土器	器台形土器	ナデ	竪溝沈線(3条) 斜位の短線	にぶい黄褐色	明黄褐色	良好	石英・長石・角閃石	
19		TP1	瓦質土器	火鉢	横ナデ	横ナデ 印文(花)	にぶい黄褐色	灰白色	良好	長石・黒色砂粒	
20		TP1	瓦質土器	短頸壺?	口縁:ハケ 体部:ナデ	口縁:横ナデ 体部:ハケ→ナデ 斜位の列点文	浅黄色	浅黄色	良好	長石・赤色粒子・黒色粒子	
21		TP1	土師器	坏	ナデ	ナデ・底部糸切り	灰褐色	橙色	良好	石英・長石・角閃石	
22		TP1	土製品	把手状土製品	-	ナデ	橙色	橙色	良好	長石・金雲母・赤色粒子・黒色粒子	

2. 貿易陶磁器 (第17~27図)

青花の器種が多く中国系窯のものが多い。他に東南アジア産のものも含まれる。

なお、佐賀県九州陶磁文化館の大橋康二氏には、資料の年代決定や技法の判断等で御教示、御助言を頂いた。

a. 青磁

1は、皿の口縁部片である。稜花形の平縁をもった口縁部で、器壁は菊弁形をなし器腹は浅く、高台部分は欠損している。釉色は明緑灰色を呈し、明るいガラス質釉がかかる。胎土は灰白色である。

2は、口縁部が八角形の皿である。口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。高台は低く内湾し、高台内は釉がかからず露胎となる。釉色は明オリーブ灰色を呈し、全面に貫入が入る。胎土は灰白色である。

3は、口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。見込みには釉は掛からず露胎である。高台は低く内湾し、高台内は釉がかからず露胎となる。釉色はオリーブ灰色を呈し、胎土は灰白色である。

4は、口縁部が八角形の皿である。口縁部は直線的で外側に開き、器腹下部で屈曲する。高台は低く内湾し高台は低く内湾し、畳付部分は外側を削り湾曲させる。高台内は浅く釉はかからない。釉色はオリーブ灰色を呈し、胎土は灰白色である。口縁部と内壁に2重の線で区画をつくり花文が刻まれる。見込みには印章文が刻まれる。

5は、2と同様の皿のである。全体に被熱している。

6は、菊花形の皿である。口縁部は直立し、器腹は弓なりになる。高台は低く内湾し、高台内は灰白色の釉が掛かる。釉色は明緑灰色を呈し、胎土は灰白色である。

7は、菊花形の皿である。口縁部はやや内湾し、器腹は弓なりになる。高台は低く内湾し、高台内は釉が掛からず露胎である。釉色は明オリーブ灰色を呈し、胎土は灰白色である。

8は、碗である。口縁部はわずかにすぼまり、器腹は弓なりになる。高台は高めでわずかに内湾する。畳付と高台内は釉が掛からず露胎である。釉色は明緑灰色を呈し、胎土は灰白色である。

9は、瓶の口縁部である。直立する口縁部で平縁の中央部に窪みをつくる。

10は、瓶の器壁部である。器壁には蛇腹状の突起が施されている。釉色はオリーブ灰色を呈し、胎土は灰白色である。

b. 白磁

11は、小杯である。口縁部は直線的に広がり、見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎをしている。高台は低く内湾し、高台内にも釉が掛かる。

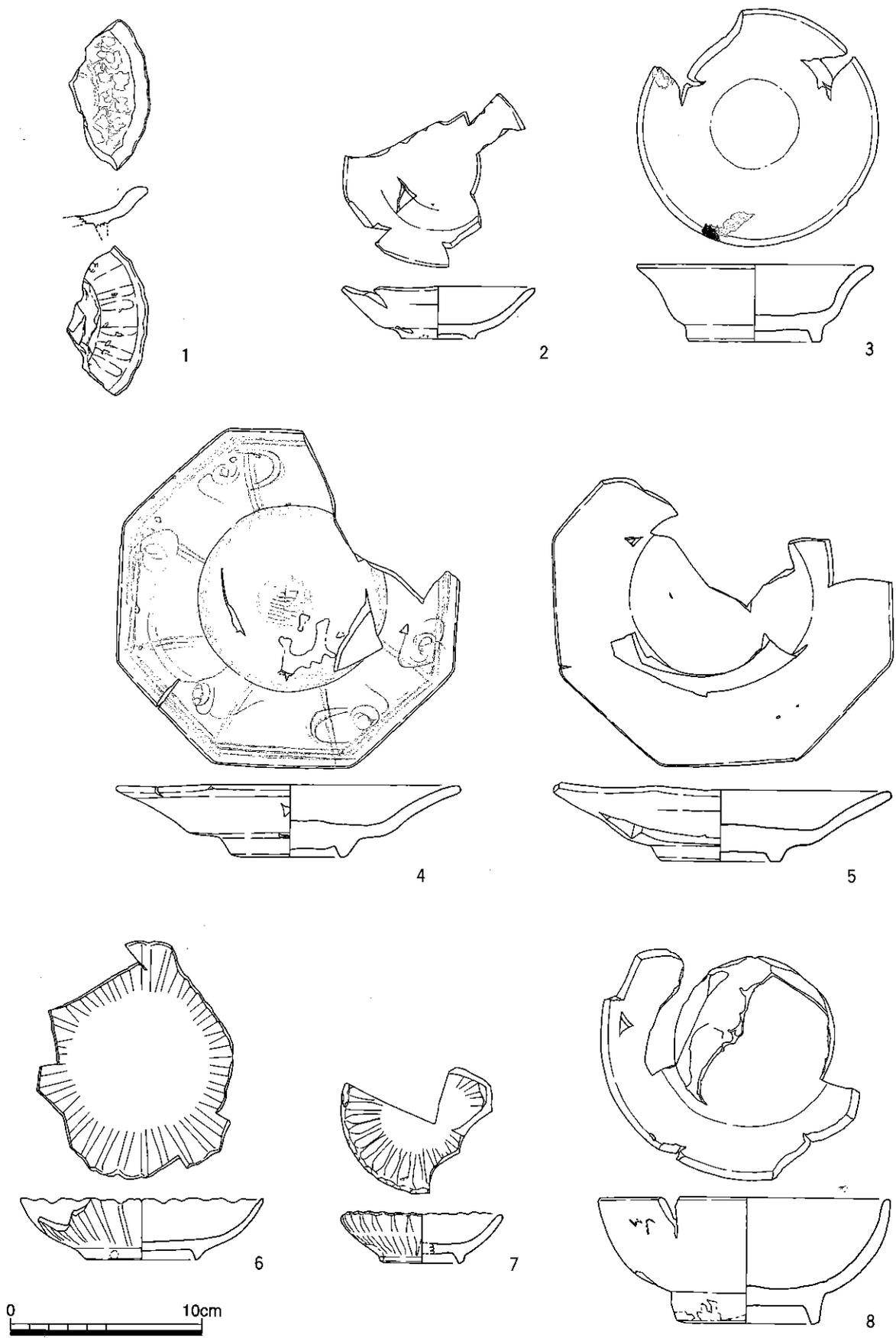
12は、小杯である。口縁部は直線的に広がり、見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎをしている。高台は低く内湾し、畳付は鋭角になる。高台内にも釉が掛かる。

13は、菊花形の皿である。口縁部はやや内湾し、器腹は弓なりになる。高台は低く内湾し、高台内は浅い。高台内と畳付に粉殻が付着する。底裏は二重円圏内に「天下泰平」の銘が記されている。

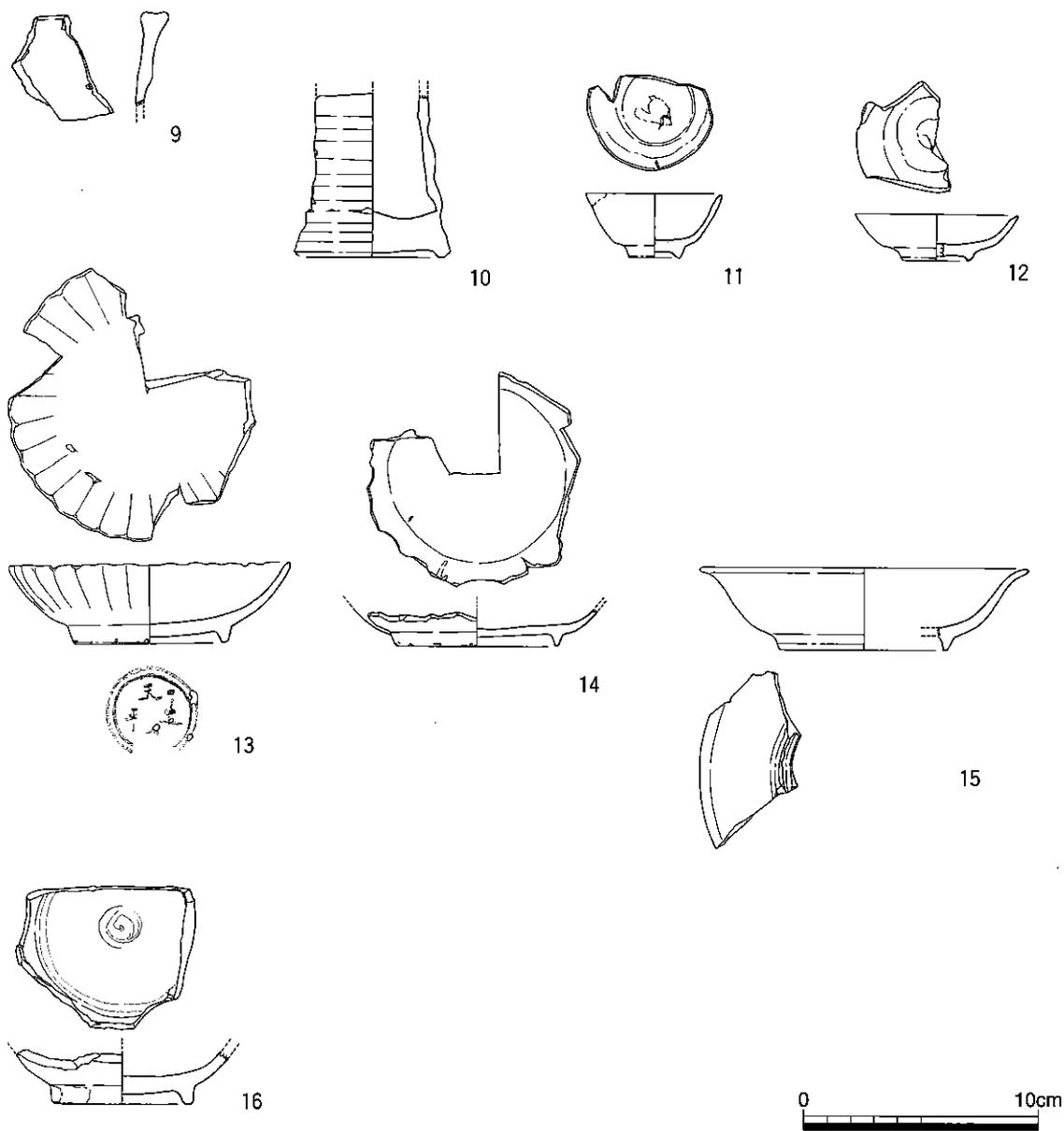
14は、皿の高台部である。高台は低く内湾し、高台内は浅い。畳付と高台壁に粉殻が付着する。

15は、皿である。口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。高台は低く内湾し、畳付は無釉である。

16は、皿の高台部である。高台は低く直立し、高台内は浅い。高台内には釉が掛からず露胎である。



第17図 出土遺物（貿易磁器）①（S=1/3）



第18図 出土遺物（貿易磁器）②（S=1/3）

全体に貫入が入る。

c. 青花

皿類

17は、菊花形の皿である。口縁部は外反し、平らに外に摘み出し器腹は弓なりになる。高台は低く内湾し、高台内は浅い。青釉が掛かるが、高台内は掛からず露胎である。底裏には二重方形圏内に「陳」銘が陽刻される。

18～28は、同種類の皿である。口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。内部口縁に四方樺文を廻らせている。見込みには円圏内に山水を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。高台内と畳付に粉殻が付着する。

29～31は、同種類の皿である。口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。内部口縁に一本の圏線を廻らせている。見込みは二重の圏線内に十字花文を描く。外壁には唐草文を廻らす。高台は低く内湾し、高台内は浅い。

32は、皿である。口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部口縁に一本の圏線を廻らし、見込みには2重の圏線内に雨龍文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。底裏に一本の方圏内に「福」の銘が記されている。

33は、皿である。口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部口縁に一本の圏線を廻らし、見込みには2重の圏線内に雨龍文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。底裏に「正」の銘が記されている。

34～36は、皿である。口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部口縁に一本の圏線を廻らし、見込みには二重の圏線内に鳳凰を描き、空には太陽を表す「日」の字を書く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。底裏に方圏内に文字銘が記されている。

37は、皿である。口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部口縁に一本の圏線を廻らし、見込みには二重の圏線内に草花を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。高台内に粉殻が付着する。

38は、皿である。口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部口縁に一本の圏線を廻らし、見込みには2重の圏線内に草花を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。全体に貫入が入る。

39は、高台部である。見込みには二重の圏線内に龍文を描く。外壁に花唐草文を廻らし、高台は低く内湾し、高台内は浅い。

40は、皿である。口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部口縁に一本の圏線を廻らし、見込みには二重の圏線内を蛇ノ目状に釉剥ぎをしている。高台は低く内湾し、高台内は浅く釉がかからず露胎である。

41は、碁笥底の皿で、畳付けが露胎となっている。見込みは二重円圏内に草木が描かれる。外壁には口縁部と器腹下部に一本の圏線を廻らし、中に草木文を描く。畳付に粉殻が付着する。

42は、角皿である。直線的に広がる口縁部で、器腹は浅く弓なりになる。見込みには二重の方圏内に鷹、雲を描く。

43は、口縁部は外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部口縁に薄い一本の圈線を廻らし、見込みには二重の圈線内に花唐草文を描く。外壁には口縁部と器腹下部に二本の圈線を廻らし、中に唐草文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。

44は、高台部である。見込みには一本の圈線を廻らし、唐草文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。

45は、基筈底の皿で、畳み付けが露胎となる。見込みは草花を描く。

46は、高台部である。見込みには二重の圈線内に「寿」を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。畳付に粉殻が付着する。

47は、高台部である。見込みには連弁文の内に「壽」を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。底裏に一本の方圏内に銘が記されている。

48は、口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部口縁に雨降文を廻らし、見込みには二重の圈線内に雨龍を描く。外部口縁に一本の圈線を廻らす。高台は低く内湾し、高台内は浅い。底裏に一本の方圏内に文字銘が記されている。

49は、高台部である。見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎをしている。高台は低く内湾し、畳付と底裏には釉がかからず露胎となる。

50は、口縁部は折縁となり、内部口縁には櫛歯文を廻らす。見込みには山水、城郭、人物が描かれる。高台は低く内湾し、高台内は浅く露胎である。

51は、口縁部は折縁となり、内部口縁には櫛歯文を廻らす。見込みには山水、城郭が描かれる。外部口縁に一本の圈線を廻らす。高台は低く内湾し、高台内は浅い。

52は、51と同様の皿の高台部である。見込みには雲、人物が描かれる。高台は低く内湾し、高台内は浅い。

53は、口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部口縁に一本の圈線を廻らし、内部器壁に花虫文を、見込みには2重の圈線を廻らし、内に山水と楼閣を描く。外部口縁に一本の圈線を廻らし、器壁には雲文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。底裏に一本の方圏内に文字の銘が記されている。畳付に粉殻が多く付着する。

54は、口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部口縁に一本の圈線を廻らし、内部器壁には梅、竹を描く。見込みには2重の圈線内に山水を描く。外部口縁に一本の圈線を廻らし、外壁には唐草文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。底裏には二重円圏内に四字銘が記されている。

55は、口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部口縁に二本の圈線を廻らし、内部器壁に竹を、見込みには二重の圈線を廻らし、内に人物と松を描く。外部口縁に二本の圈線を廻らし、器壁には牡丹と宝文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。底裏には二重円圏内に四字銘が記されている。

56~67は、区面文様の皿である。56~64は、同種類の皿である。口縁部は外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部器壁は、8区画に分けられ内に草花文を描き、見込みには岩鳥花文を描く。外壁も8区画に分けられ、宝文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。

65は、口縁部は外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部器壁は、区面文様となり宝文、草花文を、

見込みは岩鳥花文を描く。外壁は6区画に分けられ、宝文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。

66は、高台部である。見込には岩鳥花文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。

67は、口縁部は外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部器壁は、6区画に分けられ内に草花文を描き、見込みには岩馬文を描く。外壁は6区画に分けられ、宝文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。

68は、高台部である。見込みには鳳凰を配し、二重円圏内に「日」を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。

69は、口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部器壁は八卦、幾何学文を描き、見込みは岩、鳥、草などを描く。外部口縁には薄く一本の圏線を廻らす。高台は低く内湾し、高台内は浅い。畳付と底裏に粉殻が付着する。

70は、折縁の口縁で周縁部は区切窓を設け花文、青海波文を描く。見込みは鳥、草を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。畳付と底裏に粉殻が付着する。

71は、折縁の口縁で内壁に草、鳥を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。

72は、見込みに鹿、草文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。畳付と底裏に粉殻が付着する。

73は、見込みに鳥、花、草文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。底裏は釉がかからず、露胎である。畳付と底裏に粉殻が付着する。

74は、呉須赤絵の皿である。折縁の口縁で周縁部は区切窓を設け花文、青海波文が僅かに見てとれる。見込みは花草文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。底裏は釉がかからず、露胎である。畳付と底裏に粉殻が付着する。

75は、呉須赤絵の皿である。口縁部は直立し、器腹は浅く弓なりになる。色絵部分は剥落している。高台は低く内湾し、高台内は浅い。底裏は一部釉がかからず、露胎である。畳付と底裏に粉殻が付着する。

碗類

76は、小杯の高台部である。碁笥底になり、底裏には二重円圏内に四字銘が記されている。外壁には唐草文が描かれ、見込みは二重円圏内に「射」が記されている。

77は、小杯である。口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。外壁は褐釉をかけ白、緑、青釉で草花文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅い。畳付及び底裏は釉がかからず露胎である。

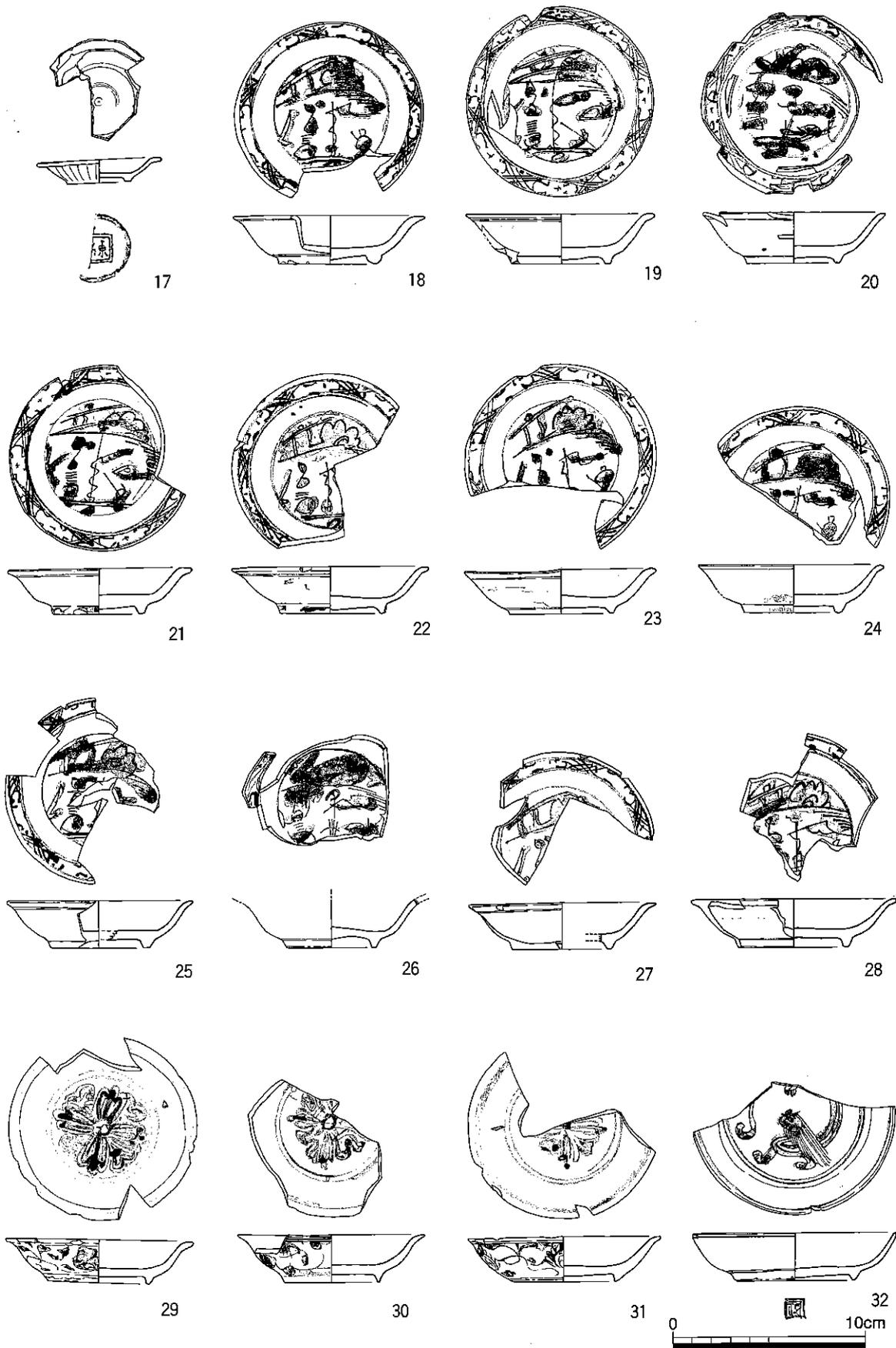
78、79は、小杯である。口縁部は直立し、器腹は弓なりになる。内部口縁に一本の圏線を廻らし、見込みには二重円圏内に花卉文が描かれる。外部口縁に一本の圏線を廻らし、器壁には花卉文が描かれる。高台は低く内湾し、高台外周に二重の圏線を廻らす。

80は、小杯の高台部である。見込みには円圏内に不明文様が描かれる。高台は低く内湾し、高台内は浅い。畳付に粉殻が付着する。

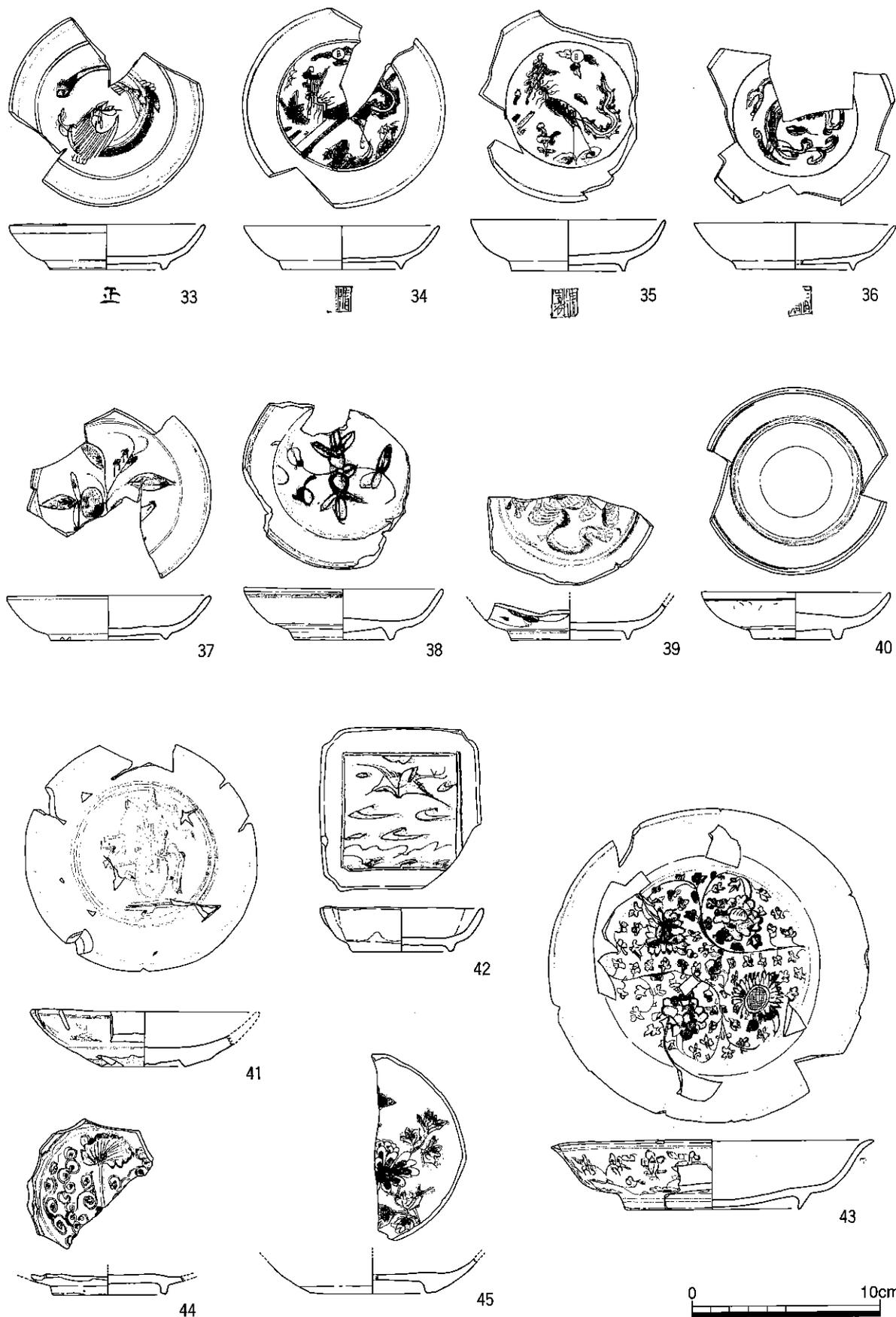
81は、小杯の高台部である。見込みには円圏内に不明文様が描かれる。高台は低く内湾し、高台内は浅い。底裏は釉がかからず露胎である。

82は、小杯の高台部である。碁笥底になり、底部には連弁文を廻らす。見込みは二重円圏内に十字花文が描かれる。

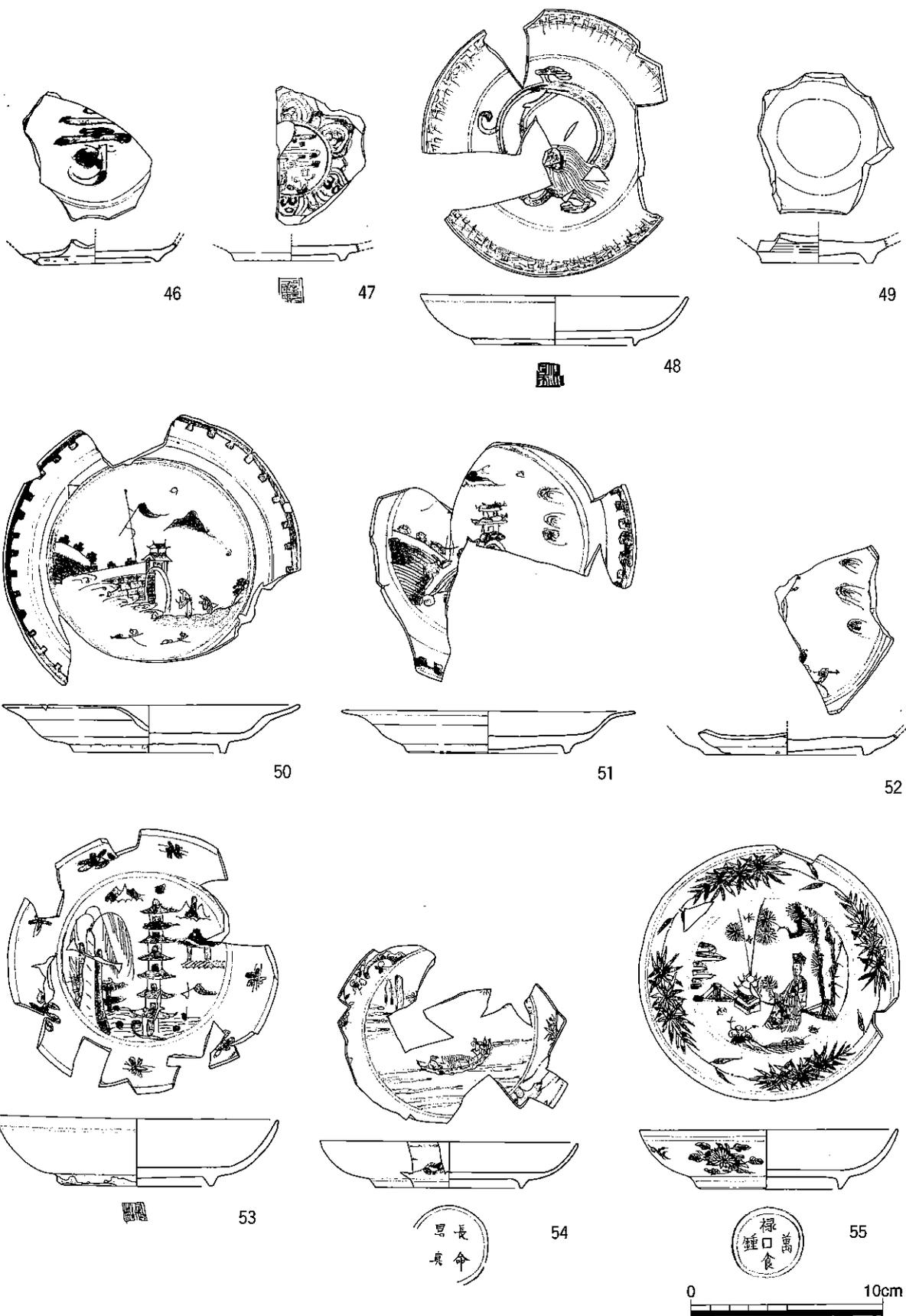
83は、饅頭心の碗である。高台は低くやや内湾する。高台側面に一本の圏線を廻らす。見込みは連



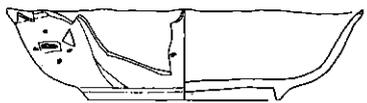
第19圖 出土遺物 (貿易磁器) ③ (S=1/3)



第20図 出土遺物（貿易磁器）④（S=1/3）



第21圖 出土遺物（貿易磁器）⑤（S=1/3）



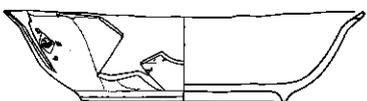
56



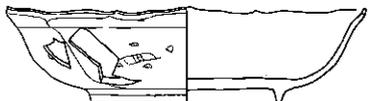
57



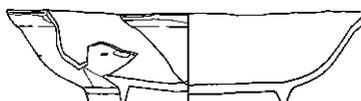
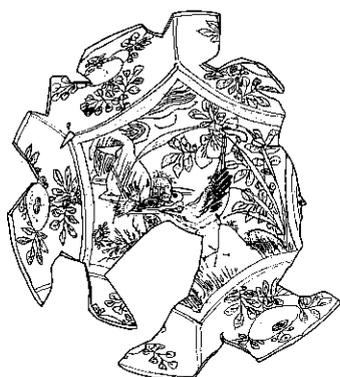
58



59



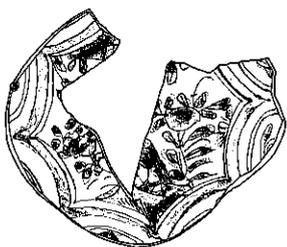
60



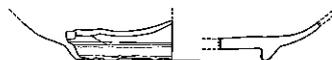
61



62



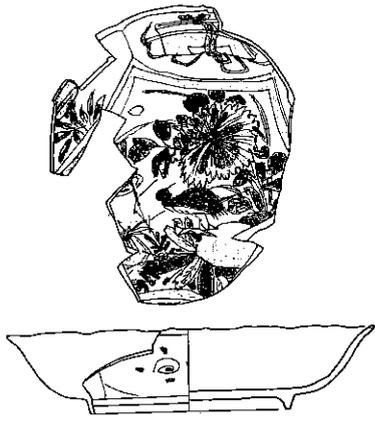
63



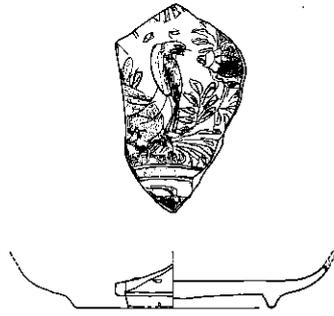
64



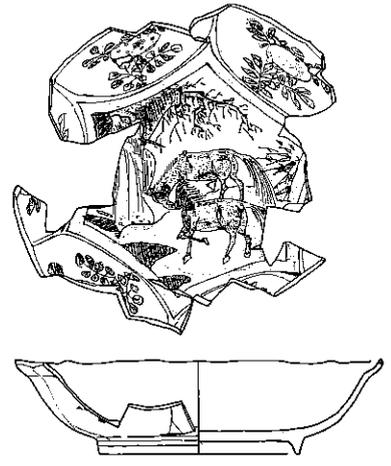
第22图 出土遺物（貿易磁器）⑥（S=1/3）



65



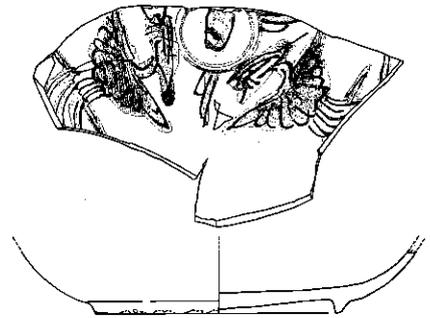
66



67



69



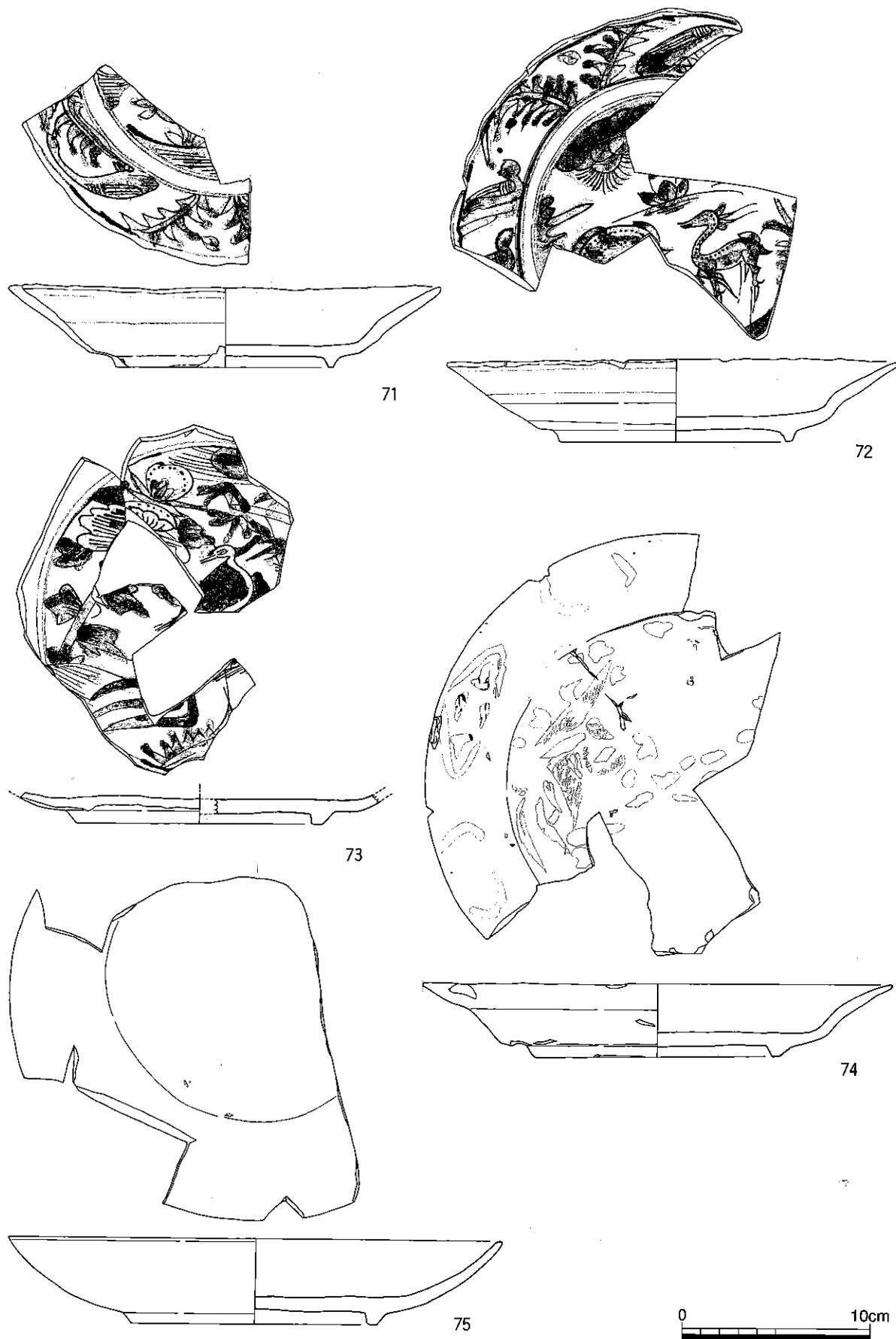
68



70



第23圖 出土遺物 (貿易磁器) ⑦ (S=1/3)



第24図 出土遺物（貿易磁器）③（S=1/3）

弁を廻らし圏線内に花卉文を描く。

84は、饅頭心の碗である。内部器壁に5つの蓮を描き、見込みには一本の圏線内に蓮を描く。外部口縁に二重の圏線を廻らし、器壁には草文を描く。高台は低く直立し、高台内は浅い。

85は、口縁部である。口縁部はわずかにすぼまり、器腹は深く弓なりになる。内部口縁に四方禳文を廻らせている。外壁には、山水を描く。

86は、口縁部は外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部口縁に圏線を廻らし、見込みは蓮文を描く。口縁外壁に一本の圏線を廻らす。高台は低く内湾し、高台外周に一本の圏線を廻らす。畳付には釉がかからず露胎となる。

87は、口縁部はわずかにすぼまり、器腹は深く弓なりになる。内部口縁に四方禳文を廻らし、見込みには二重の圏線内に人物と松を描く。外部口縁に二重の圏線を廻らし、器壁には花唐草文の中に唐子を描く。高台はやや高く内湾し、高台内は深い。底裏には二重円圏内に「禄享千鍾」の銘が記されている。

88は、口縁部は外反し、器腹は深く弓なりになる。内部口縁に二重の圏線を廻らし、見込みには二重の圏線内に十字花文を描く。外部口縁に二重の圏線を廻らし、器壁には花唐草文を描く。高台はやや高く直立する。高台外周に二重の圏線を廻らす。

89は、碗である。口縁部はわずかにすぼまり、器腹は弓なりになる。内部口縁に二重の圏線を廻らし、見込みには二重円圏内に蓮文が描かれる。外壁は唐草文が描かれる。高台は低く直立し、高台外周に一本の圏線を廻らす。畳付に粉殻が付着する。

90~92は、同種類の碗である。口縁部はわずかにすぼまり、器腹は弓なりになる。内部口縁に一本の圏線を廻らし、見込みには二重円圏内に草木文が描かれる。外壁には唐草文が描かれる。高台は低く直立し、高台外周に一本の圏線を廻らす。畳付に粉殻が付着する。

93は、口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。内部口縁に二重の圏線を廻らし、見込みには二重円圏内に草花文が描かれる。外壁には人物が描かれる。高台は低く直立し、高台外周に一本の圏線を廻らす。畳付に粉殻が付着する。

94は、口縁部はわずかにすぼまり、器腹は弓なりになる。内部口縁に二重の圏線を廻らし、見込みには二重円圏内に十字花文が描かれる。外部口縁に一本の圏線を廻らし、器壁には唐草文を描く。高台は低く内湾する。畳付に粉殻が付着する。

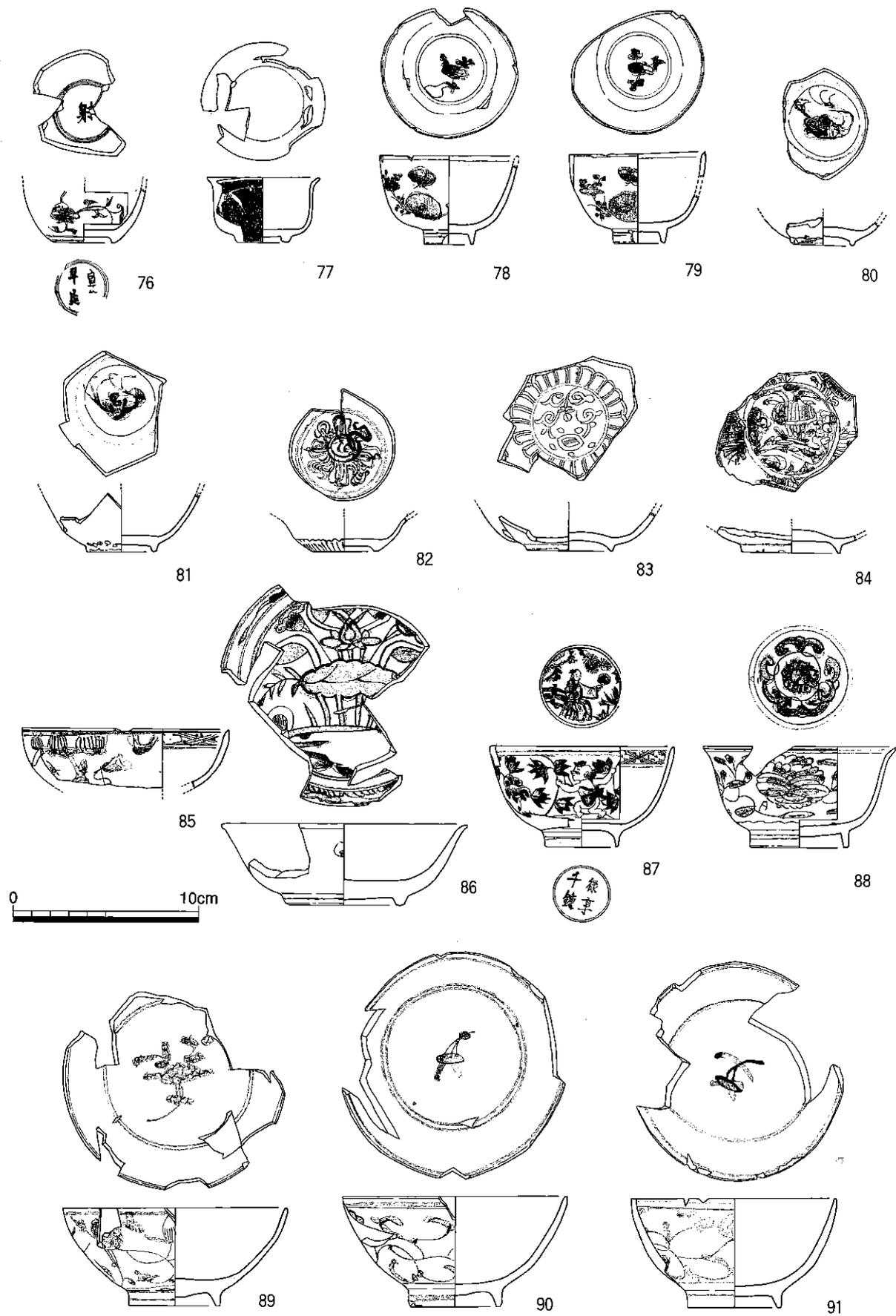
95は、口縁部は外反し、器腹は浅く弓なりになる。内部口縁に一本の圏線を廻らし、内部器壁と見込み全面を使い野菜文を描く。高台は低く内湾し、畳付と底裏には釉がかからず露胎となる。畳付を幅広く削り出し蛇ノ目状になる。

96は、口縁部はわずかに外反し、器腹は深く弓なりになる。内部口縁に二本の圏線を廻らし、見込みには円圏内に白抜きで十字花文が描かれるタイプの碗である。外壁は白抜きで花唐草文を描く。

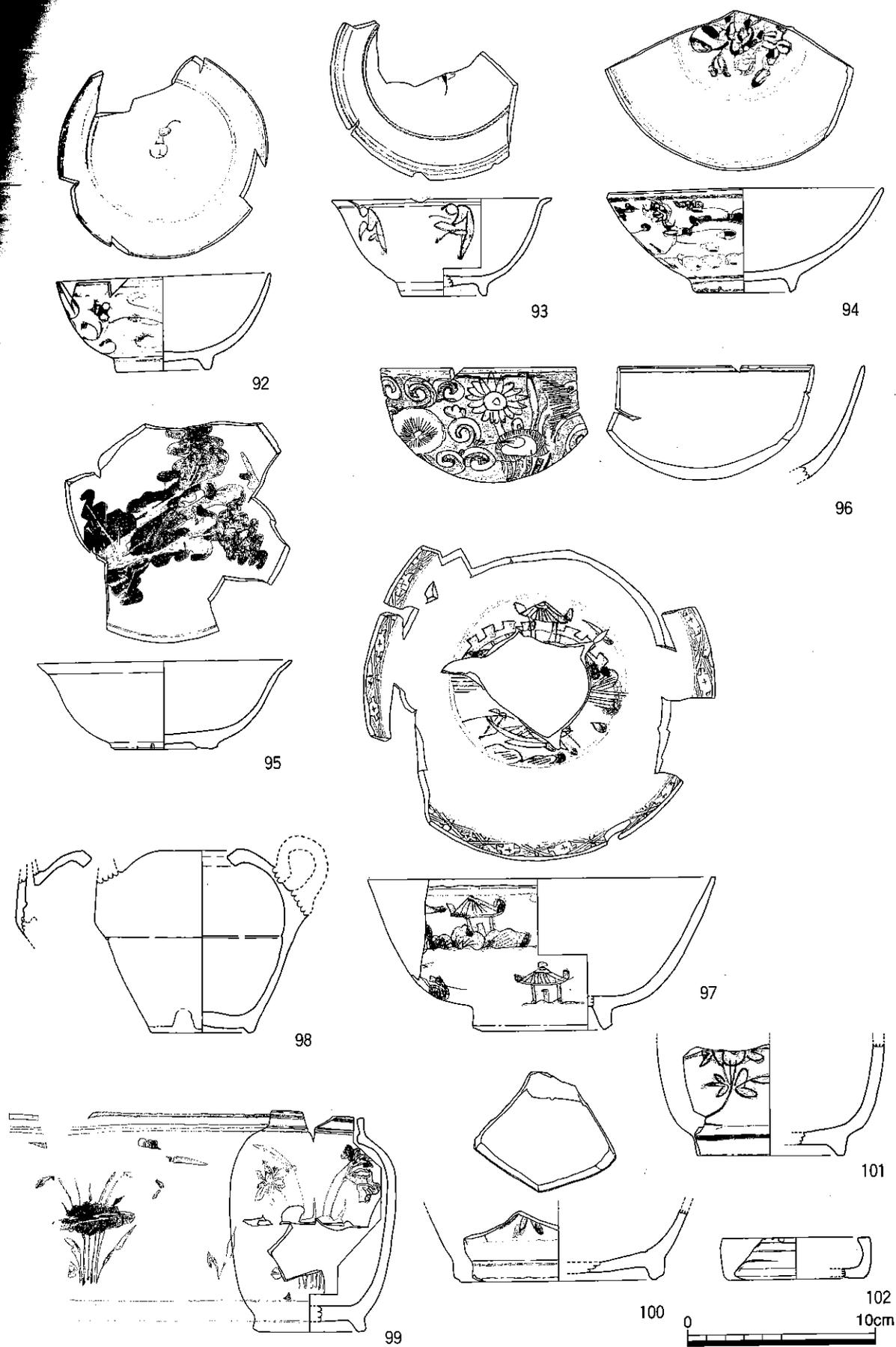
97は、口縁部はわずかにすぼまり、器腹は深く弓なりになる。内部口縁に四方禳文を廻らし、見込みには二重の圏線内に、城郭に船を描く。外部口縁に二本の圏線を廻らし、器壁には城郭に船を描く。高台はやや高く直立する。高台内及び畳付けは釉が掛からず露胎である。

その他

98は、瑠璃釉の水注である。器壁は肩から胴にかけて豊かに膨らみ、胴部裾に向かってすぼまる。



第25圖 出土遺物（貿易磁器）⑨（S=1/3）



第26圖 出土遺物（貿易磁器）⑩（S=1/3）

注口と把手は欠損しているが、把手は動物の可能性はある。高台は浅く削り出し、釉が掛からず露胎である。内部には釉が掛かり、胴継痕が見られる。

99は、瓶である。頸は短く内湾する。口頸部に圈線を廻らし、器壁には花卉文を描く。高台は低く直立し、畳付には釉が掛からず露胎である。

100は、瓶の高台部である。高台は低く内湾し、畳付には釉が掛からず露胎である。高台外周に一本の圈線を廻らす。

101は、瓶の高台部である。高台は低く直立し、畳付には釉が掛からず露胎である。器壁は区画内に花卉文を描く。

102は、香合である。

d. 陶器

出土した貿易陶器の生産地は中国および東南アジア系である。

1は、ベトナム製壺の口縁部である。口縁部は頸部から直立し、口縁は玉縁状になる。胎土はにぶい赤褐色を呈し、焼成は良く非常に堅い。

2は、ベトナム製壺の肩部分である。1の肩部分と思われる。肩部には櫛で沈線を廻らす。胎土はにぶい赤褐色を呈し、焼成は良く非常に堅い。

3は、ベトナム製壺の胴部分である。器壁には櫛で波状の沈線を施す。胎土はにぶい黄褐色を呈し、焼成は良く非常に堅い。

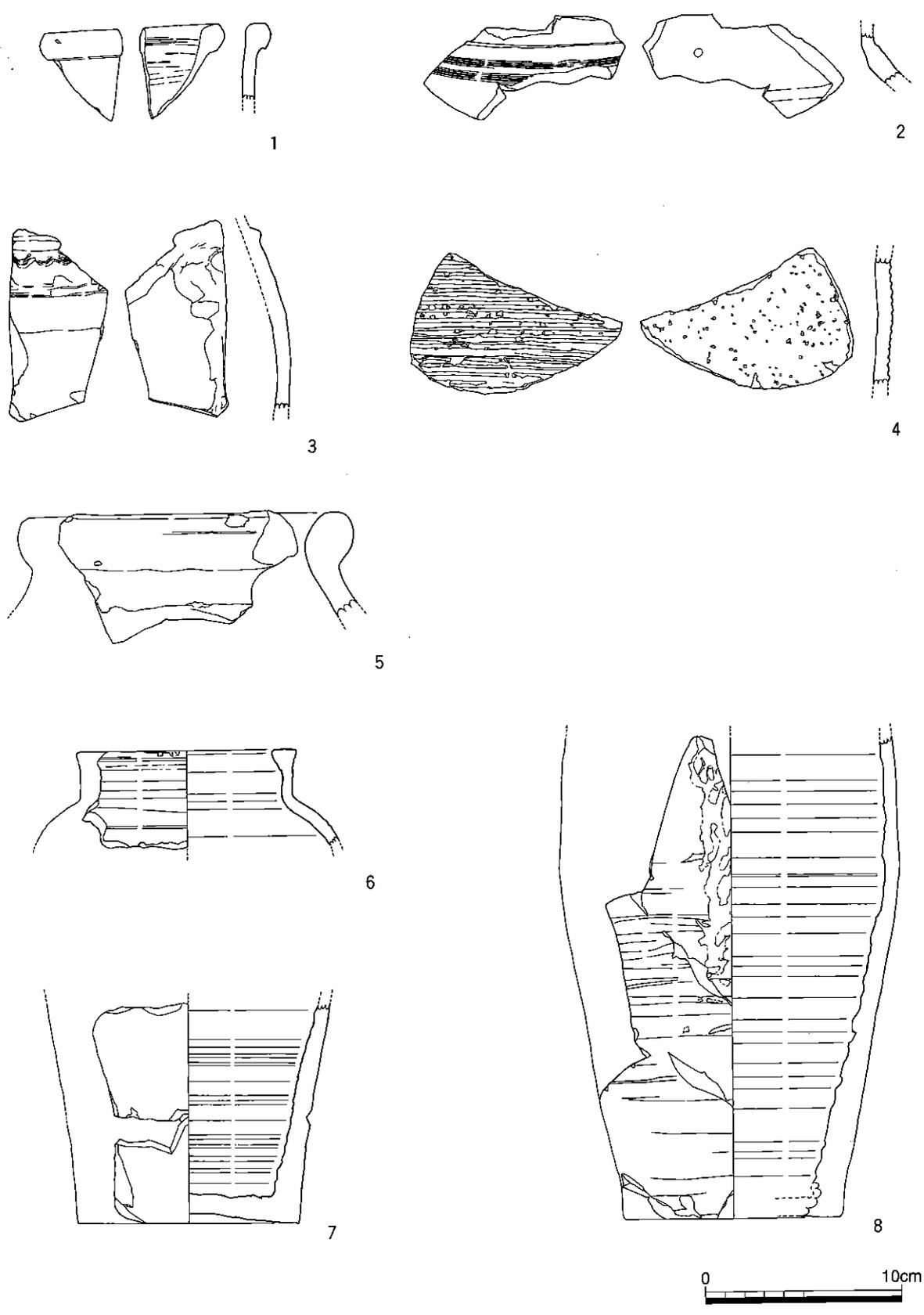
4は、ベトナム製メ切糸目土器の胴部分である。土師質の土器で、器腹には無数の沈線を廻らす。胎土はにぶい黄橙色を呈す。

5は、タイ製壺の口縁部である。頸部は短く、口縁部は外反する。口縁端部は玉縁状になる。胎土は暗灰黄色を呈する。

6は、ベトナム製壺の口縁部である。口縁部は直立し、口頸部と肩部に沈線を廻らす。釉は掛からず露胎である。胎土はにぶい黄橙色を呈する。

7は、ベトナム製壺の底部である。6と同一固体と思われる。低部は平底で釉はかからず露胎である。胎土はにぶい黄橙色を呈する。

8は、ベトナム製長胴瓶である。内面には轆轤目が残り、釉は掛からず露胎である。外壁には釉が掛かり、中央部には白濁色の釉が垂れている。底部は平底で釉が掛からず露胎である。胎土は灰白色を呈する。
(松本)



第27図 出土遺物 (貿易陶器) (S=1/3)

3. 国産陶磁器 (第28～33図)

唐津系陶器が主で、肥前磁器の製品がある。

a. 磁器 (第28図)

本遺跡から出土した国産磁器の生産地は肥前である。器種は皿・碗・瓶である。

1は、小壺の器腹部片である。口縁部と高台部は欠損しているが、器腹は膨らみをもつ。釉には貫入が入っている。

2は、小壺の高台部である。器壁下部を削りだし高台とする。高台は低く内湾し、高台内は浅い。高台内と畳付に粉殻が付着する。

3は、皿である。口縁部は外側に開き、鐔状の縁をもつ。器腹腰部で屈曲し、高台は低く内湾する。口縁鏝状部には、区画間を設け花文を描き、見込みには草鳥文を描く。

4は、皿である。口縁部は内側に屈曲し、器腹は弓なりになる。高台は低く内湾し、畳付に粉殻が付着する。内部器壁と見込みには花卉文が描かれる。

5は、碗である。口縁部はわずかにすぼまり、器腹は深い。8角に面取りした器壁で、内部口縁に連弁文を廻らす。外部口縁には雷文を廻らし、器壁には区画窓の中に花卉文が描かれる。高台は低く直立し、高台外周に二重の圏線を廻らす。

6は、香炉である。器身は円筒形をなし、高台がつく。折縁の口縁部には、唐草文を廻らす。外壁には雲と草花文を配し、全体に貫入が入る。内部には釉が掛からず露胎である。胎土は灰白色を呈する。

b. 陶器 (第29～33図)

出土した陶器は唐津系の陶器が主である。器種は皿・碗・瓶・甕などである。

1は、見込みと高台脇に胎土が付く。高台は低く内湾する。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内はかからず露胎となる。胎土は橙色を呈する。

2は、見込みと畳付に砂目跡が付く。高台は低く内湾する。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内はかからず露胎となる。胎土は明黄褐色を呈する。

3は、口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。高台は低くやや内湾し、高台内は浅い。釉は器腹外壁の高台付根までかかり、高台内はかからず露胎となる。胎土は明黄褐色を呈する。

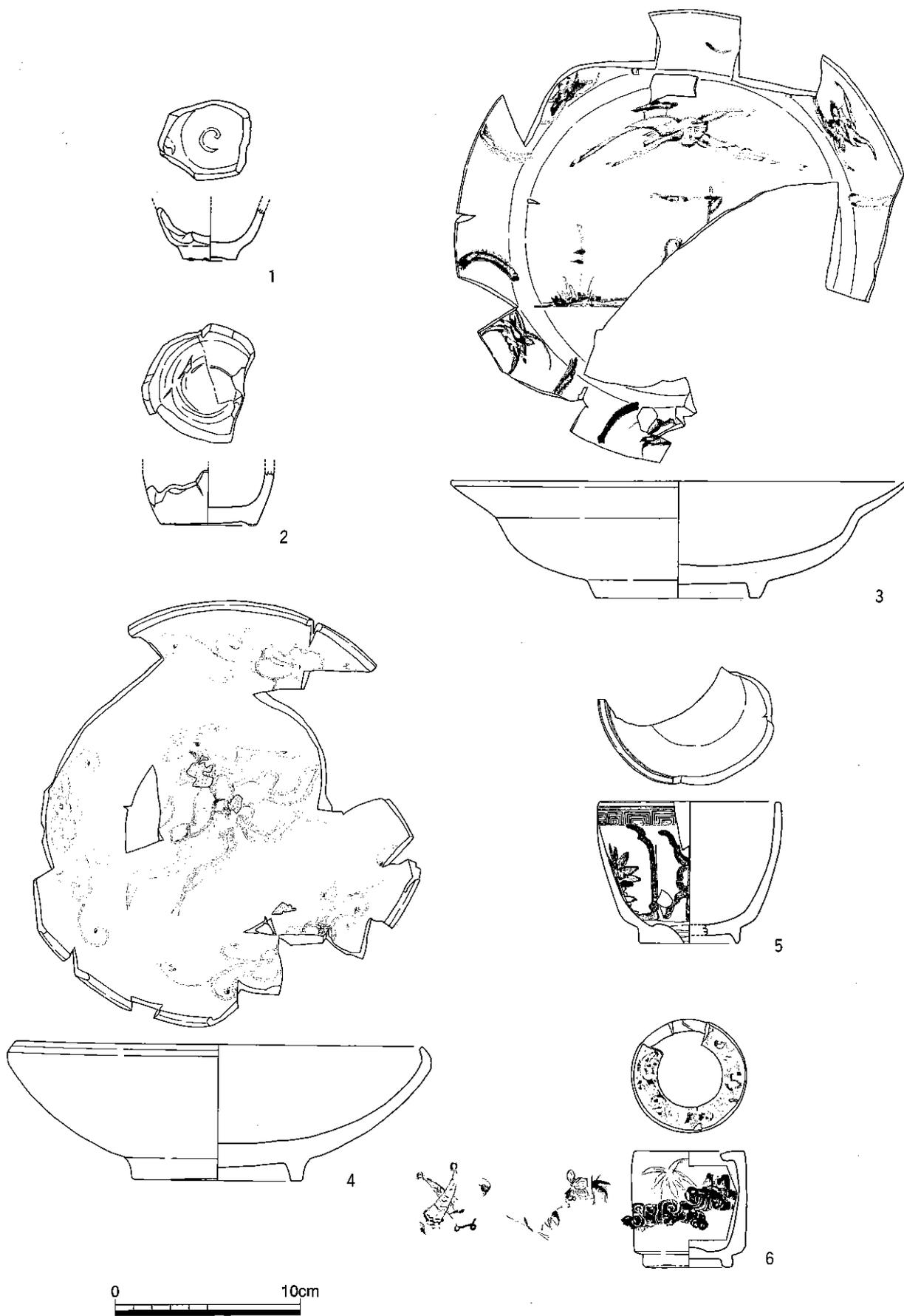
4は、見込みと畳付に砂目跡が付く。高台は低く内湾する。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内はかからず露胎となる。胎土は明黄褐色を呈する。

5は、口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。高台は低くやや内湾し、高台内は浅い。畳付に砂目跡が付く。釉は器腹外壁の高台付根までかかり、高台内は一部にかかる。胎土はにぶい黄橙色を呈する。

6は、見込みと畳付に砂目跡が付く。高台は低く内湾する。釉は灰釉と褐釉を掛分け、全釉となる。

7は、口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。高台は低くやや内湾し、高台内は浅い。見込みと畳付に砂目跡が付く。釉は器腹外壁の高台付根までかかり、高台内はかからず露胎となる。胎土はにぶい赤褐色を呈する。

8は、口縁部はわずかに内湾し、器腹は弓なりになる。高台は低く内湾し、高台内は浅い。釉は内



第28図 出土遺物（日本磁器）（S=1/3）

面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、口縁部には鉄釉がかかる。高台内は露胎となる。胎土はにぶい橙色を呈する。

9は、三島手である。見込みは2重の圈線内に印花文を施す。高台は低く内湾し、高台内は浅い。畳付に砂目跡が付く。

10は、瀬戸美濃系の皿である。高台は粗く削り出され低く、高台内は浅い。口縁部は外反し、平らに外に摘み出す。口縁部上面に溝状のへこみを設ける。見込みは菊花を線刻しその上にオリーブ黄色の釉をかける。胎土は浅黄色を呈する。

11は、鉄絵の皿である。口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。見込みに鉄砂で草文を描く。高台は低くやや内湾し、高台内は浅く畳付の幅は広い。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土は灰白色を呈する。

12は、鉄絵の皿である。見込みに鉄砂で草文を描く。高台は低くやや内湾し、高台内は浅く丁寧な作りで、畳付きの幅は広い。釉は全体に掛かり、畳付には釉が掛からず露胎となる。胎土は灰白色を呈する。

13は、鉄絵の皿である。見込みには鉄砂で草文を描き、砂目跡が見られる。高台は底部をわずかに削りだし高台としている。畳付の幅は広い。釉は内面と器腹外壁の腰部分まで掛かり、高台内は掛からず露胎となる。胎土は灰黄色を呈する。

14は、鉄絵緑彩⁽¹⁾の皿である。内外面に被熱痕が見られる。見込みは全面に白土を塗り、松樹文を描く。高台は低くやや内湾し、高台内は浅く畳付の幅は広い。釉は全体に掛かり、畳付には釉が掛からず露胎となる。見込みには胎土目痕が見られる。胎土は橙色を呈する。

15は、鉄絵緑彩⁽¹⁾の皿である。口縁部は外反し、平らに外に摘み出す。口縁部上面に溝状のへこみを設け、口縁部端は玉緑状になる。見込みは全面に白土を塗り、松樹文を描き、口縁部内面には櫛目文を施す。高台は低くやや内湾し、高台内は浅く畳付の幅は広い。釉は全体に掛かり、畳付には釉が掛からず露胎となる。見込みと畳付には胎土目跡が見られる。胎土は灰白色を呈する。

16は、鉄絵緑彩の皿である。見込みは全面に白土を塗り、草花文を描く。高台は低く内湾し、高台内は浅く畳付の幅は広い。釉は全体に掛かり、畳付には釉が掛からず露胎となる。見込みには胎土目痕が見られる。胎土は褐灰色を呈する。

17は、鉄絵緑彩の皿である。見込みは全面に白土を塗り、草花文を描く。高台は低く内湾し、高台内はやや深くなる。釉は全体に掛かり、畳付には釉が掛からず露胎となる。畳付には胎土目痕が見られる。胎土は灰黄色を呈する。

18は、二彩手の皿である。口縁部は外反し、平らに外に摘み出す。口縁部上面に溝状のへこみを設け、口縁部端は玉緑状になる。口縁部内壁には全面に白土を塗布した際の刷毛目が見ら、鉄釉の流し掛と思われる一本の曲線が見られる。胎土は灰黄色を呈する。

19は、碗の口縁部である。口縁部はわずかに外反し、器腹は深い。全面に緑釉が掛けられる。

20は、碗の口台部である。高台はやや高く直立する。前面に緑釉が掛けられる。畳付に粉殻が付着する。

21は、鉢の口縁部片である。口縁部は外反し、外側に縁帯を設ける。口縁部に褐釉と器腹外壁及び内壁に長石釉が掛かる。内面は同心円状の叩き痕が残る。胎土は灰オリーブ色を呈する。

22は、鉢の口縁部片である。口縁部はわずかに外反し玉緑状になる。釉は全面に施釉される。胎土は灰オリーブ色を呈する。

23は、播鉢の口縁部片である。御目は5本。口縁部に釉が掛かる。胎土は灰色を呈する。

24は、播鉢の口縁部片である。御目は7本。口縁部は直立し、内面に溝状のへこみを設ける。口縁部外側は3本の沈線を廻らし、下に削出し突帯をもつ。胎土は灰オリーブ色を呈する。

25は、小壺である。灰オリーブ色の釉が内外面に掛かる。底部は平底となり釉が掛からず、露胎である。外壁に鉄釉で模様を描く。胎土はにぶい橙色を呈する。

26は、瓶の頸部である。器壁には蛇腹状の突起が施され、口縁部は外反している。釉には細かな貫入が入っている。

27は、瓶の底部である。底部は平底となり鉄釉が掛かる。器腹部は長石釉が掛かるが内部は掛からず露胎である。胎土は灰色を呈する。

28は、二彩手の瓶である。器腹外壁には全面に白土を塗布した際の刷毛目と櫛目文が見られ、銅緑釉の流し掛けも見られる。内部には釉が掛からず露胎である。胎土は灰オリーブ色を呈する。

29は、壺である。短い頸で口縁部は直立し、口頸部と頸部との境に窪みを作る。器壁は肩から胴にかけて豊かに膨らみ、胴部裾に向かってすぼまる。釉は器腹外壁の腰部分までかかり、下部及び内面には釉が掛からず露胎となる。底部は平底となり、糸切り痕が残る。胎土はにぶい橙色を呈する。

30は、壺である。口縁部はわずかに外反し、玉緑状になる。頸は短く、器壁は肩から胴にかけて豊かに膨らむ。釉は器腹外壁の腰部分までかかり、下部には釉が掛からず露胎となる。底部は平底となり、糸切り痕が残る。胎土は灰オリーブ色を呈する。

31は、壺の低部である。底部は平底となり、糸切り痕が残る。見込みには、轆轤目が残る。釉は掛からず露胎となる。胎土はにぶい黄色を呈する。

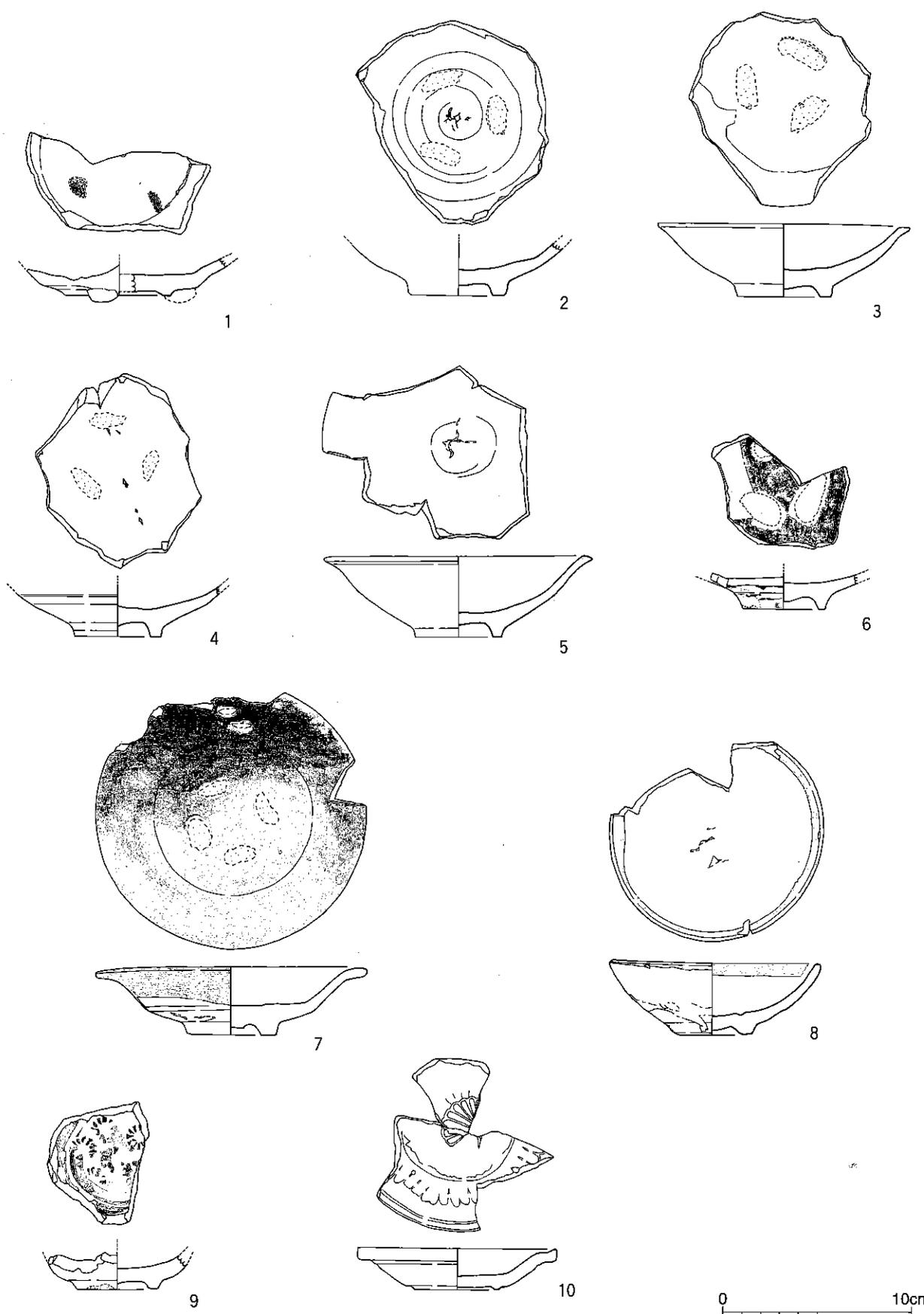
32は、壺の低部である。底部は平底となり、釉は全面に掛かる。胎土は灰オリーブ色を呈する。

(松本)

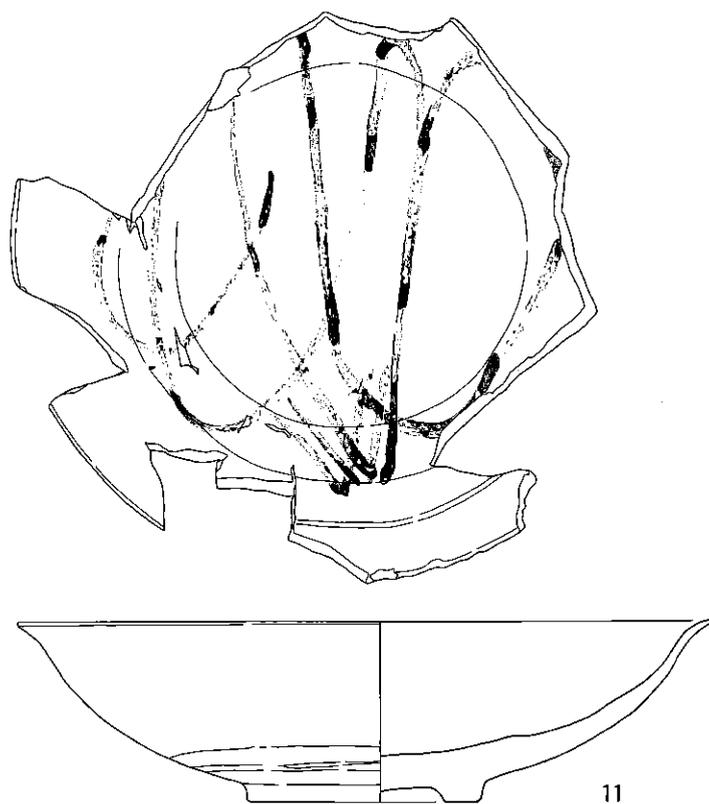
【補註・参考文献】

(1) 東中川忠美氏が、「江戸時代の唐津焼」を分類され紹介されている。引用すると、「鉄絵緑彩」とは、素地に白土を刷毛で薄く塗布し、その後で鉄顔料による描写に銅緑釉を用いて彩色し、最後に透明釉を掛けたものである。従来言われている「二彩唐津」の一種であるが、二彩唐津は白土塗布の後に櫛目文様を施し、その上から鉄釉や銅緑釉を流し掛けたり、掛け分けたりするタイプのものまで幅広く含むため、基本的に鉄と銅緑釉で文様を描き、その上から透明釉を掛けるものを「鉄絵緑彩」とされている。

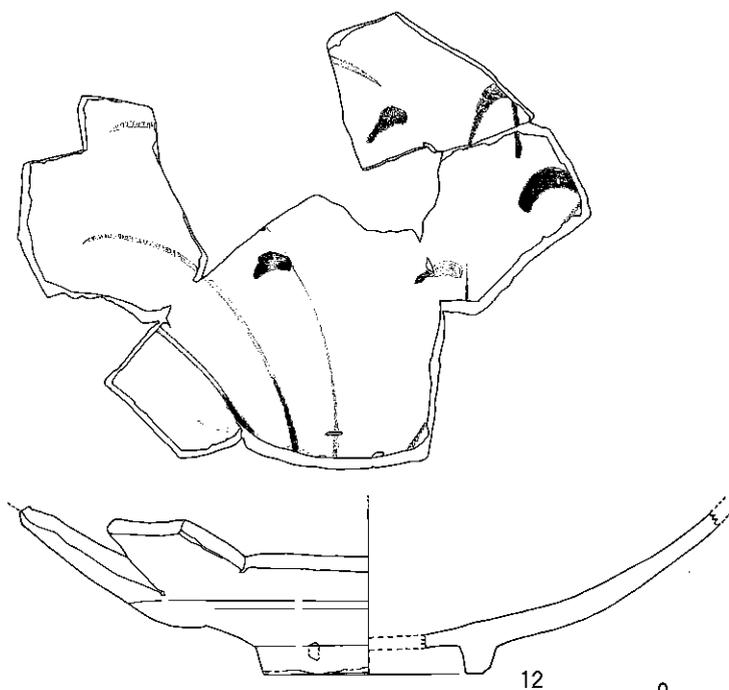
よし詳しくは、東中川忠美「江戸時代の唐津焼入門—絵唐津からの脱却 大胆で斬新な世界へ—」(『陶説』第650～657号 平成19年5月～12月)を参照されたい。



第29図 出土遺物（日本陶器）①（S=1/3）



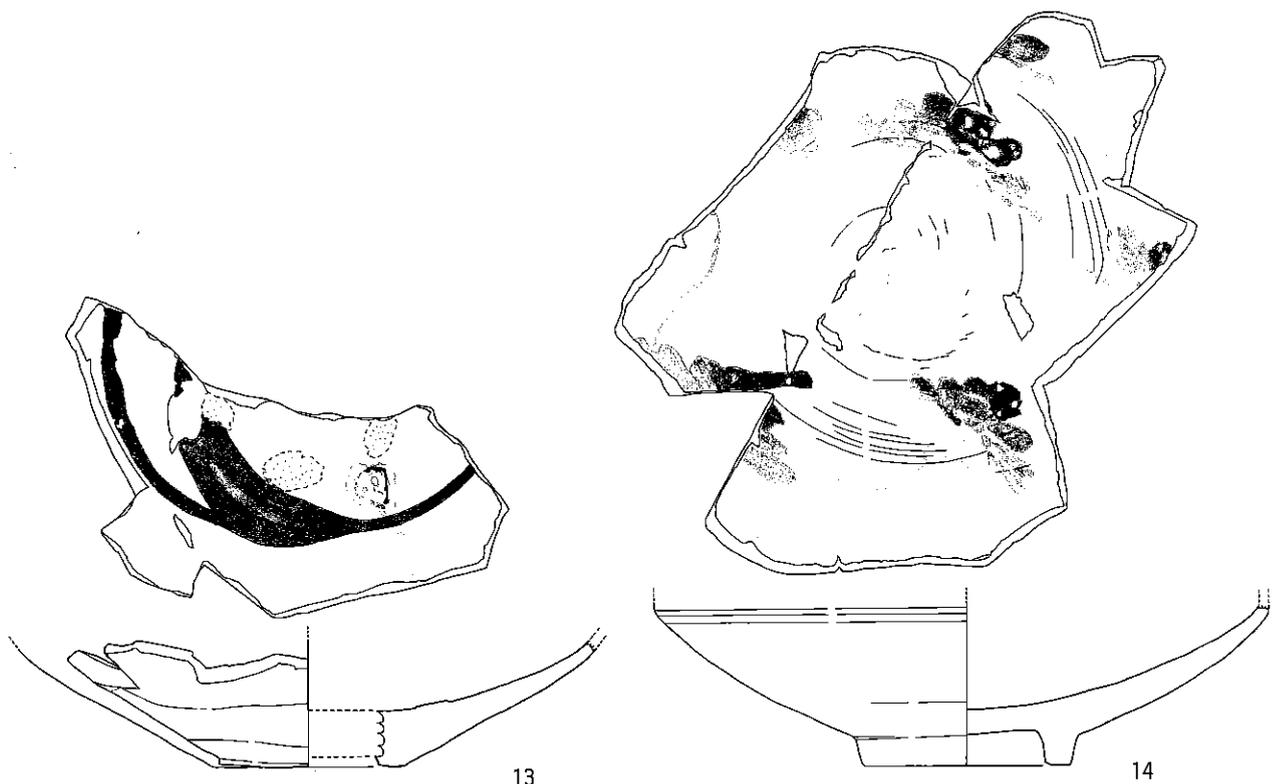
11



12

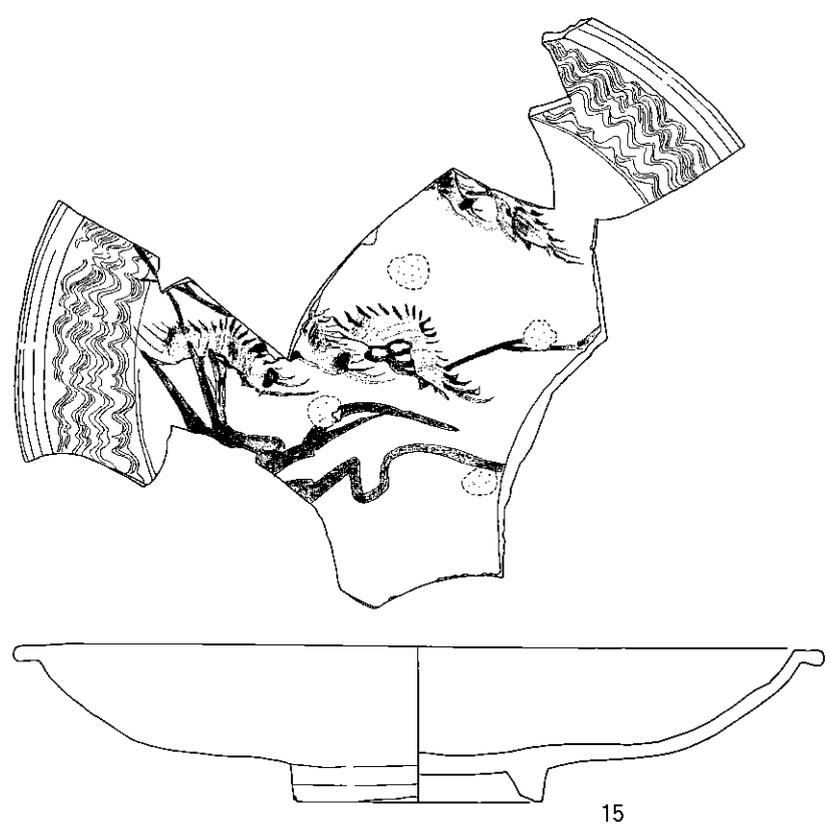


第30図 出土遺物（日本陶器）②（S=1/3）



13

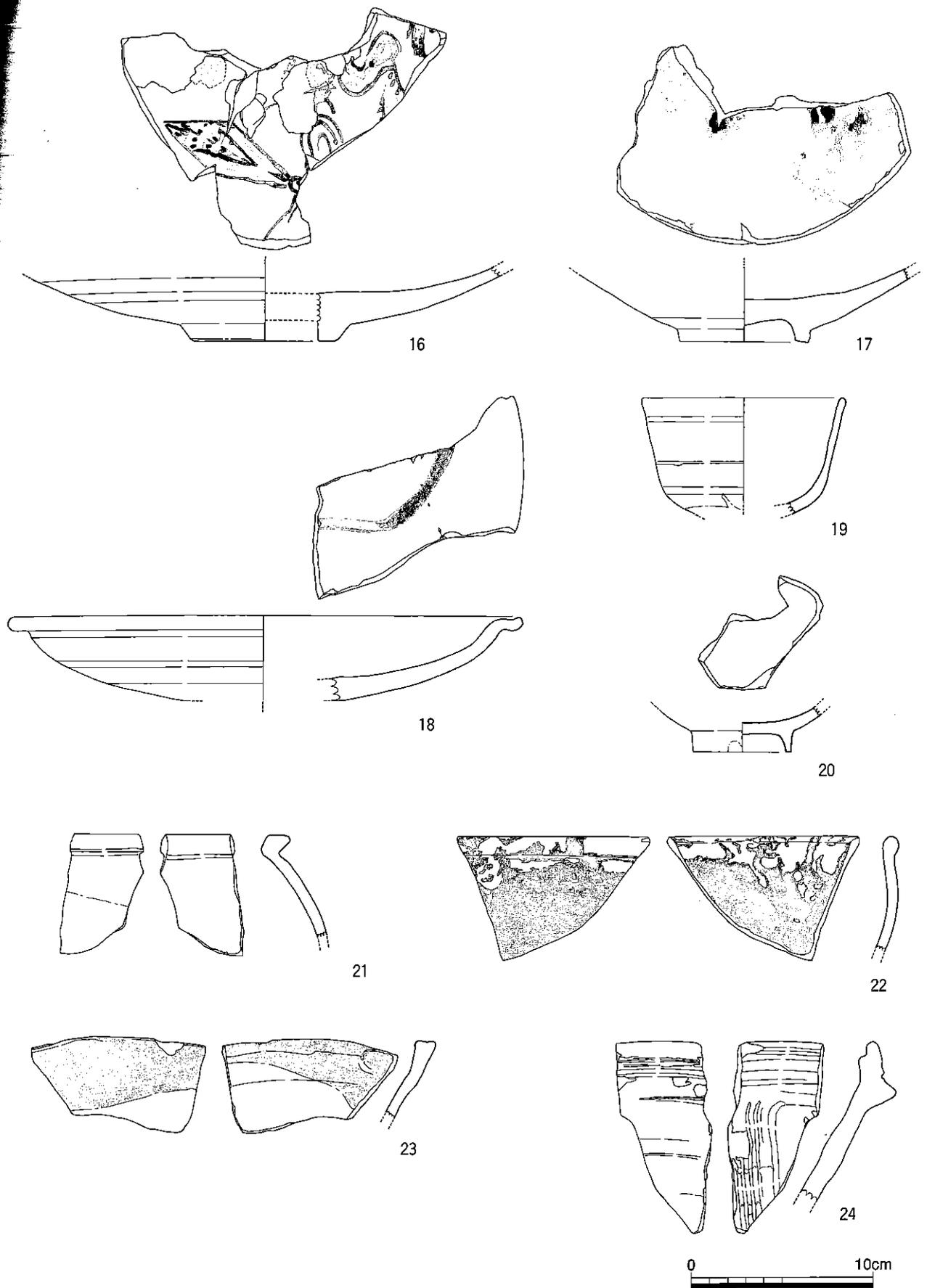
14



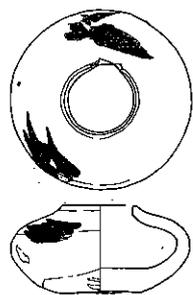
15



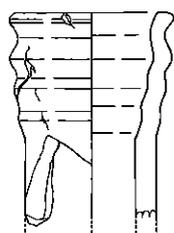
第31図 出土遺物（日本陶器）③（S=1/3）



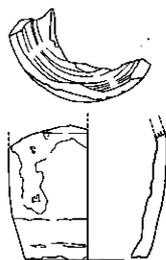
第32図 出土遺物 (日本陶器) ④ (S=1/3)



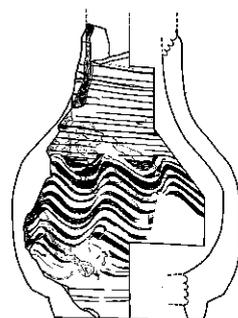
25



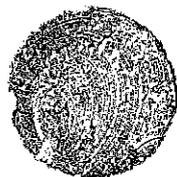
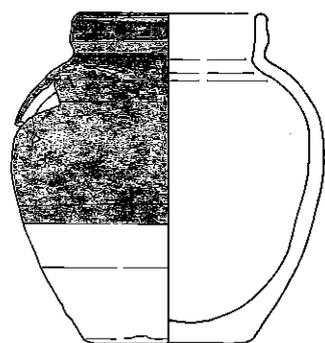
26



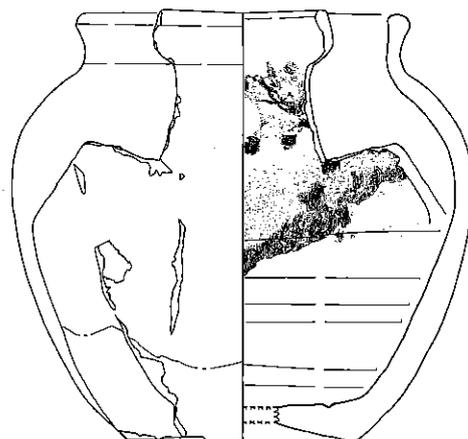
27



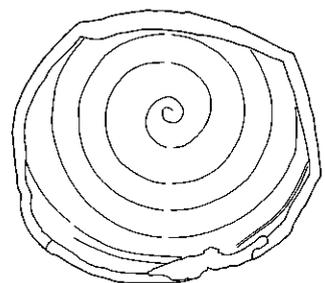
28



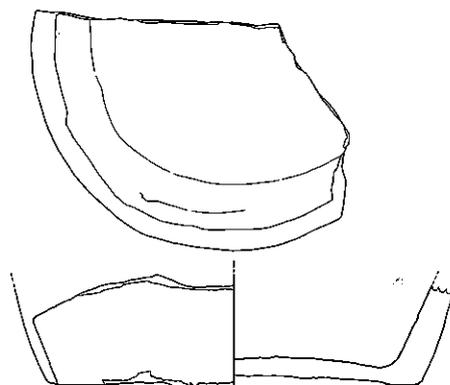
29



30



31



32



第33図 出土遺物（日本陶器）⑤（S=1/3）

4. 瓦 (第34~36図)

出土した瓦は軒丸, 丸, 軒平, 平, 隅軒平, 鬼, 鯨瓦である。

鯨瓦

1は胴体左側の一部である。U字型の工具による型押でウロコを表現している。上部に釘留用の穿孔が2箇所ある。裏面はヘラ状工具でナデ調整が施される。色調はオリーブ灰色を帯びている。

2は胴体左側の一部である。U字型の工具による型押でウロコを表現している。表面は成形後にヘラ状工具でナデ調整が施され、裏面は指ナデ調整が行われる。上部には釘留め用の穿孔が2ヶ所並んであり、一つは裏側から表面に向かって穿かれ、一つは表面から裏面に向けて斜め上方から穿っている。色調はオリーブ灰色を帯びている。

3は胴体右側の一部で、鱗の一部が付いている。U字型の工具による型押でウロコを表現している。表面の鱗の取付け部は指などで調整が、裏面はヘラ状工具でナデ調整が施される。胴体部の鱗取り付き近くに、釘留め用の穿孔が2ヶ所あり、裏側から表面に向かって穿かれている。鱗取り付き部にも釘留め用の穿孔が、胴体部から表面に向かって穿かれる。鱗部の裏面には、貼り付けるためのカキヤブリが見られる。色調は灰白色を帯びている。

4は胴体の一部である。U字型の工具による型押でウロコを表現している。釘留め用の穿孔が4ヶ所並んであり、表面から裏面に向かって穿かれている。穿孔は垂直の孔と表面から斜め上方向から穿かれるものが交互に施される。色調はオリーブ灰色を帯びている。

5は胴体の一部である。U字型の工具による型押でウロコを表現している。釘留め用の穿孔が1ヶ所ある。色調はオリーブ灰色を帯びている。

6は背鱗部分である。大小のU字型の工具による型押でウロコを表現している。釘留め用の穿孔が背鱗横にあり、表面から裏面に向かって穿かれる。裏面は指ナデ調整が行われる。色調は暗緑灰色を帯びている。

7は背鱗部分と思われる。三角形の突帯部分の横に、U字型の工具による型押の一部が見られ、裏面は指ナデ調整が行われる。色調はオリーブ灰色を帯びている。

8は鱗の部分であるが、先端部と取付け部が欠損している。要面にヘラ状工具による沈線で鱗条を表現している。色調はオリーブ灰色を帯びている。

9は鱗の部分である。両面にヘラ状工具による沈線で鱗条を表現している。色調は緑灰色を帯びている。

10は鱗の部分である。鱗条の先端部は山形をとり面取りを施している。色調は白灰色を帯びている。

11は鱗の部分である。表面はヘラ状工具による沈線で鱗条を表現している。裏面はヘラ状工具でナデ調整が施される。色調は白灰色を帯びている。

12は鱗の部分である。表面はヘラ状工具による沈線で鱗条を表現している。取付け部には釘留め用の穿孔がある。色調は暗緑灰色を帯びている。

13は鱗の部分である。表面はヘラ状工具による沈線で鱗条を表現している。取付け部には釘留め用の穿孔がある。色調はオリーブ灰色を帯びている。

14は鱗の部分である。表面はヘラ状工具による沈線で鱗条を表現している。取付け部には釘留め用

の穿孔がある。色調は灰白色を帯びている。

15は鱗の部分である。表面はヘラ状工具による沈線で鱗条を表現している。鱗部の裏面には、貼り付けるためのカキヤブリが見られる。色調は暗緑灰色を帯びている。

飾り瓦

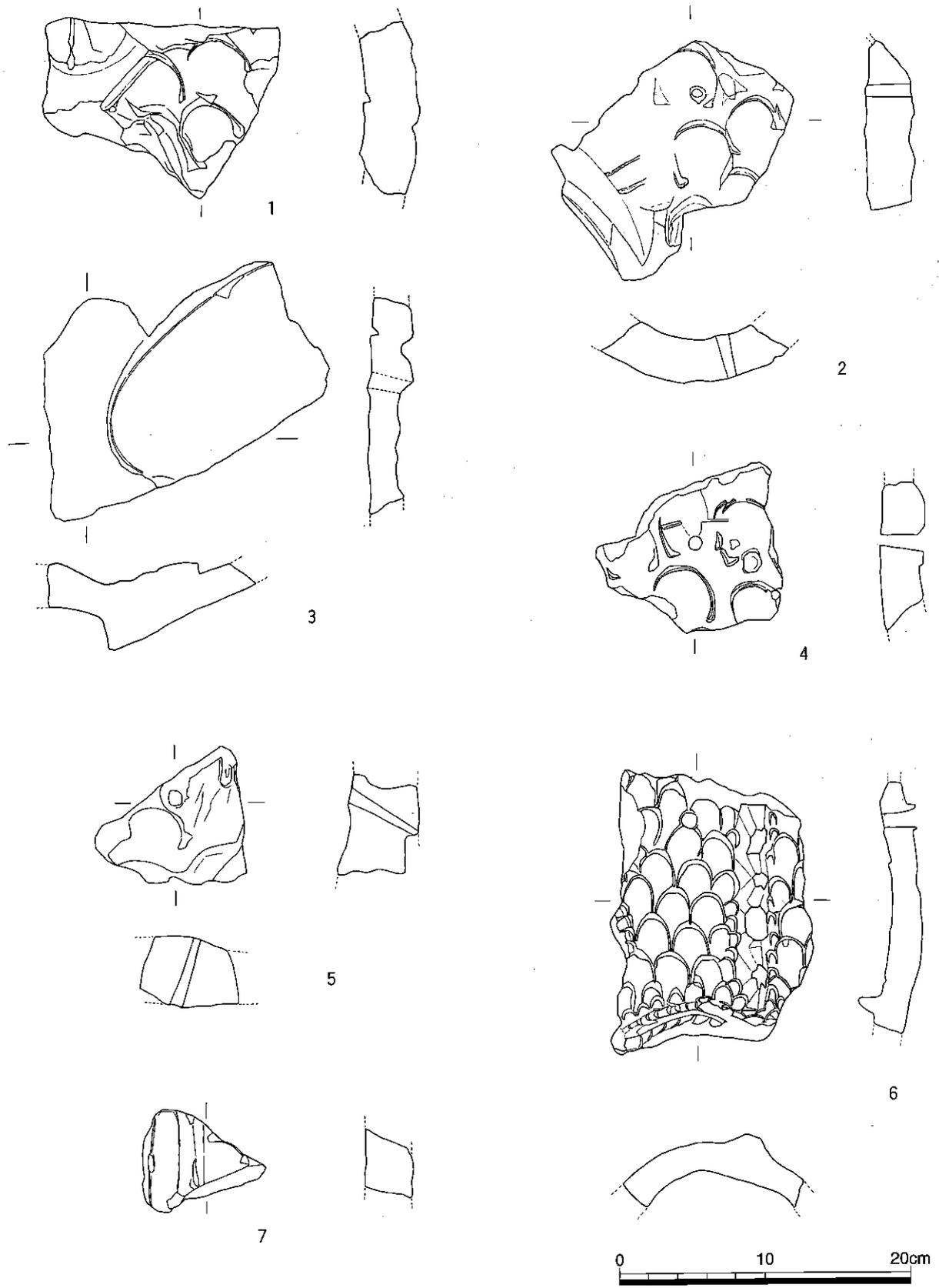
16は飾り瓦の一部と思われる。方形の四隅を曲面になるよう摘み出し山状に盛り上げ、周縁部は波うつように湾曲している。表面は円形の飾りが4ヶ所あるが、意匠は不明である。一部貼付け文様が剥落してカキヤブリが見られる。全体的にヘラ状工具により粗くナデ調整が施される。中央には釘留め用の穿孔がある。色調は緑灰色を帯びている。

17は飾り瓦の一部と思われる。三角形の瓦台に、先が尖った棒状のものをずらして3段に並べている。意匠は鳥の尾羽と思われるがわからない。色調は暗緑灰色を帯びている。

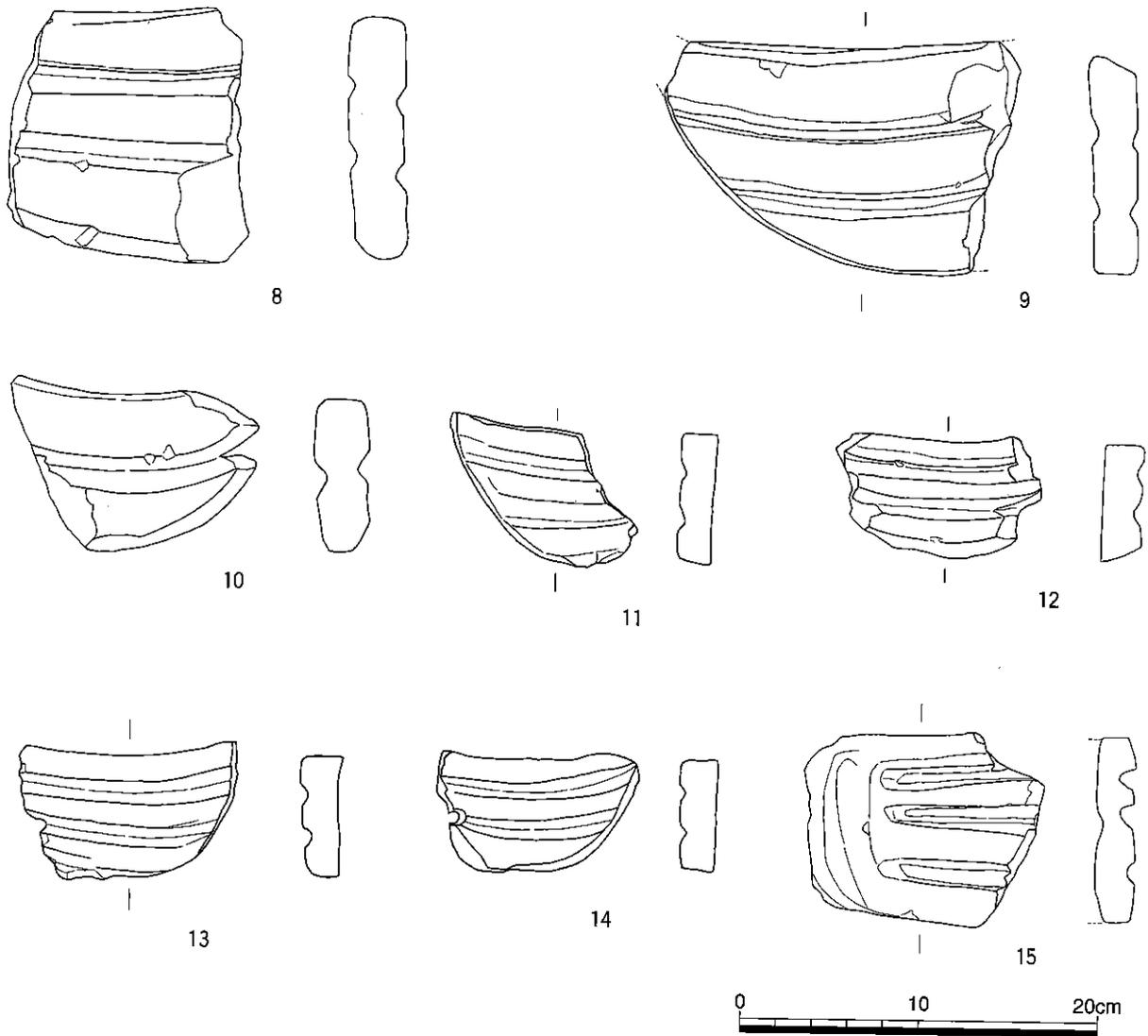
18は飾り瓦の一部と思われる。表面はヘラ状工具によりナデ調整が施され、縄文様が貼付けてある。色調は緑灰色を帯びている。

19は飾り瓦の一部と思われる。半円状に湾曲する台瓦の縁部にはヘラ状工具により縦方向に沈線を刻む。内側にはヘラ状工具の先端で横方向に4列の点刻文様が付くが、大部分は剥落してカキヤブリが見られる。色調は緑灰色を帯びている。

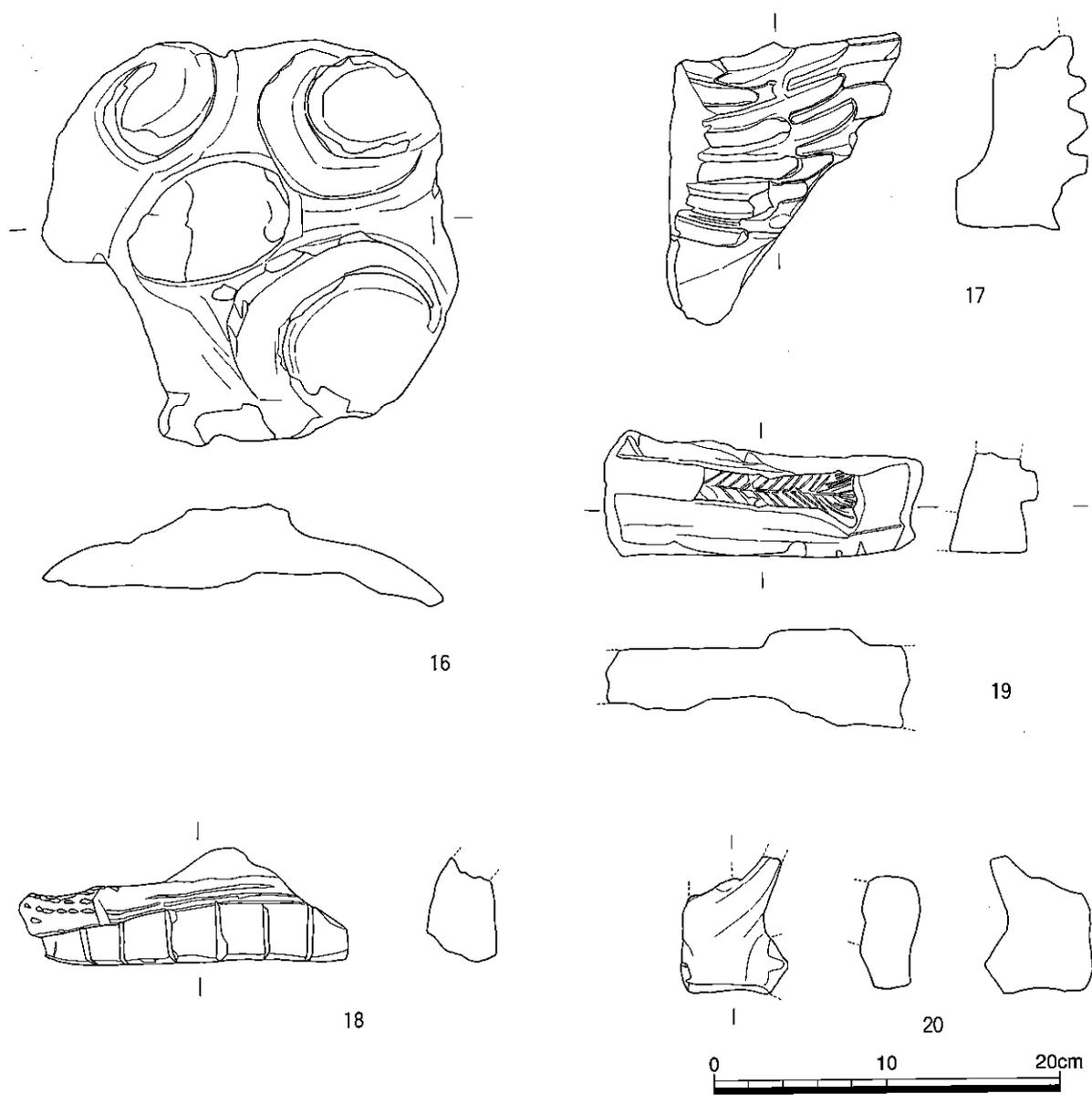
20は鬼瓦の牙か角の一部と思われる。尖った部分是指ナデ調整が行われる。色調は緑灰色を帯びている。



第34図 出土遺物 (鯨瓦) ① (S=1/4)



第35図 出土遺物（鯨瓦）②（S=1/4）



第36図 出土遺物 (飾り瓦) (S = 1/4)

5. キリシタン関係遺物

出土したキリシタン関係遺物は、十字架6点、メダイ2点、ロザリオの珠21点、花十字紋瓦2点である。

a. 十字架

十字架は形状的に2類5種に分類し、縦横軸が直線的なものⅠ類と、木製十字架玉を意匠とした縦横軸が膨らみを持つものⅡ類とした。さらに、Ⅰ類で貫通孔のものをA、上部に紐を通すための穿孔が施されるものをB、縦軸下部に穿孔が施されるものをCの3類に分けた。Ⅱ類では、縦横軸の膨らみの形状から木製十字架玉の意匠を持つものA、縦横軸端が膨らみを持つものBの2種に分けた。また、鑄造方法^{m)}についても、一枚鑄型で鑄造するものをA類、二枚鑄型で鑄造するものをB類の二種類に分けた。

1は、十字架の軸部分である。角柱状の軸となる。これまでに出土した資料を見ると、縦軸には紐を通すための貫通孔か、下部には穿孔が施されているが、この資料はその特徴が見られないことから、縦軸上部ないし横軸の一部と思われる。鑄造方法はA類である。

2は、縦軸上下を欠損した横軸部分である。円柱状の縦横軸となり、縦軸は紐を通すためのものか貫通孔が施される。軸は直線的であり、Ⅰ-A類とした。鑄造方法はB類である。

3は、縦横軸に膨らみがある木製十字架玉の意匠をもつ。縦軸は貫通孔が施さ、横軸の両端は平らに削られている。膨らみを持つ形状からⅡ-A類とした。鑄造方法はB類である。

4は、縦軸上部と横軸の一部は折れ曲り、下部は欠損している。縦横軸に膨らみがある木製十字架玉の意匠をもつ。縦軸は貫通孔が施され、横軸の両端は平らに削られている。膨らみを持つ形状からⅡ-A類とした。鑄造方法はB類である。

5は、縦横軸は直線的で、縦軸は中空の筒状のものである。磔刑像は付かない。裏面は縦軸に大きな裂け目があり、これは製造過程である程度生じていたスリットが裂けたものであると思われる。鑄造方法は、板状になったものを丸めて圧着させ、背部で留め合わせる一枚鑄型で鑄造するA類である。

6は、横軸の一部が欠損している。縦横軸に膨らみがある木製十字架玉の意匠をもち、縦軸は貫通孔が施される。縦軸側面に、合せ鑄型（2枚鑄型）で鑄造する際に生じるパーティングラインが認められることから、B類である。

7は、縦軸上部と横軸の一部が下部は欠損している。横軸は円柱状で直線的で、縦軸は角錐状で下部はやや台形状になり、穿孔が施される。磔刑像は付かない。Ⅰ-C類とした。鑄造方法はA類である。

b. メダイ

1は、真鍮製で、長径2.10cm、短径1.60cmである。上部穿孔部には、環状部と繋ぐための針金状のものが巻かれている。穿孔部は正面をむき、図柄は腐食が激しいため不明である。

2は、青銅製の箱型メダイで、聖遺物容器である。長径3.50cm、短径2.20cm、幅0.9cmである。上部の鈕は縦向きに付き、底部は径0.3cmの孔あり、何らかの付属品が付くものと思われる。内面や裏面は腐食のため図像は見えないが、X線写真で図柄が僅かに判明できる。図柄は箱内面か裏面のどちらかに描かれているかは分からないが、楕円形の圏線の中に罪票十字架が描かれ、圏線の外側には波状の文様が描かれている。箱形であるため何らかの蓋状のものがあると思われるが出土していない。

c. ロザリオの珠

1は、ガラス製で風化により白化している。径が 0.60cm 、厚が 0.30cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.15cm である。らせん状の巻き痕が認められる。

2は、ガラス製で風化により白化している。径が 0.60cm 、厚が 0.40cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.20cm である。らせん状の巻き痕が認められる。

3は、ガラス製で風化により白化している。径が 0.60cm 、厚が 0.40cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.20cm である。らせん状の巻き痕が認められる。

4は、ガラス製で風化により白化している。径が 0.55cm 、厚が 0.40cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.20cm である。

5は、ガラス製で風化により白化している。径が 0.60cm 、厚が 0.30cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.15cm である。らせん状の巻き痕が認められる。

6は、ガラス製で風化により白化している。径が 0.55cm 、厚が 0.40cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.25cm である。らせん状の巻き痕が認められる。

7は、ガラス製で風化により白化している。胴部分が欠損し25%残る。径が 0.70cm 、厚が 0.40cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.20cm である。

8は、木製で黒色の塗料が塗られている。径が 0.90cm 、厚が 0.80cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.20cm である。

9は、ガラス製で風化により白化している。径が 0.70cm 、厚が 0.40cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.20cm である。らせん状の巻き痕が認められる。

10は、ガラス製で風化により白化している。径が 0.70cm 、厚が 0.50cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.20cm である。らせん状の巻き痕が認められる。

11は、ガラス製で風化により白化し、一部銀色化している。径が 0.70cm 、厚が 0.50cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.20cm である。

12は、ガラス製で風化により白化し、一部銀色化している。径が 0.60cm 、厚が 0.50cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.20cm である。

13は、ガラス製で風化により白化している。径が 0.60cm 、厚が 0.50cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.25cm である。

14は、ガラス製で風化により白化している。径が 0.70cm 、厚が 0.40cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.20cm である。

15は、ガラス製で風化により白化している。径が 0.70cm 、厚が 0.50cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.20cm である。

16は、ガラス製で風化により白化している。径が 0.60cm 、厚が 0.30cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.30cm である。

17は、小珠の緑色のガラス製である。径が 0.35cm 、厚が 0.40cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.10cm である。

18は、ガラス製で風化により白化している。径が 0.65cm 、厚が 0.40cm で、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は 0.20cm である。らせん状の巻き痕が認められる。

19は、ガラス製で風化により白化している。径が0.65cm、厚が0.4cmで、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は0.20cmである。らせん状の巻き痕が認められる。

20は、大珠で乳白色のガラス製である。風化により表面には気泡と思われる穴が多く、らせん状の巻き痕が認められる。径が1.30cm、厚が1.30cm、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は0.3cmである。

21は、大珠で乳白色のガラス製である。径が1.50cm、厚が1.10cm、中央部には紐が通せるよう孔が施されている。孔径は0.3cmである。

d. 花十字紋瓦

1は、瓦当面に花十字紋の模様を有する軒丸瓦である。瓦当面全体の1/6を残す以外は欠損している。1本の花弁模様と2個の珠文が残る。花弁の間に珠文が3個を配すタイプと思われる。⁽²⁾

分類としてⅡB3に属する。色調は暗緑灰色を帯びている。胎土は、オリーブ黄色を呈する。

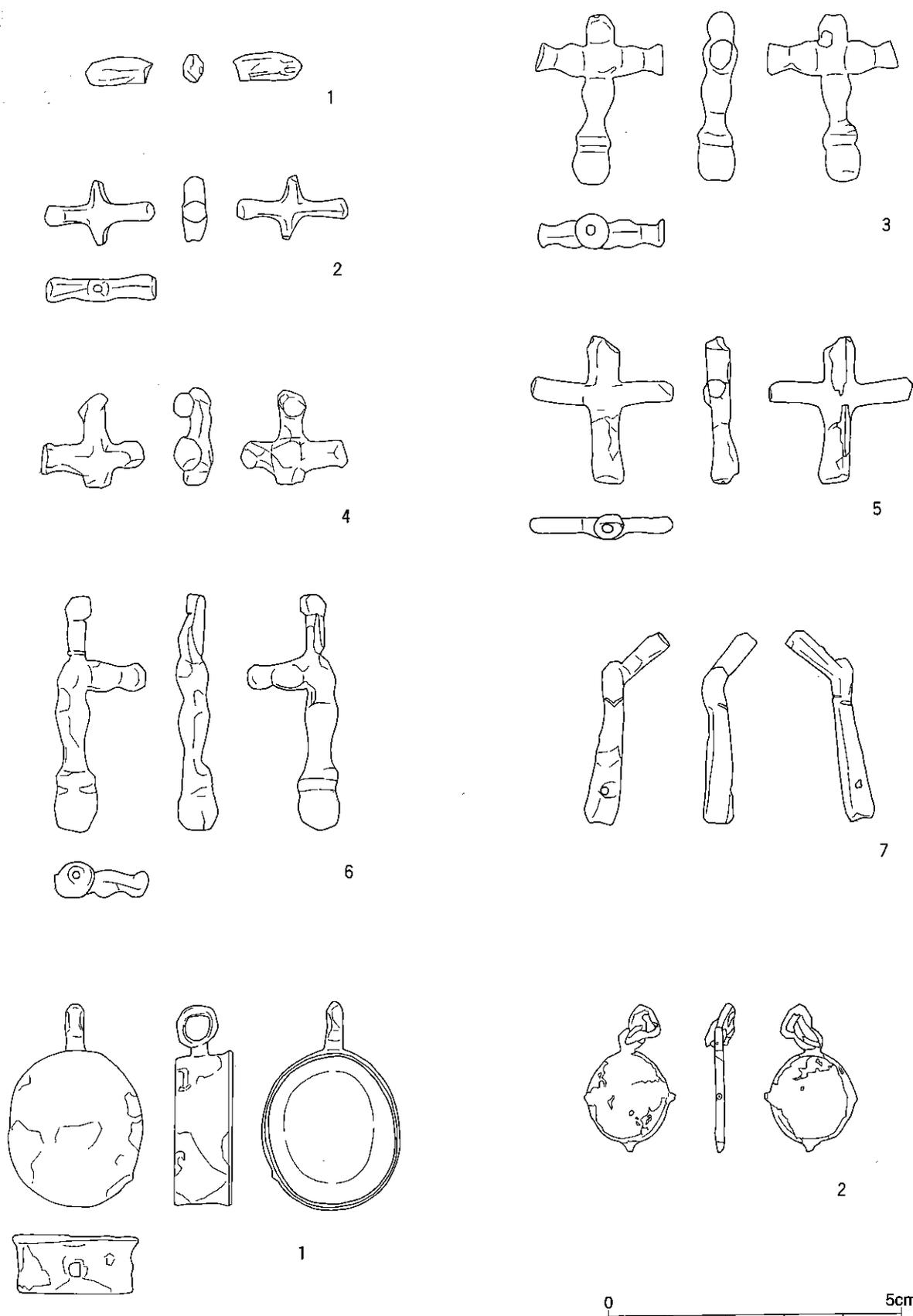
2は、瓦当面に花十字紋の模様を有する軒丸瓦である。瓦当面全体の1/3を残す以外は欠損している。1本の花弁模様と5個の珠文が残る。花弁の間に珠文が3個を配すタイプである。

分類としてⅡB3に属する。色調はオリーブ灰色を帯びている。胎土は、オリーブ黄色を呈する。

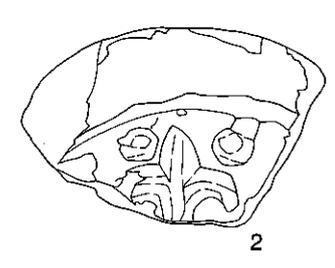
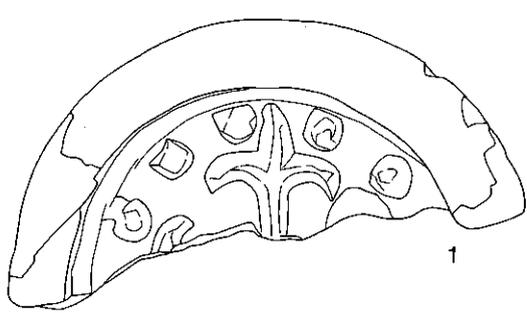
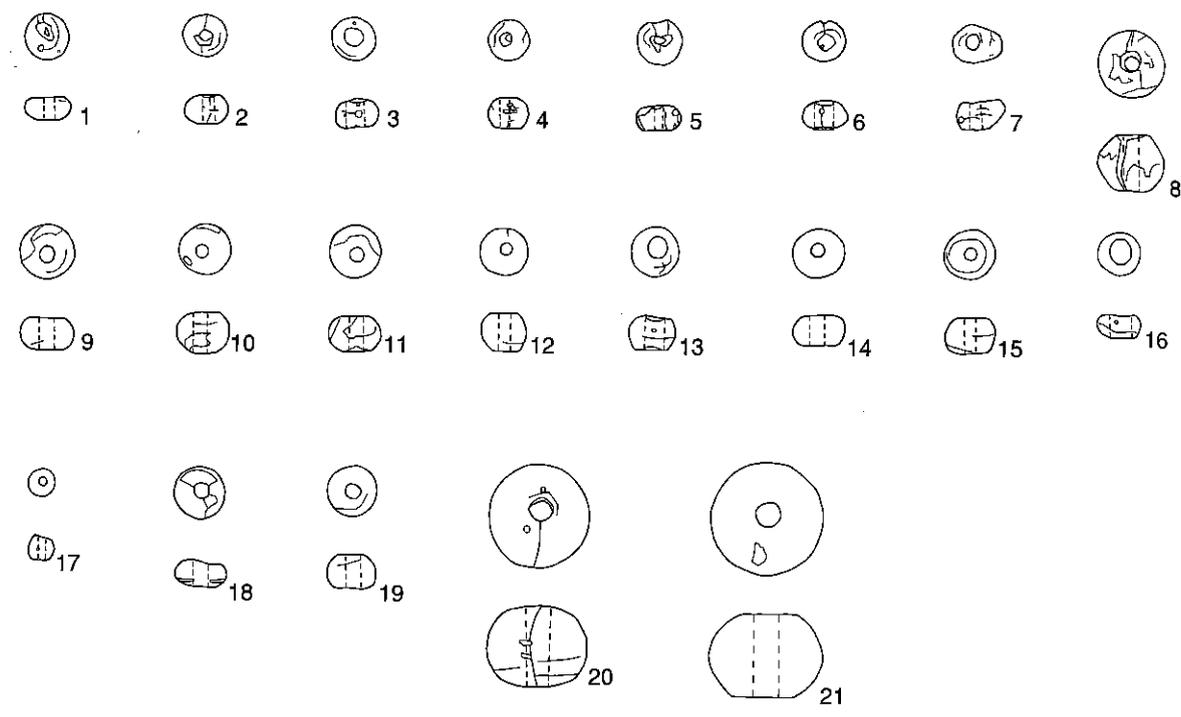
(松本)

【補註・参考文献】

- (1) 神田高士氏は、長崎市及び原城から出土した鉛製十字架を実見され、中に合せ鑄型（2枚鑄型）で鑄造する際に生じるパーティンラインが認められる資料あることから、従来考えられていた製法とは明らかに異なる鑄造法で製作されていることに気づかれ、鉛製十字架の鑄造技法をA類1枚型、B類を合せ鑄型の2種類に分類された。
- (2) 宮下雅史「花十字紋考」『西海考古』5号 西海考古同人会 2003



第37図 出土遺物 (十字架/メダイ) (S=1/1)



第38図 出土遺物（ロザリオの珠／花十字紋瓦）

表2 遺物観察表(貿易磁器①)

貿易磁器

番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	年代	出土地点	備考
1	皿	10.4	—	—	龍泉窯系	14C	79	(外)菊花形
2	皿	10.0	3.8	2.7	漳州窯系	16C	79	(外)八角皿
3	皿	12.3	6.6	4.0	龍泉窯系	15C	S14	
4	皿	17.4	5.2	3.8	龍泉窯系	15C中	81	(外)八角皿 (見込み)印花文
5	皿	17.3	6.2	3.9	龍泉窯系	15C中	S14	(外)八角皿 (見込み)印花文
6	皿	(12.6)	5.8	3.2	景德鎮系	16C第3~16C第4	64	(外)菊花形
7	皿	8.4	4.0	2.6	景德鎮系	16C	59	(外)菊花形
8	碗	(14.8)	7.2	6.5	福建・広東系	16C後	79	
9	香合	—	—	—	龍泉窯系	14C第4~15C第1	73	
10	瓶	—	(6.2)	—	龍泉窯系	15C~16C	73	
11	小盃	5.8	2.2	2.7	景德鎮系	16C	S14	(見込み)蛇ノ目状釉剥ぎ
12	小盃	(6.8)	(2.8)	1.9	景德鎮系	16C第4~17C第1	59	(見込み)蛇ノ目状釉剥ぎ
13	皿	12.0	6.4	3.4	景德鎮系	16C第4~17C第1	59	(外)菊花形 (底裏)「天下太平」銘 (底)初殻付着
14	皿	—	6.8	—	景德鎮系	1590~1630	73	(底)初殻付着
15	皿	(13.8)	(7.1)	3.5	景德鎮系	16C	S14	
16	皿	—	5.9	—	福建・広東系	16C第4~17C第1	69	
17	皿	(6.5)	3.4	1.2	景德鎮系	16C	64	(外)菊花形 (表)青 (底裏)「陳」銘
18	皿	9.4	5.0	2.5	漳州窯系	16C第4~17C第1	S14	(口縁内)四方禪文 (見込み)山水 (底)初殻付着
19	皿	9.7	5.0	2.3	漳州窯系	16C第4~17C第1	S14	(口縁内)四方禪文 (見込み)山水 (底)初殻付着
20	皿	9.4	4.9	2.6	漳州窯系	16C第4~17C第1	74	(口縁内)四方禪文 (見込み)山水 (底)初殻付着
21	皿	10.0	4.7	2.3	漳州窯系	16C第4~17C第1	S14	(口縁内)四方禪文 (見込み)山水 (底)初殻付着
22	皿	9.6	5.1	2.4	漳州窯系	16C第4~17C第1	S14	(口縁内)四方禪文 (見込み)山水 (底)初殻付着
23	皿	9.7	5.2	2.2	漳州窯系	16C第4~17C第1	S14	(口縁内)四方禪文 (見込み)山水 (底)初殻付着
24	皿	(9.6)	5.0	2.4	漳州窯系	16C第4~17C第1	S14	(口縁内)四方禪文 (見込み)山水 (底)初殻付着
25	皿	(9.6)	(5.1)	2.5	漳州窯系	16C第4~17C第1	S14	(口縁内)四方禪文 (見込み)山水 (底)初殻付着
26	皿	—	4.6	—	漳州窯系	16C第4~17C第1	73	(口縁内)四方禪文 (見込み)山水 (底)初殻付着
27	皿	(9.6)	(5.2)	2.4	漳州窯系	16C第4~17C第1	73	(口縁内)四方禪文 (見込み)山水 (底)初殻付着
28	皿	(9.6)	(4.8)	2.5	漳州窯系	16C第4~17C第1	73	(口縁内)四方禪文 (見込み)山水 (底)初殻付着
29	皿	9.6	5.1	2.2	景德鎮系	16C前	79	(見込み)十字花文
30	皿	(9.6)	4.9	2.4	景德鎮系	16C前	80	(見込み)十字花文
31	皿	9.6	(5.2)	2.3	景德鎮系	16C前	80	(見込み)十字花文
32	皿	(10.3)	6.0	2.5	景德鎮系	16C第4~17C第1	S23	(見込み)雨龍文 (底裏)「福」銘
33	皿	10.1	6.0	2.4	景德鎮系	16C第4~17C第1	80	(見込み)雨龍文 (底裏)「正」銘
34	皿	10.5	6.3	2.3	景德鎮系	1590~1630	64	(見込み)鳳凰,「日」(底裏)文字銘
35	皿	10.2	5.8	2.7	景德鎮系	1590~1630	64	(見込み)鳳凰,「日」(底裏)文字銘
36	皿	10.6	6.2	2.5	景德鎮系	1590~1630	64	(見込み)鳳凰,「日」(底裏)文字銘
37	皿	10.7	6.2	2.3	景德鎮系	16C第4~17C第1	S14	(見込み)草花 (底)初殻付着
38	皿	(10.4)	5.0	2.7	福建・広東系	16C後	79	(見込み)草花 (底)初殻付着
39	皿	—	(6.2)	—	福建・広東系	16C後	80	(見込み)龍文
40	皿	9.8	4.6	2.4	漳州窯系	16C第4~17C第1	79	(見込み)蛇ノ目状釉剥ぎ
41	皿	12.0	4.3	3.0	漳州窯系	16C後	64	基筒底(見込み)草木 (外)文字 (底)初殻付着
42	皿	8.5	5.1	2.3	漳州窯系	1590~1630	73	角皿 (見込み)鷲,雲
43	皿	16.6	9.0	3.5	景德鎮系	16C前~16C中	64	(見込み)唐草文 (外)唐草文
44	皿	—	5.8	—	景德鎮系	1590~1630	78	(見込み)唐草文 (底)初殻付着
45	皿	—	(6.0)	—	景德鎮系	1600~1630	S14	基筒底(見込み)草花
46	皿	—	6.3	—	景德鎮系	16C第4~17C第1	73	(見込み)「寿」銘 (底)初殻付着
47	皿	—	5.6	—	景德鎮系	1590~1630	S14	(見込み)「壽」銘 (底裏)文字銘
48	皿	13.7	8.2	2.6	景德鎮系	1590~1630	60	(内)雨降文 (見込み)雨龍文 (底裏)文字銘
49	皿	—	5.7	—	福建・広東系	1590~1630	73	(見込み)蛇ノ目状釉剥ぎ
50	皿	15.3	7.8	4.5	景德鎮系	1590~1630	73	(内)葡萄文 (見込み)山水,城郭,人物
51	皿	15.2	8.0	2.2	景德鎮系	1590~1630	73	(内)葡萄文 (見込み)山水,城郭
52	皿	—	(8.2)	—	景德鎮系	1590~1630	73	(見込み)人物,雲
53	皿	13.9	7.5	3.4	景德鎮系	1590~1630	64	(内)花虫文 (見込み)山水,樓閣 (外)雲文 (底裏)文字
54	皿	—	7.4	—	景德鎮系	16C第4~17C第1	80	(内)梅竹文 (見込み)山水 (外)唐草文 (底裏)四字銘
55	皿	13.3	7.3	3.0	景德鎮系	16C後	64	(内)竹文 (見込み)人物 (外)牡丹,宝 (底裏)四字銘
56	皿	14.0	7.5	3.6	景德鎮系	1590~1630	74	区画文様皿 (内)草花文 (見込み)岩鳥花文 (外)宝文

表3 遺物観察表(貿易磁器②/貿易陶器)

番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	年代	出土地点	備考
57	皿	14.0	7.9	3.6	景德镇系	1590~1630	74	区画文様皿(内)草花文(見込み)岩鳥花文(外)宝文
58	皿	14.0	7.7	3.3	景德镇系	1590~1630	74	区画文様皿(内)草花文(見込み)岩鳥花文(外)宝文
59	皿	14.1	7.6	3.5	景德镇系	1590~1630	S14	区画文様皿(内)草花文(見込み)岩鳥花文(外)宝文
60	皿	14.5	7.6	3.7	景德镇系	1590~1630	74	区画文様皿(内)草花文(見込み)岩鳥花文(外)宝文
61	皿	14.4	7.9	3.6	景德镇系	1590~1630	S14	区画文様皿(内)草花文(見込み)岩鳥花文(外)宝文
62	皿	13.9	7.7	3.7	景德镇系	1590~1630	S14	区画文様皿(内)草花文(見込み)岩鳥花文(外)宝文
63	皿	—	7.0	—	景德镇系	1590~1630	73	区画文様皿(内)草花文(見込み)岩鳥花文(外)宝文
64	皿	—	(7.4)	—	景德镇系	1590~1630	73	区画文様皿(内)草花文(見込み)岩鳥花文(外)宝文
65	皿	14.5	7.9	3.3	景德镇系	1590~1630	S14	区画文様皿(内)草花文(見込み)岩鳥花文(外)宝文
66	皿	—	(7.6)	—	景德镇系	1590~1630	73	区画文様皿(内)宝文(見込み)岩鳥花文(外)宝文
67	皿	(14.0)	7.8	3.7	景德镇系	1590~1630	S14	区画文様皿(内)草花文(見込み)岩鳥花文(外)宝文
68	皿	—	(9.6)	—	景德镇系	1590~1630	S14	(見込み)鳳凰,「日」銘
69	皿	23.4	12.8	6.5	漳州窯系	1590~1630	S14	(内)八卦,幾何学文(見込み)岩鳥草文(底)粉殻付着
70	皿	(20.8)	14.5	4.2	漳州窯系	1590~1630	73	(内)青海波文(見込み)鳥草文(底)粉殻付着
71	皿	(22.5)	(11.3)	4.3	漳州窯系	1590~1630	73	(内)鳥,草
72	皿	(23.8)	11.8	4.3	漳州窯系	1590~1630	73	(見込み)鹿,草文(底)粉殻付着
73	皿	—	13.5	—	漳州窯系	1590~1630	S14	(見込み)鳥,草花文(底)粉殻付着
74	皿	(24.5)	13.8	3.8	漳州窯系	1610~1630	73	呉須赤絵皿(内)青海波文(見込み)草花文(底)粉殻付着
75	皿	(25.8)	(12.6)	4.5	漳州窯系	1610~1630	73	呉須赤絵皿(底)粉殻付着
76	小杯	—	3.2	—	景德镇系	16C後	80	(見込み)「射」字文(底裏)四字銘
77	小杯	6.3	2.7	3.4	景德镇系	1590~1630	73	(外)草花文
78	小杯	7.1	2.6	4.8	景德镇系	1590~1610	S14	(見込み)花卉文
79	小杯	7.2	2.6	4.9	景德镇系	1590~1610	S14	(見込み)花卉文
80	小杯	—	3.1	—	景德镇系	1590~1610	79	(見込み)動物文
81	小杯	—	3.6	—	景德镇系	1590~1610	69	(見込み)花卉文
82	小杯	—	3.5	—	景德镇系	16C後	64	碁笥底(見込み)十字花文
83	碗	—	4.4	—	景德镇系	1590~1630	73	饅頭心(見込み)花卉文
84	碗	—	5.2	—	景德镇系	1590~1630	60	饅頭心(見込み)蓮文
85	碗	(10.8)	—	—	景德镇系	1590~1630	S14	(口縁内)四方禪文(外)山水
86	碗	(13.0)	6.2	4.4	漳州窯系	1610~1630	73	(見込み)蓮文
87	碗	9.9	3.8	5.3	景德镇系	16C後	64	(口縁内)四方禪文(見込み)人物(底裏)「禄享千鍾」銘
88	碗	10.4	5.0	5.4	景德镇系	1590~1630	S14	(見込み)十字花文(外)花唐草文
89	碗	11.5	4.9	5.2	漳州窯系	1590~1630	S14	(見込み)蓮文(外)唐草文(底)粉殻付着
90	碗	11.5	4.8	5.9	漳州窯系	1590~1630	S14	(見込み)草木文(外)唐草文(底)粉殻付着
91	碗	11.5	5.0	5.9	漳州窯系	1590~1630	S14	(見込み)草木文(外)唐草文(底)粉殻付着
92	碗	11.0	4.7	5.1	漳州窯系	1590~1630	S14	(見込み)草木文(外)唐草文(底)粉殻付着
93	碗	11.4	4.2	4.2	漳州窯系	1590~1630	S14	(見込み)花卉文(外)人物(底)粉殻付着
94	碗	(14.6)	5.2	5.5	漳州窯系	1590~1630	77	(見込み)十字花文(外)唐草文(底)粉殻付着
95	碗	(13.6)	5.2	4.7	景德镇系	1610~1630	73	(見込み)野菜文(外)唐草文(疊付)蛇ノ目状
96	碗	—	5.8	—	漳州窯系	1590~1630	69	(見込み)白抜花十字文(外)白抜唐草文
97	碗	18.4	7.1	8.0	漳州窯系	1590~1630	S14	(口縁内)四方禪文(見込み)城郭,船(外)城郭,船
98	水注	2.9	5.4	9.7	景德镇系	16C第4~17C第1	64	瑠璃釉
99	瓶	4.9	5.8	11.7	景德镇系	17C前	79	(外)花卉文
100	瓶	—	(11.0)	—	景德镇系	17C前	S14	
101	瓶	—	—	—	景德镇系	17C前	S14	(外)区画内に花卉文
102	香合	(7.7)	(7.0)	2.2	景德镇系	17C前	74	

貿易陶器

番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	年代	出土地点	備考
1	壺	—	—	—	ベトナム	16C第4~17C第1	73	
2	壺	—	—	—	ベトナム	16C第4~17C第1	73	(外)獅目文
3	壺	—	—	—	ベトナム	16C第4~17C第1	S14	
4	壺	—	—	—	ベトナム	16C第4~17C第1	73	(外)ノ切糸目
5	壺	—	—	—	タイ	16C第4~17C第1	S14	(内)褐釉
6	壺	11.0	—	—	ベトナム	16C第4~17C第1	S14	(外)沈線
7	壺	—	11.0	—	ベトナム	16C第4~17C第1	S14	(外)褐釉
8	瓶	—	10.7	—	ベトナム	16C第4~17C第1	S14	長胴瓶

表4 遺物観察表 (日本磁器/日本陶器)

日本磁器								
番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	年代	出土地点	備考
1	小盆	—	3.4	—	肥前	1610~1630		(底)砂目
2	小壺	—	5.2	—	肥前	1610~1630	64	(畳付)粉殻付着
3	皿	24.2	8.4	6.1	肥前	1610~1630	59	(口縁内)区画間に花文 (見込み)花文
4	皿	22.5	8.2	7.1	肥前	1610~1630	59	(見込み)花卉文
5	碗	(9.8)	(5.2)	7.6	肥前	1630~1640	73	(口縁内)連弁文 (外)区画間に花卉文
6	香炉	5.9	4.9	6.3	肥前	1610~1630	78	(口縁)唐草文 (外)雲と花卉文

日本陶器								
番号	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	年代	出土地点	備考
1	皿	—	4.4	—	肥前	1590~1610	S14	上下胎土目
2	皿	—	5.0	—	肥前	1600~1630	69	上下砂目
3	皿	(13.0)	4.8	3.8	肥前	1600~1630	69	上下砂目
4	皿	—	4.6	—	肥前	1600~1630	69	上下砂目
5	皿	(14.0)	4.6	4.3	肥前	1600~1630	73	下砂目
6	皿	—	4.5	—	肥前	1610~1630	S14	上下砂目
7	皿	14.0	4.7	3.6	肥前	1600~1630	80	上下砂目
8	皿	11.2	3.7	4.0	肥前	1600~1630	73	
9	皿	—	4.2	—	肥前	1600~1630	64	三島手 下砂目
10	皿	(10.6)	4.4	2.2	瀬戸美野	16C後	80	
11	皿	(29.0)	8.2	7.1	肥前	1590~1630	62	(見込み)鉄砂で草文
12	皿	—	8.4	—	肥前	1590~1630	80	(見込み)鉄砂で草文
13	皿	—	(7.7)	—	肥前	1590~1630	59	上砂目 (見込み)鉄砂で草文
14	皿	—	8.4	—	肥前	1610~1630	64	下胎土目 (見込み)松樹文・被熱痕
15	皿	(31.8)	9.6	6.2	肥前	1610~1630	80	上下胎土目 (見込み)松樹文・櫛目文
16	皿	—	(7.6)	—	肥前	1610~1630	80	上胎土目 (見込み)草花文・櫛目文
17	皿	—	7.0	—	肥前	1610~1630	56	下胎土目 (見込み)松樹文・被熱痕
18	皿	(28.0)	—	—	肥前	17C前	80	二彩手 (見込み)刷毛目
19	碗	11.0	—	—	肥前	17C前	64	緑釉
20	碗	—	(5.2)	—	肥前	17C前	79	緑釉
21	鉢	—	—	—	肥前	16C第4~17C第1	73	
22	鉢	—	—	—	肥前	17C前	73	
23	播鉢	—	—	—	肥前	1590~1630	S14	御目5本
24	播鉢	—	—	—	肥前	16C後	S14	御目7本
25	小壺	2.8	3.4	3.5	肥前	1590~1610	77	(外)鉄砂で文様
26	瓶	6.6	—	—	肥前	17C前	56	
27	瓶	—	—	—	肥前	1580~1610	S14	
28	瓶	—	—	—	肥前	17C前	S14	二彩手 (外)刷毛目, 櫛目文
29	壺	8.0	6.8	12.0	肥前	17C前	S14	
30	壺	(12.6)	9.3	16.0	肥前	17C前	80	
31	壺	—	6.5	—	肥前	17C前	73	(見込み)籠轆目
32	甕	—	13.8	—	肥前	17C前	73	

表5 遺物観察表 (十字架/メダイ/ロザリオの珠)

十字架

番号	種別	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重さ(g)	材質	出土地点	備考
1	十字架	—	—	0.35	0.807	鉛	73	
2	十字架	1.11	1.90	0.42	2.094	鉛	81	
3	十字架	2.95	2.20	0.65	6.170	鉛	59	
4	十字架	1.65	1.81	0.70	2.505	鉛	59	
5	十字架	2.40	2.30	0.40	3.476	鉛	64	
6	十字架	3.25	1.20	0.50	3.677	鉛	64	
7	十字架	4.05	1.51	0.70	6.612	鉛	64	

メダイ

番号	種別	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重さ(g)	材質	出土地点	備考
1	メダイ	3.45	2.30	1.00	5.311	純銅	77	聖遺物容器
2	メダイ	2.52	1.60	0.42	1.546	青銅	59	

ロザリオの珠

番号	種別	径(cm)	孔(cm)	厚(cm)	重さ(g)	材質	出土地点	備考
1	ロザリオの珠	0.60	0.15	0.30	0.070	ガラス	59	
2	ロザリオの珠	0.60	0.20	0.40	0.099	ガラス	59	
3	ロザリオの珠	0.60	0.20	0.40	0.100	ガラス	59	
4	ロザリオの珠	0.55	0.20	0.40	0.131	ガラス	59	
5	ロザリオの珠	0.60	0.15	0.30	0.065	ガラス	59	
6	ロザリオの珠	0.55	0.25	0.40	0.075	ガラス	59	
7	ロザリオの珠	0.50	0.20	0.40	0.072	ガラス	59	
8	ロザリオの珠	0.90	0.20	0.80	0.286	ガラス	64	
9	ロザリオの珠	0.70	0.20	0.40	0.196	ガラス	64	
10	ロザリオの珠	0.70	0.20	0.50	0.231	ガラス	64	
11	ロザリオの珠	0.70	0.20	0.50	0.252	ガラス	64	
12	ロザリオの珠	0.60	0.20	0.50	0.277	ガラス	64	
13	ロザリオの珠	0.60	0.25	0.50	0.202	ガラス	64	
14	ロザリオの珠	0.70	0.20	0.40	0.136	ガラス	64	
15	ロザリオの珠	0.70	0.20	0.50	0.146	ガラス	64	
16	ロザリオの珠	0.60	0.30	0.30	0.076	ガラス	64	
17	ロザリオの珠	0.35	0.10	0.40	0.051	ガラス	64	
18	ロザリオの珠	0.65	0.20	0.40	0.098	ガラス	64	
19	ロザリオの珠	0.65	0.20	0.40	0.263	ガラス	64	
20	ロザリオの珠	1.30	0.30	1.30	2.931	ガラス	64	
21	ロザリオの珠	1.50	0.30	1.10	3.813	ガラス	64	

第4章 平成20年度の調査(大手地区)

調査面積 約100m²

第1節 調査の概要

調査対象地は原城の大手口とされる地点である(第1図)。「島原天草の乱」の際の原城付近を描いた布陣図などが今日に幾つか残されているが、それらに見る大手口は「樋上(ひのえ)口」などと表記されている場合がある。有馬氏本城である日野江城の方角に面していることが一因であろう。形態的にはおよそ南東から北西にかけて伸びる崖地形からなる墨線を、北東側より進入した後北西方向へ折れる内外形虎口状に描かれている(第3図)。

調査地付近では台地を切り通すように市道が走っており、道路の南北両側で調査を実施しているが、便宜的に市道の南側をA区、北側をB区とした。調査着手前の現地観察を行った際、切り通しの南側断面(A区側)においては拳大程度の小礫が薄い層状に観察できたため、これが原城大手口に関連する遺構の一部ではないかとの想定をもって調査に着手した。なお、調査地点が元々平坦面に乏しいという地形的制約と、特にA区においては桜の木が多く生えていたが、遺構の状況が不明である点と土層観察用のベルトも必要であることから伐採は行わなかったため、調査区は幾らかの狭小なトレンチに分かれる格好となった。その為、各トレンチにはアラビア数字による枝番を付して整理した(第2図)。調査は土層と遺構の確認を行いながら人力掘削によって進め、遺物は層位ごとに取り上げを行った。また必要に応じて測量、写真撮影等の記録作業を随時行った。記録作業の終了後、土嚢および真さ土による検出遺構等の保護を図ったうえで埋め戻しを行い、現地調査を終了した。

第2節 遺構・土層

1. 遺構

遺構はA区において集石遺構、石畳、石積みの崩落状況、溝状遺構などを検出した。B区においては検出していない。以下、概要について説明する。遺構の評価については、土層や遺物の状況についても触れたのち、小結においてあらためて整理を図りたい。

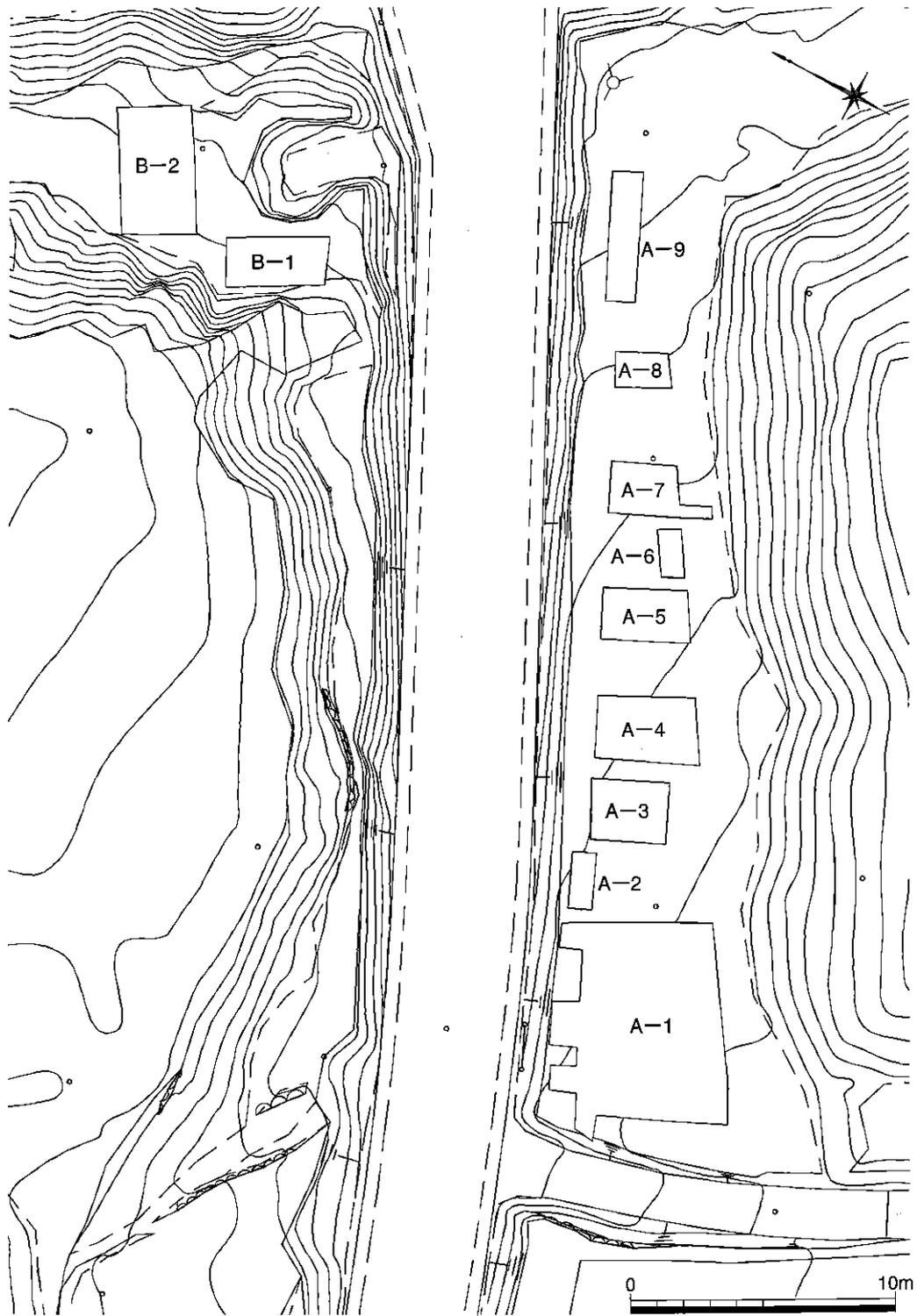
集石遺構

遺構の検出作業を進めた結果、A-1区からA-2区の地表より約70cmの深度において、東西約7m×南北約3mの隅丸長方形を呈する集石遺構を検出した(第4図)。部分的な断ち割りを行ったところ、集石は浅い窪地状の地形に収まっており、中央付近がやや盛り上がっているために、断面形はレンズ状に近いものとなる(第6図)。厚さは中央付近の最も厚い部分で約30センチを測る。

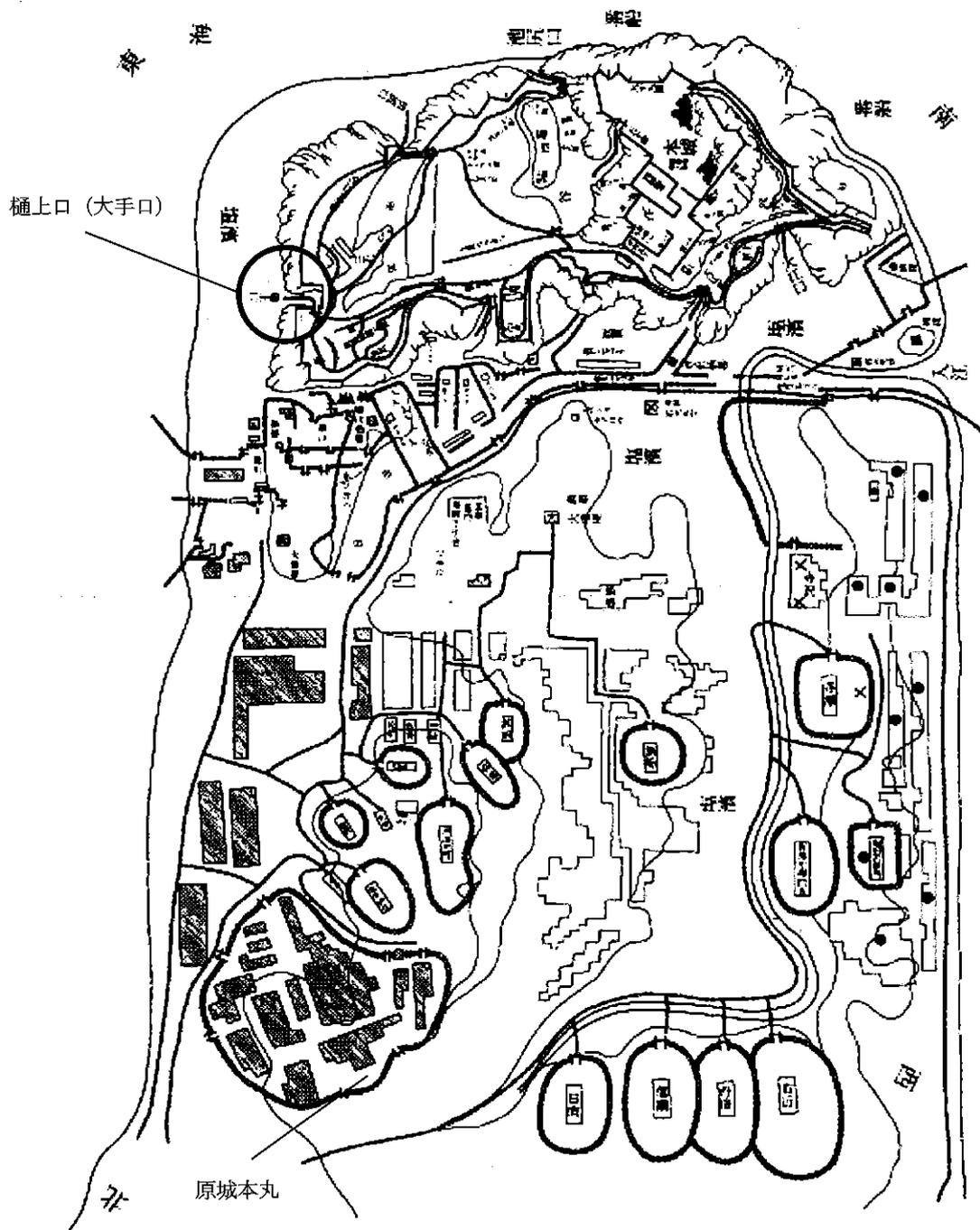
集石を構成する石材は20cm前後の不揃いな角礫が多く、切り通し断面にみられた礫とは明らかに様相が異なっていた。礫と礫の間はあまり目詰まりしておらず、空隙が多い。検出当初の段階においては石垣に伴う栗石の可能性も想定し、石垣の根石や抜き取り痕の確認に努めたが、確認するに至らなかった。また集石の断ち割りを行った際に、サブトレンチ1の西側断面では人骨と思しき骨片を確認した(図版38参照)。調査期間との兼ね合いで取り上げは行わず、養生のうえ埋め戻している。集石に伴う遺物として、瓦片、陶器片、石造物の一部などが数点出土しており、内容については次節で述



第1図 調査区位置図 (S = 1/2,000)



第2図 調査区配置図 (S = 1/250)



第3図 『綿考輯録』巻55 原城諸手仕寄之図 (※)

※城南町教育委員会・(株)九州文化財研究所 2009『新資料による天草・島原の乱ーその時、徳川幕府軍はどう考えたかー』掲載のデジタルトレース図について許可を得て引用・一部加筆

べる。

石畳

市道の切り通しによって事前に観察できた小礫層は、A区を通じて石畳状の遺構（以下、「石畳」と表記する。）として検出した。前段で述べた集石遺構の直下においても、部分的な断割りを入れ確認した結果、20cm厚ほどの泥土を介して石畳を検出した。城内への進入方向を基準（以下同様）にみるならば、現在の道路に対して石畳の軸は左側へ少し振れている。市道側が切られており、また市道の北側においては南側の様に石畳の顕在化した小礫層は確認できないことから、石畳の正確な幅ははっきりと判らない。A-1区・サブトレンチ1やA-4トレンチなどの状況を参考にするならば、およそ4mは超えると推測できる。勾配は約2.5%で城内へ向けて緩やかに上っている。石畳よりも現況地表面の勾配の方が急であるために、西側ほど検出深度が深く、東側ほど浅い。A-1区における石畳の検出深度が110cm程であるのに対し、A-9区の西隅においては地表から20cm程で検出され、中央から東側では中空へ消える格好でみられなくなる。（第18図参照）。石畳に用いられている石材は形が不揃いな拳大前後の小角礫が主であるが、角はとれ丸みを帯びている。すぐ側の海岸でみられる浜石とよく似たものである。灰白色系の粘質土によって石材の固定が図られている。

石積みの崩落状況

石畳の周囲の状況として、石積みのようなものが南側から石畳の方へ向けて崩落している状況を確認した。崩落している石の特徴は、先に述べた集石遺構に伴うものと大体同じであり、20センチ前後の角礫が主である。このような状況はA-7区において顕著であり、A-6区においてもみることができる。A-5では礫が量的に少なく、A-4区あたりになると同様の礫はみられない。また、石積みの崩落してくる南側は地盤層が立ち上がる傾向が認められ、A-4区では西側の土層断面において根切り状の立ち上がりが認められる。A-1区のサブトレンチ1においては、地盤層のカットというより盛り土と考えられるが、似たような地層の高まりがみられる。同調査区のサブトレンチ2においては、先述したような礫の崩落状況がみられる。また集石遺構の西側に設定したサブトレンチ3においても礫の崩落状況がみられたが、この場合は西側から東側に向けて崩れる形となっている。

溝状遺構

A-4区においては幅40センチほどの溝状遺構を確認している。石畳が南側で途切れる付近において、おおよそ石畳に沿う形でみられた。調査区西側の壁沿いを部分的に断割って確認したところ、断面形状は浅い「U」字状をなす。遺物は含んでいなかった。

2. 土層（第6～16, 18図）

A区

A区の土層は遺構との関係性を踏まえて次のとおりローマ数字により大別化し、細かな層の特徴についてはアルファベットを付して細分化した。

I層…表土層

II層…集石遺構の形成よりも後に堆積したと考えられる層

III層…集石遺構よりも古く、石畳の構築よりも後に堆積したと考えられる層

IV層…石畳の構築と同時期ないし以前に堆積したと考えられる層

V層…基盤層

集石および石畳の遺構としての重要性を考慮したうえでの分類であるが、集石遺構は限定的な範囲でしかみられず、必ずしも全ての層が直接的に集石遺構との先後関係を確認できるわけではない。層序関係の整理および現地での観察に基づいたものであるという点を断っておく。細分化した層の一部には類似したものや、漸次的な変化と考えられるもの、ほぼ同一と考えられるものもあったが、調査区が細かく分かれた結果、その連続性について確証の得られなかった分は別扱いとした。

- I 層 …表土層
- II a 層 …ややしまりのある褐色土 (Hue10YR4/6)。灰黄色 (Hue10YR4/6) のシルト質ブロックを多く含む。
- II a' 層 …しまりのある褐色土 (Hue10YR4/4)
- II b 層 …しまりのある暗褐色土 (Hue10YR3/3)。
- II b' 層 …にぶい黄褐色土 (Hue10YR3/4)。淡黄色のシルト質ブロック (Hue2.5Y8/4) が層中位付近において少量混ざる。II b 層からの漸位層と考えられる。
- II c 層 …しまりのある黄褐色土 (Hue10YR5/6)
- II d 層 …暗褐色土 (Hue10YR3/4)。黄褐色土 (Hue10YR5/8) が多く混ざる。
- II e 層 …微弱な粘性のある褐色土 (Hue10YR4/6)。1 cm未満の明褐色土粒 (Hue7.5YR5/8)、1 cm程の暗赤褐色土粒 (Hue2.5YR3/2) を含む。
- II f 層 …褐色土 (Hue7.5YR4/4)。風化砂礫とみられる 5 mm前後の黄橙色粒、灰白色粒を含む。
- II g 層 …黒褐色土 (Hue10YR2/2)。
- II h 層 …にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3)。淡黄色 (Hue2.5Y8/4) のシルト質ブロックを少量含む。
- II i 層 …にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3)。10cm前後のにぶい黄橙色 (Hue10YR7/4) のシルト質ブロックを多く含む。
- II j 層 …ややしまりのある暗褐色土 (Hue10YR3/3)。
- II k 層 …にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) とにぶい黄橙色土 (Hue10YR7/4) の混ざる層。
- II l 層 …にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3)。淡黄色 (Hue2.5Y8/4) のシルト質ブロックを少量含む。
- II m 層 …弱い粘性のあるにぶい黄色土 (Hue2.5Y6/4)。黒褐色土粒 (Hue2.5Y8/4) を多く含む。
- III a 層 …ブロック状の黄褐色土 (Hue10YR5/8) が多く混ざる暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- III b 層 …暗褐色土 (Hue10YR3/3)。黒褐色粒 (Hue10YR7.5YR3/2) を少量含む。
- III c 層 …淡黄色 (Hue2.5Y8/3) のやわらかい粘質土。
- III d 層 …やや粘性の強い灰オリーブ色土 (Hue5Y5/3)。鉄分とみられる黒褐色粒 (Hue7.5YR3/2) を多く含む。灰黄色のシルト質ブロックを少量含む。
- III e 層 …やや粘性の強い灰オリーブ色土 (Hue5Y5/3)。鉄分とみられる黒褐色粒 (Hue7.5YR3/2) を非常に多く含む、全体的に暗褐色土層としてみえる。
- III f 層 …A-4区にみられた溝状遺構の埋土。暗褐色土 (Hue10YR3/3)。にぶい褐色の粘質土 (Hue7.5YR5/4) が少量混ざる。
- III g 層 …A-4区にみられた溝状遺構の埋土。にぶい黄色の粘質土。
- III h 層 …にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3)。淡黄色 (Hue2.5Y8/4) のシルト質ブロックを多く含む。
- IV a 層 …浅黄色の粘質土 (Hue2.5Y7/4)。石畳に伴う。
- IV b 層 …褐色の粘質土 (Hue10YR4/6)。
- IV c 層 …褐色土 (Hue10YR4/4)。砂礫の風化したものとみられる 5 mm前後の黄色粒、橙色粒、灰白色粒を多く含む。全体の色調として黄色味が強い。
- IV d 層 …IV c 層とほぼ同質であるが、比較して黄色味が弱く、橙色が強い。
- IV e 層 …IV c 層とほぼ同質であるが、灰白色粒の割合が多く、全体の色調として白みがる。
- IV f 層 …IV c 層とほぼ同質であるが、全体の色調として黒味が強い。
- IV g 層 …微弱な粘性のある褐色土 (Hue10YR4/4)。砂礫を少量含む。
- IV h 層 …粘性のあるにぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4)。砂質土を微量含む。
- IV i 層 …やや粘性の強い褐色土 (Hue10YR4/4)。砂礫の風化したものとみられる 5 mm前後の黄色粒、橙色粒、灰白色粒を多く含む。
- V a 層 …やや粘性のある褐色土 (Hue10YR4/6)。固くしまる。
- V b 層 …灰黄色の粘質土 (Hue2.5Y6/2)。しまりが強い。

- Vc層 …淡黄色土 (Hue2.5Y8/4)。A-7区にみられる。南側の高い位置では粘質土であり、北側の低い位置では漸移的にシルト質に近づいている。
- Vc'層 …淡黄色のシルト質土 (Hue2.5Y8/4)。

B区

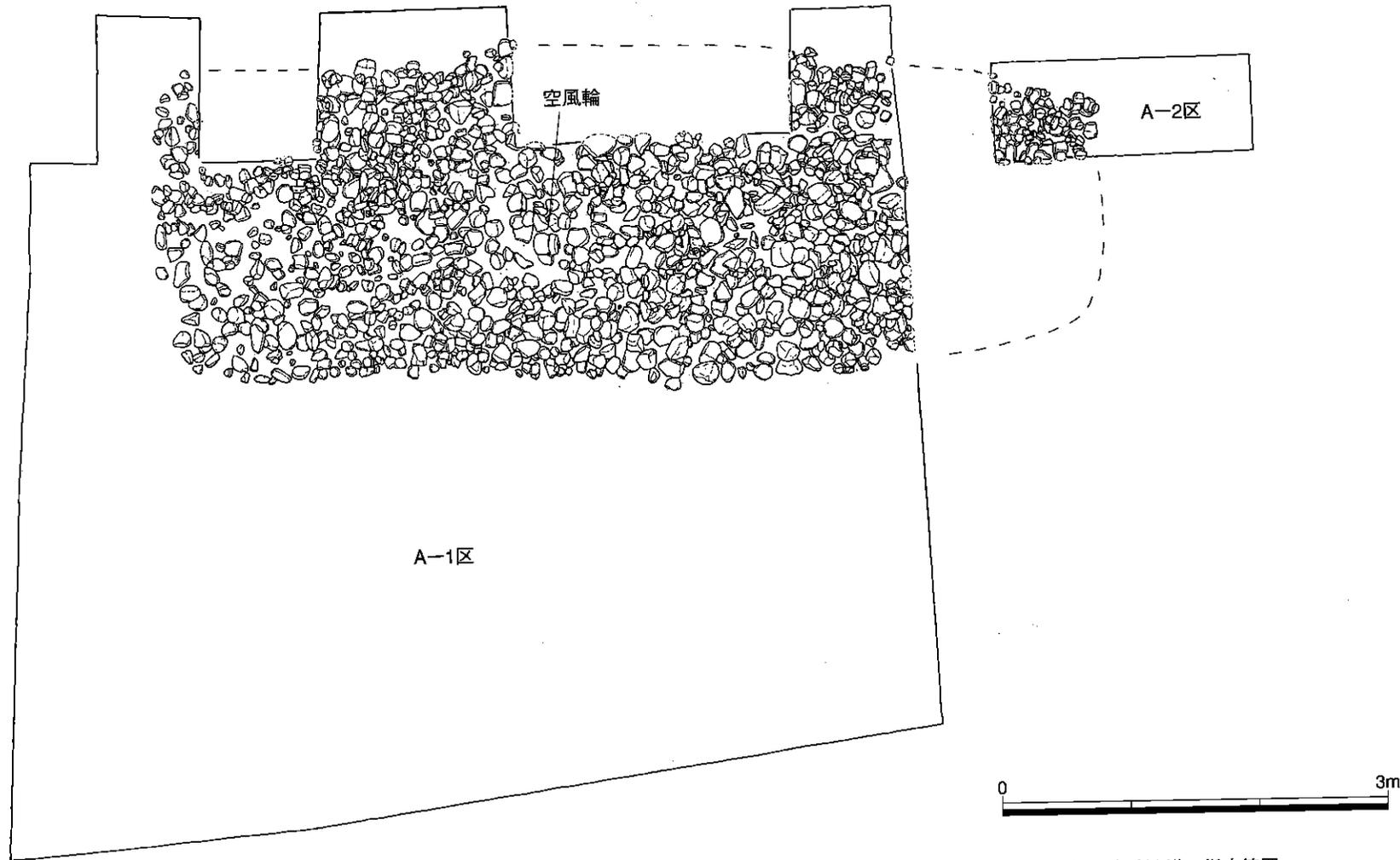
B区付近の西側は5m前後の崖地形となっており、その崩落土とみられる土砂の堆積が表土下においてみられた。B-1区、B-2区のそれぞれについて、地表より順にローマ数字により分類した。

B-1区

- I層 …表土 (腐葉土)。
- II層 …浅黄色の灰質土 (Hue2.5Y7/3)。暗褐色土がブロック状に混ざる。西側崖面の崩落土と考えられる。
- III層 …浅黄色の灰質土 (Hue2.5Y7/4)。西側崖面の崩落土と考えられる。
- IV層 …暗褐色土 (Hue10YR3/4)。黄褐色粘質土 (Hue2.5Y5/4) がブロック状に混ざる。西側崖面の崩落による影響と考えられる。
- V層 …黄褐色土 (10YR5/6)。暗褐色土 (Hue10YR3/4) が少量混ざる。西側崖面の崩落による影響と考えられる。
- VI層 …黒褐色土 (Hue10YR3/1)。西側崖面の崩落以前の表土層 (腐葉土) と考えられる。
- VII層 …しまりのある褐色土 (Hue10YR4/4)。地山と考えられる。
- VIII層 …VII層とIX層の漸移層
- IX層 …にぶい黄橙色の火山灰質土 (Hue10YR7/2)。

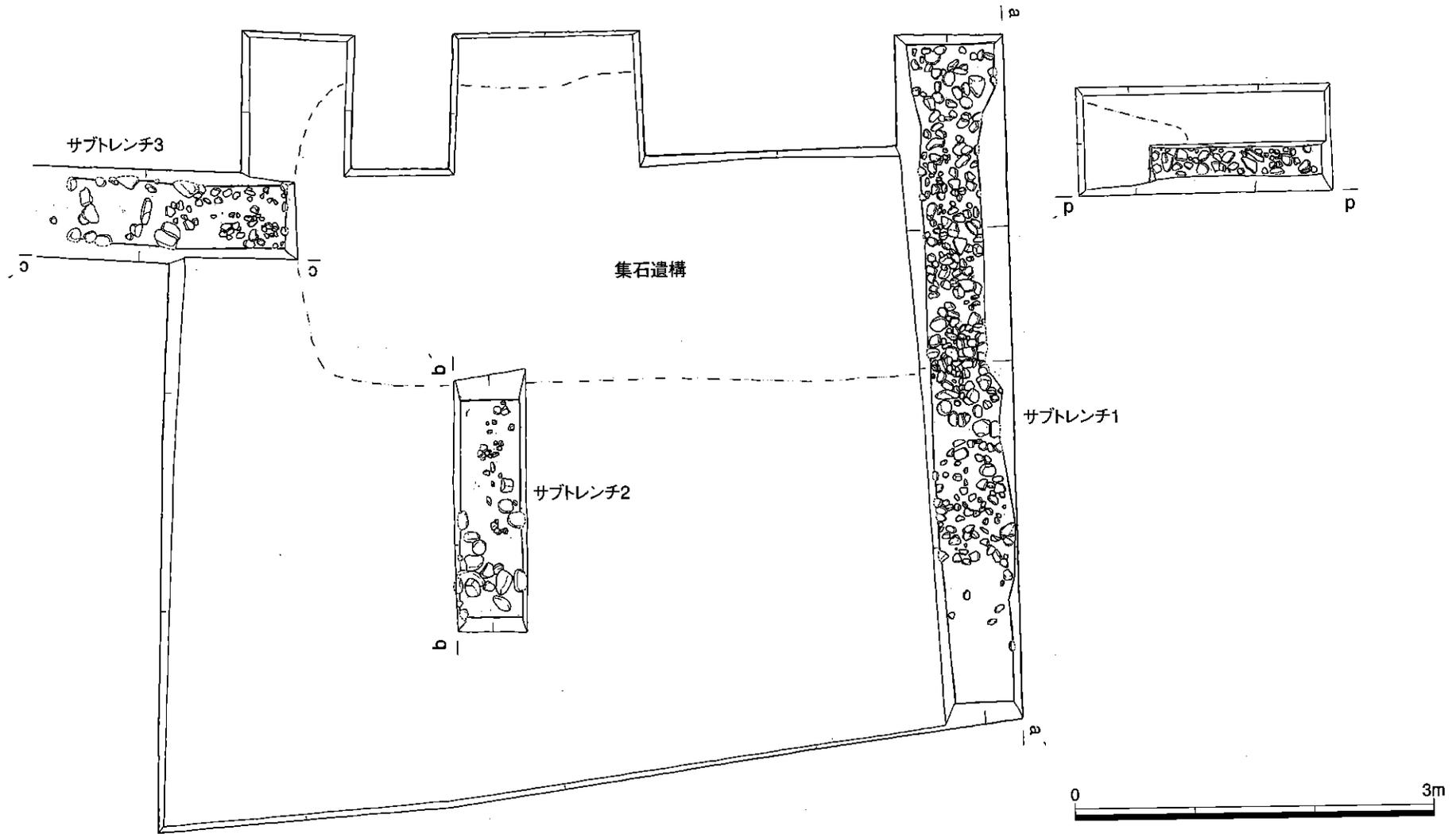
B-2区

- I層 …表土 (腐葉土)。
- II層 …浅黄色の灰質土 (Hue2.5Y7/4)。西側崖面の崩落土と考えられる。B-1区のIII層に対応。
- III層 …暗褐色土 (Hue10YR3/4) と黒褐色土 (Hue10YR3/1) の混ざる層。
- IV層 …しまりのある褐色土 (Hue10YR4/4)。地山と考えられる。B-1区のVII層に対応。

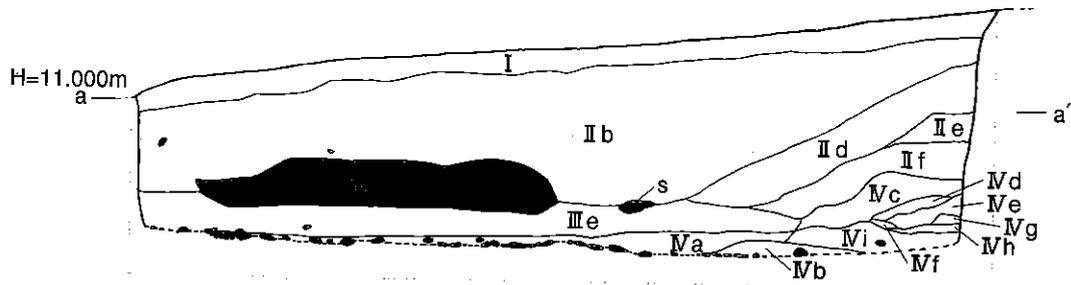


第4図 A-1区・A-2区 集石遺構検出状況 (S=1/50)

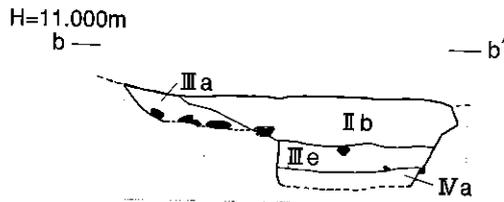
※点線は集積遺構の指定範囲



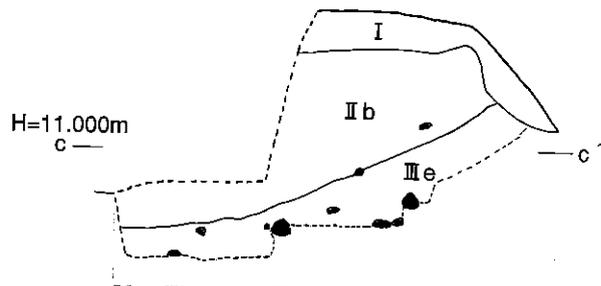
第5図 A-1区・A-2区 集石遺構断割り(石畳検出)状況



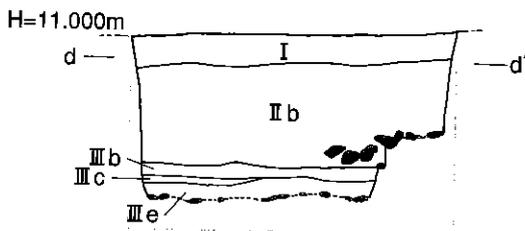
第6図 A-1区東壁土層図



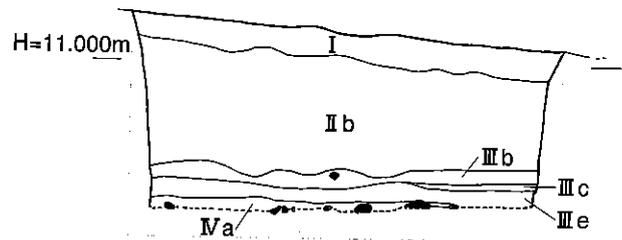
第7図 A-1区サブトレンチ2東壁土層図



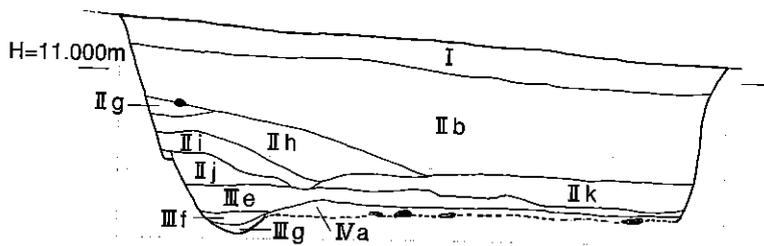
第8図 A-1区サブトレンチ3南壁土層図



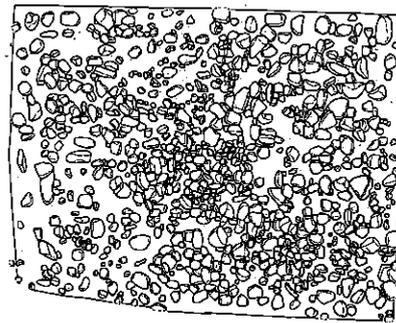
第9図 A-2区南壁土層図



第10図 A-3区西壁土層・遺構平面図

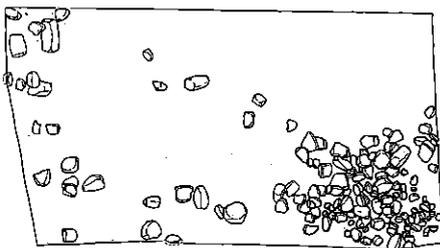
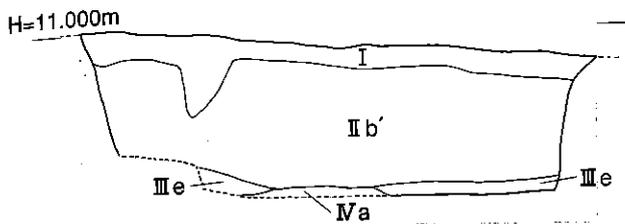


第11図 A-4区西壁土層・遺構平面図

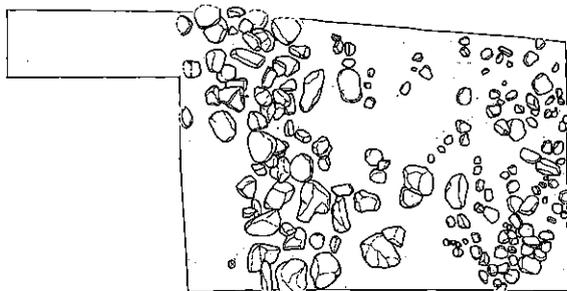
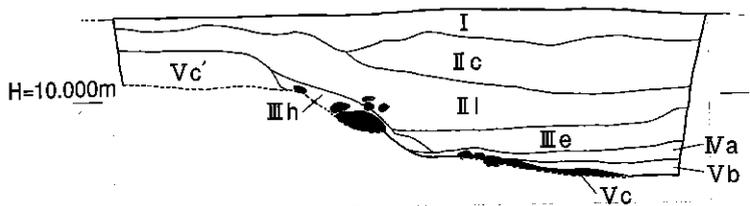


第6図～第11図 (S=1/50)

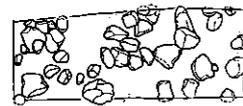




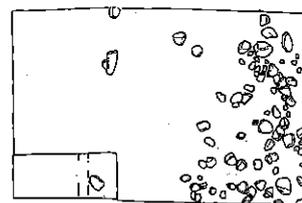
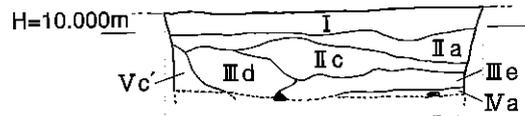
第12图 A-5区西壁土层·遺構平面図



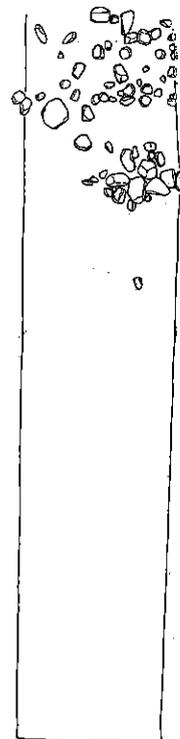
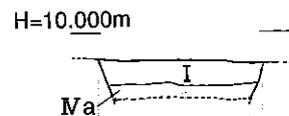
第14图 A-7区西壁土层·遺構平面図



第13图 A-6区遺構平面図



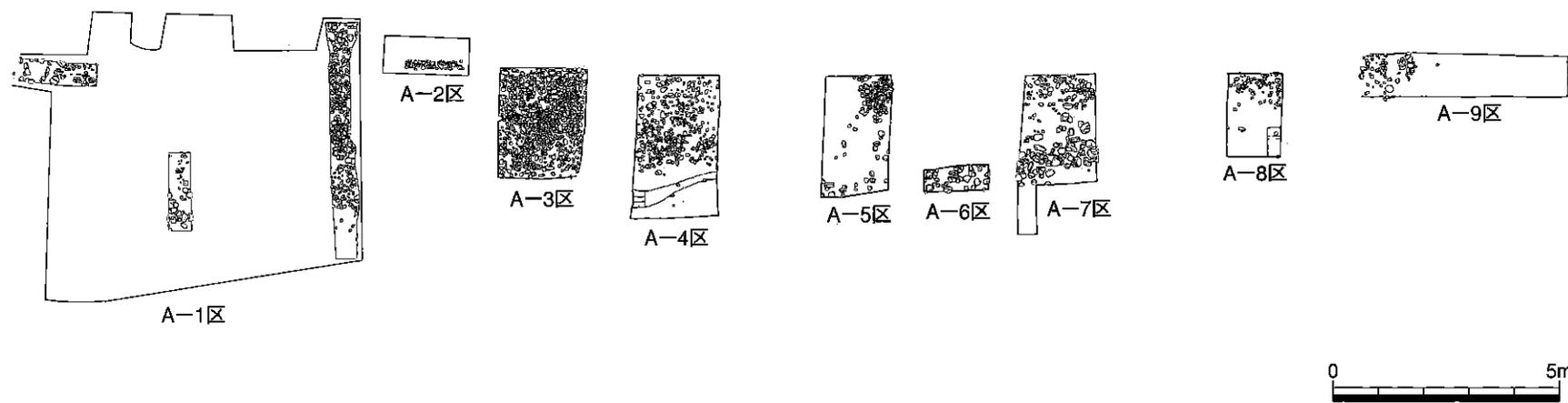
第15图 A-8区西壁土层·遺構平面図



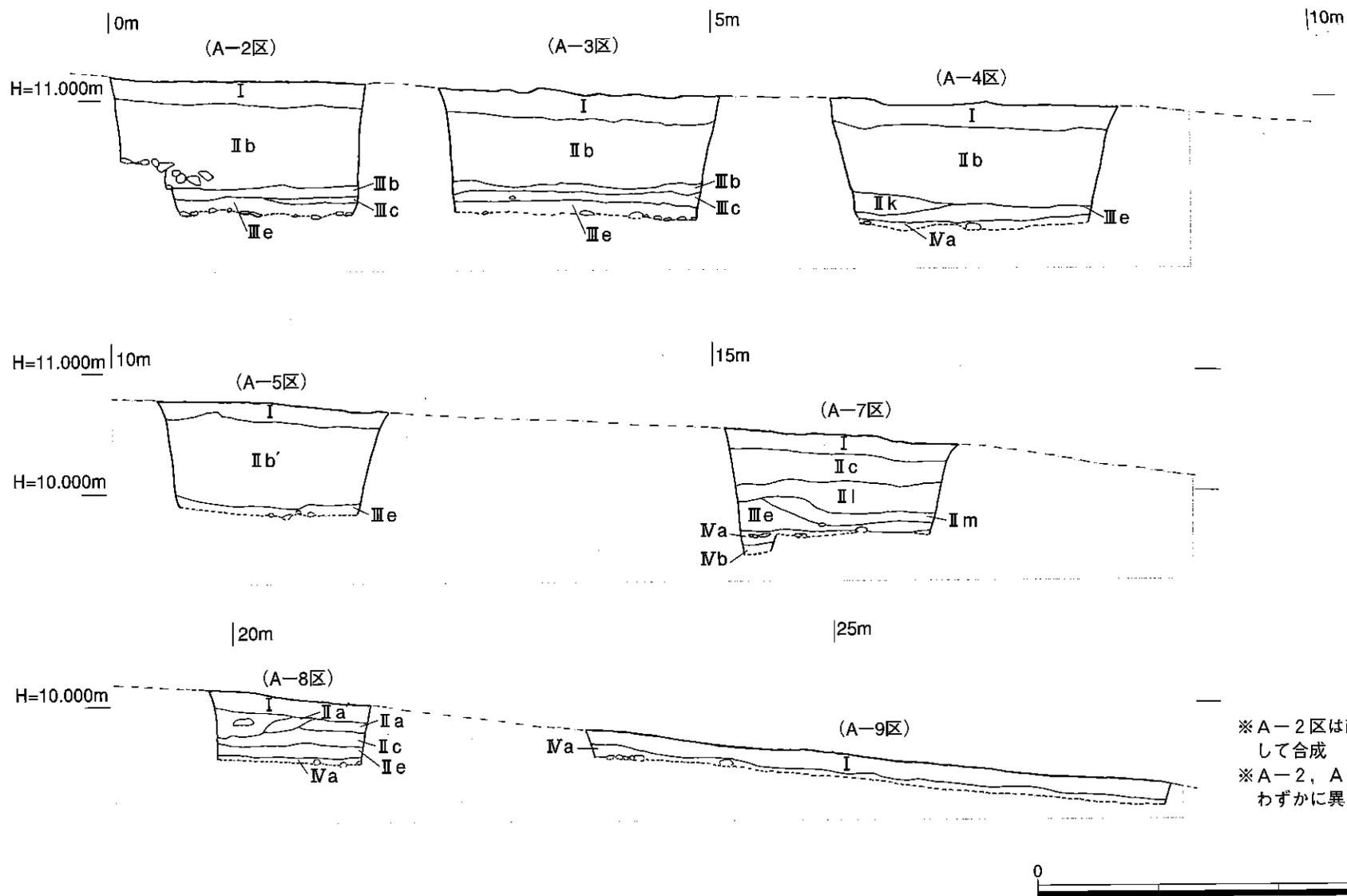
第16图 A-9区西壁土层·遺構平面図

第12图~第16图 (S = 1/50)

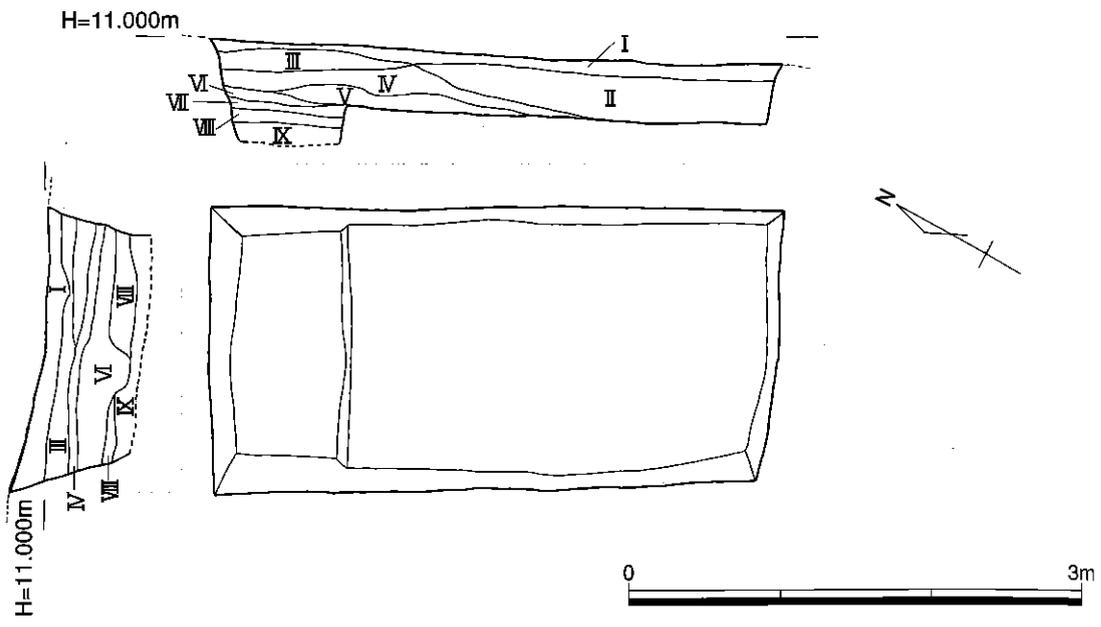




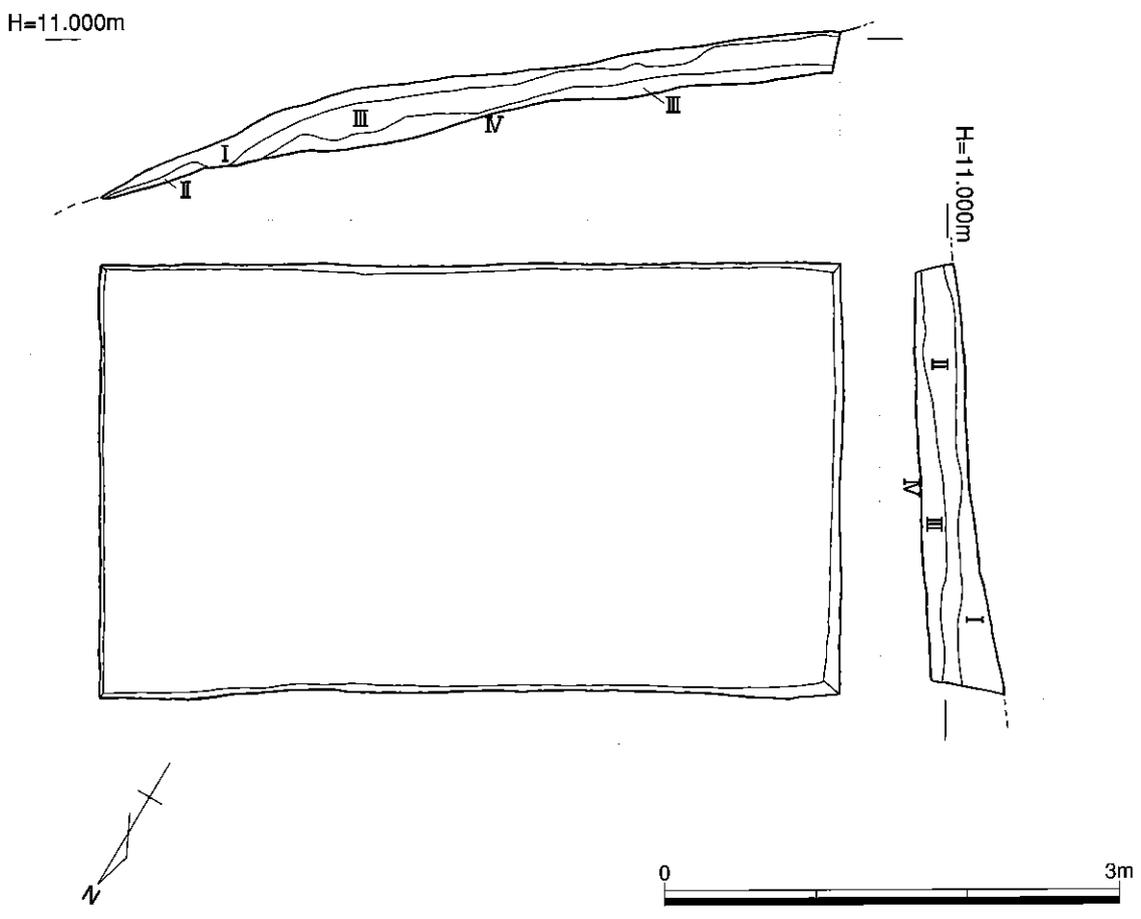
第17图 A区石壘等検出状況平面図 (S = 1/150)



第18図 A-2・A-9区間北壁土層図 (S=1/50)



第19図 B-1区土層および調査区平面図 (S=1/50)



第20図 B-2区土層および調査区平面図 (S=1/50)

第3節 遺物 (表1, 第21~23図)

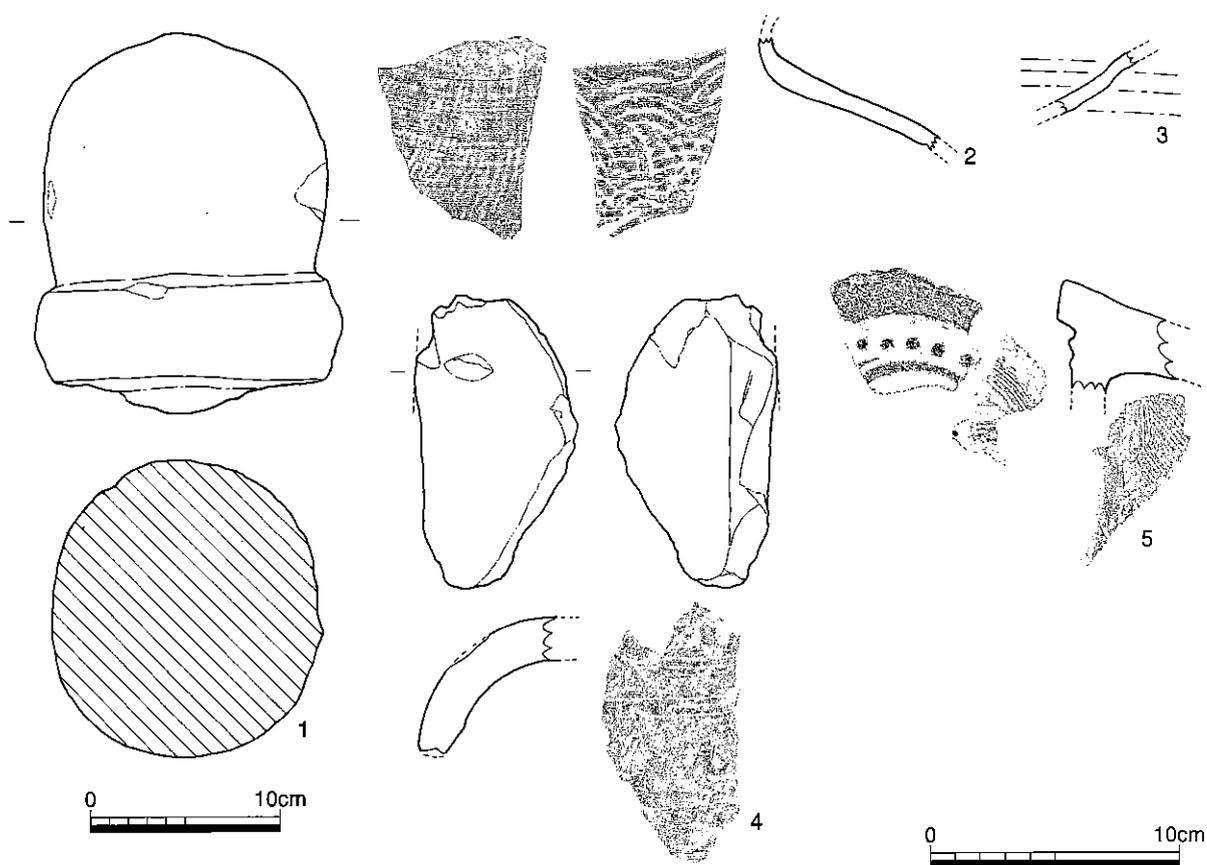
出土した遺物の総点数は411点であり、時期は弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世のものがみられる。遺物のほとんどはA区出土のものであり、B区の方は僅かである。Ⅱb層出土のものが半数以上を占めるが、掘削土量との兼ね合いによる部分も大きい。層序に遺物の時期差が反映される事はなく、同一層内において多様な時期の遺物が混在している。特徴的なものを55点抽出して図化している。ほとんどの遺物が細片であり、図化している分でも残りの良い方である。本来は同一個体であった可能性のある破片も、判別ができなかった分については、それぞれを一点として集計している。細片であることに加え、弥生土器と土師器は磨滅したものが多く、その峻別において誤りが含まれる可能性は否定できない。銃弾を除く鉄類は図化していないので補足しておくとして、製品については釣り針状のものが数点みられ、鉄滓も僅かにあるが、大抵は錆膨れして用途の判らない小塊である。

表1 出土遺物集計表

地区 出土層位	A区						集石遺構			B区		小計
	I	Ⅱb	Ⅱb'	Ⅱc	Ⅲe	Ⅳa	上面	断割り内	底	表土	崩落土	
石造物							1					1
石器・石材		4			2							6
弥生土器	1	55		4	1	9						70
須恵器	1	24			3	1	1					30
土師器 (土師質土器)	2	34		1	6							43
陶器	16	44	3		1		1			3	1	69
磁器	18	25			4						1	48
瓦		12			1	1	5	2	1			22
土製品		4				1						5
銃弾 (鉛)	1	30	2	2	10							45
銃弾 (鉄)		18		1	10							29
鉄塊・鉄製品・鉄滓	1	34		0	6					2		43
小計	40	284	5	8	44	12	8	2	1	5	2	411

集石遺構に伴う遺物

1~4は集石遺構の直上において、5はサブトレンチ1における集石の底部分で出土したものである。1は五輪塔の空風輪であり、遺構プランのほぼ中央において横たわった状態で出土した。空輪と風輪の一体化したものであり、底には“ほぞ”が付く。器高は約20cm、空輪部分はやや楕円を呈し径が14~16cm程度となる。石材はデイサイトである。風輪に比べて空輪の方が大きく円頭円柱に近い形状である。空輪から風輪にかけてのくびれは弱い。また、風輪の胴面は垂直気味に切られている。形態的特徴から考えられる製作時期は、16世紀末頃から17世紀の前半となるらしい^(※1)。2は須恵器甕の肩部片である。肩の張りが非常に強い。外面には縦方向の叩きの後に横ナデが施され、内面には同心円文の当て具痕が残る。3は肥前系の陶器皿と考えられる破片である。腰折れ気味に弱く屈曲している。文様等は確認できない。4は丸瓦の側縁部である。内面にはコビキB痕がみられる。5は軒丸瓦である。瓦当文様は右巻きの巴文と珠文によって構成される^(※2)。内面にはコビキA痕がみられ、



第21図 集石遺構に伴う出土遺物（1：S=1/4 2～5：S=1/3）

また瓦当と丸瓦の接合部には同心円状のカキ目がみられる。

石器・石材

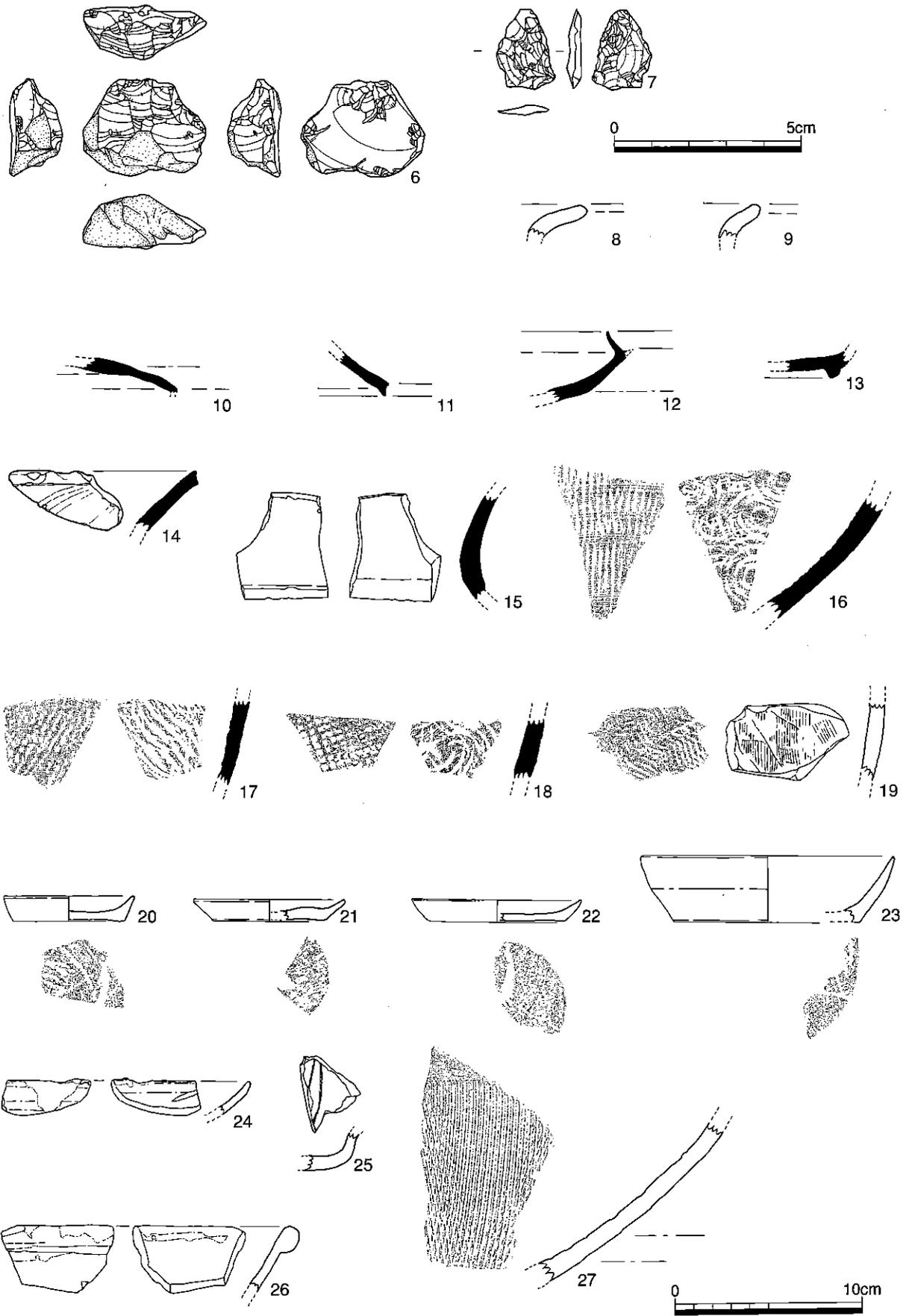
6は黒曜石の石核である。7は黒曜石製石鏃の未成品である。大まかな成形はなされているが、刃部の仕上げが不完全となっている。

弥生土器

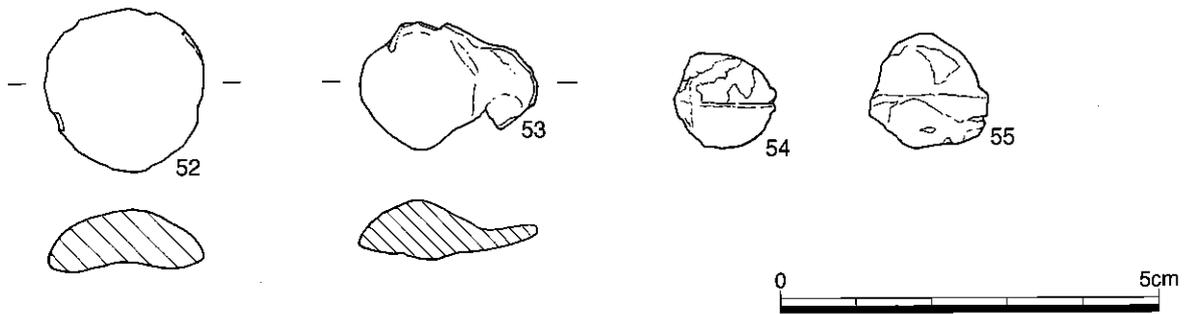
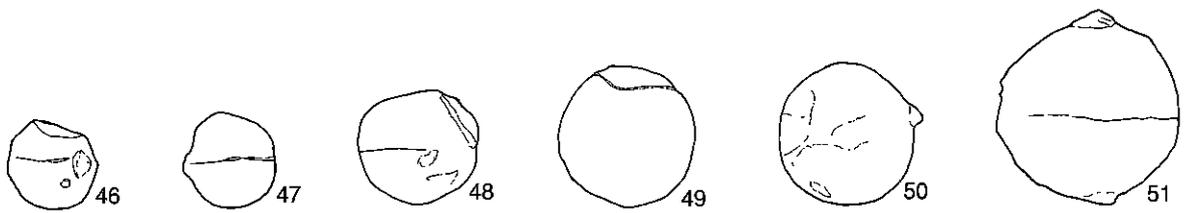
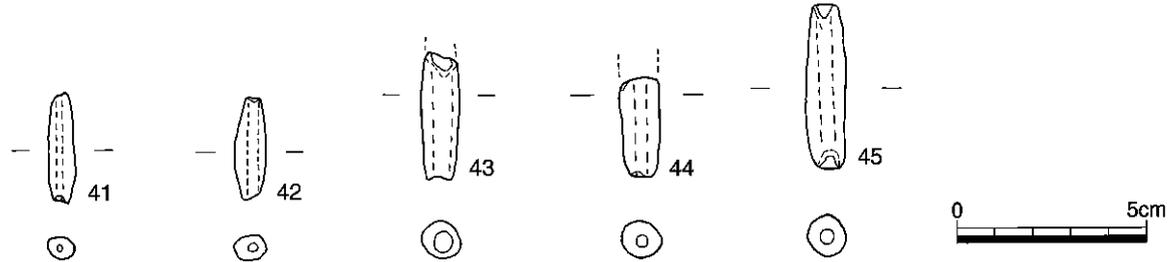
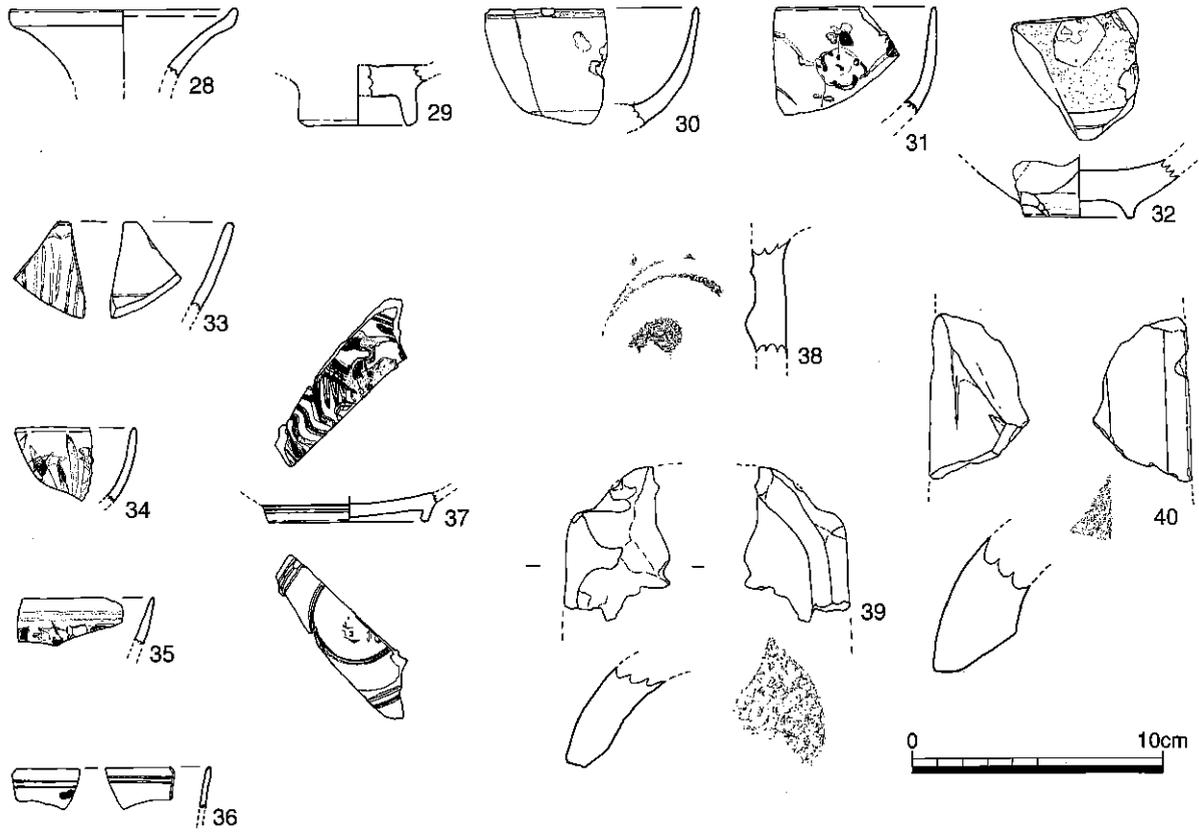
8・9は弥生土器である。いずれも甕形土器の口縁部片であり、やや強く外反し、端部は丸くおさまられている。残りが悪く明確ではないが、弥生時代後期頃のものと考えられる。

須恵器

10～18は須恵器である。10は坏蓋である。口縁内面に段を持つ。端部は欠損している。11は高坏の脚部と考えられる。端部外面は横ナデにより面取りされる。12は杯身の口縁である。“たちあがり”は強く内傾し、受け部は欠損している。酸化焰焼成によるもので、灰白色を呈する。13は杯身の高台部分である。14は正確な器種は不明だが、甕または広口壺などの口縁と考えられる。15は甕の口縁部片である。16～18は甕の体部片である。いずれも外面にタタキ目が残っており、16は縦方向、17・18は格子目タタキとなっている。内面はいずれも同心円状の当て具痕が残る。少なくとも、10～13については古墳時代後期～古代頃のものであろう。



第22図 調査区の出土遺物① (6・7 : S=2/3, 8~27 : S=1/3)



第23図 調査区の出土遺物② (28~40: S=1/3, 41~45: S=1/2, 46~55: S=1/1)

底
陶
縁部
片で
胎と
後半
寧に
磁器
28
は上
畳付と
ずつ施
32は
円圈1
描かれ
33~3
細線に
34は溝
35~37
施し、下
付が内側
円圈の内
字は「武」
頭のもの
瓦
38~40は
丸瓦の玉縁
は軟質で、
土製品
41~45は

土師器・土師質土器

19～23は土師質土器または土師器である。19は器種などの詳細が不明であるが、外面に山形文風のタタキ痕、内面にはハケ目が残る。20～22は土師皿である。いずれも径に対して器高があまり高くない。20は口縁の立ち上がりがやや強く、21・22は相対的に開き気味である。また口縁端部の形状については20・22が先細り気味となっており、21は丸みを帯びている。底部の切り離しについてはヘラ切りである。23は土師器の坏である。軽く内折れ気味に口縁が立ち上がり、口縁端部は先細りしている。底部の切り離しはヘラ切りによる。20～23については、13～14世紀頃のものと考えられる。

陶器

24～27は国産陶器である。いずれも肥前系のものであり、うち24・25は古唐津の皿である。24は口縁部であり、やや内湾気味に開き、端部は丸くおさめられている。口縁より鉄釉がかかる。25は体部片であり、器形は腰折れとなっている。内面見込みに鉄絵による条線が2条残る。外面の底付近は露胎となっている。26・27は播鉢である。26は直線的に開く口縁であり、端部が玉縁状となる。17世紀後半頃のものと考えられる。27は体部片である。内面の播目は幅広の工具によって施され、上端は丁寧な撫で揃えられている。17世紀末以降のものと考えられる。

磁器

28・29は青磁、30～32は染付である。28は花生の口縁である。口縁はラッパ状に大きく開き、端部は上方へつまみ出された形状となっている。29は碗の高台である。明るい緑色のガラス質釉が掛かる。畳付と高台内部は露胎となる。30・31は丸形の碗である。30は外面の口縁下と腰部付近に界線を一条ずつ施し、その間には丸文を描く。31は外面に梅樹文を施す。それぞれ内面は無紋である。

32は高台である。高台外面に界線2条、体部側に界線1条が施される。内面見込みにには僅かながら円圈1条の残存が確認できる。その内側には砂目の崩れたようないびつな輪があり、中心には草花が描かれる。

33～37は貿易磁器である。33は龍泉窯系青磁碗の口縁部である。口縁は外傾気味に開く。外面には細線による退化した蓮弁文が施され、内面には弱い段が見られる。16世紀後半頃のものともみられる。

34は漳州窯系と考えられる丸形碗の口縁であり、器肌は黄色味を帯びている。外面に竹が描かれる。

35～37は景德鎮系と考えられる青花である。35・36は碗の口縁部である。35は外面に2条の界線を施し、下位に花卉文を描く。36は内外面に2条の界線を施す。37は皿の底部である。高台形状は、畳付が内側へ入り込むものとなっている。外面の腰部には3条の界線が施される。内面見込みに二重円圈の内部に龍と波文を描く。高台内には二重円圈の内部に「造」の文字が残る。右側の欠損した文字は「武」と読める可能性が高く、本来の字款は「洪武年造」と推定される。16世紀末から17世紀初頭のものと考えられる。

瓦

38～40は瓦である。38は軒丸瓦の瓦当であり、右巻きの巴文と珠文2点の残存が確認できる。39は丸瓦の玉縁である。40は丸瓦の側縁である。器壁が2.5cmほどあり、分厚い造りとなっている。焼成は軟質で、黄色味を帯びた色調となっている。

土製品

41～45は土製品である。いずれも土師質の管状土錘であり、胴部の中央付近が少し膨れるタイプの

ものである。法量でみると長さが3 cm弱で胴部径が1 cmに満たない小型品(41・42)と、長さが4 cm程になるとみられ胴部径が1 cm強になるもの(43~45)に分けられる。

金属製品

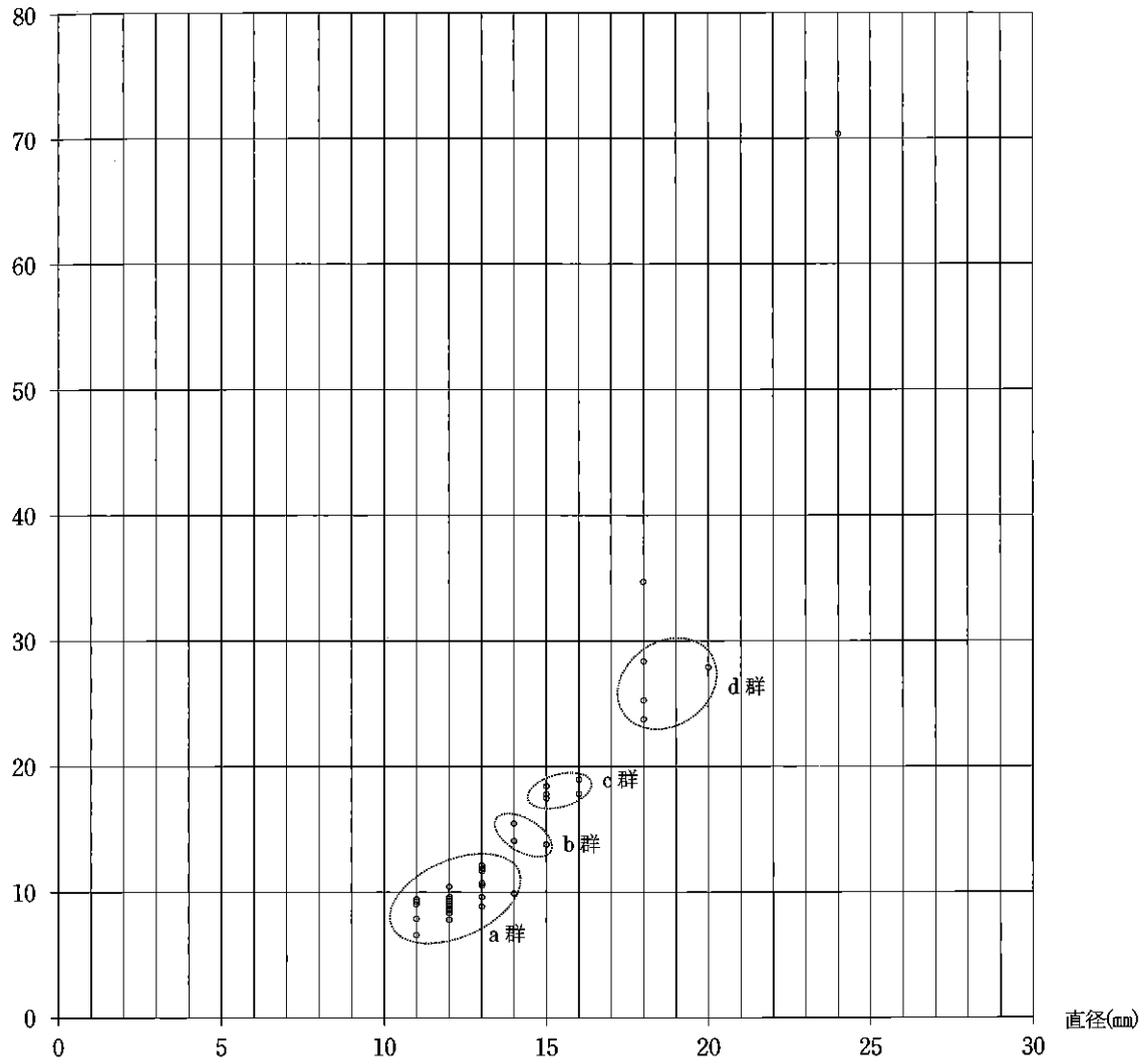
46~55は火縄銃の銃弾である。46~53は鉛製であり、54・55は鉄製である。46~48、51・54・55は鑄型合わせの痕跡とみられる線が観察できる。50・51は表面に小さな突起が認められる。玉型から外した後の仕上げが十分に及ばなかったなど製作過程に起因すると考えられるが、詳しいことについてはよく判らない。52・53は着弾して潰れたと考えられるものである。52はおおよそ均等に潰れているものであり、53は潰れた部分がヒレ状に拡がっているものである。

第24図は出土した銃弾の直径と重量の関係を示したものである。出土した74点のうち、錆化等による質量変化の少ない鉛製のもの、およそ球形を留めている事を条件に43点を抽出して対象としている。過去の本丸跡の調査においては、これを遥かに上回る点数の銃弾が出土しているので、本来的にはそれらも含めて検討すべき事項であるが、今回は時間的な余裕が無く取り扱っていない。そのため本丸跡出土資料を概観した際に、明らかに拾いきれていない法量がある。あくまで傾向を大まかに予察する程度のものとして捉えて頂ければ幸いである。

分布図から読み取れる大きな特徴として、重量が20 gに満たず直径が11mmから16mmの間におさまる相対的に小型のものが大多数を占めるという点が挙げられる(37点、約86%)。この群内においても、少なくとも三法量程度には細分できる傾向が認められる(a~c群)。a群として示している小群が点数的にとりわけ多く、28点で全の約75%を占めている。特に直径12mm、重量9~10 g付近に強い集中がみられる。旧尺貫に置き換えるとおよそ四寸、二匁五分程度である。これと見合う口径をもつ火縄銃が、「島原天草の乱」に用いられた銃砲類の構成比において主体を占めたのであろうか。ほかにd群としている20 g中盤~後半台の緩い纏まりがあり、またこれらを超えていく法量のものもあるが、サンプル数が少ないので過去の調査分も含めて精査すべきであろう。また、出土地点ごとの数量的な分布として整理していく視点も必要であろう^(※3)。

- ※1 この空風輪に関する所見や年代観については、大石一久氏よりご教示を賜った。原城跡本丸正門の石垣にはめ込まれている天正期の馬耳型宝篋印塔と同時期かやや新しいものになるとのことである。
- ※2 巴文の巻き方向については、過去の原城跡の調査報告に準拠した。
- ※3 銃弾の持つ性質上、幕府軍によって撃ち込まれたものと一揆軍によって備えられたものが混在している可能性は高く、その峻別は困難である。ただ何れにしても、銃撃戦が主体であった地点に多く出土するものと予測される。絵図や文書と突合し、原城攻防戦の戦略的側面を子細にみていくうえでは必要な作業であろう。とくに原城跡の調査は限定的な範囲にしか及んでおらず、今後の調査を進めていく際に有用な視点の一つになるのではないかと考えている。

重量(g)



第24図 出土銃弾の法量分布図

表2 遺物観察表 (集石遺構に伴う遺物)

図	番号	出土地区・層位	器種	石材	法量			備考
					高さ(cm)	空輪径(cm)	風輪径(cm)	
21	1	集石遺構上面	五輪塔・空風輪	デイスイト	20.2	約15	16.3	

図	番号	出土地区・層位	種別	器種	文様・調整		色調		焼成	胎土	備考
					内面	外面	内面	外面			
21	2	集石遺構上面	須恵器	甕形土器	同心円当て具痕 →横ナデ	縦方向タタキ →横ナデ	にぶい黄色	にぶい黄色	堅緻	石英・長石 ごく微量	

図	番号	出土地区・層位	種別	器種	生産地	文様・特徴など			備考	
						内面		外面		
21	3	集石遺構上面	陶器	皿	肥前	貫入 無紋	明オリーブ灰色	貫入 無紋 明オリーブ灰色	腰折れ	

図	番号	出土地区・層位	器種	文様・技法・調整などの特徴	色調		焼成	胎土	備考
					内面	外面			
21	4	集石遺構上面	丸瓦	コビキB	内面：灰色 外面：灰オリーブ色	良好	白色砂， 黒色粒子		
	5	集石遺構底	軒丸瓦	巴文(右巻き)， 珠文(5点残存)， 接合部カキ目， コビキA	内面：暗青灰色 外面：暗青灰色	良好	白色砂， 黒色粒子		

表3 遺物観察表 (石器)

図	番号	出土地区・層位	器種	石材	法量				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
22	6	A-1サブ Tr1・Ⅲe	石核	黒曜石	2.6	3.2	1.3	11.0	
	7	A-1・Ⅱb	石鏃(未成品)	黒曜石	2.1	1.5	0.25	1.2	

表4 遺物観察表 (弥生土器・須恵器・土師器)

図	番号	出土地区・層位	種別	器種	文様・調整		色調		焼成	胎土	備考
					内面	外面	内面	外面			
22	8	A-4・Ⅱb	弥生土器	甕形土器(口縁)	横ナデ	横ナデ	明黄褐色	明黄褐色	良好	石英・長石・角閃石	
	9	A-5・Ⅳa	弥生土器	甕形土器(口縁)	横ナデ	横ナデ	橙色	にぶい黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・赤色粒子	
	10	A-1・Ⅱb	須恵器	高坏(脚端部)	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色	にぶい褐色	堅緻	長石・赤色粒子	
	11	A-1・Ⅱb	須恵器	坏蓋	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色	灰色	堅緻	長石・赤色粒子・黒色粒子	
	12	A-4・Ⅱb	須恵器	坏身(口縁)	回転ナデ	回転ナデ下位： 回転ケズリ	灰白色	灰白色	軟質	長石・赤色粒子・黒色粒子	
	13	A-3・Ⅱb	須恵器	杯身(高台)	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	黄灰色	堅緻	長石・赤色粒子・黒色粒子	
	14	A-1・Ⅱb	須恵器	不明(口縁)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐色	灰白色	堅緻	長石・赤色粒子・黒色粒子	
	15	A-3・Ⅳa	須恵器	甕形土器	回転ナデ	回転ナデ 下位に沈線	灰色	青灰色	堅緻	長石・黒色粒子	
	16	A-5・Ⅲe	須恵器	甕形土器	同心円当て具痕	縦位の平行タタキ →回転ナデ	青灰色	青灰色	堅緻	長石・赤色粒子・黒色粒子	
	17	A-4・Ⅲe	須恵器	甕形土器	同心円当て具痕	格子目タタキ →回転ナデ	青灰色	灰色	堅緻	長石・黒色粒子	
	18	A-1・Ⅱb	須恵器	甕形土器	同心円当て具痕 →回転ナデ	格子目タタキ	黄灰色	浅黄褐色	堅緻	長石・赤色粒子・黒色粒子	
	19	A-3・Ⅱb	土師質土器	不明	ハケ目	山形支風のタタキ	暗灰色	褐色	良好	石英・長石・角閃石	
	20	A-4・Ⅲe	土師器	皿	横ナデ	横ナデ 底面：ヘラ切り	橙色	褐色	良好	石英・長石・赤色粒子・黒色粒子	
	21	A-3・Ⅱb	土師器	皿	横ナデ	横ナデ 底面：ヘラ切り	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	石英・長石・赤色粒子	
	22	A-4・Ⅱb	土師器	皿	横ナデ	横ナデ 底面：ヘラ切り	にぶい黄褐色	褐色	良好	石英・長石・赤色粒子・黒色粒子	
	23	A-1・Ⅱb	土師器	杯	横ナデ	横ナデ 底面：ヘラ切り	褐色	褐色	良好	石英・長石・赤色粒子	

表5 遺物観察表(陶磁器類)

図	番号	出土地区・層位	種別	器種	生産地	文様・特徴など		備考
						内面	外面	
22	24	A-3・IIb	陶器	皿	肥前	-	鉄釉	唐津
	25	A-1・IIb	陶器	皿	肥前	鉄絵	下位露胎	唐津
	26	A-1・IIb	陶器	播鉢	肥前	-	玉縁状に口縁肥厚	17c 後半頃
	27	B-2・I	陶器	播鉢	肥前	幅広施文具による播目。 播目上端は撫で揃え。	-	17c 末以降
23	28	A-4・IIb	磁器(青磁)	花生	肥前	-	端部つまみ上げ	復元口径9.0cm
	29	A-1・IIb	磁器(青磁)	碗(高台)	肥前	-	疊付内側まで施釉, 高台内は露胎。	復元底径4.0cm
	30	A-5・IIIe	磁器(染付)	碗	肥前	-	口縁及び腰部に圈線1条, 圈線間に丸文を描く。	
	31	A-5・IIb	磁器(染付)	碗	肥前	-	梅樹文	波佐見焼
	32	B-1・II	磁器(染付)	碗(高台)	肥前?	円圈1条。見込みに砂目の崩れたような輪。内部に草花。	高台側に圈線2条, 体部側に圈線1条。	復元底径4.2cm
	33	A-4・IIb	磁器(青磁)	碗	龍泉窯系	段あり	細線蓮弁文	16c 後半
	34	A-1・I	磁器(青磁)	碗	漳州窯系	-	口縁下に竹を描く。	
	35	A-1サブTr3・IIIe	磁器(青花)	碗	景德鎮系	-	口縁下に界線2条, 下位に草花文	16c 末~17初
	36	A-5・I	磁器(青花)	碗	景德鎮系	界線2条	界線2条	
	37	A-1・IIb	磁器(青花)	皿(高台)	景德鎮系	見込みに二重円圈。内側に龍, 波文を描く。	外面腰部に界線3条。高台内に二重円圈と「造」の文字。「洪武年造」か。	復元底径6.0cm

表6 遺物観察表(瓦)

図	番号	出土地区・層位	器種	文様・技法・調整などの特徴	色調	焼成	胎土	備考
23	38	A-3・IVa	軒丸瓦	巴文(左巻き), 珠文2点残存	内面: 灰色 外面: 灰色	良好	白色砂, 黑色粒子	瓦当
	39	A-1・IIb	丸瓦	凸面ナデ コビキ: 不明	内面: 灰色 外面: 灰色	良好	白色砂, 黑色粒子	玉縁
	40	A-3・IIb	丸瓦	凸面ナデ コビキ: A?	内面: ぶい黄橙色 外面: 灰色	軟質	白色砂, 黑色粒子 赤色粒子微量	側縁

表7 遺物観察表(土製品)

図	番号	出土地区・層位	器種	法量			色調	備考
				長さ(cm)	最大径(cm)	重量(g)		
23	41	A-1・IIb	土錘	2.9	0.7	1.2	橙色	
	42	A-1・IIb	土錘	2.7	0.9	1.3	赤橙色	
	43	A-1・IIb	土錘	-	1.1	1.9	赤橙色	推定長 約4.4cm
	44	A-1・IIb	土錘	-	1.1	2.2	橙色	
	45	A-3・IVa	土錘	4.3	1.1	4.3	赤橙色	

表8 遺物観察表(銃弾)

図	番号	出土地区・層位	材質	法量		その他の特徴	備考
				直径(mm)	重量(g)		
23	46	A-4・IIb	鉛	12	9.0	鋳型合わせ痕	
	47	A-1・IIb	鉛	12	9.7	鋳型合わせ痕	
	48	A-1・IIb	鉛	16	19.0	鋳型合わせ痕	
	49	A-3・IIb	鉛	18	28.4	-	
	50	A-6・IIIe	鉛	18	34.7	-	
	51	A-4・IIb	鉛	24	70.3	鋳型合わせ痕	
	52	A-1・IIb	鉛	-	18.9	着弾による潰れ	
	53	A-4・IIb	鉛	-	10.0	着弾による潰れ	
	54	A-3・IIb	鉄	13	4.1	鋳型合わせ痕	
	55	A-4・IIb	鉄	15	7.1	鋳型合わせ痕	

第4節 考察・小結

遺構の評価および調査の成果と課題について述べておきたい。

A区において検出した石畳であるが、周りを囲むように石積みの崩落や地形の高まりを伴っており、城内方向へ伸びていくとするならばA-1区付近から北側へ一度折れる蓋然性が高い。絵図等と位置関係・形状を照らしてみる限り、原城大手の内舩形虎口に伴う可能性が高いであろう。報告で述べているとおりA-9区の途中で石畳は途切れており、城外と城内の境界にあたる部分の在り方については捉えることができなかった。本丸跡の調査で発見されている玉砂利敷きとは石材の趣が異なっている。時期差や、本丸と大手という位置付けの違いも考慮しなければならないが、同じような石を徒歩1~2分の距離にある海岸で拾える点からみると、単純に材料調達的面における合理性が石材選択に影響を与えた可能性もあながち否定できないのかもしれない。

石畳を虎口通路の下部構造と捉えるべきか、通路面とみるかも整理しておく必要がある。この場合、石畳を全体的に覆っているⅢe層の評価が問題となる。A区の大部分において、ほぼ均一な厚みで拡がっている点や、包含する遺物の時期が様々で細片ばかりである点からして整地層の類であろうとは考えているが、特に同層より出土している銃弾の量に着目しておきたい。今回の調査で出土した銃弾の点数が73点であることは先に述べたとおりである。図化したものがⅡb層に偏ってしまったが、Ⅲe層に包含されていたものは、このうち20点あり、上層からの偶然の混入とは考えられない。Ⅲe層の掘削土量は土層図、平面図からの概算で4㎡を少し上回る程度であり、1㎡あたりに5点近くの銃弾を含む計算となるのだが、このような層が形成される状況は通常時であれば考えにくい。城の構築層であるかどうかに関わらずである。周囲に銃弾が多く散乱している状況にあって、それらを含む泥土によって石畳が被覆されたとみるのが最も自然な解釈であろう。また、その最も有力なタイミングというのは、出土銃弾の全てを無批判に「島原天草の乱」と結び付けてよいかは検討の余地があるとしても、原城の辿った歴史をみる限り「島原天草の乱」の終結後になるのではないだろうか。そのように解釈を進めてよいのであれば、この石畳は検出した状態によって通路としての機能を果たし、一国一城令に伴う廃城以降も取り壊されることなく、「島原天草の乱」終結後までは地表に顕在化していたものと考えたい。「島原天草の乱」における一揆軍の蜂起時において、原城が軍事的な構造物としてはある程度利用可能だったとの見方があるが(千田2008)、そうした意見とも符合するものである。

前段で述べたように石畳が「島原の乱」以後に被覆されたという考えに立てば、A-1区からA-2区で検出した集石遺構はⅢe層の直上にあるため、乱以降のものということになる。今後、周辺の調査も踏まえて検証していく必要は当然あるが、可能性としては本丸跡でもみられる破却行為の類を考えており、Ⅲe層の形成からもほとんど時間をおかないものと想定している。つまり城の正面玄関にあたる大手口の戦後処理として、まず泥土によって石畳を覆い尽くすことで通路としての機能を奪い、さらには城内へ侵入した際の最初のコーナー部分に礫を集積することにより、その機能を消し去ったことを幕府軍が表象化したのではないだろうか。この集石遺構が形成されて程なく埋め尽くされたか否かについてははっきりとは判らない。ただ、直上のⅡb層に含まれる遺物には17世紀後半以降のものも散見されるので、しばらくは地表に顕在化する期間があった可能性についても余地を残しておきたい。いずれにしても遺物量があまり多くないので、今後における周辺の調査状況も踏まえて検討

していきたい。集石遺構を形成する礫群であるが、本来ならば石畳の袖にあった石積みの石材であったものと推測する。理由として、集石遺構の礫とA-7区などでみられる崩落した礫とが大体同じようなものであることが先ず挙げられる。またA-4区およびA-5区付においては、A-7区でみられる崩落した石積みの延長上に対応するような地形の高まりは認めうるものの、礫そのものは無くなっているか、または希薄になっているので、この辺りの礫が取り外されたものではないかと考えている。集石遺構上面の中央に置かれていた空風輪については、遺構の性質や配置的にみても意図があつて置かれたような印象を受けるが、類例を知り得ないので断定は避けたい。また、この空風輪が崩落した石積みの石材として用いられていたと仮定するならば、石積みの構築時期を規定する材料ともなるのだが、これについても確証はない。A-1区サブトレンチ1の集石断面に覗いていた骨片は、集石を破却の結果としてみた場合、一揆軍の戦死者のものとして理解すべきであろう。

城郭にとって重要性の高い大手口という場所にあつて、本丸と同様に近世的な築城技術による工事が行われているか否かについては重要な調査課題の一つであつたが、今回の調査範囲においてはそのような状況はみられなかった。時期差や郭の位置づけの違いなどを含め、さらに検討しなければならぬだろう。また、絵図等には内舁形虎口のコーナーを一旦北西へ折れた先に門が描かれている事が多く、そうした遺構の確認と合わせて今後の調査課題と言えよう。

B区付近の性格については遺構が検出されず、遺物もほとんど出土しなかった為に報告であまり触れていないが、B区から崖面を介した西側の段上には纏まった面積の平場が広がっており、B区付近が通路のような空間として利用された可能性は考えられるらしい^(※1)。

遺物は細片が殆どであり、量的にも多くないうえに時期も多様であつたので、あまり掘みどころがなく、原城一帯の城としての本格利用が一体いつ頃から始まったのかという問題に対して考古学的にアプローチすることは出来なかった。ただ、原城跡の城郭史における重要性や「島原天草の乱」の歴史的なインパクトに隠れがちだが、原城跡が地域において連続と利用され続けた土地であり、遺跡であるということが垣間見えたことは成果であるだろう。

(伊藤)

※1 千田嘉博氏に現地視察を頂いた際、直接教示を得た。

謝辞

平成20年度における大手地区の現地調査、整理作業にあたっては以下の方々より貴重な指導、助言、協力を賜った。文末ではありますが、記して御礼を申し上げます。

高瀬要一、千田嘉博、服部英雄、岡林隆敏、澤田正明、分部哲秋、福田八郎、原田建夫、三宅克弘、大石一久、古門雅高、伊藤修一、中尾篤志、上野淳也、山口勝也、辻田直人、東貴之、^(株)九州文化財研究所、大野泰輔、竹田将仁(順不同、敬称略)

【参考文献】

- 上田秀夫 1991 「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」
『関西近世考古学研究』Ⅰ 関西近世考古学会
- 大橋康二 1994 『古伊万里の文様』理工学社
- 小野正敏 1982 「15, 16世紀の染付碗, 皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 九州近世陶磁学会 編 2000 『九州陶磁の編年』
- 千田嘉博 2008 「島原の乱—原城攻防の実像」服部秀雄・千田嘉博・宮武正澄 編『原城と島原の乱—有馬の城・外交・祈り—』新人物往来社
- 原田範昭 編 2004 『古町遺跡Ⅰ』古町遺跡第1次調査区発掘調査報告書 熊本市教育委員会
- 松本慎二 編 1996 『原城跡Ⅰ』南有馬町文化財調査報告書第2集 南有馬町教育委員会
- 松本慎二 編 2004 『原城跡Ⅱ』南有馬町文化財調査報告書第3集 南有馬町教育委員会
- 松本慎二 編 2006 『原城跡Ⅲ』南有馬町文化財調査報告書第4集 南有馬町教育委員会
- 宮崎健吾 編 2000 『太宰府条坊跡XV』陶磁器分類編 太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会

第5章 過年度調査のまとめ

第1節 原城の築城

原城の築城は明応5年(1496)、戦国時代初期、有馬氏の勢力も強大になっていき島原半島をほぼ手中に収めた時期であるとされるが、詳細は不明であった。これは林銃吉氏の「島原半島史」で、「明応5年有馬貴純によって築城されたと言ひ伝えている。旧くは志自岐原の城と称へ後世の所謂原城である。俗に之を以て有馬氏の居城と称するけれども「有馬世譜」「恩榮録」「廢絶録」等に拠れば飽くまで之は俗説であつて、実地に就いて見るも城下町、武家屋敷、寺院、基地等居城としての実蹟はない。惟ふに国防第一線の要害として築造したもので、日野江城の拡張延長と見るべきものであろう。」と記していることを基にしたものであつた。しかし、『藤原有馬世譜』は、有馬貴純が明応3年に卒去したとしているため明応5年築城は矛盾する。

築城時期を絞り込むことは歴史的に原城がどのような意味をもったのかを明らかにする上で非常に重要な問題である。

本丸の発掘調査によって本丸で検出した石垣は、慶長年間前期の豊臣系城郭の影響を色濃く受けた石垣であり、多く出土した陶磁器のほとんどが16世紀末から17世紀初頭の製作であり、他に出土した遺物についてもこの時期に集中していた。

そのことを示すように、五野井隆史氏が昭和55年(1980)にキリシタン文化研究会の会報で、イエズス会宣教師の報告書に、原城の築城時期を示した記録があることを指摘されている。

ヴァリニャーノの報告書は、「日本中が現在沸き立って、各大名が自領内に壮大な城を築いており、また彼等が以前に築いていた城よりも大きいものを造っている。何故ならば、太閤様の時代に彼等は別の(新しい)戦法を習得し、彼等が最初に所有していたのとは異なる城を造る術を知ったからである。」と記している。新しい戦法とは、鉄砲や大砲等を使用した戦いであり、それに伴って中世以来の古い城塞の修築が必要となってきたことによるものである。有馬晴信の築城については、

『日本キリスト教会状況報告』ヴァリニャーノ・1599(慶長4)10月

「有馬殿もまた海に近い場所であるシマンバラ Ximabara に〔大村氏〕同様に築城しており、しかも極めて強固な一城を造っている。しかるに彼もまたもっと良好な別の地所に有馬の〔居〕城を移転する意向のようである。」と記している。

この報告が有馬氏の築城について初めて言及されたものであるが、記事の扱い方は築城について独自に報じたものではなく、イエズス会との関係において報じられたものである。

『1600年度日本年報』(慶長5)8月

「そしてまた彼が当時(当地では櫓と称している)三層からなる塔の如きものを築いていて、これを美しさを誇りに戦闘に便宜を与えている彼の居城に併せ加え、しかも弾薬と糧食とをそこに貯えようとしていたからであつた。その工事には相当数の大工達が従事していた。かようにして、それらの諸工事を行い、かつまた教会建設の工事に着手することは不可能なことであつた。しかし、逆に有馬殿は先ず彼が高麗の戦争に参加していた折に彼等の主が彼を無事に有馬に連れ戻した時にはこの教会を建設することを誓言していたと述べ、そしてその誓言を果たそうと思ったこと、さらにこの他にもコンパーニャ(イエズス会)にかの屋敷を与えた以上は教会を建設しようと思っている。彼はまたすで

に内府様に（自分を）キリシタンとして表明しているし、彼（家康）がキリシタン達に親愛の情を抱いていることも知っているし、このために何ら恐れることはなく悪い事態には至らない、むしろ迫害後に日本で公然と（教会）建設に着手した最初（の者）であることの方が喜ばしい、と述べた。そして両方の建築を同時に行うことができないために、その櫓の建造を中止して彼らの領内の大工全員を教会建設のための工事に投入することを決めたと述べて、万難を排してこの教会を建造することを決意した。そして彼はこの事を決定するや直ちに巡察師に伝言を送って、ひとたび学んだ事を実行に移すにおいては彼は非常に激しやすく、かつ性急な質であるために（教会を）建設することを決めた旨を彼（巡察師）に伝え、直ちに櫓の建設工事を中止することを命じて、教会建設のために奉仕しているさらに別の200名以上の人夫と一緒に送って寄こした。そして彼らさらに必要な事柄を援助するためにその工事を監督すつための非常に勤勉な武士2名をも遣した。このようにして、この工事はすぐに威勢よく始まった。彼がこの工事に着手した時期、彼が自分の居城のために極めて重要であった櫓（の工事）を中継して、私達の教会を建設するための工事に着手したことは真実大いに感謝すべきことであった。」と記している。

この報告の一説によって、有馬氏が建設中の城の具体的な構造が伺える。城は3層の大型の櫓を備えようとしており、さらに石材を運んでいたことから石垣をもった城であったことが分かった。建設中の城は天主と石垣とゆう近世城郭の形態をそなえたものであった。櫓に弾薬と食糧を貯蔵することを主目的としていたということは、江戸時代の天主と共通した性格であった。

『1603年度日本報告』（慶長8）

「彼が現在居住している所よりも一層適地にして、堅固で防衛できるように移転を決意している場所に新しい一城を築くために（領内）全体が動いている時期であり、彼が目下金を最も必要としているだけに、この事実は感謝して余りあることである。（中略）これらの（有馬の）レジデンシアの一つのために非常に献身的な多数のキリシタンが参集した。そして彼等自身は全く話をかわすこともせず私達の教会の周囲及び教会がある広々としている広場の周りに高く幅のある石塀を築いた。そして、それは、彼等有馬氏の新城の増築工事とその作業に従事していた時期のことであつたけれども、彼等は男子は言うまでもなく多数の身分ある者や老女からなる婦人達までが大層熱心に駆けつけて来たり、子供達までが競って石運びをしていた。」と記した。

この報告により有馬氏が当時居住していた日野江城から移転を決意していたことが伺える。千田嘉博氏は、「織豊期は城と城下の意図的な移転を全国的に繰り返していた時期であり、この記述を手掛かりに全国的な当該期の城下町移転の流行という動きのなかで有馬氏の新城への移転をとらえるという視点を得ることができる」と解説された。

『1604年度日本準管区年報』ジョアン ロドリゲス ジアン 11月23日（慶長9）

「有馬殿がこれまでに居住していた城は、戦時には不適當で安全でないと考えられているために、彼は（現在ある城よりも）すぐれて、しかもより一層堅固な城を、そのために一層好都合と思われる、ここ（有馬のコレジヨ）に近い別の場所に築くことを決心した。各屋敷ができあがると、有馬殿は準管区長に以来して、彼等の主がこれらの屋敷を守護し、またその新城を神の保護のもとに置くようにそれらの屋敷でミサを立て、これらを祝別してくれるようにと懇願した。準管区長を（新しい城に）案内したことが喜びであつた。彼は（ミサに）臨席していたパードレとイルマンの全員を、さらに教

会の同宿等全員をも（新城に）招待した。彼は習慣に従って昼間祝宴を設け、そしてまた別の祝宴が夜まで続いた。城の普請はほどなく終了しようとしている。そして家臣等の屋敷もまた同様であり、彼等のうちの多数の者がすでにそこに移っている。彼は私達（イエズス会員達）が時期を見て移転するのにふさわしい、しかも広い屋敷を私達に与えた。そして彼は教会を彼の費用で移転し、必要のある時には全面的に援助を与えると申し出た。私達の地所は現在整理されている。しかるに、殿がこの新しい城に移った時には、私達もまた同じく移転することになる。」と記した。

報告書によると新城はほぼ完成し、キリスト教により祝別を受けたことが伺える。有馬氏は日野江城から新城に移転することを決めており、家臣たちも屋敷を建て始めていたと述べ、屋敷ばかりではなく日野江城下にあった教会も新城の城下へ移転することを計画していた。千田氏は「新城建設は単純に領国防衛のために軍事拠点をつくるということではなく、家臣屋敷や宗教施設の移転をもセットにしたセンターとしての城下町を移転する、とゆう壮大な構想のもとに進めつつあった政策であったことが確認できると」解説されている。

新しい築城工事は1599年8月には着手され1604年の秋頃までには完成していたと思われる。発掘調査で検出した石垣や出土した遺物からもこの時期と一致することが判明した。

豊臣秀吉の九州統一をかわきりに文禄・慶長の役による名護屋城や、「倭城」の築城によってその技術を身につけていった有馬晴信は、原城にもこの倭城のプランが大きく影響を与えた。つまり、中央からもたらされた豊臣系城郭の新技术を用いて石垣を使用した原城を築城したことが伺える。これは、明応5年以降あった中世の城を改修したのではなく、全く新規に築城したと思われ、宣教師の報告書がほぼ正確に記していることがわかった。

その完成した城は、検出した遺構などから推測すると天守相当の櫓を備えており、近世的な城郭としての性格が強いものであった。今回検出した張り出し部は、上部構造としての礎石などは破壊により検出できなかったが、築城当時の櫓台を推測すると、石垣の基底石部分で約15m×30mあり、石垣の勾配を考慮して、上部空間は約10m×25mの広さがあったと思われる。これだけの広さと石垣があれば、宣教師の報告書の中に出てくるように、三層の櫓などのしっかりとした建物が建てられるだろうと思われる。また、この場所は、海に面しており当時貿易港として栄えた口之津港に向いており、さらに有明海を挟んで対岸には、天草諸島も見渡せるという格好な場所であった。

（松本）

【参考文献】

- 五野井隆史 1980 「有馬晴信の新城経営と原城について」『キリシタン文化研究会報』
南有馬町 2000 石井進・服部英雄 編集『原城発掘』

原城の構造

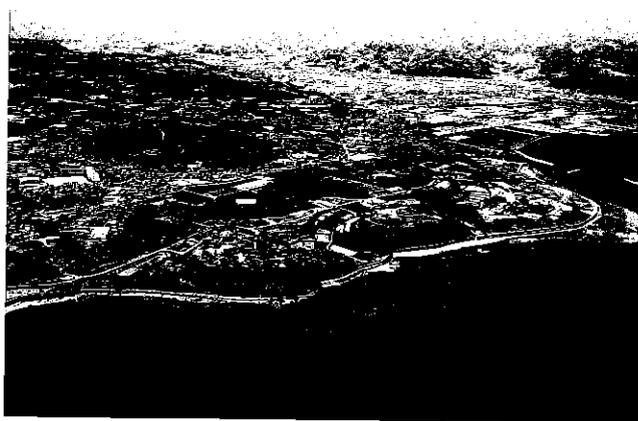
原城は、海岸に突き出した標高31mの丘に築かれ、本丸、二ノ丸、三ノ丸、天草丸、鳩山出丸などから構成されており、東は有明海、西及び北は一部を除き一面泥土の天然要害であった。

本丸は石垣で囲まれ出入口は櫓形となり、織田信長や豊臣秀吉の時代に完成された石積み技術が用いられ、近世城郭の特徴をもった。一方、二の丸、三の丸は自然の地形を活かした土づくりであった。三ノ丸の東側海岸に面した所に大手門があり、他に、田町門、池尻門、蓮池門、田尻門がある。

全体の平面構造の特徴は、中・南九州では多くみられる中世的な様相と近世的な様相を併せ持つ「館屋敷型」あるいは「群郭型」と呼ばれている。

現在の遺構の大半は慶長年間前半の有馬氏によるものであり、島原・天草一揆期の遺構が含まれている。また、城に直面する丘陵地帯は幕府軍が布陣した場所で、大体の地形は当時の遺構をそのまま残していると思われる。現在の原城跡は乱後の幕府による徹底的な破壊により、往時の姿はとどめてないが発掘調査により「島原の乱」と「原城」の姿が現れ始めた。

本丸跡からは、乱後破却され埋め込まれた出入口や礎石、櫓台石垣を検出した。石垣は慶長年間前期の織豊系城郭の影響を色濃く受けた石垣であることが判明し、大量に出土した瓦は瓦葺の礎石建物が存在したことを明らかにした。



原城跡全景（航空写真）

調査により検出した本丸の虎口（出入口）は3箇所、そのうちの2箇所は、本丸北側にある虎口空間帯に存在する本丸最初の虎口と、最も本丸寄りの虎口である。もう1箇所は、本丸東側にある虎口である。本丸内部に直接取り付く2箇所の虎口は、検出前は完全に埋められていた。本丸北側の最初の虎口である大枡形虎口では、外周を網羅する石垣は顕在していたが、内部空間は土砂に覆われており詳細は不明であった。

本丸東側の虎口は、幅が東西に約6m、開口部は北を向き、5段の階段を有する平入りの出入口である。階段の踏石は取り壊され、礎石残る程度であった。礎石も検出し何らかの建築物があったことが推測できる。

最も本丸寄りの虎口は、本丸側から見て右側の石塁を張り出した外枡形の出入口で、開口部は西を向き、幅は約7.5mを測る。虎口内部床面に7個の礎石と礎石跡を1箇所検出した。礎石の配置から門は、東西に張り出した石塁から本丸側石塁に渡る櫓門形式と思われ、瓦もたくさん出土していることから、門は瓦葺の建物のようなものである。建築物としての門は、張り出した石塁の内側にあり正面に門の側面を見せた建ち位置である。出入口階段部分はかなり破壊されているが、幅約6m、2段の階段を検出している。築城当時はさらに数段あったと思われるが、破壊がひどく詳細は不明である。

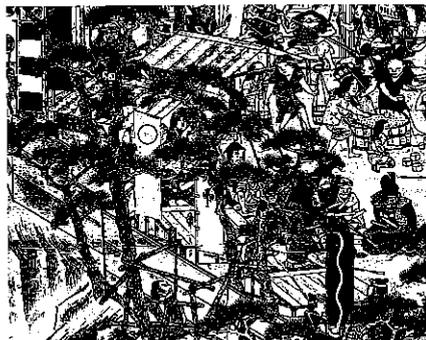
この虎口では、その後の調査により、細川氏の家譜『綿孝輯録』に綴じ込まれた絵図「原城諸手仕寄之図」が示す「四郎家」と同じ平面プランをもつことがわかった。全国的に数多くに残されている原城攻囲図には、本丸に「四郎家」など存在せず、この絵図のみである。そのため、これまで信頼性

に欠けると思われていたが、実はほぼ正確に伝えていたことになる。天草四郎の最後の場所については、「細川忠利書状」や「島原陳始末記録抜書」などに記されており、その実像を解明する検出であった。

平成16年度の発掘調査において本丸の最北部に位置し登城用道路として利用されていた道路の下から巨大な門の礎石が8個、水路、階段を検出した。門跡は破却され石垣に使用した石材等によって埋め込まれた状態で検出し、大量の瓦、陶磁器、人骨なども出土した。検出した礎石はその配列から門であることがわかり、本丸正面入口の石垣間に、幅約9mの開口部となり東を向く。建築物としての門は、1間が6尺5寸（1m97cm）の京間を基準とする桁行4間、梁行2間の建物で、枱形を構成する石垣の間におさまる形となり、石垣と接して建てられていた。礎石の位置から、正面4間のうち中央2間には扉が入り、両脇各1間のいずれかにも扉が入っていた可能性がある。京間の寸法体系であることは、当時としては先進地帯であった近畿地方の建築技術の可能性が高く、原城も近畿地方の建築技術者が建設に関与していた可能性を示すものである。建物は石垣と一体となって機能を発揮したはずで、外観も石垣と一体となって本丸の正面入口に位置していることから、本丸大手門と考えられる。単層の可能性もあるが、大手門であることから外観が重視されていたはずであり、重層（2階建て）であった可能性が高い。その位置と高さからみて、外観は周辺のみならず、遠く沖を航行する船からも見えたはずであり、そのような遠望を意識した豪華な外観であった可能性がある。原城内で存在が確認できた建物としては、最も目立つ外観構成であった可能性があり、有馬氏の権力を再確認するものである。また、この門は島原の乱で一揆軍が籠城した時にも存在した可能性がある。

本丸西側で検出した張り出し部と推定される場所では、上部構造としての礎石などは破壊により検出できなかったが、築城当時の櫓台を推測すると、石垣の基底石部分で約15m×30mあり、石垣の勾配を考慮して、上部空間は約10m×25mの広さがあったと思われる。これだけの広さと石垣があれば、宣教師の報告書の中に出てくるように、三層の櫓などのしっかりとした

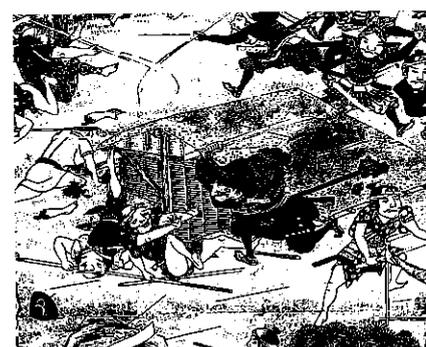
建物が建てられるだろうと思われる。また、この場所は、海に面しており当時貿易港として栄えた口之津港に向いている。さらに有明海を挟んで対岸には、天草諸島も見渡せるという、格好な場所でもあった。城の天守というものは、戦闘時の見晴らしのための展望台、戦争の時の指揮をするための台



I類



II-A類



II-B類



III類

島原の乱図屏風に見える竪穴の諸形態

などという印象が強いが、有馬氏が原城を近世的な城郭として築城した時は、口之津港に向かう船から非常に良く見える位置に、良く見える形で建てられていたのだらうと思われる。つまり、原城を象徴するような建物として存在したと考えられる。

本丸跡西側の破壊され埋め込まれていた石垣の前面広場部分からは、島原の乱の時に立て籠もった一揆軍が使用した、地面を掘込んだ半地下式の小屋跡群を検出した。竪穴建物跡の床面は焼けており、中からは多くの陶磁器や瓦、人骨などが出土した。

検出した竪穴建物跡群は、一辺が約2m～3mを測る方形の竪穴建物跡で、その建物跡が石垣に沿って南北方向に9区画連なっていた。石垣側には幅約1mの通路と思われる空間が石垣に沿ってあり、西側は畑による耕作などで削平されている。

竪穴建物群の検出は、文献や絵画資料で断片的に知られていた一揆勢の籠城の実態の一端を明確にする画期的な成果であった。竪穴建物跡群には規格性があり、家族単位でしかも同一集落を基本に使用したと思われる。

発見した竪穴建物は密集しているが、通路を設定するなど計画性の高さを示し、整然と籠城していたことがわかった。さらに冬場の籠城にもかかわらず竪穴建物では、個別に炉やカマドといった暖房や煮炊きにかかわる遺物や遺構の痕跡が見つかっていない。それらのことから、籠城中に失火で火災を起こさないようにした大名軍勢並みの軍規の存在を物語るものといえる。この点からも一揆勢は寒さに耐えて、高い規律を守ったことが明らかになった。

また、個別の炉やカマドをもたなかったことは、籠城中の食事が竪穴建物ごとの個別での調理だったのではなく、食料を集中管理して調理し、配給していたことが推測される。

以上、一揆勢の原城への籠城はたいへん組織的であり、従来の一揆勢のイメージに対して根本的な再検討を迫る発掘成果である。こうした竪穴建物は原城内の広い範囲にあったことが予測され、今後の調査の進展によって、階層差など、より詳しい一揆勢の実像が解明されるだろう。

(松本)

【参考文献】

- 南有馬町教育委員会 1996『原城跡』南有馬町文化財調査報告書第2集
- 南有馬町教育委員会 2004『原城跡Ⅱ』南有馬町文化財調査報告書第3集
- 南有馬町教育委員会 2006『原城跡Ⅲ』南有馬町文化財調査報告書第4集
- 南有馬町 2000 石井進・服部英雄 編集『原城発掘』

第2節 原城の石垣

本丸跡からは、発掘調査によって乱後破却され埋め込まれた、石垣で構成された虎口や櫓台石垣を検出した。虎口は三ヶ所検出し、そのうちの二ヶ所は、本丸北側の虎口空間帯に存在する連続柵形で、本丸最初の虎口（本丸正門）と最も本丸寄りの虎口（本丸門）である。もう1箇所は、本丸東側にある虎口（池尻口門）である。本丸内部に直接取り付く二ヶ所の虎口は、検出前は完全に埋められていた。本丸北側の最初の大柵形虎口では、外周を網羅する石垣は顕在していたが、調査によって内部空間の様相も明らかになった。これらの虎口や石垣は破却によりそのほとんどが壊されているが、石垣構造や築城技術の実態を見ることができる。

石垣の存在を確認できるのは、本丸一帯のみに見られ、二の丸、三の丸においては畑化による旧地形の改変を考慮してみても、近世城郭に共通する直線的かつ直角に折れ曲がる墨線がほとんど見受けられない。したがって、土づくりの城郭部分の三の丸にある大手門や、各曲輪などの出入口の部分に手を加えただけで、その他は自然の地形を活用している程度の土木レベルが推測できる。現段階では、本丸以外の地域に関しては、各曲輪が本丸と同様石垣が地中に埋没している可能性は少ないと思われるが、平成19年度からは三の丸地区の調査に移行し、特に平成20年度は、大手門地区の調査を開始して大手門跡から石畳状の遺構を検出している。石垣の検出は無かったものの調査地区は一部であったため今後の調査を待たれる。本丸に残る石垣で、地表に現れていない埋没石垣は、発掘調査である程度推定でき、原城本丸を取り囲む石垣の概要はおおよそ把握できている。

原城跡の石垣の構築年代については、イエズス会宣教師の書簡や報告書に、1599年着工して1604年に完成したことが報告されており、発掘調査の結果、出土した遺構・遺物の年代とも一致していることが確認できた。検出して見えてきた原城の本丸は、大型の外柵形虎口と櫓台を備えた総石垣の近世城郭の様相をもち、その築城技術は慶長年間前半の文禄・慶長の役による有馬晴信の倭城普請によるもので、それにより中央政権の技術を身に付けたものと思われる。それらは、検出した虎口を構成する石垣や、築石の使用石材の加工度や規格性、隅角部の構築形態からも、豊臣氏系統の城郭に習った総石垣の近世城郭の構築であった。

使用石材について

原城の石垣については、既存のものや発掘調査によって検出した石垣にそれぞれ番号を附しており、これまでに29までの数字をつけた。今回、田島俊彦氏の協力によって、全ての石垣の石材について調査した。

石垣1 本丸池尻口門構成石垣

本丸東端に位置する池尻口門を構成する石垣である。築石は自然石あるいは粗割石を使用し、規格は不揃いで積み方は布目崩し積み技法である。隅角部は、角石が1石のこるだけで、上部の算木積み状況は不明である。天端部分は完全に壊されており、築城当時の石垣高さは不明である。

築石は、全体で34個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；18個（52.9%）、玄武岩B；16個（47.1%）である。築石総数34個の内、24個が自然石（玉石・楕円礫）で、10個が1～4面をカットした割石であった。間石はほとんど玄武岩Bである。築石面は、

波食台（潮間帯）で波食を受けたものと思われ、山野に見られるような黄褐～赤褐色風化殻が見られず、少数のものには藻類や石灰藻付着跡が見られるので、原城東海岸の潮間帯から持ち込まれたものと思われる。デイサイトは、雲仙火山岩類で西有家竜石～布津大崎までの波食台（潮間帯）に産出する。

これらは高岩山火山、矢岳火山、野岳火山等の溶岩ドームが崩壊して火山麓扇状地をつくっていたものが河川に運搬されたものである。玄武岩は、南有馬の吉川南部海岸や貴船神社海岸の波食台（潮間帯）に産出するものと有馬川流域～河口に産出するものがあり、これらは上原台地に流出した上原玄武岩溶岩が地滑りで海岸まで移動して来たものであり、有馬川流域のものは河川より運搬されたり地滑りで移動して来たものである。石材の規格は平均して、高さ56.8cm、幅81.9cmである。

石垣2 本丸池尻口門構成石垣

築石は、全体で38個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；24個（63.1%）、玄武岩B；8個（21.1%）、複輝石安山岩A；6個（15.8%）である。築石総数38個の内、27個が自然石（玉石・楕円岩塊）で10個が1～2面をカットした割石を使用している。裏込め石はほとんど玄武岩Bである。原城東海岸の波食台（潮間帯）から運搬されて来たものと思われる。6個の複輝石安山岩は、駒崎鼻に産出する偏平円礫であり、塔ノ坂安山岩～高峯安山岩とは異なるものである。石材の規格は平均して、高さ37.3cm、幅56.5cmである。

石垣3 本丸池尻口門構成石垣

築石は、全体で41個の石垣石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；24個（58.5%）、玄武岩B；11個（26.8%）、複輝石安山岩A；5個（12.3%）、古第三紀砂岩・礫岩P；1個（2.4%）である。間石はほとんど玄武岩Bである。石灰藻等の付着する築石が多いところから海岸の潮間帯から持ち込まれたものと思われる。複輝石安山岩Aは、駒崎鼻産が多い。石材の規格は平均して、高さ37.1cm、幅50.7cmである。

石垣4 本丸池尻口門構成石垣

門正面右側の石垣4は、本丸北面を形成する高さ5m以上を想定する高石垣と一体化した構築物である。虎口隅角部を含み、残存部は東西に並び長さ約50mで高さ約4.2mを測る。天端部は全て取り壊され、残存石垣の上部形状はノコギリ状になる。

築石は、全体で259個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；254個（98.1%）、玄武岩B；4個（1.4%）、複輝石安山岩A；1個（0.5%）である。全て巨大岩塊で構成され、石灰藻等の付着する築石が多いところから潮間帯から運ばれたものと思われる。

間石はほとんど玄武岩Bである。石材の規格は平均して、高さ59.1cm、幅81.5cmである。

石垣5 本丸 蓮池側

石垣は自然崩壊により、中央部は斜面に巨大岩塊が見られる状態である。築石は37個（94.6%）で、ほとんどがデイサイトDの自然石（割石は3個）であり、海岸の潮間帯から持ち込まれたものと思わ

れる。北端の2個(5.4%)が古第三紀砂岩Pである。古第三紀堆積岩の産地は、南島原市南有馬町の向小屋である。

石垣6 本丸 蓮池側

本来の石垣6は破却により埋め込まれており、現在は顕在化していない。発掘調査で埋没している石垣7との内隅部を確認しており、この石垣は、埋め込まれて埋没している場所に近代の畑化による構築と思われる。

築石は、全体で40個の石を使用している。全てがデイスイトD(100%)である。間石はほとんどが玄武岩Bである。築石は、波食台(潮間帯)で波食を受けたものと思われ、山野に見られるような赤色風化殻が見られず、少数のものには藻類や石灰藻付着跡が見られ、海岸の潮間帯から運び込まれたものと思われる。石材の規格は平均して、高さ54.1cm、幅68.1cmである。

石垣7 本丸 蓮池側

石垣南側の内隅部においては破却による埋没しているため、調査できる範囲で行った。築石は、全体で59個の石を使用している。おもにデイスイトと玄武岩で構成されていて、デイスイトD;46個(77.9%),玄武岩B;8個(13.6%),複輝石安山岩A;1個(1.7%),古第三紀砂岩・礫岩P;4個(6.8%)である。間石はほとんど玄武岩Bである。石材の規格は平均して、高さ56.7cm、幅75.3cmである。

石垣8 本丸 蓮池側

築石は、全体で23個の石を使用している。デイスイトと玄武岩で構成されていて、デイスイトD;16個(69.6%),玄武岩B;7個(30.4%)である。下部に7個の玄武岩を配置し、その上にデイスイト15個を積み上げ、さらに上部に玄武岩Bの間石を多く使用している。石材の規格は平均して、高さ53.3cm、幅74.1cmである。

石垣9 本丸 蓮池側

築石は、全体で46個の石を使用している。おもにデイスイトと玄武岩で構成されていて、デイスイトD;29個(56.5%),玄武岩B;16個(34.8%),複輝石安山岩A;01個(2.17%)である。28個の自然石を用い、隅角石には、整形・加工が施してある。間石はほとんど玄武岩Bである。石垣石表面は、波食台(潮間帯)で波食を受けたものと思われ、山野に見られるような黄褐～赤褐色風化殻が見られず、少数のものには藻類や石灰藻付着跡が見られるので、海岸の潮間帯から運び込まれたものと思われる。

石材の規格は平均して、高さ61.0cm、幅75.3cmである。

石垣10 本丸正門構成石垣

本丸正門を構成する石垣で、二の丸から見ると正面にある石垣である。築石は、全体で150個の石を使用している。おもにデイスイトと玄武岩で構成されていて、デイスイトD;110個(73.3%),玄

玄武岩B；39個（26.0%）、複輝石安山岩A；1個（0.7%）である。No.04と同様、他の石垣に比べて巨大岩塊が多く、中には長辺が200cmを超える玄武岩の「鏡石」が存在する。間石はほとんど玄武岩Bである。築石面は、波食台（潮間帯）で波食を受けたものと思われ、山野に見られるような黄褐～赤褐色風化殻が見られず、少数のものには藻類や石灰藻付着跡があり、海岸の潮間帯から持ち込まれたものと思われる。石材の規格は平均して、高さ65.5cm、幅88.1cmである。

石垣11 本丸正門構成石垣

本丸正門の外柵形を構成する石垣である。隅角部は、角石が2石のこるだけで、上部の算木積み状況は不明である。天端部分は完全に壊されており、築城当時の石垣高さは不明である。

築石は、全体で142個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；20個（14.1%）、玄武岩B；119個（83.8%）、複輝石安山岩A；1個（0.7%）、古第三紀砂岩P；1個（0.7%）、小利イグニンプライト（灰石）O；1個（0.7%）であった。間石はほとんど玄武岩Bである。「鏡石」も存在する。

築石面は、波食台（潮間帯）で波食を受けたものと思われ、山野に見られるような赤色風化殻が見られず、少数のものには藻類や石灰藻付着跡が見られ、海岸の潮間帯から持ち込まれたものと思われる。

複輝石安山岩の偏平円礫は、駒崎鼻汀に産出し、小利イグニンプライト（灰石）は、露田、宇土、矢竹、天草丸汀、古第三紀砂岩・礫岩は、向小屋に産出する。石材の規格は平均して、高さ47.2cm、幅81.7cmである。

石垣12 本丸正門構成石垣

築石は、全体で190個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；103個（54.2%）、玄武岩B；73個（38.4%）、複輝石安山岩A；5個（2.6%）、古第三紀砂岩・礫岩P；8個（4.2%）、花崗岩；1個（0.6%）である。最大築石は、「鏡石」と思われ、溶岩ドームに良く見られる急冷節理が発達している。古第三紀砂岩岩塊および花崗岩礫Cは、向小屋付近に分布する口之津層群吉川礫岩層を構成していた岩塊・角礫と思われる。間石は、ほとんど玄武岩Bである。材の規格は平均して、高さ55.9cm、幅87.5cmである。

石垣13 本丸大櫓形虎口構成石垣

築石は、全体で38個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；38個（100%）であった。石材の規格は平均して、高さ64.8cm、幅94.1cmである。

石垣14 本丸檜台構成石垣

築石は、全体で255個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；103個（40.4%）、玄武岩B；149個（58.4%）、複輝石安山岩A；3個（1.2%）である。全体的に大きめの礫が多く使用されていて、玄武岩の使用量が多い。間石はほとんど玄武岩Bである。

築石面には石灰藻・海藻類・セルプラ・貝殻など潮間帯の付着物が見られるが、デイサイトの新鮮

割面に付着しているものもある。この事は現地の潮間帯で割石にした後、原城天草丸汀まで運搬し、しばらくこの荷揚場汀に放置されていたのではなかろうかと推測される。築石で最も大きいものは「鏡石」と思われデイサイト礫である。石材の規格は平均して、高さ58.5cm、幅62.4cmである。

石垣15 本丸櫓台構成石垣

本丸櫓台を構成する石垣で、隅角部は完全に破壊されており、根石も存在していない。築石は、全体で107個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；83個（77.6%）、玄武岩B；21個（19.6%）、複輝石安山岩A；3個（2.8%）である。間石はほとんど玄武岩B（一部に複輝石安山岩A数個）である。風化殻のある築石はなく、波食台（潮間帯）から引き上げた証拠と思われる海藻、石灰藻類、カキ殻、セルプラ等付着跡の見られるものが多い。石材の規格は平均して、高さ61.5cm、幅71.8cmである。

石垣16 本丸櫓台構成石垣

石垣-15側の隅角部は完全に破壊されている。石垣-17側の隅角部は、角石が2石残るだけで、上部の算木積み状況は不明である。天端部分は完全に壊されており、築城当時の石垣高さは不明である。築石は、全体で154個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；114個（74.0%）、玄武岩B；34個（22.1%）、複輝石安山岩A；3個（1.95%）、古第三紀砂岩・礫岩P；3個（1.95%）である。大型デイサイトが多用されており、玄武岩は礎石に大きなものが10個ほど使用されている。間石のほとんどは、玄武岩Bであり、本西石垣の上部には、他の石垣よりも多数の栗石（裏込め石）が使用してある。その中には古第三紀礫岩Pがはめ込んであるが、本礫岩は、向小屋海岸産と思われる。石材の規格は平均して、高さ53.5cm、幅73.0cmである。

石垣17 本丸櫓台構成石垣

天端部分は完全に壊されており、築城当時の石垣高さは不明である。築石は、全体で126個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；60個（47.6%）、玄武岩B；64個（50.8%）、複輝石安山岩A；2個（1.6%）である。大型のデイサイトと他の石垣よりも小形の玄武岩を多用している。間石はほとんど玄武岩Bである。石材の規格は平均して、高さ42.4cm、幅57.2cmである。

石垣18 本丸櫓台構成石垣

天端部分は完全に壊されており、築城当時の石垣高さは不明である。築石は、全体で138個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；97個（70.3%）、玄武岩B；31個（22.5%）、複輝石安山岩A；08個（5.8%）、古第三紀砂岩・礫岩P；1個（0.7%）、蛇紋岩C；1個（0.7%）を占めていて、大型のデイサイトと玄武岩を多用している。築石はデイサイト割石を74%、玄武岩野面石を21%を使った石垣であり、間石はほとんど玄武岩Bである。築石の中には、珍しい蛇紋岩礫Cがある。本礫は、向小屋の口之津層群向小屋礫岩層中に産出する花崗岩、閃緑岩、結晶片岩、チャート、古第三紀砂岩～礫岩などと共に深成岩の巨礫を含んでいる所から、それ

らの後背地は九州山地であろうと推定している。石材の規格は平均して、高さ53.4cm、幅82.5cmである。

石垣19 本丸正門一第二門構成石垣

石垣-26との間にある門で、天端部分は完全に壊されており、築城当時の石垣高さは不明である。

築石は、全体で35個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；23個（65.7%）、玄武岩B；12個（34.3%）である。石材の規格は平均して、高さ45.2cm、幅64.8cmである。

石垣20 本丸正門構成石垣

本丸正門を構成する石垣であり、門内部空間にある石垣である。天端部分は完全に壊されており、築城当時の石垣高さは不明である。築石は、全体で53個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；38個（71.7%）、玄武岩B；15個（28.3%）である。石材の規格は平均して、高さ49.5cm、幅75.8cmである。

石垣21 本丸門構成石垣

本丸の北側にある虎口空間帯で検出した、最も本丸寄りの虎口である。検出した門は、本丸側から見て右側の石塁を張り出した、外枅形の構成となり、張り出した石塁は幅約5mで、長さ約11mを測り、開口部の幅は約7.5mを測る。虎口を構成する石垣は5面（石垣20・21・22・23・25）あり、すべてが基底石のみで、天端までの高さは不明である。虎口正面両脇の隅角石部は、大部分が破壊され角石は基底石が1石の残るだけで、上部の算木積み状況は不明である。

築石は、全体で12個の石を使用している。デイサイトD；12個（100%）で構成されている。石材の規格は平均して、高さ58.0cm、幅84.6cmである。

石垣22 本丸門構成石垣

築石は、全体で9個の石を使用している。デイサイトD；9個（100%）で構成されている。石材の規格は平均して、高さ72.5cm、幅90.1cmである。

石垣23 本丸門構成石垣

築石は、全体で15個の石を使用している。デイサイトD；15個（100%）の石で構成されている。石材の規格は平均して、高さ46.5cm、幅66.0cmである。

石垣24 本丸門構成石垣

築石は、全体で9個の石を使用している。デイサイトD；9（100%）の石垣石で構成されている。石材の規格は平均して、高さ58.7cm、幅88.2cmである。

石垣25 本丸門構成石垣

築石は、全体で24個のデイサイト石で占められている。デイサイトD；20個(83.3%)と玄武岩B；04個(16.7%)で構成されている。中に「鏡石」が存在する。石材の規格は平均して、高さ39.0cm、幅63.3cmである。

石垣26 本丸正門一第二門構成石垣

石垣19との間にある門で、天端部分は完全に壊されており、築城当時の石垣高さは不明である。築石は、全体で63個の石垣石を使用している。デイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；51個(80.9%)、玄武岩B；12個(19.1%)である。石材の規格は平均して、高さ49.7cm、幅71.6cmである。

石垣27 本丸門構成石垣

本丸門石垣-25と接続する石垣である。殆どが破壊されており、内隅部が僅かに残る。築石は、全体で07個の石垣石を使用している。デイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；04個(57.1%)、玄武岩B；3個(42.9%)である。石材の規格は平均して、高さ31.6cm、幅39.0cmである。

石垣28 本丸門構成石垣

本丸正門の外柵形を構成する内面部の石垣である。隅角部は、角石が2石のこるだけで、上部の算木積み状況は不明である。天端部分は完全に壊されており、築城当時の石垣高さは不明である。

築石は、全体で59個の石垣石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；4個(6.8%)、玄武岩B；52個(88.1%)、複輝石安山岩A；1個(1.7%)、古第三紀砂岩・礫岩P；1個(1.7%)、イグニンプライト(灰石)；1個(1.7%)である。複輝石安山岩は塔ノ坂安山岩や高峯安山岩ではなく加津佐層や南串山層中の複輝石安山岩ではないかと推定される。イグニンプライト(灰石)は、露田～宇土、矢竹、天草丸海岸等に産出する。石材の規格は平均して、高さ44.1cm、幅75.7cmである。

石垣29 本丸門構成石垣

本丸正門の正面を構成する石垣である。一部は未調査部であり埋没している。隅角部は、角石が2石のこるだけで、上部の算木積み状況は不明である。天端部分は完全に壊されており、築城当時の石垣高さは不明である。

築石は、全体で9個の石を使用している。デイサイト、玄武岩および複輝石安山岩で構成されていて、デイサイトD；2個(22.2%)、玄武岩B；6個(66.7%)、複輝石安山岩A；1個(11.1%)である。隅角部の角石の間石に使用されていた、宝篋印塔の塔身は複輝石安山岩であり、塔ノ坂安山岩や高峯安山岩ではなく加津佐層や南串山層中の複輝石安山岩ではないかと推定される。石材の規格は平均して、高さ52.4cm、幅79.3cmである。

池尻口門階段踏石

本丸池尻口門の階段踏石の石材である。踏石は全体で22個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されており、デイサイトD；3個（12.5%）、玄武岩B；21個（87.5%）である。石材には、海棲生物跡の見られるものが多いところから、海岸の潮間帯から持ち込まれたものと思われる。また、多用されている玄武岩は、大江や井手清水から運搬されて来たものと思われる薄い黄褐色風化殻のある板状節理の発達した石材を階段石として使用してある。

石垣10の前面石積石

石垣10の前面にある犬走り状のテラスに使用されている石積石である。この空間は、発掘調査の結果、石垣10の破却の際に壊した石垣の築石を、石垣前面に平行して並べた様な状態であった。石垣と築石の間はある程度の空間があり、たくさんの石材や土砂が充填されていた。その石を境に石材が存在しないことから、裏込め石や土砂などの堆積物の崩れを防止するための石積と思われる。

全体で41個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；30個（73.2%）、玄武岩B；10個（24.4%）、古第三紀砂岩P；01個（2.4%）である。

大柵形虎口雁木段（1）

本丸門を構成する大柵形虎口内部空間にある南北方向に47mを計る階段遺構である。南側の一部の階段遺構を除いた部分で、全体で100個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；85個（85%）、玄武岩B；15個（15%）である。

大柵形虎口雁木段（2）

雁木段遺構の南側部分である。全体で23個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；4個（17.4%）、玄武岩B；19個（82.6%）であった。階段の踏石は玄武岩が多用されている。

本丸正門 第二門階段遺構

第二門遺構にある階段である。破却により踏石のほとんどが破壊されており、僅かに残る踏石である。

全体で9個の石を使用している。おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；1個（11.1%）、玄武岩B；08個（88.9%）である。

本丸に残る石垣の使用石材は、おもにデイサイトと玄武岩で構成されていて、デイサイトD；1,532個（64.67%）、玄武岩B；775個（32.70%）、複輝石安山岩A；39個（1.65%）、古第三紀砂岩・礫岩P；19個（0.80%）、イグニンプライトO；2個（0.09%）である。蛇紋岩・花崗岩C；2個（0.09%）の合計2,369個の築石があった。

石材の中には、築石面に石灰藻・海藻類・セルブラ・貝殻など潮間帯の付着物が見られ、石材の調達場所は海岸であることが推測される。現在も原城周辺の有家町の海岸から南有馬町の海岸では、巨石岩塊が多く存在し、中には矢穴痕も確認できることから原城の石材調達場所であることが伺える。

原城本丸には築石以外にも、破却によって壊された石垣の石材が多くあり、その石材についても調査を行った。石材は、発掘調査によって検出したもので、破却によってそれぞれの門や石垣などに埋められていた石材である。発掘調査後に調査区の近くに移動保管しており、今後の整備および石垣の保存修理の石材として使用する目的である。

石材は、全て1,214個の石がある。デイサイトD；774個（63.7%）、玄武岩B；414個（34.1%）、複輝石安山岩A；5個（0.41%）、古第三紀砂岩・礫岩P；19個（1.56%）、イグニンプライトO；2個（0.16%）である。

積み方

築石部

個々の石材の長軸を水平に保ちながら設置することを原則として構築法で、石垣面の横目地が上下に波打つように通り、平行線の連続にならない状態の配石をなしている。「布目崩し積み」と位置付けられる。

隅角部

原城の隅角部は、本丸を構成する石垣において、各門を構成する石垣における隅角部は12箇所、地築石部では5箇所あるが、そのほとんどが破却により壊され残存率が非常に悪い。石垣の構築年代の推定に際しては、最も重要なのがこの隅角部の構造分析であるとされるが、原城跡では徹底的に破壊され、角石の残存率が極めて低い状態であるが、石垣の「反り」の要素が全く認められず、直線的な勾配を守って構築されている。

宮武氏は、考古学的な年代検証がなされている戦国期以前の石造構築物の実例から、中世城郭と近世城郭の特徴を比較され、原城の構築年代を検証された。（宮武2000）以下一部省略して引用する。

中世城郭の特徴

- 使用されている石材の小ささと規格性の低さという点で、石材は素手で持ち運べるくらいのもので主流としている。
- 加工痕跡が少ないこと。石材の裁断・分割を目的とした、積極的な工具の使用の様子が窺えるのはほとんどない。大半は「小面」の微調整や、積み上げの段階で石材胴部の凸凹を調整するために、「ゲンノウ」などで殴打した程度の粗い加工にとどまっている。圧倒的多数は全く未加工の河原石や山石を用いたもので、自然石の平らに整った「小面」の石を選択しようという意図さえ感じられない。
- 石垣の隅角部分は、きちんと直方体に整形した石材を積み重ねているような様子はないので、「角」稜線が直線的に通るような、一般にイメージされる石垣のアウトラインとは程遠い外観をなしている。
- 全てに共通する特徴として、石垣全体の傾斜角度が非常な急勾配にある。いずれも80度前後を測り、ほとんど垂直に積み上げられているものもある。結果、2メートル前後の高さまで積むのが限界のようである。

○高さを稼ぐ必要に立たされた場合、石積みが限界高に達すると、その上部からは奥手にセットバックした位置から同じ形式の石垣を積み上げていくことで対処しており、棚田のような雛壇状の外観の構築物を形成している。

近世城郭の特徴

- 中世城郭との相違点は、使用石材の大型化である。
- 高石垣構築のための前提条件である勾配角度のとり方も、50度～60度代にまで傾斜調節している。
- 時代的特性は、使用石材の加工と規格化の進展にあり、石材の表面が割面をもって統一される傾向がほぼ定着してくる。石材の規格化の進展の意義とは、石積み工事全体の管理・運営の効率化を暗示しているとされ、テクニック面での築城技術の発達以上に、システムとしての築城工事の革新を約束するものとも言える。
- 石材規格の点で見ると、時代を追うごとに石材の長・短軸に統一性が進む。意義は、石積み工事全体の管理・運営の効率化はかる。

以上の特徴をふまえ、原城本丸跡から検出された一連の石垣遺構を検証された。

- 石垣の傾斜角度は56度～65度を測る緩やかな勾配を取っており、それぞれの石材の角度調節を行いながら高石垣の構築を志向する傾向がはっきりと現われている。
- 石材の加工・面調整は、石垣の角石には割面石を用いており、角稜線をできるだけシャープに仕立てようとする意図が現われている。
- 「築石」にも「矢」痕跡を残す割面石が相当数混在している。
- 石垣総体の表面の造作は凸凹が少ない比較的フラットな仕上がりとなっている。
- 大半が自然石を多用した「布目崩し積み」を基調とした技術特性を有し、慶長年間前半までの時代相が強く表れている。
- 隅角部に使用されている角石の形状としては、池尻口門、本丸正門、本丸門などに使用されている角石は、角の稜線が鮮明に整った割面石を用いており、一部では工具による面調整の痕跡も確認できる。

結果、原城の石垣は慶長年間の前半代1596年～1610年を中心とした時期に構築されたものと推測でき、イエズス会宣教師の書簡や報告書の報告や、発掘調査による成果とも一致していることが確認できた。ただし、二の丸、三の丸について調査は始まったばかりであり、その成果を踏まえ原城の総合的な位置づけをすることが今後の課題である。

(松本)

【参考文献】

- 五野井隆史 1980「有馬晴信の新城経営と原城について」『キリシタン文化研究会報』
- 宮武正登 2000「検出遺構（主に石垣）から見た原城跡」石井進・服部英雄 編集『原城発掘—西海の王土から殉教の舞台へ』新人物往来社

界高に達すると、その上部からは奥手にセットバック
くことで対処しており、棚田のような雑壇状の外観

る。
とり方も、50度~60度代にまで傾斜調節している。
にあり、石材の表面が割面をもって統一される傾向
義とは、石積み工事全体の管理・運営の効率化を暗
の発達以上に、システムとしての築城工事の革新を

の長・短軸に統一性が進む。意義は、石積み工事全

した一連の石垣遺構を検証された。
配を取っており、それぞれの石材の角度調節を行い
と現われている。

を用いており、角稜線をできるだけシャープに仕立

混在している。

フラットな仕上がりとなっている。

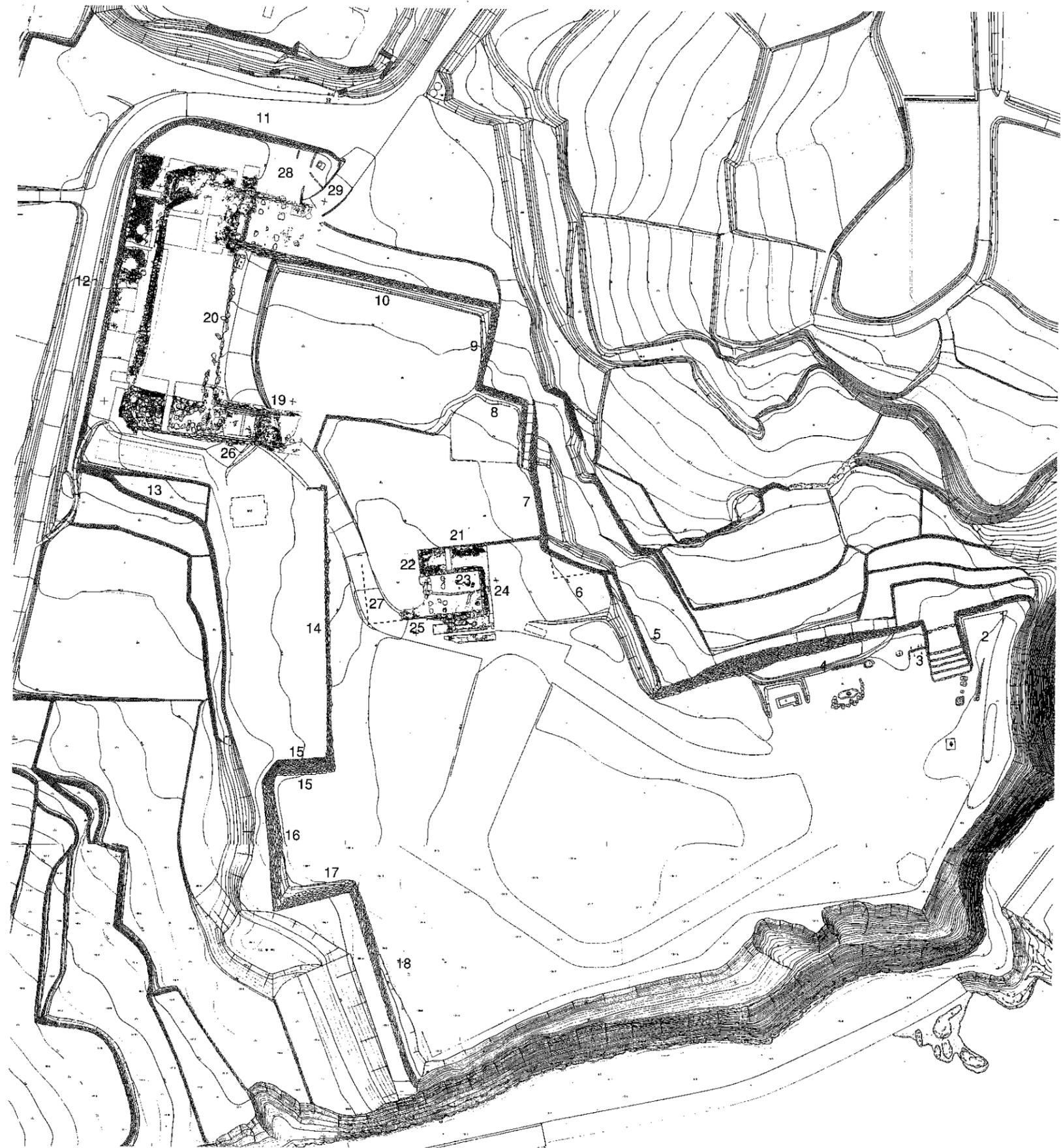
基調とした技術特性を有し、慶長年間前半までの時代

池尻口門、本丸正門、本丸門などに使用されてい
用いており、一部では工具による面調整の痕跡も確認

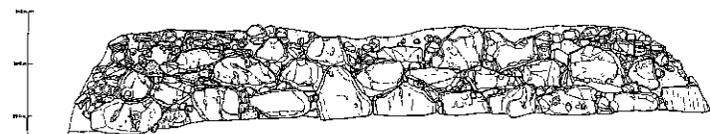
~1610年を中心とした時期に構築されたものと推測で
発掘調査による成果とも一致していることが確認で
台まったばかりであり、その成果を踏まえ原城の総合

(松本)

て『キリシタン文化研究会報』
跡』石井進・服部英雄 編集『原城発掘—西海の王土から殉教



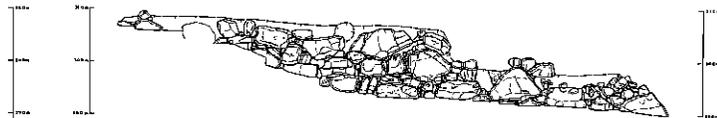
第1図 本丸石垣配置図



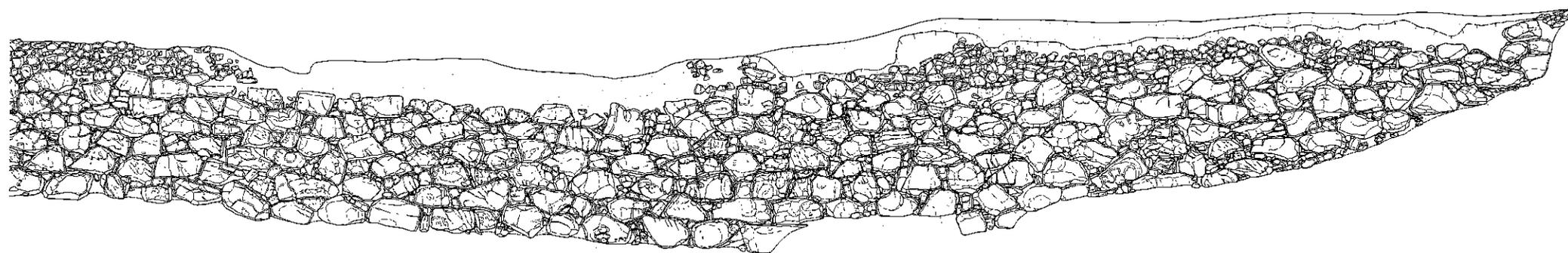
石垣1



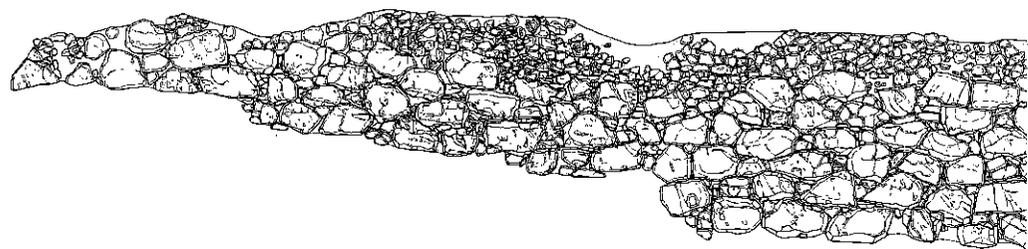
石垣2



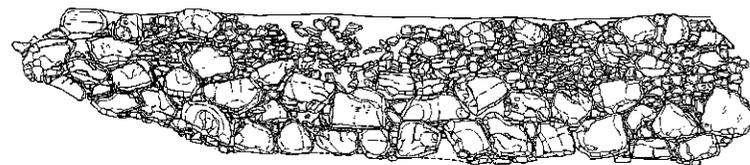
石垣3



石垣4

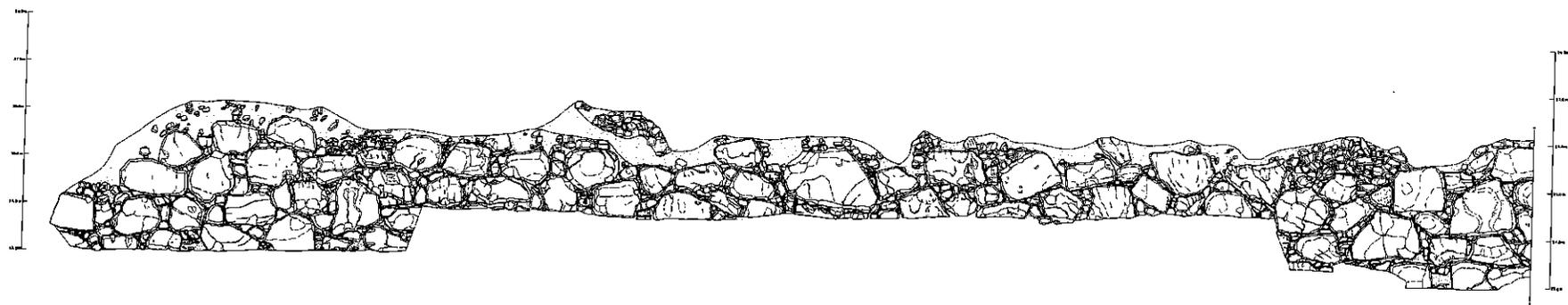


石垣4

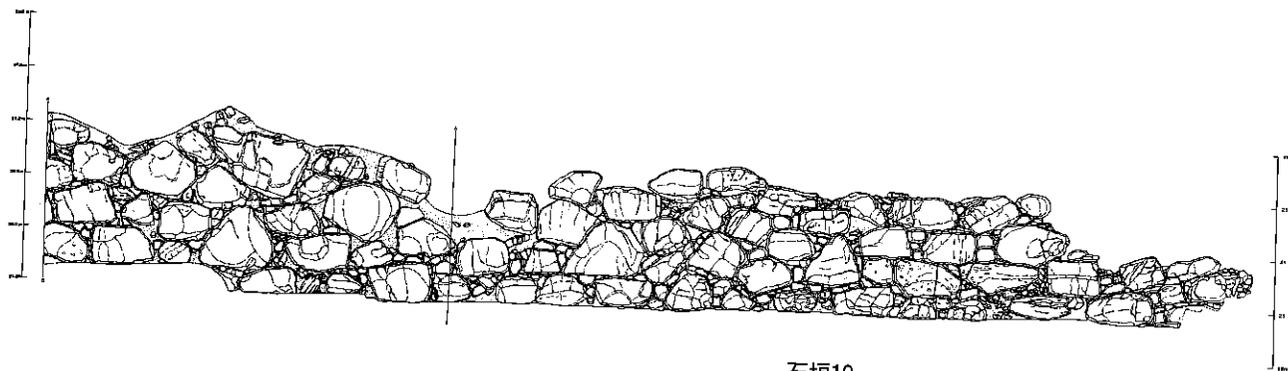


石垣7

第2図 原城本丸石垣①

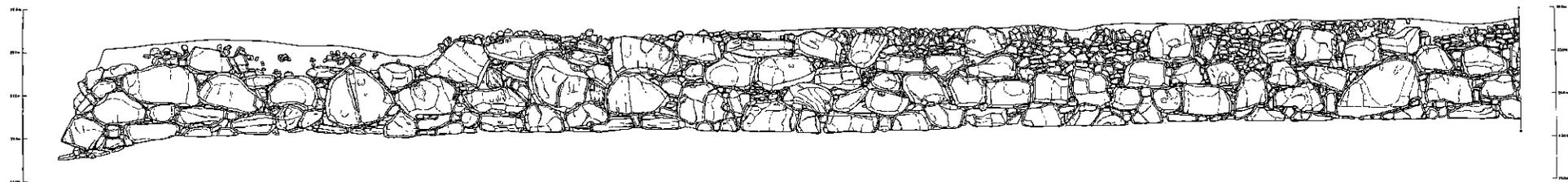


石垣10

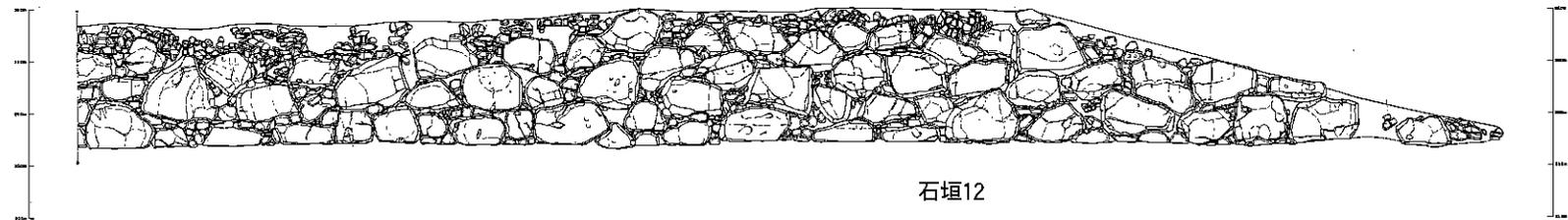


石垣11

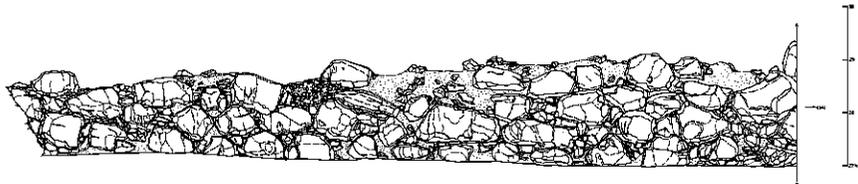
第3図 原城本丸石垣②



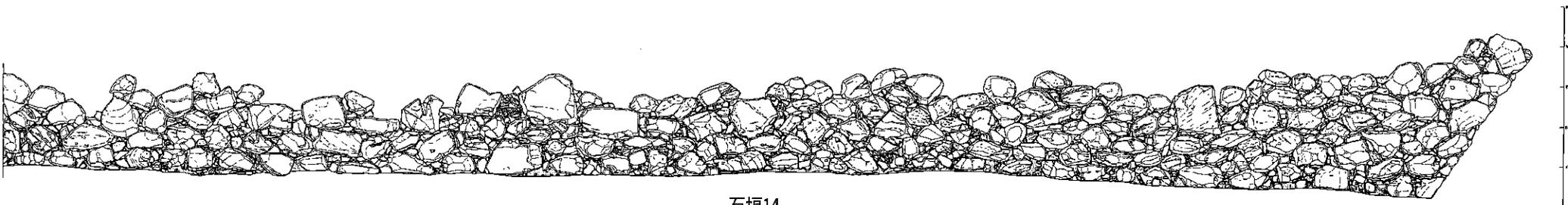
石垣12



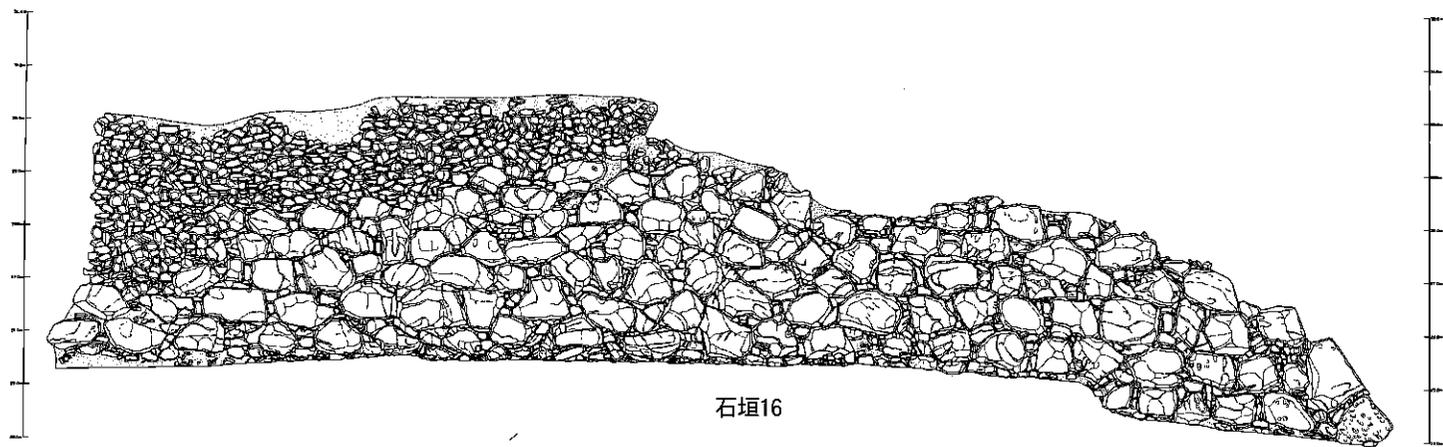
- 123 -



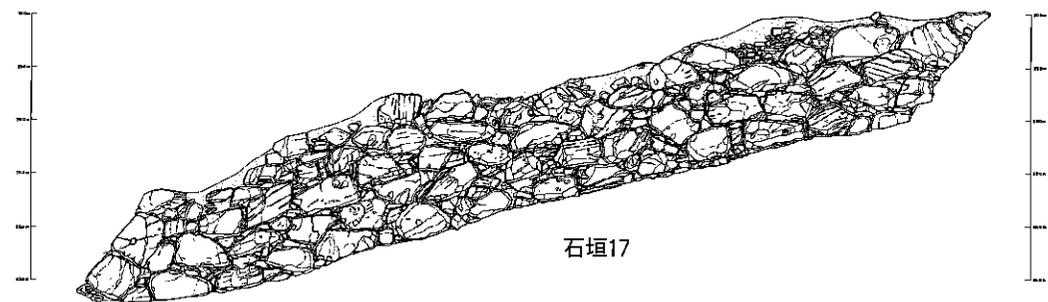
石垣14



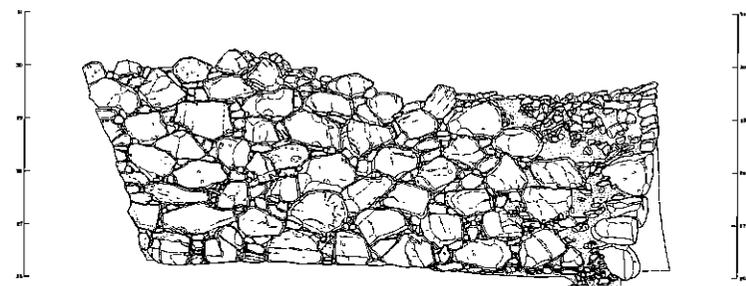
第4図 原城本丸石垣③



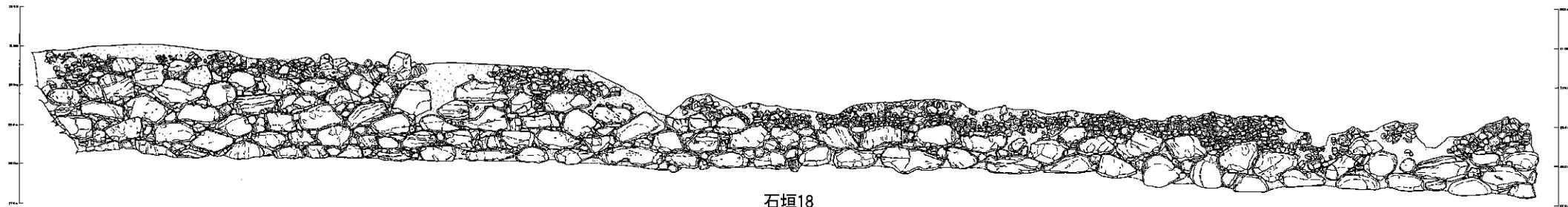
石垣16



石垣17

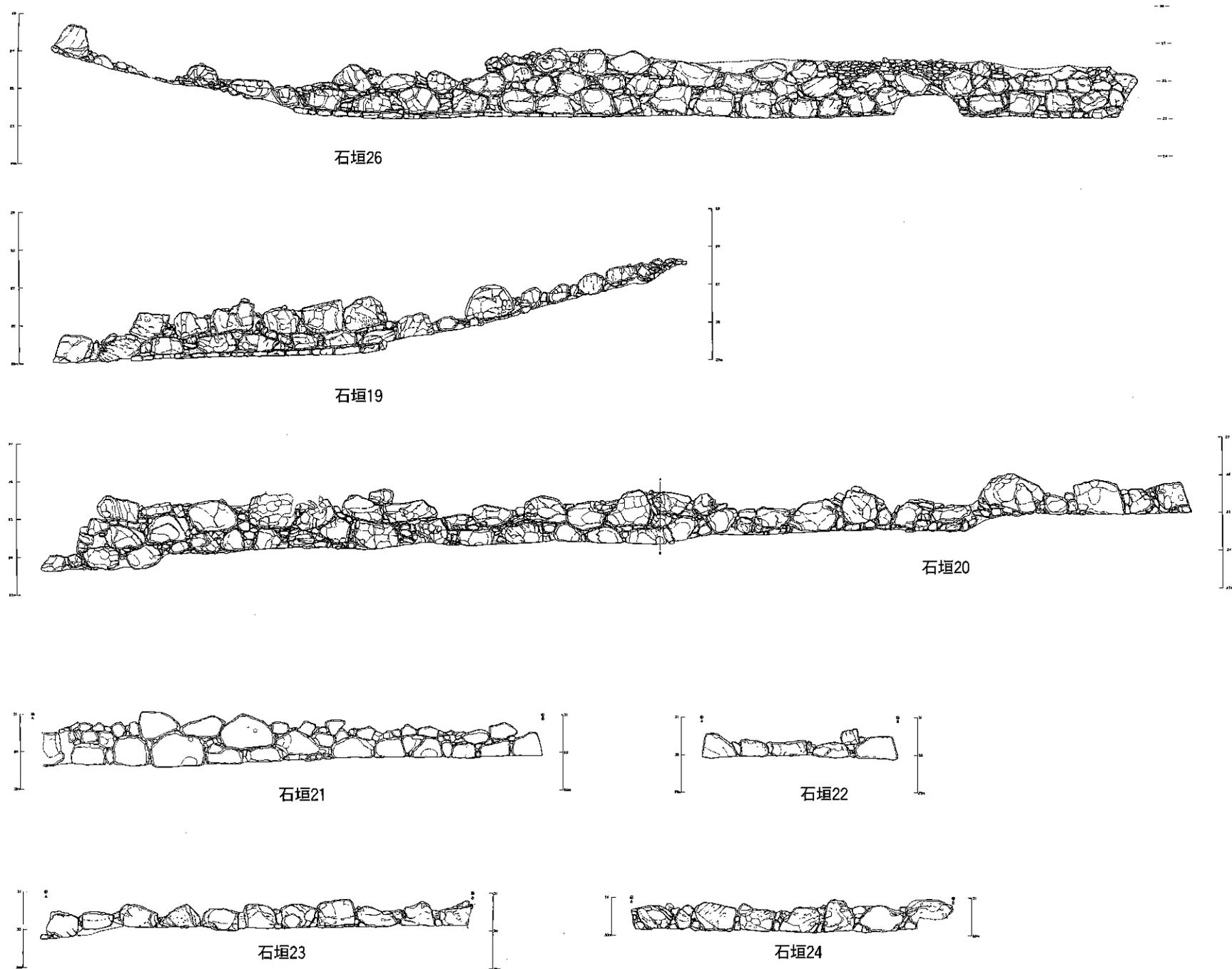


石垣15

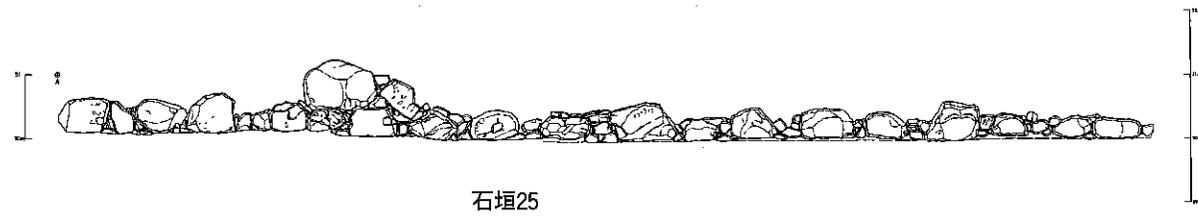


石垣18

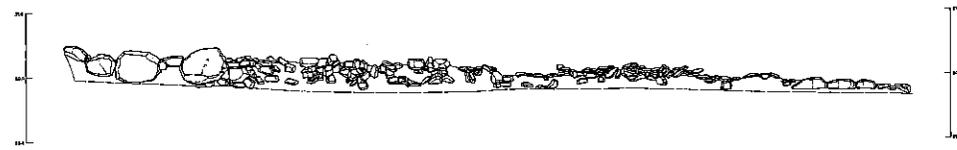
第5図 原城本丸石垣④



第6图 原城本丸石垣⑤



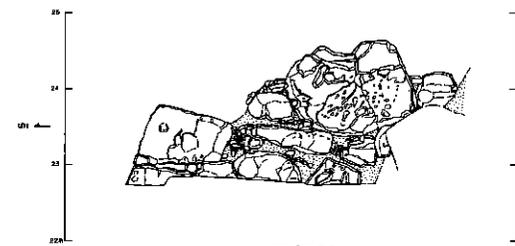
石垣25



石垣27



石垣28



石垣29

第7圖 原城本丸石垣⑥



本丸櫓台石垣遠景



石垣11・「鏡石」—
本丸正門構成石垣



石垣29・「鏡石」—
本丸正門構成石垣

表1 原城本丸 散在石垣石の岩質

石垣 No.	石垣石の場所	デイサイト D	玄武岩 B	複輝石 安山岩 A	古第三紀 砂岩・礫岩 P	イグニ ブライ ト O	蛇紋岩・ 花崗岩 C	石垣石総数
1	本丸池尻口門	4	18					22
2	石垣9の横	19	4					23
3	石垣10の前面	13	26		1			40
4	石垣10の上段	22	42		9			73
5	石垣11の上段	5	38					43
6	本丸大榭形虎口内部空間南端	27	8			2		37
7	本丸大榭形虎口内部空間	22	4					26
8	石垣20の上段	20	10					30
9	石垣26の前面	58	16					74
10	石垣13の上段	19						19
11	石垣13の前面	32	7					39
12	石垣14の前面	16	1					17
13	石垣13の下段畑石積	15						15
14	石垣14の下段石積	24	12					36
15	石垣13の下段-(1)	4	16		4			24
16	石垣13の下段-(2)	8	12					20
17	石垣13の下段-(3)	9	5	1				15
18	石垣16の下段	148	71	1	2			222
19	石垣18の下段	144	71	3	2			220
散在石材総数		609	361	5	18	2		995
本丸築石総数		1,532	775	39	19	2	2	2,369
総数		2,141	1,136	44	37	4	2	3,364
岩質 (%)		63.64	33.77	1.30	1.11	0.12	0.06	100.00

表2 原城本丸 築石の岩質

石垣	デイサイト D	玄武岩 B	複輝石安山 A	古第三紀 砂岩・礫岩 P	イグニ ブライ ト O	蛇紋岩・ 花崗岩 C	石垣石総数
1	16	18					34
2	25	7	6				38
3	28	10	3				41
4	254	4	1				259
5	35		2				37
6	40						40
7	46	8	1	4			59
8	16	7					23
9	29	16	1				46
10	110	39	1				150
11	20	119	1	1	1		142
12	103	73	5	8		花1	190
13	38						38
14	103	149	3				255
15	83	21	3				107
16	114	34	3	3			154
17	60	64	2				126
18	102	29	5	1		蛇1	138
19	23	12					35
20	38	15					53
21	12						12
22	9						9
23	15						15
24	9						9
25	20	4					24
26	51	12					63
27	4	3					7
28	4	52	1	1	1		59
29	2	6	1				9
池尻口門階段踏石	3	21					24
石垣10の前石積	30	10		1			41
大榭形虎口雁木段(1)	85	15					100
大榭形虎口雁木段(2)	4	19					23
第二門階段踏石	1	8					9
築石総数	1,532	775	39	19	2	2	2,369
岩質(%)	64.67	32.70	1.65	0.80	0.09	0.09	100.00

第3節 原城の破却

原城の石垣の存在を確認できるのは、前述したとおり、本丸一帯のみに見られ、二の丸、三の丸においては畑化による旧地形の改変を考えてみても、近世城郭に共通する直線的かつ直角に折れ曲がる墨線がほとんど見受けられない。したがって、土づくりの城郭部分の三の丸にある大手門や、各曲輪などの出入口の部分に手を加えただけで、その他は自然の地形を活用している程度の土木レベルが推測できる。現段階では、本丸以外の地域に関しては、平成19年度、20年度において、三の丸地区の調査に入った。大手門の一部から石畳が検出されたが、各曲輪が本丸と同様石垣が地中に埋没している可能性は少ないと思われる。本丸に残る石垣で、地表に現れていない埋没石垣は、発掘調査である程度推定でき、原城本丸を取り囲む石垣の概要はおおよそ把握できている。

原城が城としての機能を停止した、すなわち破却の行為が及んだのが2回あったと考えられる。1回目の破却は、元和2年(1616)に大和五条(奈良県五条市)の領主、松倉重政が有馬氏に代わり日野江城主として入部し、森岳城(島原城)を築城した時期で、前年の元和元年(1615)に発令された一国一城令と同年発令の武家諸法度での城郭統制策が出された時期と考えられる。

ここでは原城本丸に残存する石垣遺構を、各部位ごとに見ていき、破却行為の実態の確認をしていく。

(1) 虎口石垣の崩壊状況

調査により検出した虎口は、現在4箇所確認できている。そのうちの2箇所は、本丸北側にある虎口空間帯に存在する虎口である本丸正門と第二門である。その他の2箇所は本丸東側にある虎口(池尻口門)と本丸門である。本丸池尻口門と本丸門に関しては本丸内部に直接とり付く虎口で、検出前は完全に埋められており、地表面観察では遺構の存在が確認できる状況ではなかった。本丸正門は、本丸北側の最初の出入口である大柵形虎口の最初の門で、外周を網羅する石垣は顕在していたが、内部空間は土砂に覆われており詳細は不明であった。

本丸池尻口門

本丸東端から検出した虎口で、虎口空間全面を袖石垣の築石や裏込め石、また、取り外された階段の踏石などの石材で充填し、その上から虎口全体を土で覆い隠すように埋められていた。

虎口前面は、本丸の高石垣である石垣4の築石面に沿って墨線が通り、開口部は完全に遮断されている状態であった。検出した虎口は、幅が東西に約6m、長さは南北に約12m、5段の階段を有する出入口で、階段の高低差は約2mを測る。階段の踏み台部分は上段から4段目までは幅約1.3mを測り、最下段の5段目は、幅約4.5mをとり幅広い平場部分を持つ。階段の踏石は取り壊され、4段目はほぼ残存しているが、その他の段においては、数石残る程度でほとんどが取り外されている状況である。平場部分両端には礎石を検出し、何らかの建物があったことが推測できる。

虎口を構成する石垣は、石垣1・2・3・4の4面からなり、築石は野面石あるいは粗割石を使用し、規格は不揃いで積み方は布目崩し積み技法である。

虎口正面両脇の隅角部は、大部分が破壊され角石は根石1石のみが残るだけで、上部の算木積み状況は不明である。築石面は、天端部分を取り壊され、根石とその上の数石が残存している。虎口正面

左側の石垣1は、東西に並び北に面した石垣であり、築石面は、ほとんどが根石を残すのみで、天端部分は完全に壊されており、築城当時の石垣高さは不明である。残存部の石垣は長さ約12mで一番高いところで約1.5mを測る。石垣東端は崖になっており自然崩壊のためか途中で消失している。虎口正面右側の石垣4は、本丸北面を形成する高さ5m以上を想定する高石垣と一体化した構築物である。虎口隅角部を含み、残存部は東西に並び長さ約50mで高さ約4.2mを測る。天端部は全て取り壊され、残存石垣の上部形状はノコギリ状になる。石垣下面は畑化により旧地形をかなり改変してあるが、調査により石垣4の下には犬走り状の土手があり、壊された石垣4の築石及び裏込め石などの石材で、犬走り状の土手も覆い隠すように埋め込まれていた。現況は土手部分も削平され、本丸地区を公園化する前まで畑として利用されていた。

本丸門

本丸の北側にある虎口空間帯で検出した、最も本丸寄りの虎口である。虎口空間を築石と裏込め石の石材と土砂で埋め尽くされた状態で検出した。虎口床面には瓦が大量にあり、また、多くの人骨と陶磁器も出土した。

検出した虎口は、本丸側から見て右側の石塁を張り出した、外柵形の出入口であることが判明した。張り出した石塁は幅約5mで、長さ約11mを測り、開口部の幅は約7.5mを測る。虎口内部床面に7個の礎石と礎石跡を1箇所検出した。礎石の配置から門は、東西に張り出した石塁から本丸側石塁に渡る櫓門形式とおもわれ、瓦もたくさん出土している事から、門は瓦葺の建物のようである。建築物としての門は、張り出した石塁の内側にあり正面に門の側面を見せた建ち位置である。虎口は開口部から中に約11m入り、右に折れ2段の階段で城内に入るプランである。虎口を構成する石垣は6面（石垣21・22・23・24・25・27）あり、すべてが根石のみで、天端までの高さは不明である。虎口外側の残存石垣21は、東西に並び北側に面している。東側は石垣7にすりつき長さ約20m、石垣22は、南北に並び長さ約10mで階段にすり付く。石垣25は、東西に並び石垣27と内隅部を構成する。虎口正面両脇の隅角石部は、大部分が破壊され角石は根石が1石残るだけで、上部の算木積み状況は不明である。

虎口階段部分は、かなり破壊されているが、幅約6m、2段の階段を検出した。階段は、石垣袖部に2段確認でき、踏石は1段目の両端に1石ずつ残り、2段目は東端に1石のみ残存している。階段中央部分は、踏石が取り外され大きな穴が掘られ、中には築石が3石と人骨が入り、その上から裏込め石などの石材と土砂で埋められていた。また、虎口正面で入口を塞ぐかのように、礎石外側にも築石と思われる石材が2石埋められている。

大柵形虎口

本丸北側にある虎口空間帯の、最初の出入口である大柵形の虎口である。調査前は、最初の門と二の門が推定できる場所の上を通過するような状態で、本丸内部に通じる道路があった。本来、城道である虎口内部空間は、調査前は花壇として利用されており、調査により下部構造が明らかになった。

本丸最初の門と推定した場所から「本丸正門」また大柵形虎口第二折部分からは「第二門」を検出した。

大枡形虎口は南北に長軸を取り約50m、虎口外周を網羅する石垣が、二の丸との間の濠に面した石垣11と、西側の馬場跡に面した石垣12に存在し、これらは調査以前から顕在していた石垣である。南側石垣13は、破壊による埋め込みと畑化による石積みで覆われていたが、調査により検出した。石垣11東端の隅角部も破壊石材などで埋められていたが、調査により検出した。石垣11西端の石垣12との隅角部は、道路のため崩落した隅角部の石材は取り除かれ、新しく積み直されており隅角部の確認はできない状態である。石垣12の南端の隅角部も破壊され埋め込まれている状態であったが、石垣13を検出した際に確認した。

本丸正門

本丸の北側にある虎口空間帯の最初の出入口で検出した、本丸に入る最初の虎口である。虎口空間を築石と裏込め石の石材と土砂で埋め尽くされた状態で検出した。虎口床面には瓦が大量にあり、また、多くの人骨と陶磁器も出土した。

検出した8基の礎石は門の柱を支えるためのものと考えられる。礎石列は、南北に2列、4基ずつの礎石が並ぶ。礎石から見た柱間は、1間が6尺5寸(1m97cm)の京間を基準とする桁行4間、梁行2間を測り、枡形を構成する石垣の間におさまる形となる。礎石の位置から、正面4間のうち中央2間には扉が入り、両脇各1間のいずれかにも扉が入っていた可能性がある。

礎石の規模は、大きなもので130cm×120cm、小さいもので80cm×80cmであるが、そのうち、正面の4基の礎石が大きい。石材は全て玄武岩である。

正面礎石列から7.5m内部に入り、西に向かって上る階段を検出した。破壊により殆どの踏み石は外されているが、一段目の6石が残る。二段目以降については破壊されスロープ状になる。階段の幅は南北に約9m、踏み面は約1m、蹴上げ高は約30cmである。建築物としての門を想定すると、東に門の開口部を向ける立ち位置になる。

ところで、一の門と二の門の間で、石材は使用せず土砂だけで埋め込まれた空間が存在した。本丸にある他の虎口では、虎口空間全体を築石などの石材で埋め尽くされていたのだが、この虎口内部空間においては、その例は見られなかった。

第二門

本丸の北側にある虎口空間帯の第二折れ部分の虎口である。虎口空間を築石と裏込め石の石材と土砂で埋め尽くされた状態で検出した。階段遺構、床面から玉砂利、溝遺構を検出し第2門である可能性が高くなった。階段遺構は、石垣19と石垣26に挟まれた平坦部分から東方向に上がる構造になる。破壊により殆どの踏み石は外されているが、一段目の5石がと二段目の2石の踏石が残る。階段の北側端、石垣19との間に幅約50cmの溝があるが上部分は破壊により不明である。城道としての空間は幅約6m、階段の幅は約4.7m、踏み面は約70cm、蹴上げ高は約20cmである。水路は、第二門を構成する両石垣に沿って造られ、両脇に断面が長方形の平たい石材を並べ溝の縁としている。

(2) 檜台石垣の崩壊状況

本丸西側の海に面した場所から検出した、石垣張り出し部で、石垣はほとんど取り壊され、さらに

土砂によってそれを覆い隠すように埋め尽くされていた。張り出し部を構成する石垣は、石垣15・16・17で、石垣15・16の隅角部は大きく取り壊され、角石の根石も取り壊している状況であった。石垣16・17の隅角部も壊されて、かろうじて角石2石を残しているが、上部分の算木積み状況は不明である。また、天端部分も大きく削り取られているため、築城当時の石垣の高さは不明である。石垣17で、内隅部から隅角部までは長さは約15mを測り、張り出し部石垣の幅は、片方の隅角部が消失しているが、築石面の延長で推測して測ると約30mある。残存する石垣の最長高は、石垣15の築石面で約4m、石垣16の築石面で約4m、石垣17の築石面で2mである。

(3) 本丸石垣隅角部の崩壊状況

本丸に残存する石垣の隅角部は、前述した虎口及び檜台石垣を含め、現在把握できている個所は16箇所存在する。そのほとんどが徹底的な破壊によるものと思われ、角石の1石及び2石のみを残すだけという残存状況である。

(4) 本丸石垣内隅部の崩壊状況

本丸石垣の内隅部は、檜台石垣内隅部を含め、現在把握できている個所は6箇所ある。石垣4以外の内隅部においては、内隅部を構成する石垣を取り壊し、築石と裏込め石の石材を投げ込み、その上から土をかけそこを覆い隠すように埋められた状況で検出した。破却の手順として、まず天端部分から築石を落とし、次に内側にある裏込め石を落とし込み、また、次の段に移るといった作業が行われたようである。石材堆積層の断面図からでも判るように、それぞれの石材が層を成して堆積している。また、埋め込まれている石材の他に、陶磁器及び瓦や人骨も多く含まれていた。

原城本丸石垣の崩壊状況の検討から、崩壊は自然的なものではなく人為的な破壊といえる。破却の際には石垣の隅角部が主に対象になるとされ、原城の隅角部は築石部より徹底的な破壊が及んでいる。破却の行為は重要な虎口の門や土塁の撤去、主要な掘りの埋め立て等を行うといった例があるが、原城の虎口では、内部が築石や裏込石などの石材や土砂で埋められており、その通行は完全に遮断されている。埋められている石材は他の場所からの持ち込みでなく、虎口を構成している石垣の築石及び裏込め石を利用していると思われる。虎口内部空間いっぱい埋められた石材の在り方は、ただランダムに投げ込まれた様子ではなく、埋められた石材の上部はならされ、敷き並べたような状態であった。また、城内にとり付く本丸池尻口門や本丸門内部にある階段で、本丸門では、中央部が大きく掘り込まれ、築石が埋め込まれていたが、本丸池尻口門では、踏石は取り外されてはいたが掘り込みは無かった。これらのことは、虎口という城郭では特別な場所を破壊する際、特別な方法で破壊する意図が存在すると思われる。また、同じ城内に取り付く虎口の階段で、破壊の状況が違うのは、象徴的な部分の破壊という意味とは別に、「鳥原の乱」の特別な意味での破壊が存在すると思われる。建築物については不明であるが、虎口内部や石垣内隅部に大量の瓦が出土したことで、破却時にはやはり建築物も存在しその全てが破壊されたものと思われる。

海側に面した檜台石垣は、壊されて堆積している石材も覆い隠すように埋められていた。破却の際には、城下町側、山麓部から目立った石垣が意図的に破壊されているが、原城の場合も檜台石垣の上部建築物は天守相当の檜が立っていた可能性があり、海から見えるこの場所はとことん見えなくなる

ように破却の行為がおよんでいる。しかし、重要な虎口などは徹底的に破壊されていたが、海側からは見えない、北側にある本丸の正面玄関として重要な、本丸正門を構成する石垣は、海に面した石垣のように覆い隠されることはなく、周知の石垣として存在していた。

また、本丸大柵形虎口内面の石垣や石垣10・13・14の一部分で、壊した築石を石垣前面に平行して並べた様な状態を確認した。石垣と築石の間はある程度の空間があり、たくさんの石材や土砂が充填されていた。その石を境に石材が存在しないことから、これらの行為は、石垣破壊の時に、裏込め石や土砂などの堆積物の崩れを防止するための作業と思われる。

さて、原城の破却行為を時期的にとらえることで、元和期と寛永期との破却の方法が確認できると思われるが、発掘調査で見える原城の破壊の状態は、すべて島原の乱後の破却によるものが大きく、前期段階における破却行為の実態は確認できない。調査によって検出した各部位における破壊の状況は前項で述べたが、破壊され埋め込まれている石材及び土砂の下からは大量の人骨が出土している。つまり、島原の乱後の現地処理において、周りに散乱していた一揆軍の死者を一緒に埋め込んだものと考えられる。破却面最下部からはこの人骨や瓦また、焦土など確認でき、大きな破却行為は島原の乱後に行われたものであることが伺える。

通説では、松倉氏の森岳城築城の際、原城及び日野江城を破壊して石垣などの石材を持ち去り、森岳城の石垣に使用したといわれていたが、調査で検出した石垣遺構や崩壊している築石などの石材は、破却の際の埋め込み用として使っているのが確認でき、森岳城築城時の石材の持ち去りは全く否定できる。また、最近科学的な構成岩石の調査によって、本丸にある全ての石材の構成岩石を調べ産地を特定した。同時に森岳城(島原城)の石材も調査した結果、両城の石材は全く別の石材であることが判明した。このことによっても、島原城の築城に伴う原城石材の使用は無かったことが裏付けられた。

島原の乱の時、廃城となった原城に一揆軍が立て籠った際に、非常に短期間で修復したという記録がある。その段階での原城は廃城となっているはずなのだが、どの程度の破却在前期に行なわれていたのかが問題になり、通常の破却行為が及んでいれば、当然重要である門や石垣など壊されているはずである。現況で見られるような破却行為がその時点で行なわれているならば、短期間で修復というのは不可能に近いのではないと思われる。つまり、松倉氏段階での破却はかなり手抜きで行ったと考えられ、発掘調査でこの時期の破却行為は確認できなかったが、外から見える施設だけを主に壊していたと思われる。外からや海からは余り見えない、本丸北側の大柵形虎口空間帯にある門などの施設やその他の建築物など、この時点での破壊はあまり及んでいなかったと考えられる。原城が軍事的に使用不可能なぐらいの破壊が及んでいれば、視覚的にも城郭としての体裁は見られず、一見山と化した城を一揆軍が「立て籠りの城」に選ぶことも無かったと思われる。老朽化さえしているものの簡単に修理できる状態の城ととらえることができるのである。一揆軍は兵船、軍船を壊して塀を作ったという資料があるのは、その資材を利用して塀を作る程度で城郭の機能は十分復元できたと考えられる。

幕府を震撼させ、「鎖国」という日本の歴史を大きく変えさせた「島原の乱」は、元和一国一城によって破却された諸国大名の旧支城を、老中松平信綱の指令によって、さらに徹底的に破却させられた。これは、原城のような古城の使用を防止することが幕府の目的であり、石垣・堀を徹底的に壊すことであった。

(松本)

第4節 陶磁器・土器類の組成について

過去に原城跡の調査においては、数万点におよぶ遺物が出土している。その大部分を占めるのは貿易品を含めた陶磁器類である。これら陶磁器の年代は、殆どのものが16世紀末から17世紀前半という比較的限定された期間に属する^(註1)。この点は遺物そのものの特徴だけでなく、文献史料や遺構の特徴からも補完され得る。貿易陶磁について言えば、該期において原城跡と同程度ないし、それ以上の量を出土する遺跡は決して多くない。大阪城、大友氏関連遺跡、長崎など幾つか例は挙げられるものの、数としては限られる。遺跡の性質上、キリシタン遺物や「島原天草の乱」の痕跡、石垣などの遺構群が注目されがちであるが、原城跡から出土する陶磁器類が年代幅の限定される良好な資料群であることにも十分な配慮をし、これらの基礎的な整理と検討を進めること、また広く提示していく事は不可欠な作業である。ただ、今回の作業においては、過去に蓄積された遺物量が膨大であることや作業期間との兼ね合いから、産地の大別と器種に基づく雑駁な集計結果を提示するに留まっている。また集計の対象は全出土品に及ばず、平成4年度～平成13年度までの出土資料19,349点を取り扱った。本来なら全年度の出土品を対象とし、細かな年代差もフォローしていく必要があることは言うまでもなく、また遺物の分類集計にあたっては、同一器種であっても器形や文様に基づく細分基準が必要であるだろう。こうした点については、さらなる検討課題として挙げておきたい。今回の作業はむしろ、そうした課題を解決していくうえで、大まかな全体像を予察するための作業として理解して頂ければ幸いである。なお、集計作業に際して小破片も対象として扱っており、本来同一個体であるものを重複してカウントしている可能性があることを否定できない。しかし、サンプル点数がかなり多い事と、今回の作業自体を大まかな全体傾向を把握するためのものとして位置付けているため、今回の作業目的に限れば、結果に対して重大な影響は及ばさないと考えている。以下、集計作業の結果について概説する。

・貿易品と国産品の割合

今回集計作業の対象とした中近世陶磁器および土器類のうち、貿易品の総点数は2,818点、一方の国産品は16,531点であり、合計では19,349点である。割合にすると貿易品が14.6%、国産品が85.4%である。磁器および陶器の別に見た場合であるが、集計した磁器3,659点のうち貿易品の点数は2,515点、国産品は1,144点である。それぞれが占める割合は68.7%、31.3%であり、原城跡で出土する磁器のうち7割近くを貿易品が占め、残りを国産品が占めるという傾向が読み取れる。陶器については貿易品が303点あり、殆どは系統のよく判らない壺の破片であるが、李朝系の皿が10点、中国系の壺が10点、ベトナム系の壺が21点と小さな纏まりをもつ。一方の国産品は14,708点であり、陶器の合計は15,011点である。陶器に占める比率としては、貿易品が2.0%、国産品が98.0%である。磁器と陶器では様相が大きく異なり、また陶器においては国産品の占める割合が圧倒的に多いことが指摘される。そうした背景については、後の方で検討をおこなっている。

・器種の割合

貿易磁器を器種別にみた場合、群を抜いて多いのは碗・皿類である。芙蓉手皿まで含めた合計点数は1,648点であり、器種不明品670点を除外した際の割合は89.3%に及ぶ。

国産品については、まとまった点数のある肥前系陶器を参考に器種組成をみておきたい。最も多いのは甕で2,200点である。ほかの器種についても言えるが、大型品の破碎したものを重複してカウ

表1 貿易陶磁器類集計表

大別・生産地・系統など		器種													小計	
		碗	皿 (芙蓉手除く)	芙蓉手皿	水滴	急須	小盃	瓶	香炉	香合	小壺	壺	甕	鉢類		その他・不明
磁器類	青磁	龍泉窯	2	5				2	4						1	14
		景德鎮	8	3					1							12
		漳州窯系	2					1							4	7
		中国系	7									1				8
		産地不明	15	3				1	4						38	61
	白磁	中国系 (景德鎮・漳州窯など)	37	48		1		16	13			2	2		57	176
		李朝系	2	9												11
		産地不明	98	54		5		31	26				6		305	525
	青花	景德鎮	266	588	6		3	22	33		1		7		140	1,067
		漳州窯系	136	267	42			4					3		91	543
		福建系	4	5				1								10
		産地不明	3												3	6
	色絵	景德鎮	2	7											10	19
		漳州窯系		7											4	11
		福建・広東系		3					1							4
	青白磁	17	2				3							17	39	
	瑠璃				1	1										2
	陶器類・その他	中国	1	1								10		1		13
		李朝系		10					1							11
		台湾										1				1
ベトナム								2				21			23	
タイ											4		3		7	
東南アジア系		2									4			17	23	
その他・不明											9	197	8	11	225	
合計	602	1,012	48	7	4	77	80	9	1	11	256	8	5	698	2,818	

トしている可能性は十分にある。ただ、そうした条件を差し引いても多い出土点数と言える。次いで多いのは皿であり、1,862点を数える。このほか、碗類(759点)、挿鉢(823点)、鉢(605点)、壺(1,208点)、瓶(1,275点)などが安定した出土量となっている。貿易磁器と比べた場合、極端な器種の偏りがなく、バランスが取れているという点の特徴と言えるだろう。

・産地と種別について

貿易磁器類を産地と種別でみた場合、景德鎮系の青花が1,067点と最も多く、漳州窯系の青花が543点とこれに次いで多い^(註2)。器種が碗・皿に偏る点は先述のとおりである。産地の判る国産陶器類では、肥前系のものが大多数であり、ほかのものは僅かである。今回取り扱えなかった以後の年度分において、肥前地域以外の資料も追加されているが、量的にはやはり少なく、状況としては変わらない。

表2 国産陶磁器・土器類集計表

大別	器種																小計		
	坏	碗類	皿類				鉢類				甕	壺	瓶	水差	火入れ	香炉		その他 不明	
			皿	大皿	角皿	不明	大鉢	片口鉢	楕鉢	鉢									
磁器類	青磁		1													2		3	
	白磁		2	1													1	4	
	染付	16	481	245		1	5						81	2		1	298	1,130	
	色絵		1	4								1						1	7
陶器類	肥前系	5	759	1,862	201		642	19	34	823	605	2,200	1,208	1,275		16	6	5,028	14,683
	備前系									1		1	5	3				9	19
	瀬戸美濃系			5										1					6
土器類	土師質土器	1		132							6	6	5					138	288
	須恵質土器	1								4	11	9	2					9	36
	瓦質土器		1	1						13	61	110	38			5		126	355
合計	23	1,245	2,250	201	1	647	19	34	841	683	2,326	1,259	1,360	2	21	9	5,610	16,531	

・まとめ

以上に述べた集計作業の結果について、簡単な整理を行っておきたい。陶磁器および土器類といった日常容器、雑器全体に占める貿易品の比率はおよそ15%である。遺物の総点数が多いことや、時代背景を考慮するなら、この割合は少ないというより、むしろ安定した出土量と評価できる。イエズス会を通じ、海外との繋がりがあった有馬氏の城郭としての性格が窺える。

貿易品か国産品によって、陶器と磁器の割合が大きく異なる点であるが、原城の存続期間と肥前陶磁器の生産開始時の状況、あるいは当時の肥前地方における有馬氏の状態などとの関係があるだろう。原城本丸の築城が、文禄・慶長の役に参加したことによって習得された近世的技術によることは、これまでの調査や研究で明らかとなっており、イエズス会の記録等からは慶長四年（1599）から慶長九年（1604）頃の年代観が与えられている（松本2004）。一方、肥前陶器の生産であるが、同じ文禄・慶長の役によって日本へ連れ帰られた朝鮮陶工らの手によって16世紀末に開始したとされる。有馬氏は戦国期において竜造寺氏の圧迫を受け一時衰退するが、天正十二年（1584）の沖田駿の戦いに勝利したことで勢力を盛り返す。また、その数年後には秀吉の九州平定に伴って本領を安堵され、関ヶ原においても後に東軍へついた事から家康によって本領を安堵される。つまり、原城の築城と肥前陶器の生産開始が、期をほぼ同じくし、また近隣の生産地からの安定供給を受けられる環境が整っていたことが、原城跡の出土遺物にみる肥前陶器の圧倒的な多さに反映されているのではないかと考えられる。

一方の肥前磁器であるが、本格的な生産開始が陶器よりも遅れる。大橋康二氏の論説によれば、肥前での磁器生産は1610年頃からの開始とされる^(註3)。これよりほどなく、原城跡は元和四年（1618）に、森岳城の築城に伴って一国一城令により日野江城とともに廃城となっている。また時期を少し遡れば、慶長十四年（1609）の岡本大八事件や、慶長十九年（1614）における直純の日向転封といった出来事もあり、肥前磁器の生産開始期というのは有馬氏にとっての凋落期でもある。つまり原城跡が政治的に機能した年代と、肥前磁器の生産された年代の重複期間は、肥前陶器に比べるとかなり短いと理解される。集計結果において肥前磁器が陶器に比してかなり少ないという状況は、以上のような

背景をある程度反映していると言えるだろう。肥前磁器の倍以上の出土量がある貿易磁器については、肥前磁器の生産開始以前のもが主体をなすであろうと想定しているが、先に述べたとおり今回の集計作業は細かな遺物の年代差までフォローしきれていないので予定調和的な断定は避けておく。あらためて検証する機会が得られればと考えている。

貿易陶磁器にみる磁器碗および皿の多さであるが、単純に有馬氏の嗜好性とは結び付けられない。日常容器、雑器の組成を考えた場合、個人に配膳される性質の碗・皿がどうしても多くなるであろうし、小型で積重ねが可能な碗・皿などの器種が、大型の貯蔵容器などより輸送に適するという側面もみておいた方がよいだろう。いずれにしても有馬氏は、中世末以降に陶磁器の一大産地となる肥前の一隅にあり、また海外とも通じた。近隣の生産地から調達可能なものについては、基本的にこれに依拠し、不足するものについては中国系を中心とした外来品などによって補うといった選択制と合理性が、出土資料の量的分布から垣間見える。

(橋本・内山・伊藤)

※ 集計作業は、橋本の補助を受ける形で主に内山貴有（文化財調査員）が行った。作業分担の都合上、總めの執筆は伊藤が行うこととなったが、集計作業の労によるところが大部分であり連名とさせて頂いている。原城跡から出土する陶磁器は産地や器種がバラエティに富んでおり、特に破片資料の判別において幾分かの誤りが含まれる可能性を全くは否定できないが、ご寛恕願えれば幸いである。なお器種や産地の判別については、主として過去の原城跡の調査報告書3冊を含む以下の文献に依拠した。

- ・小野正敏 1982「15, 16世紀の染付碗, 皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- ・九州陶磁近世学会 編 2000『九州陶磁の編年』
- ・松本慎二 編 1996『原城跡』南有馬町文化財調査報告書第2集 南有馬町教育委員会
- ・松本慎二 編 2004『原城跡Ⅱ』南有馬町文化財調査報告書第3集 南有馬町教育委員会
- ・松本慎二 編 2006『原城跡Ⅲ』南有馬町文化財調査報告書第4集 南有馬町教育委員会

- 註1 龍泉窯系青磁などに、明らかに原城本丸の築城より時期を遡るものが一部含まれるが、全体量に比してごく微量であり、あくまで集計作業としてこれらも含めている。
- 註2 白磁類の破片資料は特に判別が難しく、産地不明として処理したのも500点余りあるが、調査担当の松本慎二氏によると、胎土の特徴から景德鎮系と見なせるものが多いとの教示を得ている。
- 註3 大橋康二 2000「九州陶磁概論」九州近世陶磁学会 編『九州陶磁の編年』

〔補記〕

註1の内容を含め、今回の作業結果について脱稿後に松本氏と論議しているが、遺物の組成や社会背景などについては、松本氏からも概ね合意し得るものであるとの見解を得ている。話題は、原城の本城であった日野江城においては土師器の出土が圧倒的に多く、陶磁器があまり出土しないという対比関係に及んだが、原城に多く出土する陶磁器は「島原天草の乱」時における一揆勢の分捕り品が含まれることも想定されるため、原城の政治的機能との関連で捉える場合には注意も必要であるとの教示を頂いている。この点は確かに原城を正しく理解するうえで重要な指摘である。なお、該期に有馬地域に存した陶磁器という少し大きめの枠組みで捉えるならば、今回の作業結果に与える影響はそれほど大きなものではないとも考えている。

第5節 瓦

はじめに

多年にわたる調査のため、瓦の総数については集計が困難であるが、出土量はおおよそ一万点ほどに上ると思われる。今回の報告を提出するにあたっては、軒丸瓦、軒平瓦を主体として1000点余りを点検した。

出土した瓦は、軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、道具瓦である。軒丸瓦・軒平瓦については瓦当の文様構成について分類配列したが、軒丸瓦・軒平瓦のセット関係や瓦の新旧を解明するまでには至っていない。なお各分類の中で記した出土点数は、1999～2006年における出土数である。

a. 軒丸瓦

軒丸瓦の瓦当文様は花十字文瓦4点を除き、すべて巴文であった。また、これまでに発行された報告書に合わせ、尾部の方向が右に向くものを「右巻き」し、左に向くものを「左巻き」として大分類した。

I類 右巻きの巴文を持つ軒丸瓦をI類とした。

I a類 (第1図1, 2) 現在までに原城から出土した軒丸瓦の中で最大と思われる類で、復元径は約18cmである。巴の頭部は角張り、断面が台形となる。珠文数は16。全体に大ぶりでシャープな作りである。断片を含め、4点を確認している。

1は77T出土で、丸瓦との接合部で破損し、正面に風化を受けている。胎土はやや粗く石英粒他の砂粒を多く含む。焼成良く、炭素を吸着し黒い。断面は灰白色である。2は50T出土で、瓦当下方の断片である。焼成良く硬質で、風化の程度は低い。裏面に指紋痕が残り、周縁に鉄分の付着が認められる。

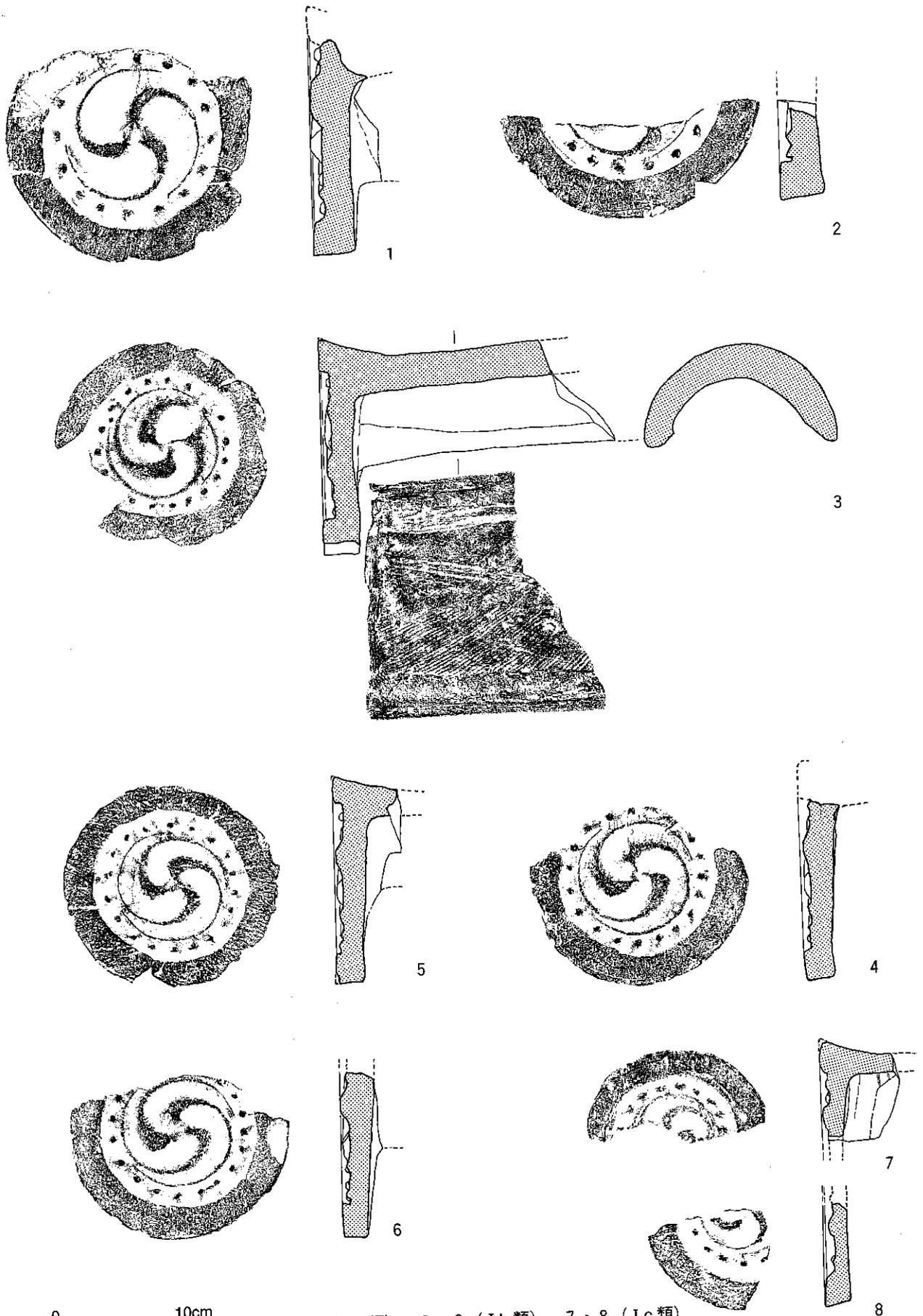
I b類 (第1図3～6) 径は15～16cmであり、巴の頭部は太く、断面は台形である。珠文数は19。

3は41T出土。瓦当面径は15.8cmでやや風化している。胎土は細かいが、石英他の砂粒を含む。焼成良く黒色である。断面は灰白色を呈する。丸瓦部凹面に「コビキA」痕と布目痕が認められる。なおこの瓦は既報告の瓦当部破片と丸瓦部が接合したものである^(註)。4は41T出土で丸瓦部との接合部で剥がれている。瓦当面の復元径は16cm。胎土はやや粗く角閃石等の砂粒や小石を含む。5は77T出土。瓦当面がほぼ完存し、珠文19個を数えることができる。瓦当面径は15.2cm。正面はかなり風化しザラついている。胎土は精良で、角閃石を含む。焼成良く、表面は黒色、断面は灰白色である。6は77T出土。胎土、焼成等5に同じ。

I c類 (第1図7, 8) I類の中で巴の頭部が丸く、圏線をもつタイプをC類とした。三つ巴は均一の大きさではなく、それぞれ違う大きさで構成されている可能性がある。断片を含め9点出土している。瓦当面の復元径は14～15cm。珠文数は20個前後と推定される。

7は56T出土。胎土精良で、白雲母他細砂を含んでいる。焼成良く、表面は灰黒色、断面は灰白色である。丸瓦部凹面に「コビキB」痕が残っている。正面の風化が著しい。8は79T出土。胎土良く、雑多な細砂を含む。外面は部分的に黒化し、断面は灰色である。全体に風化しており、正面の風化が進んでいる。

(註) 南有馬町教育委員会 1999「原城跡Ⅱ」p88 第82図-4



1. 2 (Ia類) 3~6 (Ib類) 7・8 (Ic類)

第1図 軒丸瓦①

Ⅱ類 左巻きの巴文を持つ軒丸瓦をⅡ類とした。この類は文様の種類が多く、a～eに細分した。さらにその下に1～3の数字を付したのものもある。a類は圏線を持たないグループであり、b～e類は圏線を持つグループである。なおこの分類は暫定的であり、丸瓦部との接合の促進や、他城出土の瓦との比較検討によって、より合理的な分類が行われることを期待したい。

Ⅱa1類 (第2図9～11) 瓦当面径約12.5cmで、頭部の丸い均整のとれた巴文を持つ類であり、圏線を持たない。珠文数は13個と推定される。この類は「日野江城」出土の主要な軒丸瓦と同範である可能性が極めて高く、珠文数はそれに従った^(註)。但し、原城からの出土例は少なく、断片を含めて6点余りを確認しているに過ぎない。「コビキ」については原城例では不明であるが、「日野江城」例では「コビキA」である。

9は78T出土。丸瓦との接合部で破損している。胎土良く、石英等の砂粒を含む。焼成良好で、外面は黒色、断面は灰色～黄土色を呈する。10・11は拓図のみ掲載。10は41T、11は43Tからの出土である。

(註) 北有馬町教育委員会 2005「日野江城跡」p70 第40図18参照

Ⅱa2類 (第2図12～14) 巴の形状はa類に近いが、珠文数は15個とそれよりも多い。出土例は5点と少ないが、完形品が含まれている。

12は77T出土。略完形である。瓦当面径は13.1～13.4cm。全長25.7cm、玉縁部を除く長さは22.8cmである。丸瓦部幅は断面図作成部分で12cm程度。固定用の穴が開けられているが、瓦当面に向かって中心よりやや左にずれている。凹面には「コビキB」痕と僅かな布目痕が残る。胎土は精良で、石英粒、雲母を多く含む。焼成はやや甘く、軟質で灰色を呈する。13は58T出土。胎土に、光沢を感じられるくらいの雲母を含んでいる。柔らかい焼成である。14は61T出土。全体に風化が進んでいる。胎土に石英粒、雲母を含み、柔らかい焼成である。復元瓦当面径は13.5cm。

Ⅱb1類 (第2図15) 巴の頭部には丸みがある。尾は長く引き、互いに接近して圏線に繋がる。1点のみの出土で、全体像は不明。

15は77T出土。瓦当面の復元径は約15cm。珠文数は24個程度と推定される。周縁幅は2.6cmと広い。胎土に石英粒を含む。焼成は良好で、外面は灰黒色～灰色、断面は灰色である。

Ⅱb2類 (第2図16・17) (図版92-16・17) 巴の頭部は丸い。尾部は互いに接近せず、空間の多い文様構成となっている。Ⅱa2類の巴に似るが、圏線の有無に違いがある。

16は石垣14からの出土。瓦当面の復元径は13.5～14cm。胎土はやや粗く、雲母、石英粒等が観察される。焼成良く、外面は灰黒色を呈し、断面は灰色である。全体に作風が荒い。17は50T出土。丸瓦との接着部で剥がれている。瓦当面の復元径は13.5cm。珠文数は11個と推定される。胎土に雲母、石英粒等の砂粒を含む。焼成温度が低いと思われ、軟質である。外面は灰黒色、断面は灰色である。

Ⅱb2'類 (第2図18) Ⅱb2類の範を再刻したもののように見えたので、暫定的に「'」を付けて表示した。

18は80T出土。巴文、珠文ともに彫りが浅い。復元瓦当面径は約14cm。珠文数は14～15個と推定される。胎土に雲母、石英粒を含む。焼成は甘く軟質である。外面は黒色、断面は灰色を呈する。断片1点のみの出土であり、出土点数が増えると新しい分類が検討されるべき資料であろう。なお型式別

集計ではⅡb2類に含めている。

Ⅱc類 (第3図19~23) 最も出土量が多いと推定されるタイプである。巴頭部の先端が少し巻き込まれて細く尖る。圏線があり、珠文数は11個。瓦当面径は約15cmである。丸瓦部凹面には、「コビキB」痕が残る。出土数が多いため、珠文数や径の違いで細分化される可能性も残っている。

19は15T出土。既出資料^(註)の実測図を再トレースしたものである。全長31.2cm、玉縁部を除く長さ27cm。丸瓦部幅14.4cm、高さ6.9cmである。瓦当部の下半分を欠失する。胎土に角閃石他の砂粒を含む。焼成良く、外面断面ともに灰白色である。丸瓦部凹面に「コビキB」痕と布目跡が残る。瓦当部正面の風化著しい。20は77T出土。瓦当面に風化が認められる。径は15cm。縦方向に深いヒビが入る。周縁幅は1.8~2cm。珠文の1個が剥がれている。丸瓦部凹面には、「コビキB」痕と指跡が残る。また、撚り紐痕をなで消した形跡がある。胎土はやや粗く、石英、角閃石他の砂粒を含む。焼成良く、外面は黒色、断面は灰白色である。荒い作行きで、重く感じられる。21は77T出土。正面に風化を受けている。瓦当面径は14.4~14.6cm。丸瓦部凹面に「コビキB」痕、布目痕が残る。胎土はやや粗く、石英他砂粒を多く含む。焼成良く灰色~灰黒色を呈する。22は本丸虎口出土。荒い作風である。瓦当面の風化が著しい。径は15.2cm。丸瓦部凹面に「コビキB」痕が残る。胎土はやや粗く、角閃石他の砂粒を含む。焼成良く、外面は黒色、断面は灰白色である。23は80T出土。正面に風化を受けている。瓦当面に木目が見えかかっており、範の磨耗が進んだ頃の製品と思われる。胎土に石英等の砂粒を含む。焼成良く、外面は黒色、断面は黄みを帯びた灰色である。

(註) 南有馬町教育委員会 1996「原城跡」p86 第54図-9

Ⅱd類 (第3図24・25) 圏線を持つ巴文であるが、珠文が無い類である。巴の形状はⅡc類に似ている。

24は63T出土。瓦当面の風化が進み、文様が消えかかっている。瓦当面径は14.7cm。周縁幅は1.5~1.7cm。胎土に石英等の砂粒を含む。焼成は良いが、風化のため当初の色調は不明。断面は薄茶色であるが、これは土壤の染み込みによると思われる。コビキ等不明。25は77T出土。全体に風化しており、表面がほとんど消失している。焼成当時は灰黒色であったと推定される。断面の色は薄茶色である。瓦当面の復元径は13.5cm。周縁幅は1.7cmである。

Ⅱe類 圏線を持つ巴文のうち頭部の巻き込みが強く、「唐草文」を思わせる形態のものをe類とした。さらに巴頭部の差異によって、1~3に細分している。

Ⅱe1類 (第4図26) この類の巴の頭部は丸く、尾部及び圏線は細い。1点のみの例示。

26は77T出土。瓦当面の復元径は15.5~16cm。周縁幅は1.4cm。珠文数は15~16個と推定される。胎土はやや粗く、石英等の砂粒、小石を含んでいる。焼成は良好で、硬質。外面は灰黒色、断面は灰色。丁寧な作りである。

Ⅱe1'類 (第4図27) 巴文はe1類と見分けがつかないが、約10%縮小して作られていると思われるので、「'」付けて別分類とした。

27は62T出土。瓦当面の復元径は、約14cm、周縁幅、1.5cm。珠文数は12~13個と推定される。胎土はやや粗く、石英粒、角閃石等の砂粒を含む。焼成良く、外面は黒色、断面は灰色を呈する。シャープな作りである。これも1点のみの出土。

Ⅱ e 2類 (第4図28・29) この類の圏線は太く、巴は幅広で低平である。瓦当面の径は約16cm。珠文数は8個である。13個の出土を確認している。

28は10T出土。再掲資料である(註)。瓦当部正面に風化を受けている。丸瓦部凹面に「コビキB」痕が認められる。胎土は粗く、石英他大粒の砂を多く含む。焼成良く、灰色。瓦当面径は16.2~16.5cm。文様面に木目が見える。29は77T出土。焼成良く、表面は灰黒色、断面は灰色である。胎土はやや粗く、石英、角閃石他の砂粒を多く含んでいる。周縁幅1.8cm。

(註4) 南有馬町教育委員会 1996「原城跡」p85 第53図-2

Ⅱ e 3類 (第4図30~33) 圏線は細く、巴の頭部が尖るタイプであり、Ⅱ c類について検出量が多かった軒丸瓦である。瓦当文様を構成する3個の巴が均一の大きさではなく、大・中・小となっているのも特徴の一つである。瓦当面径は16cm程度。珠文数は13個である。「コビキB」。

30は77T出土。瓦当面径は15cm。周縁幅は1.4~1.6cmで木目が観察される。胎土やや粗く、石英、角閃石等の砂粒の他、2mm~5mmの小石を含んでいる。焼成は良好。内外とも灰白色となっている。丸瓦部凹面に「コビキB」痕、布目根が残る。また、断面半円形の工具で粘土掻き取った跡も見えるが、後出の丸瓦の一部にも同様の工具痕を残すものがある。31は77T出土。瓦当の復元径は16cm。周縁幅は1.7cm。胎土やや粗く、石英等の砂粒を多く含む。焼成良好であるが、外面が黄土色に変色しているように見える。断面は薄い灰色を呈する。32は56T出土。瓦当面の復元径は、15.5cm。文様面に木目痕が見える。胎土はやや粗く、石英、角閃石等の砂粒や3mm程度の小石も含んでいる。焼成良く硬質である。外面は灰黒色、断面は灰色である。33は再掲資料である(註)。1T出土。全体の風化が進んでいる。瓦当面径は14.3~14.8cm。胎土粗く、石英他の砂粒を多く含む。焼成はやや悪く、軟質である。内外とも灰色。

(註) 南有馬町教育委員会 1996「原城跡」p85 第53図-3

Ⅲ類 (第4図34~37) 花十字文の瓦当をⅢ類とした。4点を確認している。

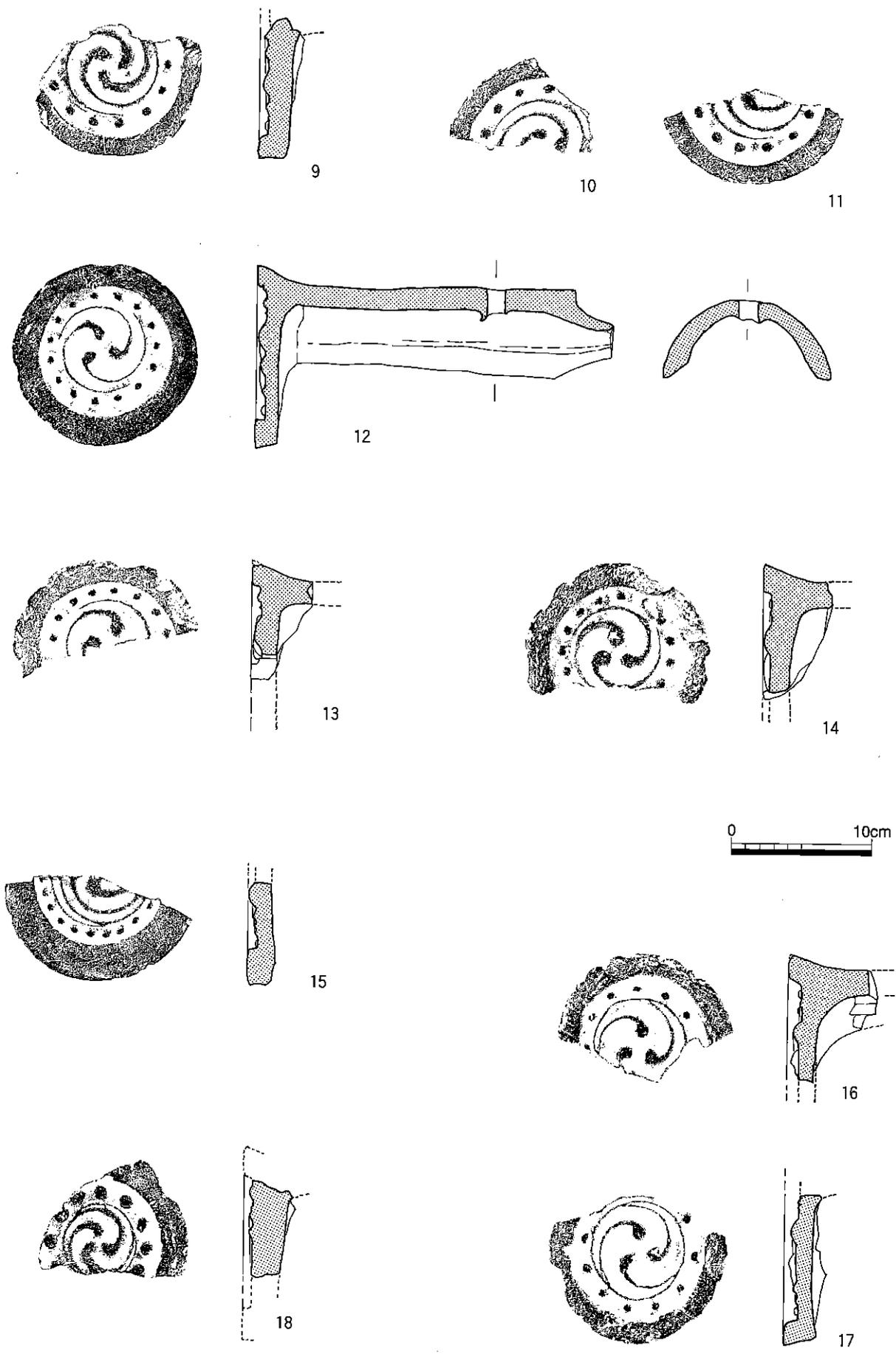
34は77T出土。正面に風化を受けている。復元径は14.5cm程度で文様に痛みがある。珠文数は12個と推定される。周縁幅は1.5~1.7cm。焼成良く、灰色。胎土に石英、雲母等の細砂を含む。丁寧な作りと言える。35は大枡形内部表土層出土。復元径は14.8cm、周縁幅は1.5cmである。胎土に雲母が目立つ。灰黒色~灰色を呈している。36・37は61T出土の既出資料である(註)。4点とも同じような胎土、焼成であり、文様にも大きな差異は無い。また、製作技法においても他の巴瓦類と同様と思われる。

(註) 南有馬町教育委員会 2006「原城跡Ⅲ」p90 第57図-1・2

b. 丸瓦 (第5図~第7図, 38~46) 丸瓦については統計処理等を実施できなかったもので、大きさや「コビキ」の違いがわかる資料を例示するに留まった。

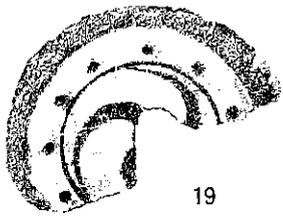
1. 「コビキA」の資料

38は77T出土。固定用の穿孔がある。断面図作成部分で、幅17.7cm。高さ9.2cm。原城出土の丸瓦の中で、最大クラスと思われるが長さが不明。凸面は縦方向のヘラ磨き痕があり、凹面には撚り紐痕、布目痕が残る。胎土はやや粗く、石英他の砂粒を含む。焼成良く、外面は黒色~灰黒色、断面は灰色

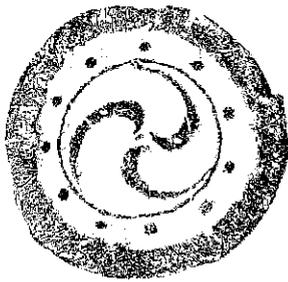
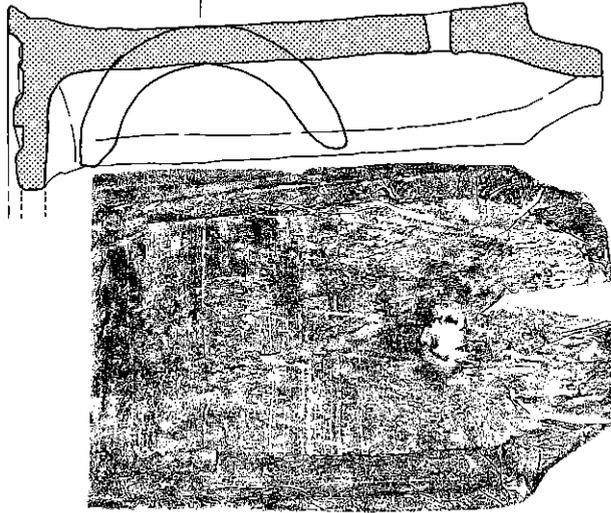


9~11 (Ⅱa1類) 12~14 (Ⅱa2類) 15 (Ⅱb1類) 16・17 (Ⅱb2類) 18 (2b2'類)

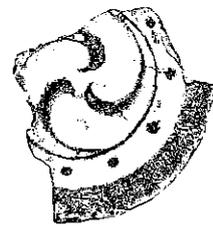
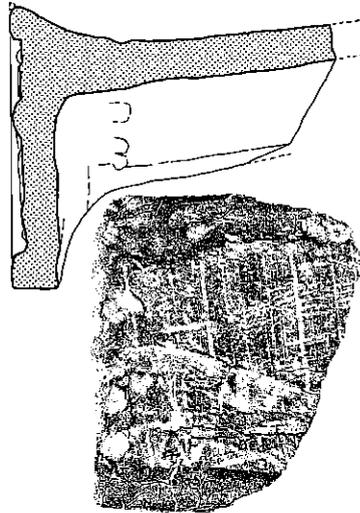
第2図 軒丸瓦②



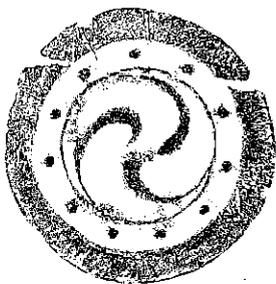
19



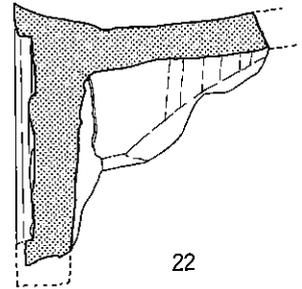
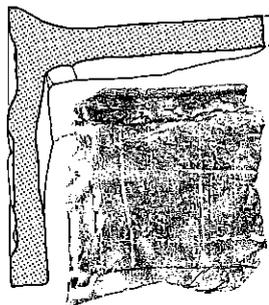
20



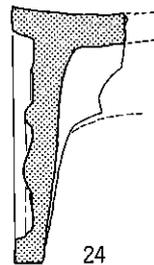
23



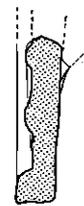
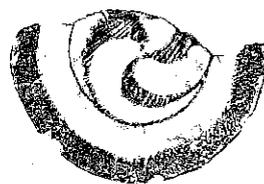
21



22



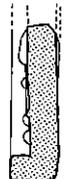
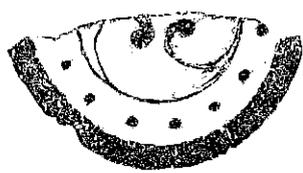
24



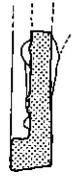
25

19~23 (IIc類)
24・25 (II d類)

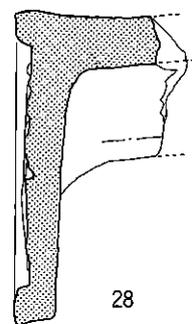
第3図 軒丸瓦③



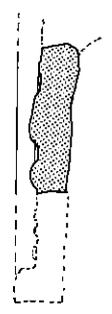
26



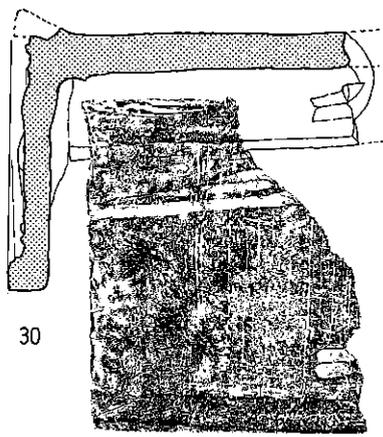
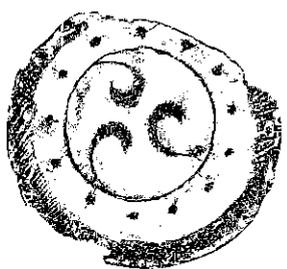
27



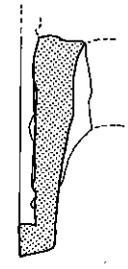
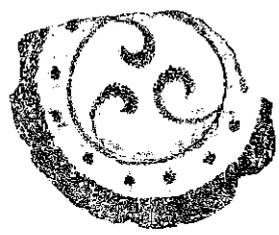
28



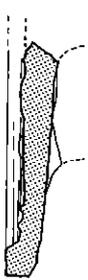
29



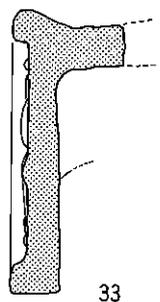
30



31



32



33



34



35



36



37



26 (IIe1類) 27 (IIe1'類) 28・29 (IIe2類) 30~33 (IIe3類) 34~37 (III類)

第4図 軒丸瓦④

～黄褐色を呈している。39は虎口出土。断面図作成部分で、幅13.5cm。高さ7.2cm。外面調整、凹面の状況、胎土、色調ともに38と略同じ。40は石垣一8出土。全長26.2cm、玉縁部を除く長さ22.8cm。幅12.7cm。高さ6.5cm～6.8cm。胎土に小石、砂粒を含む。焼成良く、硬質である。外面は黒色～灰黒色、断面は灰白色である。

2. 「コビキB」の資料

41は77T出土。断面図作成部分で、幅16.7cm。高さ7.2cm。凹面の状態に特徴があり、撚り紐痕と細長い複数の掻き取り痕が残る。この掻き取り痕は前出30に見えるものと同じである。胎土に1cm大の小石が含まれる。焼成は良好で、外面は灰黒色、断面は灰白色である。42は略完形の資料である。77T出土。全長32.3cm。玉縁部を除く長さ28.3cm。幅15.3cm。高さ6.5cm。胎土に白色粒子等の砂粒や、小石を含んでいる。焼成は良。外面は、淡黄褐色、断面は灰色である。43は77T出土。全長29.8cm、玉縁部を除く長さ26.9cm。幅14.8cm。高さ7.3cm～8.3cm。凹面に布目痕が残る。凸面に粘土を継いだような痕跡がみえるが断定は出来ない。胎土は粗く、石英他の砂粒を多量に含む。また1.2cm大の小石も含んでいる。焼成良く硬質で、灰白色～灰色を呈し、一見須恵器のような風合いがある。44は77T出土。穿孔がある。幅17.4cm。高さは7.7cmである。胎土は粗く、石英他の砂粒を多く含んでいる。焼成良く、全体が灰白色である。

3. 文字資料 45

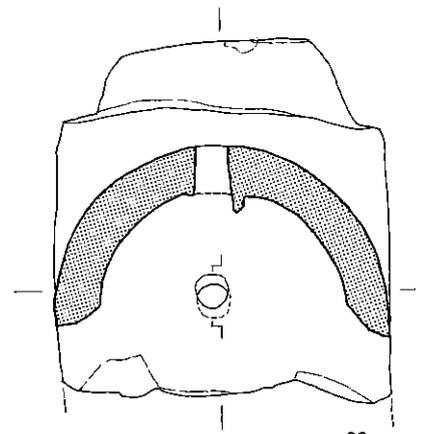
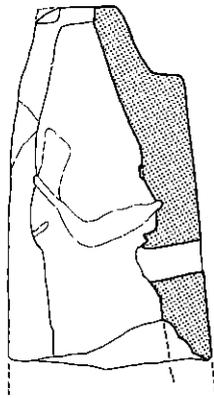
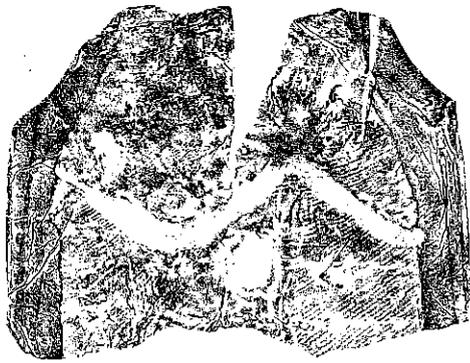
原城出土の瓦の中で、銘文のある瓦は1点のみであり、既報告の図(註)を再編集して掲載したが、横方向の断面図は割愛している。凸面に人名らしいへら書きのある丸瓦である。出土位置の記録は無い。読み方については、筆者の個人的見解ではあるが、「新(三)郎」と読んでおきたい。

(註) 南有馬町教育委員会 2004「原城跡Ⅱ」p136 第120図-142

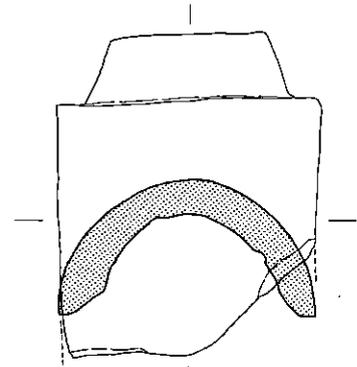
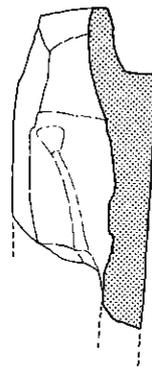
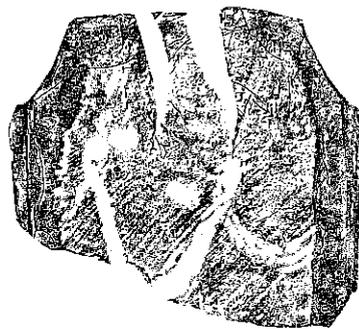
4. 刻印資料 46

これも再掲資料であるが(註)、実測図を改定し、拓図を付加した。60T出土。丸瓦の中心線上で玉縁寄りに菊花状の刻印が押されている。胎土に、石英他の砂粒を含む。焼成良く、外面は灰黒色、断面は灰色である。凹面に「コビキB」痕布目痕が残っている。

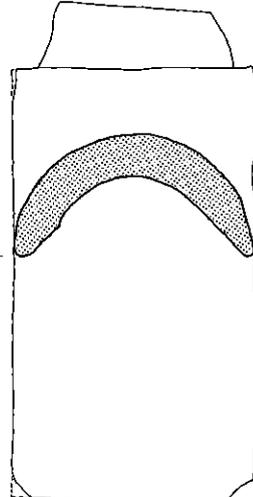
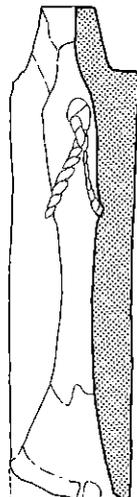
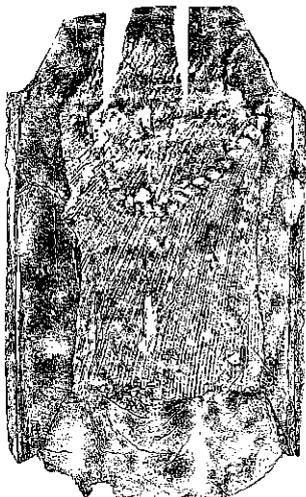
(註) 南有馬町教育委員会 2006「原城跡Ⅲ」p71 第43図-13



38

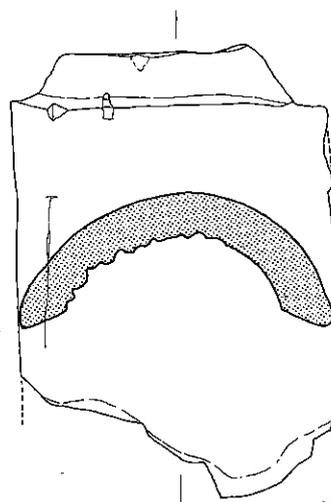
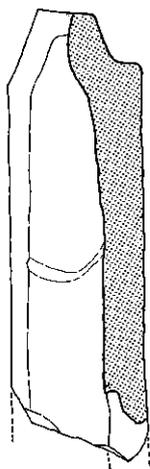
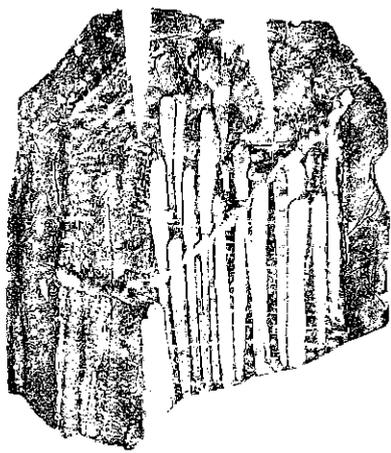


39

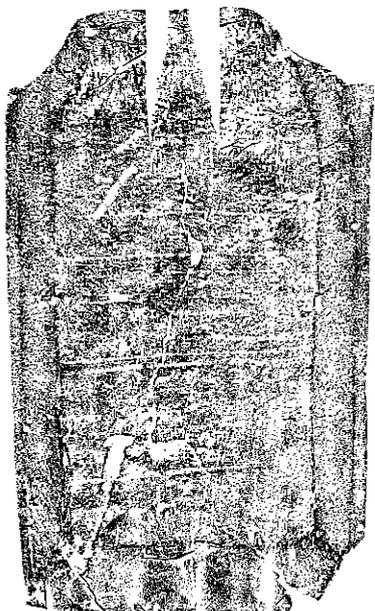


40

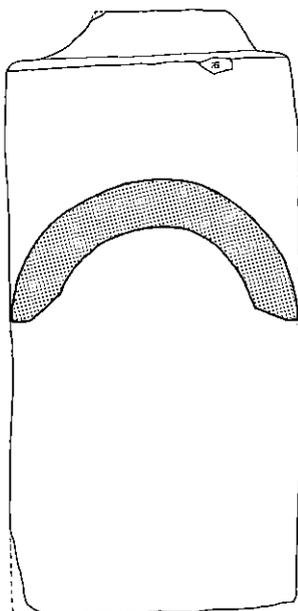
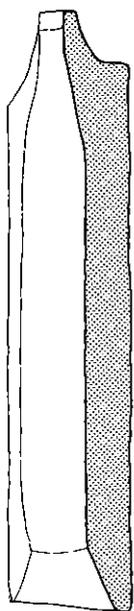
第5图 丸瓦①



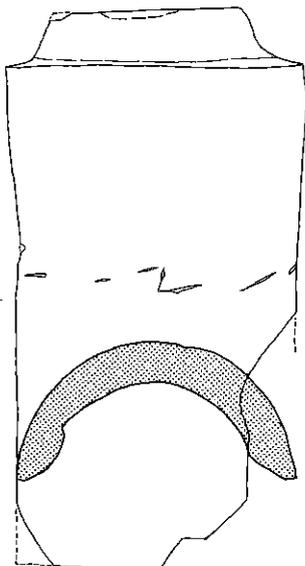
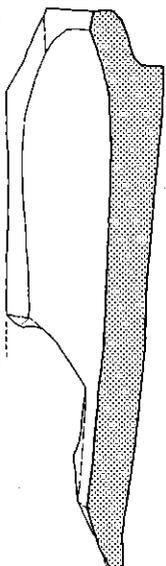
41



20cm

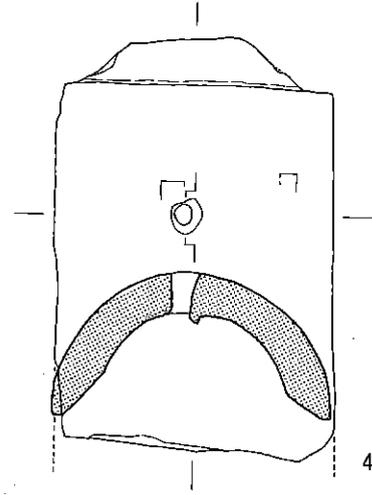
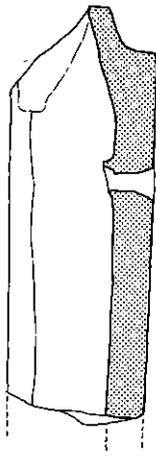
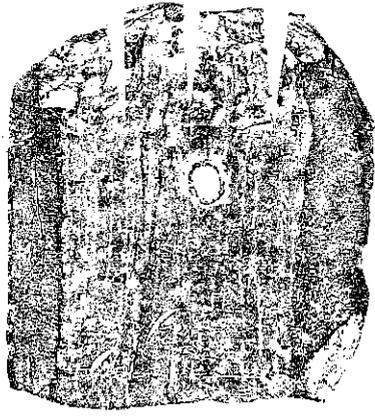


42

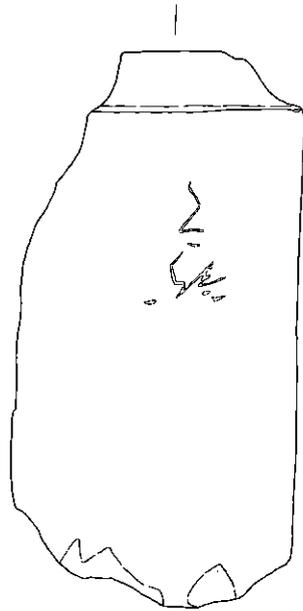
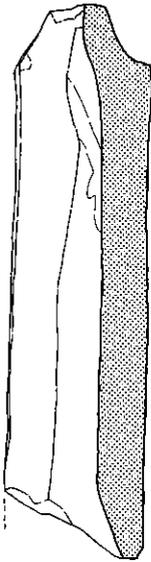


43

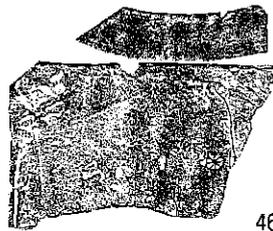
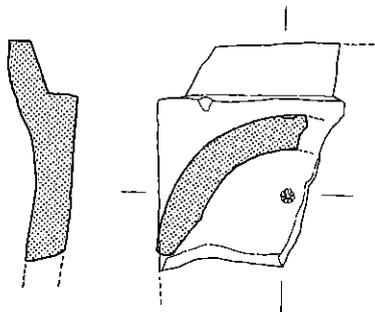
第6圖 丸瓦②



44



45



46



第7图 丸瓦③

c. 軒平瓦

原城出土の軒平瓦の瓦当文様は、ほとんどが均整唐草文の系統に属しており、文様の種類が豊富である。軒平瓦においても軒丸瓦と同様に、各文様の先後を判断する手がかりが乏しいため、唐草の転数や、文様の上下を反転させるという特徴的な技法を元に分類を試みた。なお「コビキ」痕を確認できる軒平瓦を含む平瓦の資料は見あたらなかった。

I 類 3転する唐草を持つグループである。

I a 類 (第8図47~51) この類の中心飾りは上向きの3葉とそれを囲む枠線及び、下向きの付属的な小さな3葉状の飾りで構成される。左右に3転の唐草文を配するが、左右の1転目と2転目の間に珠文を置き、さらに左側の1転目の下に「大」字様の文様を配するという独特な文様構成を持つ。瓦当面の復元幅は約24cm。

47・48は再掲資料であり^(註)、ともに41T出土。拓図のみを掲載した。49は中央部の破片である。56T出土。胎土はやや粗く、石英、角閃石等の砂粒を含む。焼成良く、外面は灰黒色~黄白色、断面は灰色である。50も中央部の破片である。胎土は49に同じ。焼成良く、外面は黒色で硬い。断面は淡赤褐色であるが、土壌の色の染み込みによるかもしれない。51は拓図のみを掲載した。77T出土の断片である。胎土粗く、角閃石他の砂粒を含む。焼成良好で、硬質である。外面は黒色~灰黒色、断面は灰色である。

(註) 南有馬町教育委員会 2004「原城跡Ⅱ」p136 第120図-142

I b 類 (第8図52~54) この類の文様はI a類の上下を反転させたものと理解することができる。中心飾りは下向きとなり、珠文の位置が上に来る。唐草の巻きも方向が「下・上・下」から「上・下・上」に変わり、回転も弱くなっている。「大」字は採用されていない。瓦当幅は22cm~25cm程度と思われ、変動幅がある。

52は77T出土。右側の唐草文の3転目から外側を欠く。胎土に石英、角閃石等の砂粒を含む。焼成良く、外面は灰白色、断面は灰白色である。瓦当幅の復元値は25cm。53は77T出土。文様部分はほぼ完存するが、右上の珠文が欠けている。瓦当幅24.5cm。胎土に石英、角閃石等の砂粒を含む。焼成良く、外面は黒~灰白色、断面は黄灰色。瓦当部幅24.5cm。54は69T出土。中央部の破片である。胎土に、石英粒、角閃石等の砂粒を含む。焼成良く、硬質である。外面は、黄灰色、断面は鼠色を呈している。また、粘土の練りが見える。

I b' 類 (第8図55) I b類の文様から、珠文を除いた文様である。唐草文の一つ一つが小さくなり、中心飾りの枠線が見えにくくなっている。出土量が多いが、総じて文様の彫りが浅く、不鮮明な瓦当文様となっている。

55は77T出土。胎土はやや粗く、石英粒、角閃石等の砂粒を含む。焼成良く、外面は灰黒色~灰白色。断面は灰白色である。瓦当面の復元幅は約24cm。荒い作風である。

Ⅱ~Ⅳ類 2転する唐草文を持つグループであるが、十分には整理が出来ていない。

Ⅱ a 類 (第8図56~58) 簡略な三葉を中心飾りとし、左右が繋がった2転の唐草文を組み合わせ、瓦当文様を構成している。三葉の先端は剣菱状となっている。この類と同じ瓦当文様を持つ軒平瓦

が日野江城から出土している。

56は50T出土。胎土はやや粗く、石英、角閃石等の砂粒を含む。焼成良好で硬質。外面は黒色～薄茶色、断面は灰茶色を呈する。瓦当幅の復元値は約20.5cm。反りが強い。57は71T出土。右半の破片である。胎土はやや粗く、石英、角閃石等の砂粒や小石を含んでいる。焼成良好で、外面は黒灰色、断面は灰色である。瓦当幅の復元値は約20.5cm。58は出土トレンチ不明。拓図のみの掲載である。胎土はやや粗く、石英等の粒子を含み、石ハゼも見られる。焼成良好で、外面は黒色、断面は灰白色を呈している。

Ⅱ b類 (第8図59～60) 中心飾りは、Ⅱ a類の文様の上下を反転したような下向きの三葉で、唐草文は同一方向に巻く2転である。

59は50T出土。胎土に石英粒等の粒子を含む。焼成は良好で、特に瓦当面は自然釉が薄く溶けたような状態である。内面、外面とも黒色～灰色。60も50T出土。胎土は59と同じ。正面に風化を受けている。焼成は良好であるが、炭素の吸着は無く、全体が鼠色を呈している。瓦当幅は約21cm。

Ⅲ a 1類 (第8図61) 中心飾りは上向きの三葉であるが、両脇が木の葉状の線描となっている。唐草の巻きは強い。77Tから1点のみ出土している。61の焼成はやや柔らかく、外面は黒灰色、断面は灰白色である。胎土に雲母他の砂粒を含み、丁寧な作風である。瓦当面幅の復元値は約23cm。

Ⅲ a 2類 (第8図62・63) 中心飾りの両脇が尖って左右に開く形状となっている。中心飾りは文様区の中央よりやや左に寄っており、それによって、唐草文も左右のバランスがとれていない。瓦当面の幅は19.5cm。62は77T出土。胎土に雲母が目立つ。焼成柔らかく、全体がすり減っており、灰色がかっているが、外面には灰黒色の部分が残る。63は63T出土の断片であり、拓図のみを掲載した。胎土は62と共通する。焼成良く、外面は黒色、断面は灰色であるが、どちらも茶色に変色している。

Ⅲ a 2'類 (第8図64) Ⅲ a 2類の範を再刻したもののように見える。唐草の線が太くなるなど、技術的には稚拙な印象を受ける。64は62T出土。胎土に、石英他の砂粒や雲母を含む。柔らかい焼成であり、外面は、灰黒色～灰白色であり、断面は灰白色。

Ⅲ b類 (第8図65・66) Ⅲ a類の文様の上下を反転させたデザインと思われ、中心飾りが下向きとなり、唐草の巻きの方向も入れ替わっている。三葉は線で表されている。

65は77T出土。平瓦部が残る資料であるが、「コビキ」痕は観察されない。粗い作風で、浅く不鮮明な文様である。瓦当幅は、20.8cm。胎土に大粒の石英粒を含む。外面は黄白色。断面には黒色の芯があり、瓦質土器を思わせる焼成である。66は77T出土。浅く不鮮明な文様である。胎土は65と同じ。焼成良く、凹面は灰黒色、他は黄灰色～灰色である。

Ⅳ類 (第9図67・68) I～Ⅲ類とは異なる系統の文様である。木の実を半載したような中心飾りを置き、左右の上方に向かって延びる、2転する唐草文を配する。中心近くの唐草には、左右に枝状の子葉が付加されている。瓦当幅は、約23cm。41Tからまとまって出土している。

67は再掲資料である^(註)。全長27cm。平瓦部の幅23～19.8cm。胎土粗く、石英他大粒の砂粒を含む。焼成良く、外面は灰黒色、断面は灰白色を呈する。非常に重く感じられる。68も同じく、41T出土の再掲資料である。拓図のみ掲載。

(註) 67 南有馬町教育委員会 2004「原城跡Ⅱ」p128 第114図-116

68

p127 第113図-112

V類 (第9図69・70) 宝珠文を中心飾りとし、4転する唐草文を配した上品な作風の軒平瓦である。4転する唐草文はこの類にだけ見られ、2点出土している。

69は77T出土。胎土は精良で、石英、角閃石等を含む。焼成良く、硬質である。外面は黒色。断面は灰白色である。瓦当面の幅は24.5cm。70も77T出土で、胎土、焼成も69に共通する。

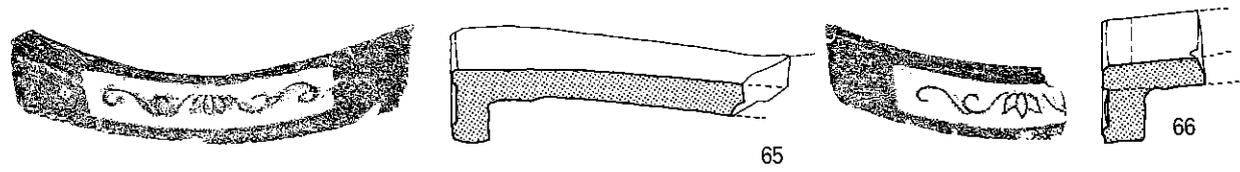
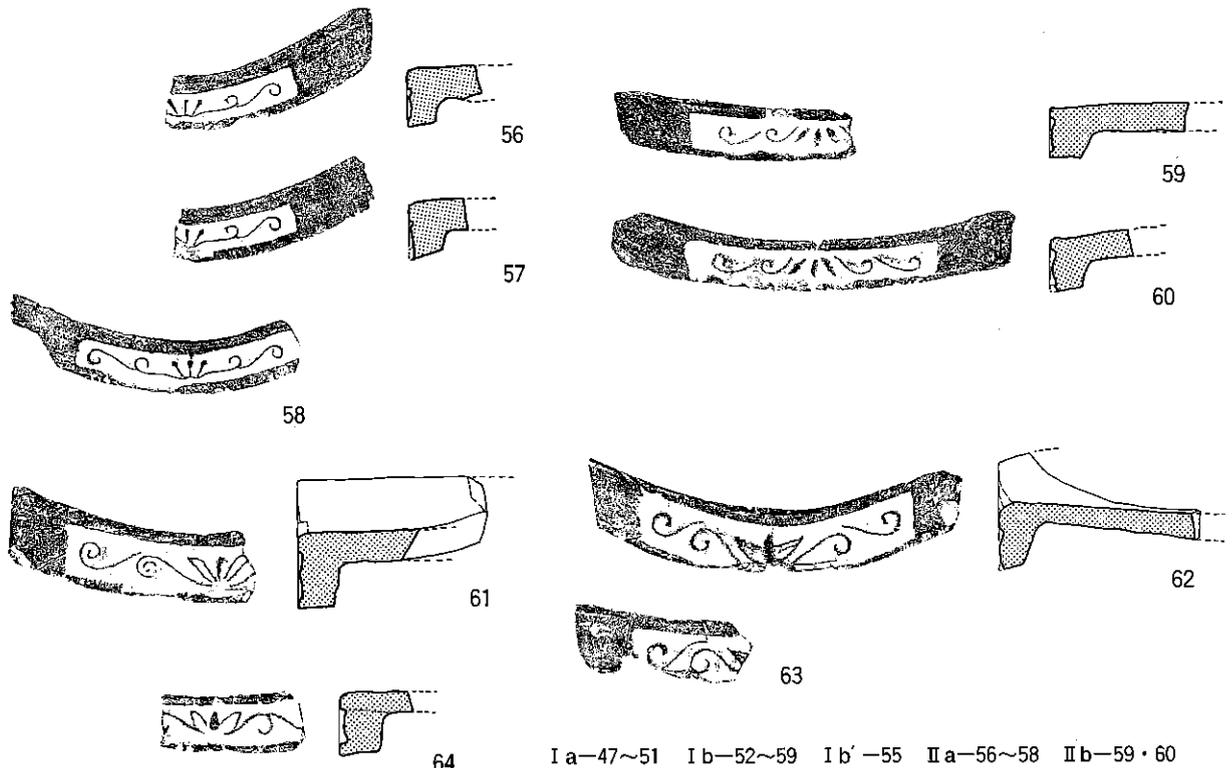
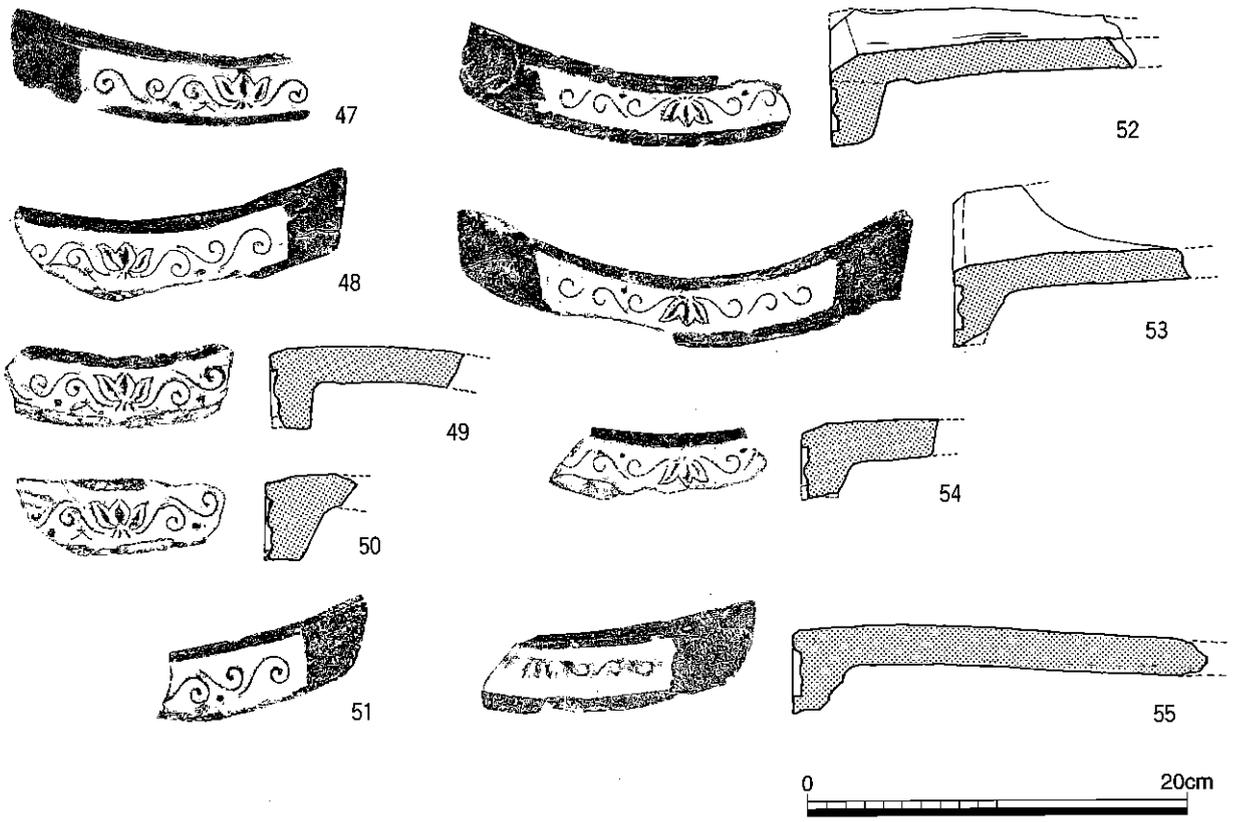
VI類 (第9図71・72) 2点を提示したが、いずれも瓦当中央部の断片であり、詳細不明。上向きの三葉に唐草文を配した構成と推定される。三葉の先端は菱形になっている。2点とも62T出土。71は胎土精良で。石英他の細砂を含む。焼成良く、外面は黒色、断面は灰色である。瓦当面に風化を受けている。72の胎土は71に同じ。柔らかい焼成で、外面は灰黒色、断面は灰白色を呈する。全体的に風化が進んでいる。

VII類 (第9図73・74) その他の瓦当文様2点を一括した。各1点の出土である。73は62T出土。中心飾りのみの瓦当文様である。中央に桃花様の五弁花を置き、両側に葉脈を表現した写実的な葉を配している。唐草文は採用されていない。範に横方向のひび割れが生じている形跡が見られる。瓦当幅の復元値は、約23cm。胎土に石英他の砂粒、及び雲母粉末を含んでいる。焼成良く、外面は黒色、断面は灰色である。74は63T出土。中心飾りには双葉と丸い点(花か)を置き、双葉の下で左右の唐草文がつながるような文様構成と思われる。胎土に石英が目立ち、雲母も含んでいる。柔らかい焼成で、外面は黒灰色、断面は灰色である。全体の風化が進んでいる。

d. 平瓦 (第9図75~77, 第10図78・79) 平瓦も丸瓦と同様に、統計処理等の整理を実施できなかった。平瓦の多くについては、発行済みの報告書を参照されたい。なお原城出土の平瓦には「コビキ」痕は残っていないと思われる。ここでは5点の資料を提示した。

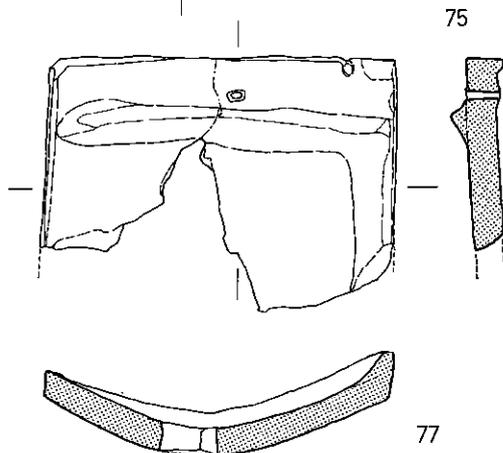
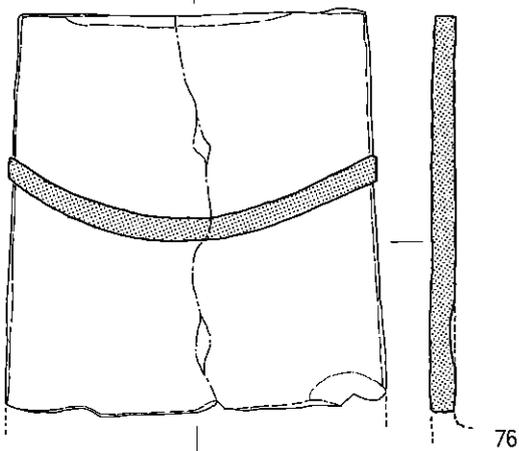
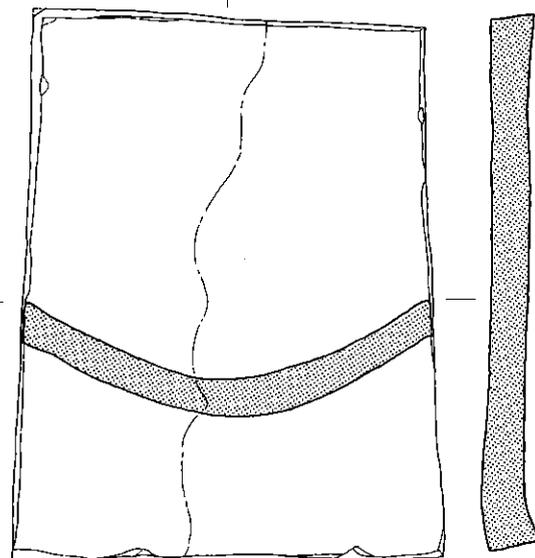
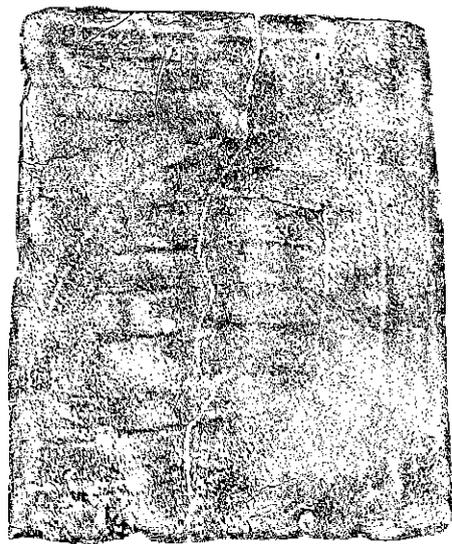
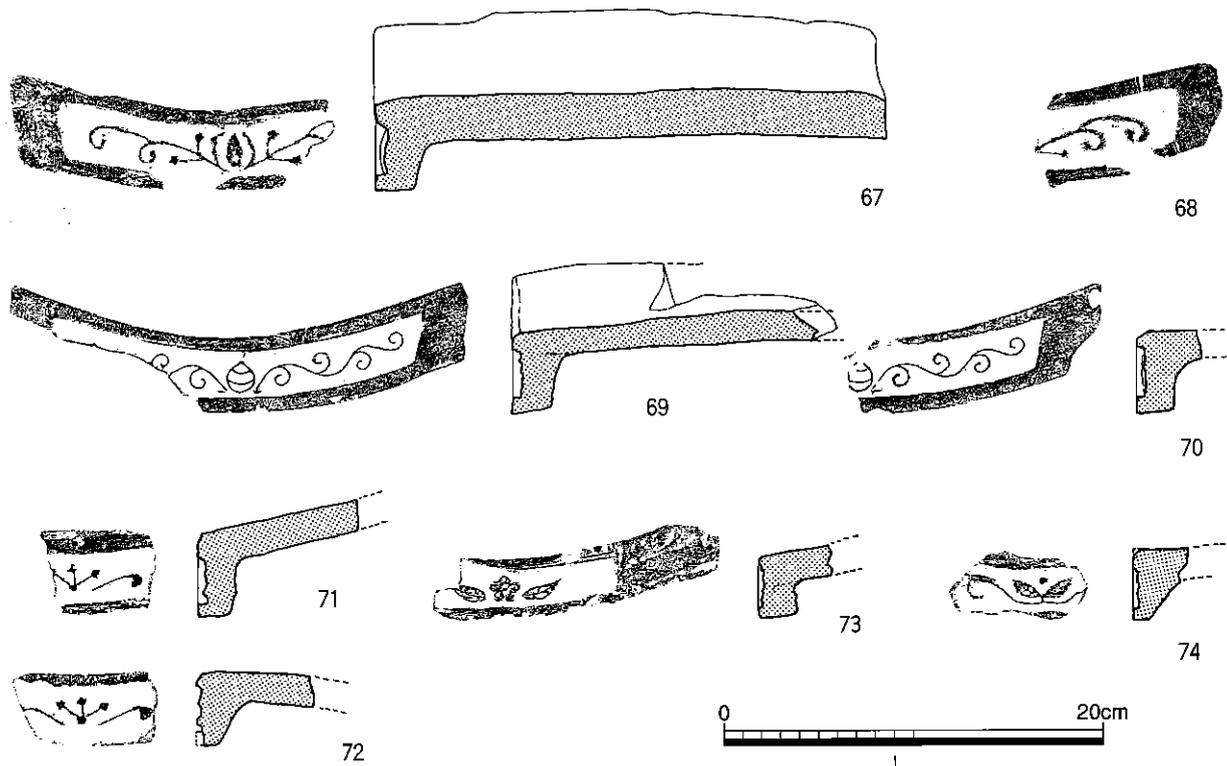
75は75T出土。2片に割れているが、完形に復している。上辺(尻)と下辺(頭)は平行に作られていない。上辺長、20.6cm。下辺長、22.6cm。中央部の長さは28.6cm。厚みは2cm程度。下辺を除く3辺はヘラ切りによって整えられている。下辺端と凸面には砂が多く付着している。焼成良く、外面は灰黒色、断面は灰色である。76は瓦当部が外れた平瓦部分である。77T出土。残存部の長さ、21cm。幅は18.3~20cm、厚さは1.3cm程度。胎土に雲母を含む。焼成は良好で、外面は灰黒色、断面は灰茶色である。77は「水返し」の付いた平瓦である。既出資料であるが^(註)、接合によって形状に変化が生じたので、再測した。41T出土。平瓦の凹面にL字形の粘土を貼り付け、水返しとしている。上辺(尻)の幅18cm。上辺近くの中央付近に、穿孔がある。胎土に石英他の砂粒を含む。焼成良好で、外面は灰黒色、断面は灰色~灰白色である。78は77T出土。これも「水返し」の付いた平瓦であるが、断片であるため全体の形状が掴みにくい。77よりも大型の瓦と思われる。胎土に石英他の砂粒を含む。焼成良く、外面は黒灰色、断面は灰白色である。79は刻印のある平瓦として収録したが、確信は持てない。復元幅は約20cm。頭部近くに刻印のように見える、スタンプがある。焼成は良好で、外面は黒色、断面は灰黄褐色である。胎土に石英、角閃石他の砂粒を含んでいる。

(註) 南有馬町教育委員会 2004「原城跡Ⅱ」p132 第118図-139



I a-47~51 I b-52~59 I b'-55 II a-56~58 II b-59·60
 III a1-61 III a2-62·63 III a2'-64 III b-65·66

第8图 軒平瓦①



IV-67·68 V-69·70 VI-71·72 VII-73·74

第9圖 軒平瓦②/平瓦①

e. 道具瓦 (第10図80~86, 第11図87) 道具瓦については抽出, 整理が困難であった。従って, この報告では主として既報告の資料と重複しない瓦を掲載した。

1. 丸瓦の加工品

80は77T出土。通常の丸瓦を17.7cmの長さに切断したものである。胎土に石英他の砂粒を含む。焼成良く外面は黒灰色, 断面は灰色。凹面に「コビキA」痕, 布目痕, 撚り紐痕が残っている。81はやや反りのある丸瓦を斜めに切断し, そこに半円形の粘土板を貼りつけていると推定されるが, 破損が大きく, 全体の形がわかりにくい資料である。凹面に「コビキB」痕, 撚り紐痕が残っている。胎土に石英他の砂粒, 小石を含む。焼成良く, 外面は黒色, 断面は灰茶色を呈する。

2. 鬼瓦類

82~84は外形「風」字形の小型の鬼瓦と思われるが, いずれも下の部分が欠けており, 全体の形は不明。降り棟等に使用されたものか。82は77T出土。正面に2条の強いヘラ切りがある。右上の浅いヘラ切りは意識的なものかどうかよくわからない。頂部と正面やや右寄りに穿孔がある。胎土に石英粒を多く含む。焼成良く, 外面は灰色~灰黒色, 内面は灰黒色である。上端の幅7.2cm。83も77T出土で, 82とほぼ同形である。左上に「X」のヘラ切りと, 正面に「梵字」様の深い切り込みが施されている。胎土に石英粒を多く含む。焼成良く硬質である。外面は灰色。断面は灰黒色。上端の幅6.9cm。正面に穿孔の一部が残る。84は出土トレンチ不明。調査初期の出土と思われる。前二者に比べ, ややなで肩の形状をしている。正面上部にギリシャ文字の「φ」に似たヘラ描きと, 裏側に木葉状のヘラ描きが施されている。頂部に半円形の穿孔が僅かにかかり, 正面には円形の穿孔が見える。胎土に砂粒が目立たない。焼成良く, 内外とも灰茶色である。全体が風化している。上端幅4cm。85は雲形の飾りを持つ, 板状の鬼瓦と思われる。文様については不明。胎土に雲母を含むので, 搬入品の可能性もある。焼成はやや甘く軟質である。外面は灰色, 断面は灰白色を呈する。裏面に鉄分の付着が認められる。77T出土。

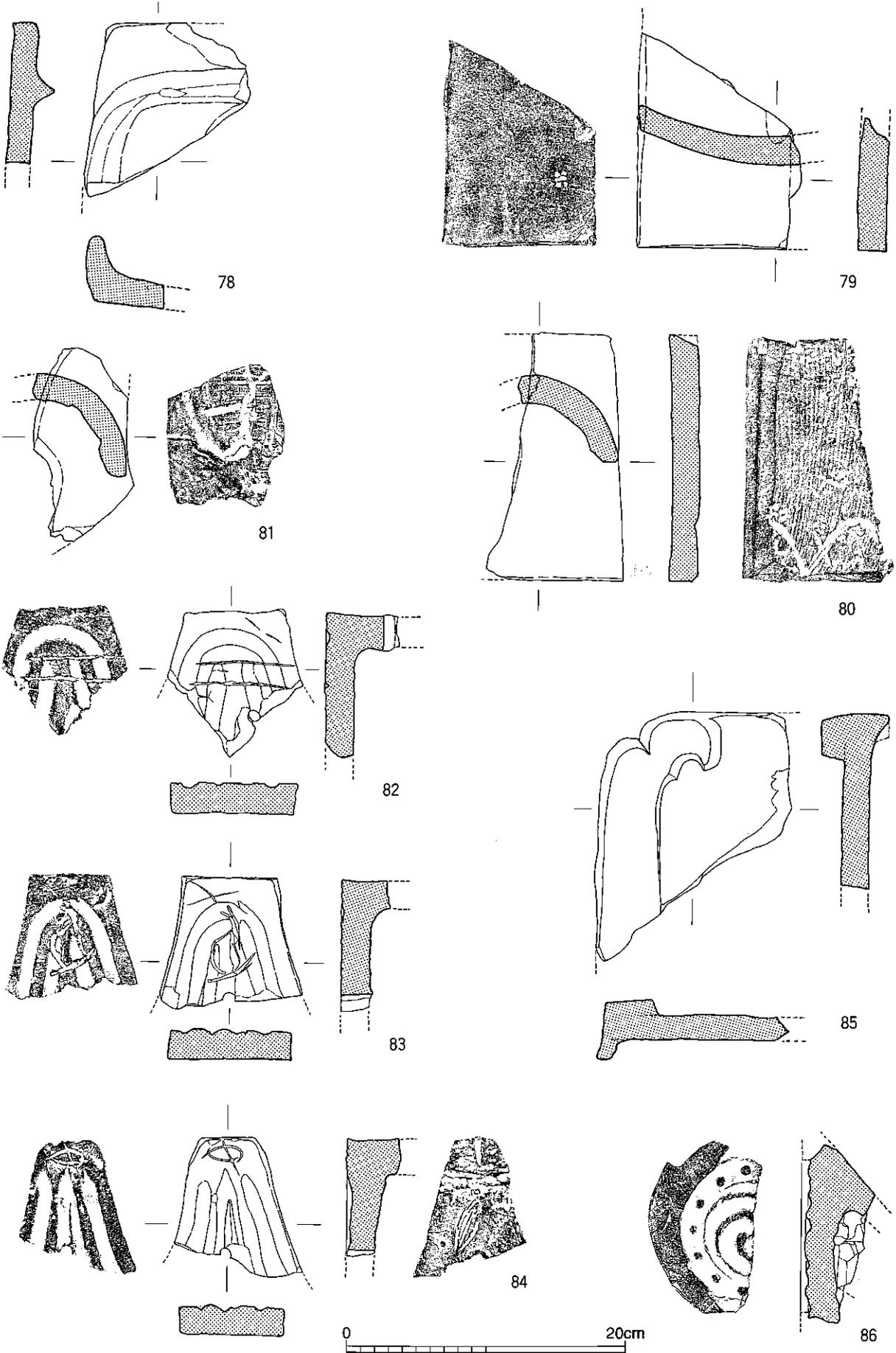
3. 鳥衾瓦

1点の出土を確認しているが, 2分の1以下の破片であるため, 図の断面線は中心を通っていない。86は77T出土。瓦当文様は左に巻いた三つ巴で頭部は丸みを帯びる。珠文は7個残っているが, 完形に復すると14~15個と推定される。胎土に石英他の砂粒を含む。焼成良く, 外面は黒色, 断面は灰色である。

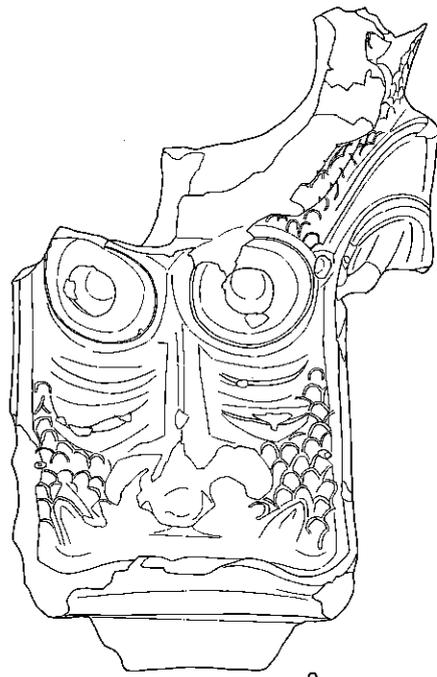
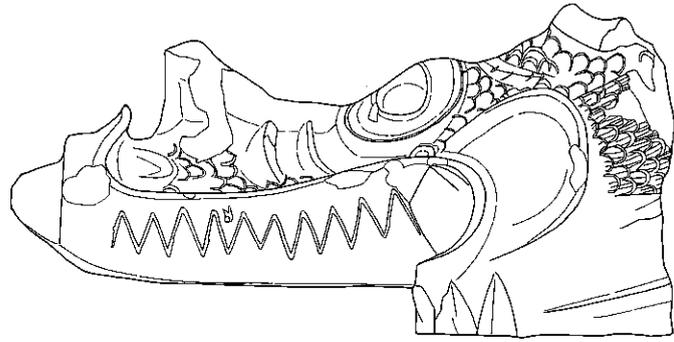
4. 鯨瓦

87は再掲資料である^(註)。多くの鬼瓦, 鯨瓦類は細かく碎かれ, 原形に復しない状態で出土しているのに, この個体のみ大きい破片で出土している。単なる偶然なのか, 何か意図があって大きいまま廃棄されたのか検討の余地があるのではないだろうか。

(註) 南有馬町教育委員会 2006「原城跡Ⅲ」p87 第55図-9



第10図 平瓦②/道具瓦



9



0 10cm

第11図 鏡瓦

まとめ

1. 丸瓦系、平瓦系の割合

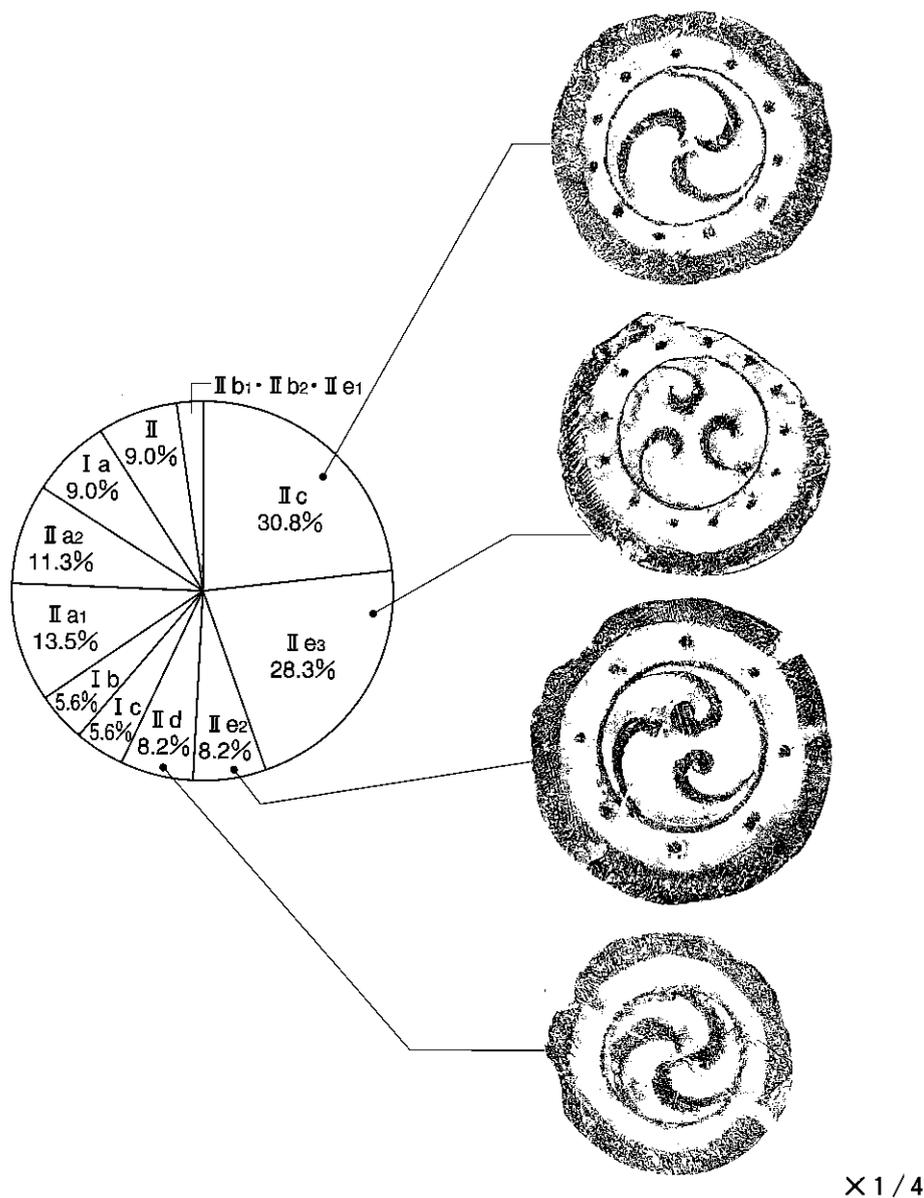
点検した1026点の内、丸・軒丸瓦に属するものは649点、平・軒平瓦に属するものは344点、道具瓦に属するものは33点であった。それぞれ、63.3%、33.5%、3.2%の割合となっている。原城における瓦の廃棄状況には様々な様相が想定されるので、この数字は参考程度に留まるのかもしれない。

2. 軒丸瓦・軒平瓦の型式別割合

A. 軒丸瓦 点検した瓦の内、型式を特定したのは162点であり、下表のようになっている。

I a	I b	I c	II a1	II a2	II b1	II b2	II c	II d	II e1	II e2	II e3	III
4	9	9	6	5	1	2	49	13	2	13	45	4

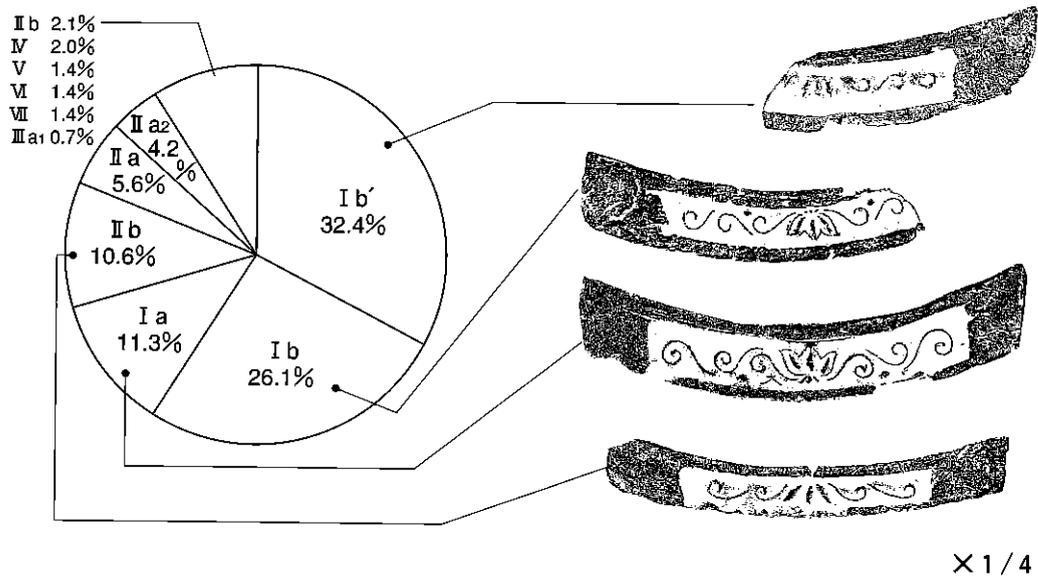
上記の表を円グラフで表すと次のようになる。



B. 軒平瓦 軒平瓦は142点を特定した。その内訳は下表のようになる。

I a	I b	I b'	II a	II b	III a1	III a2	III b	IV	V	VI	VII
16	37	46	8	15	1	6	3	4	2	2	2

上記の表を円グラフで表すと次のようになる。



上のグラフの特徴としては、軒丸瓦においては、II c型とII e 3型を合わせると59.1%を占め、軒平瓦においては、I b'型とI b型で58.5%を占めることである。この数字は、これらの瓦が原城が最終的に破却された時点まで、多量に存在した事を示すのではないだろうか。また軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせは、軒丸瓦II c型+軒平瓦I b'、軒丸瓦II e 3型+軒平瓦I b型あるいは軒丸瓦II c型+軒平瓦I b型、軒丸瓦II e 3型+軒平瓦I b'になることが想定される。

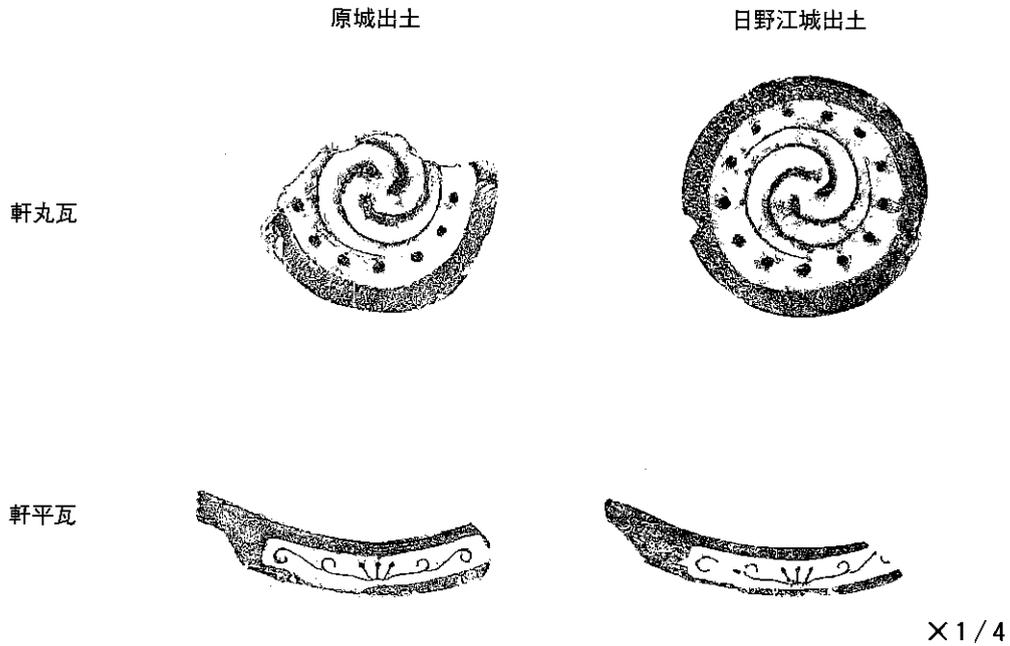
3. 同范瓦について (次図参照)

有馬氏は近接した原城と日野江城を同時に使用しているため、両城から同じ瓦が出土すると考えるのは必然的である。今回報告する原城の瓦と日野江城出土の瓦を比較した結果、軒丸瓦で1種、軒平瓦で1種、同范の可能性が高い瓦を見出すことができた。

軒丸瓦においては原城でII a 1型とした瓦と、日野江城で多く出土した軒丸瓦である。II a 1型の瓦は原城では5%くらいの出土量でしかないが、日野江城ではほとんどがこのタイプである(註)。この両者の大きさ、巴の位置・形状、珠文の位置関係等を比較してみると、おのおのが良く一致し、同范瓦として差し支えない。また、日野江城例は比較的残存状況が良く、「コビキ」等の観察が容易であり、原城の瓦の研究に貢献するものと思われる。

(註) 北有馬町教育委員会 2005「日野江城跡」

軒平瓦においては原城でⅡ a型とした瓦と日野江城で多く出土した軒平瓦が良く一致し、同範瓦として差し支えないと思われる。軒平瓦においても、このタイプの瓦は原城では少なく、日野江城では主たる瓦となっている。同じ瓦であっても、二つの城で使い分けがなされているものと思われる。



4. 今後の課題

原城出土の軒丸瓦・軒平瓦については、そのほとんどのパターンを提出できたと考えるが、今後は類似した瓦を出土する周辺諸城との比較検討がなされるべきであろう。直接報告書にあたることができなかつたが、九州内では「筑前名島城」の瓦には原城との近縁性が感じられる。また、歴史的には「肥前名護屋城」・「森岳城」の瓦との比較が必要と思われる。

瓦窯・工房は、胎土に含まれる砂粒、小石等から原城に近い場所にあったと推定されるが、その追求には現在まで全く手がつけられておらず、今後に残された大きな課題と思われる。

【参考文献】

- 1994 織豊期城郭研究会「織豊期城郭の瓦」
- 1996 後藤宏爾「名護屋城跡出土の軒平瓦」『研究紀要第2集』佐賀県立名護屋城博物館

表1 軒丸瓦観察表

No	出土位置	型式分類	瓦当部径(cm)	文様	方向	圈線の有無	珠文数	コビキ	備考
1	77T	I a	(18)	巴	右	無し	16	不明	
2	50T	〃	(18)	巴	右	〃	〃	不明	指紋あり・周縁に鉄分付着
3	41T	I b	15.8	巴	右	〃	19	A	
4	41T	〃	(16)	巴	右	〃	〃	—	
5	77T	〃	15.2	巴	右	〃	〃	—	
6	77T	〃	15.7	巴	右	〃	〃	—	
7	56T	I c	(14)	巴	右	有り	(20)	B	
8	79T	I c	(15)	巴	右	〃	〃	—	
9	78T	II a 1	(13)	巴	左	無し	13	不明	「日野江城」例はコビキA
10	41T	〃	〃	巴	〃	〃	〃	〃	
11	43T	〃	〃	巴	〃	〃	〃	〃	
12	77T	II a 2	13.4	巴	〃	無し	15	B	
13	58T	〃	(13.5)	巴	〃	〃	〃	—	
14	61T	〃	13.5	巴	〃	〃	〃	—	
15	77T	II b 1	(15)	巴	〃	〃	(23~24)	不明	1点のみ出土
16	石垣14	II b 2	(14)	巴	〃	有り	(14~15)	不明	
17	50T	〃	(13.5)	巴	〃	〃	〃	〃	
18	80T	II b 2'	(14)	巴	〃	〃	(14~15)	〃	範磨耗, 1点のみ出土。
19	15T	II c	(15)	巴	〃	有り	11	B	全長31.2cm
20	77T	〃	15	巴	〃	〃	〃	〃	指紋あり
21	77T	〃	14.5	巴	〃	〃	〃	〃	
22	本丸虎口	〃	15.2	巴	〃	〃	〃	〃	
23	80T	〃	(15)	巴	〃	〃	〃	—	
24	63T	II d	14.7	巴	〃	有り	0	不明	
25	77T	〃	(13.5)	巴	〃	〃	〃	〃	
26	77T	II e 1	(16)	巴	〃	有り	(15~16)	不明	1点のみ出土
27	62T	II e 1'	(14)	巴	〃	有り	(12~13)	不明	
28	10T	II e 2	(16.5)	巴	〃	有り	8	不明	
29	77T	〃	(16)	巴	〃	〃	〃	〃	
30	77T	II e 3	15	巴	〃	有り	13	B	
31	77T	〃	(16)	巴	〃	〃	〃	—	
32	56T	〃	(15.5)	巴	〃	〃	〃	—	
33	1 T	〃	(14.8)	巴	〃	〃	〃	—	
34	77T	III	(14.5)	花十字	—	—	(12)	—	
35	大橋形	〃	(14.8)	花十字	—	—	(12)	—	
36	61T	〃	(14.5)	花十字	—	—	(12)	—	
37	61T	〃	—	花十字	—	—	(12)	—	

()は復元値

()は推定値

表2 丸瓦観察表

No	出土位置	コビキ	全長(cm)	長	幅	高さ	備考
38	77T	A	—	—	17.7	9.2	布目痕あり, 穿孔あり。
39	本丸虎口	A	—	—	13.5	7.2	
40	石垣8	A	26.2	22.8	12.7	6.5	布目痕あり
41	77T	B	—	—	17.7	7.2	凹面に工具痕あり
42	77T	B	32.3	28.3	15.3	6.5	
43	77T	B	29.8	26.9	14.8	7.3	粘土継いだか
44	77T	B	—	—	17.4	7.7	穿孔あり
45	不明	B	—	—	—	—	文字有り
46	60T	B	—	—	—	(7.6)	刻印有り

()は推定値

表3 軒平瓦観察表

No	出土位置	型式分類	瓦当部幅(cm)	瓦当部高さ(cm)	中心飾り	唐草の転数	備考
47	41 T	I a	(25)	4.2	三葉上向き	3	「大」, 珠文2個有り。
48	41 T	〃	(24.4)	4.4	〃	〃	
49	56 T	〃	—	3.9	〃	〃	
50	62 T	〃	—	3.9	〃	〃	
51	77 T	〃	(24)	3.7	〃	〃	
52	77 T	I b	(25)	3.8	三葉下向き	〃	珠文2個有り
53	77 T	〃	24.5	3.8	〃	〃	
54	69 T	〃	—	(3.4)	〃	〃	
55	77 T	I b'	(24)	4.0	〃	〃	
56	50 T	II a	(20.5)	2.9	三葉上向き	2	日野江城出土の瓦と同範の可能性
57	71 T	〃	(20.5)	2.9	〃	〃	
58	不明	〃	(18.4)	2.8	〃	〃	
59	50 T	II b	(22)	3.0	三葉下向き	〃	
60	50 T	〃	(21)	2.7	〃	〃	
61	77 T	III a 1	(23)	3.7	三葉上向き	〃	
62	77 T	III a 2	19.5	3.5	〃	〃	
63	63 T	〃	—	—	〃	〃	
64	62 T	III a 2'	—	2.9	〃	〃	
65	77 T	III b	20.8	3.9	三葉下向き	〃	瓦質土器のような焼成
66	77 T	〃	(21.2)	3.9	〃	〃	
67	41 T	IV	(23)	4.6	三葉上向き	〃	子葉有り
68	41 T	〃	—	—	〃	〃	
69	77 T	V	24.5	3.4	宝珠	4	
70	77 T	〃	(26.5)	3.9	〃	〃	
71	62 T	VI	—	3.6	三葉上向き	不明	
72	62 T	〃	—	3.7	〃	〃	
73	62 T	VII-1	—	3.2	花	—	
74	63 T	VII-2	—	3.5	双葉	不明	

()は復元値

表4 平瓦観察表

No	出土位置	長さ(cm)	短辺幅	長辺幅	厚み	反りの高さ	備考
75	77 T	28.6	20.6	22.6	2.0	6.1	凸面には多量の砂付着
76	77 T	(21)	18.3	(20)	1.2	4.4	瓦当の欠落で平瓦に見える個体
77	41 T	—	18.2	—	1.5	—	水返し付き
78	77 T	—	—	—	1.8	—	水返し付き
79	77 T	—	—	—	2.1	—	刻印? 資料

表5 道具瓦観察表

No	出土位置	細分類	長さ(cm)	幅	高さ	備考
80	77 T	丸瓦加工品	17.7	(12.2)	4.0	コビキA
81	78 T	〃	—	—	7.5	コビキB
82	77 T	鬼瓦	—	上辺7.2cm	—	ヘラ描き有り
83	77 T	鬼瓦	—	上辺6.9cm	—	ヘラ描き有り
84	不明	鬼瓦	—	上辺4.0cm	—	ヘラ描き有り
85	77 T	鬼瓦	—	—	—	
86	77 T	烏衾瓦	—	—	—	
87	50 T	鯰瓦	—	—	—	コビキB, 「原城III」参照。

第6節 キリシタン関係遺物

1992年(平成4)から実施している発掘調査によって、本丸地区から多くの遺構・遺物が出土した。特に、十字架、メダイ、ロザリオの珠などのキリシタン関係遺物は、島原・天草一揆にまつわる資料である。また、一揆後、幕府軍により壊され埋められた出入口や櫓台石垣、本丸の正面玄関に相当する出入口などが検出され、原城築城時の遺構や島原・天草一揆に対する幕府の対応を示す資料を発見した。

他に火繩銃の玉、輸入陶磁器、瓦など、築城当時から乱で封印されるまでの原城を物語る資料がある。出土したキリシタン関係遺物の主なものは、十字架、メダイ、ロザリオの珠、花十字紋瓦である。

①十字架

十字架は、鉛製十字架が29点、銅製の十字架が2点の31点が出土している。十字架は材質により2種類に区別し、さらに7種類に細分類していたが、今回、再整理して形状的に2種類に分類した。旧分類Ⅳ～Ⅵ類は、縦横軸が直線的なものとしてまとめⅠ類とし、さらに3種類に細分した。旧分類Ⅰ～Ⅲは、縦横軸に膨らみを持つもので、木製十字架玉を表したものとしてまとめⅡ類とし、さらに2種類に細分した。他に、聖遺物容器と十字架レリーフ状のものを分けた。

Ⅰ-A (図5. 7・8・13・23・25・29)

Ⅰ-Aは、縦横軸は直線的で、縦軸は中空の筒状のものである。磔刑像は付かない。7, 8, 13は鉛製で、縦横軸の断面は円形をしている。23, 25, 29は鉛製で、縦横軸の断面はほぼ方形となる。

Ⅰ-B (図5. 16)

Ⅰ-Bは、縦横軸は直線的で、縦軸の上部に紐を通す孔を持つものである。磔刑像は付かない。16は鉛製で、平板状になり、紐を通す孔は十字架面に対し垂直に付く。下部は欠損している。

Ⅰ-C (図5. 9・28・30・14・3・15・21)

Ⅰ-Cは、縦横軸は直線的で、縦軸の下部に紐を通す孔が開いているものである。6, 9, 28, 30, 14は断面が方形となる。3, 15, 21は、縦軸は中空の筒状ではなく板状となり、縦軸の下部に紐を通す孔が開いている可能性があるもの。この遺物については、下部が欠損しており、詳細は不明であるが、紐を通す孔が上部にはなく、また、中空の筒状でもないため、縦軸の下部に紐を通す孔が開いている可能性があるものとした。

Ⅰ-BとCにおいて、紐孔の位置により、現在普通に思われている、正常方向に吊されるものと、上下逆方向に吊されるものであることがわかる。この上下逆方向に吊される十字架については、長軸の下側に紐孔が開いているものであり、現代の十字架では見られない形態のものである。現段階では解明できていないが、キリシタン時代の十字架はロザリオに付く十字架と吊し用の十字架があるとされ、ロザリオの十字架は、ロザリオの環状部につなげるもので、横軸1点、縦軸2点の木製十字架玉3種3個で構成され、紐でつながれるものであり、上下逆方向となる。吊し用十字架は、十字架単独で首から吊すものである。

Ⅱ-A (図6. 5・10・12・18・22・2・24)

Ⅱ-Aは、木製三玉型状のものである。木製の三つの玉を組み合わせた十字架を型取りし、鉛で一体成型したもので、縦軸は中空の筒状となる。5, 10, 12, 18, 22, 2であり鉛製である。24は、銅製のものであり、縦軸の下部に紐を通す孔が開いている。

II-B (図6. 4・11・17・19・31・26)

II-Bは、縦横軸端に膨らみをもつもので、上下左右の端に膨らみをもち、縦軸は中空の筒状となる。26はガラス製で、三玉型の一部と思われる。31は、縦軸の下部に紐を通す孔が開いている。

聖遺物容器 (図7. 十字架20)

20は、青銅製の箱型十字架で、聖遺物容器である。出土した中では最大のもので縦7.35cm、横4.70cmである。両面に図柄を施し、表面には、星、茨冠、金槌、釘抜、3本の釘、2本の槍、一つは先端に葡萄酒を染み込ませた槍が描かれるなど「受難の道具」の模様が描かれている。裏面には蔦状の植物が描かれている。両面とも背景には魚子(ななこ)文様が細工され、縁には縄状の文様が刻まれている。上部には環が付き、左右端に突起物が付く。下部にはこの突起物が外れた痕がある。側面は無柄である。

同様のものが東京国立博物館に所蔵されている。表面には、釘、鎚、釘貫などの「受難の道具」の模様が描かれている。また、表面中央部に「H I S」の刻銘がある。裏面には竹葉が描かれている。両面とも背景には魚子(ななこ)文様が細工されている。表側を開けると内部が仕切られており、聖遺物容器とされている。時期は16世紀後期～17世紀初期の日本製である。

この2点の共通点は「受難の道具」を描き、背面には魚子文様が細工されていることであり東京国立博物館所蔵の聖遺物容器と同じく、原城出土の聖遺物容器は日本製の可能性がある。

また、1951年(昭和26)2月に原城本丸跡から出土した金製十字架がある。

縦4.8cm、横3.2cmで、金線を縫り合せた緻密なデザインが施され、籠状筒型となり、聖遺物容器と思われる。現在この十字架は南蛮文化館が所蔵されているが、非公開の資料となっている。

十字架のレリーフ (図7. 26)

26は、鉛製の平板状の片面に十字架のレリーフがついたものである。鋳型に鉛を溶かし込んだ状態であり、十字架製作過程の途中のようであると思われるが、十字架部の縦軸が1.9cm、横軸が1.3cmであり、出土した他の十字架と比較するとあまりにも小さいため、十字架単体での使用は考えにくい。下部は変形しているが、上部縁に残るカーブや下部は変形しているが楕円状の形状を残しているようであり、復元してみると、円形ないし楕円形となり、上部に穿孔を施すと、ペンダントとして利用できると思われる。裏面は無文である。

②メダイ

メダイは主に真鍮製である。形状は全て楕円形で、横両縁部と下縁部に突起物が付くものがある。3種類(I～III)の大きさと2種類(A・B)に分けられ、それぞれの表裏には絵が描かれている。小さいものはロザリオの先端に付けられるものである。

楕円形の長径・短径で種別し、I類は長径2cm以上、II類は、長径が1.5cm以上で縁部の形状から2タイプに分けられる。II類-Aは、横両縁部と下縁部に突起物が付くもの。II類-Bは、突起物が付かないもの。III類は長径が1.5cm以下で、縁部の形状から2タイプに分けられる。III類-Aは、横両縁部と下縁部に突起物が付くもの。III類-Bは、突起物が付かないものである。他に聖遺物容器を別枠とした。

I-A (図7. 5・9)

5は、表面は「福者フランシスコ・ザビエル」、裏面は「福者イグナチオ・デ・ロヨラ」を描く。

ザビエルとロヨラの列福は1619年(元和5)に行なわれ、列聖は1622年(元和8)であった。したがってそのメダイは、その間に製作され日本に送られたものであろう。1621年(元和7)9月25日、加津佐の庄屋ミゲル助エ門の家に隠れていた中浦神父は、ローマのマスカレニア神父に宛てた手紙で、その神父から受けたメダイなどに感謝して直ちに信者達に分け与えたと書いている。出土したこれらのメダイはその時のものかもしれない。

9は、表面は「聖杯とホステアを拝む天使の絵」、裏面は文字で刻銘はポルトガル語で「LOVVADO SEIA O SANCTISSIMO SACRAMENTO」(いとも尊き聖体の秘蹟はほめ尊まれ給え)を描く。

II-A (図7. 3・4・6・7・12)

3は、表面は「天使聖体礼拝図」、裏面は腐食のため図像は不明である。4は、表面に「天使聖体礼拝図」裏面は不明である。6は、表面に「無原罪の聖母像」、裏面は不明である。

7は、表面は文字、裏面は不明である。12は、図像は腐食により図像が明らかでないが、表面に「聖人立像」、裏面には「両手を広げた人物像」がわかる。

II-B (図7. 11)

11は、表面に十字架と文字、刻銘は不明である。裏面に文字、刻銘は不明である。

III-A (図7. 2・8・10・13・14)

2, 8は、ともに表面に「無原罪の聖母像」、裏面は不明である。10は表面に「無原罪の聖母像」、裏面は「十字架上のキリスト」である。13は、表面は「聖杯とホステアを拝む天使の絵」、裏面は文字である。このタイプのメダイの図像は表面には天使聖体礼拝図、裏面には銘文を記したものしか存在せず、神戸市立博物館収蔵のメダイと比較され同型であることがわかった(今野2007)。また、今野氏は、「無原罪の聖母像」図像を、「アウレオーラの形状」、「星の数」、「結び目の数」、「マリアの体の向き」の4点から分類を行われている(今野2008)。原城出土の「無原罪の聖母像」図像は腐食により図像が明らかでないため、この分類は現状では行っていない。14は、上部の穿孔部分が欠損しているが、表面には人物像と裏面には人物立像らしき図像がある。

III-B (図7. 1)

1は、原城出土最小のメダイである。表面に「キリスト像」、裏面には「聖母像」である。

聖遺物容器 (図7. メダイ15)

15は、青銅製の箱型メダイで、聖遺物容器である。表裏面は腐食のため図像は見えないが、X線写真で図柄が僅かに判明できる。浮かび上がった図柄は箱内面か裏面のどちらに描かれているかは分からないが、楕円形の圏線の中に罪票十字架が描かれ、圏線の外側には波状の文様が描かれている。箱形であるため何らかの蓋状のものがあると思われるが出土していない。

以上、原城出土のメダイについて分類を行ったが、16世紀以降、ヨーロッパでは同様のメダイが大量に生産され、多種多様なものが存在しているという美術史学側からの報告もあり(浅野2008)、今後ヨーロッパなどで伝世している資料との比較研究や各分野からの学融合的な調査研究が必要とされている。

③ロザリオの珠 (図8. ロザリオの珠1~12)

ロザリオの珠は、青色、緑色、白色のガラス製で、花形や球形また14面にカットされたものがある。すべてのものは中央に穴が開けられており紐を通すようになっている。

花形のものは、本珠の貫孔径が大きいので、通常のロザリオの珠として使用されたのではなく、根締めで使用したり、飾り珠の可能性もある。白色の珠は、ロザリオの小珠であると思われる。

④花十字紋瓦（図8．花十字瓦1～4）

花十字紋瓦片は、軒丸瓦と呼ばれる瓦の破片であり、瓦当面に花十字紋の模様を有する瓦である。1613年（慶長18）のキリシタン禁教令が出されるまでの間、長崎市では万才町遺跡のミゼリコルディア（福祉事業団）、勝山町遺跡のドミンゴ教会などキリシタン関係施設の屋根瓦に使用されていた。長崎市内からの出土は多いが、16世紀末キリシタン文化の中心地であった有馬の地では初めての出土で、しかもキリシタン大名の居城からの出土であった。鹿児島（鶴丸）城二之丸跡からも、四点の花十字紋瓦が出土していることが報告されている。

島原半島におけるキリシタン関係施設は半島南部において、セミナリヨ・コレジオなどの施設があったが建物跡など未だ検出されていない。今回原城での出土は、キリシタン大名である有馬晴信が築城した城からの出土であり、この瓦の使用施設・場所は不明であるが、出土した場所は本丸に入る最初の大きな門跡で、その施設に使用されていた可能性もある。宣教師の『1604年度日本準管区年報』によれば、晴信の新城が完成しキリシタンによる祝福を受けたことが書かれている。このことから、原城を象徴するような施設に使用されていたことが推定されるが、出土した花十字紋瓦片の断面はかなり磨耗しており、他に多く出土している瓦片の断面とは異なった様相であるため疑問が残るところである。1614年（慶長19）に長崎の諸教会やキリシタン施設がことごとく破壊されている。この瓦礫の山と化した教会跡から、この花十字紋瓦の破片を拾い大切にしていたものを、原城龍城の際に持ち込んだものと考えられないだろうか。破片面がきれいに磨耗しているのはそのためではないかと思われる。

これらの花十字紋瓦について、文様形態の分類が行われている。文様は、花十字紋とその周囲に配された連珠文で構成される。配置としては、花十字を圏文で囲み、その外側に連珠が配されるものと、圏文が無いものの2種類に分類される。花十字の形態によってA～D類の4種、連珠文は、8個、12個、16個、20個の4種類に分類され、全7種の文様形態が存在していることが確認されている（宮下2006）。

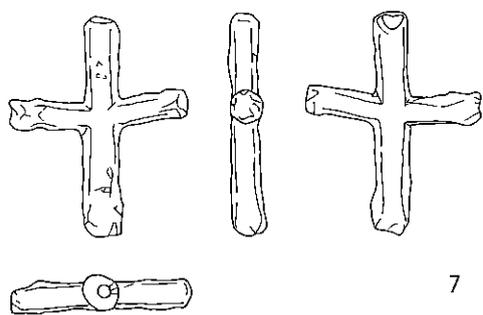
しかし、花十字紋瓦の生産地や生産者に関しては一切不明であるため、島原半島での検出及び長崎市出土瓦との比較研究が今後の課題である。

（松本）

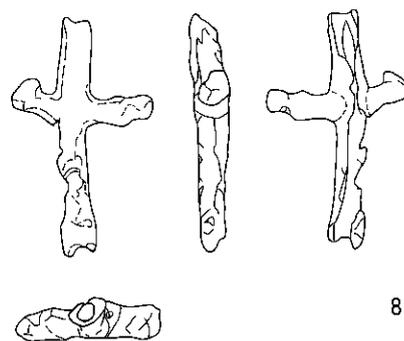
【補註・参考文献】

宮下雅史「花十字紋考」『西海考古』5号 西海考古同人会 2003

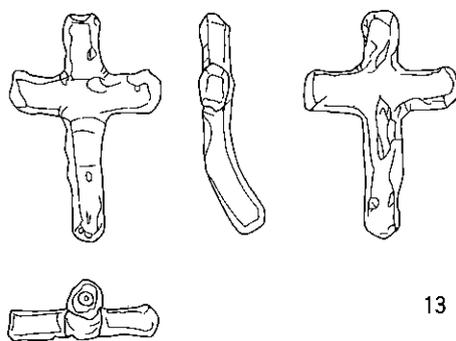
I-A



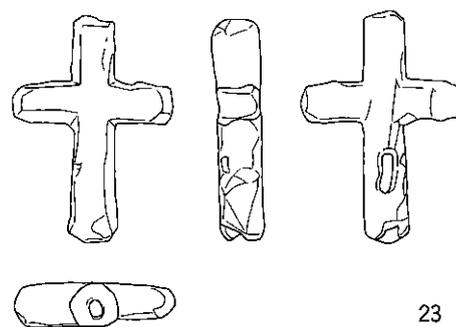
7



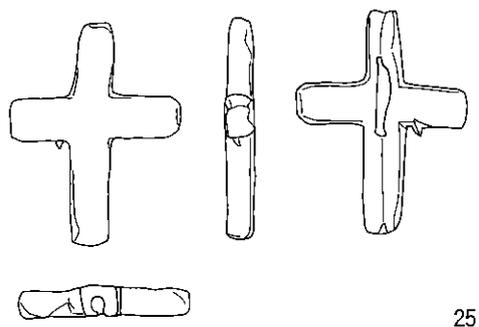
8



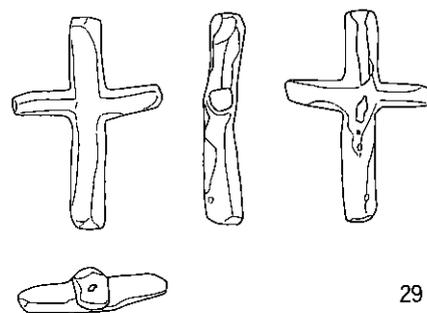
13



23

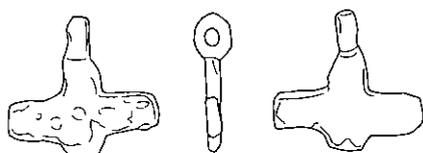


25



29

I-B

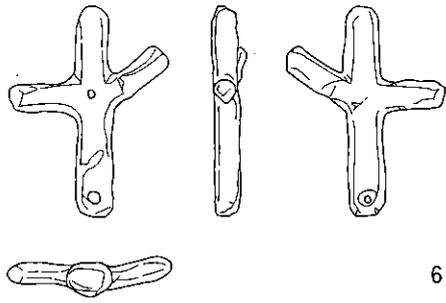


16

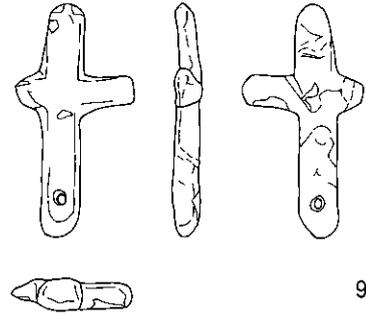


第1圖 十字架①

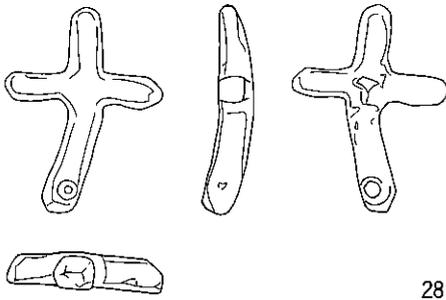
I-C



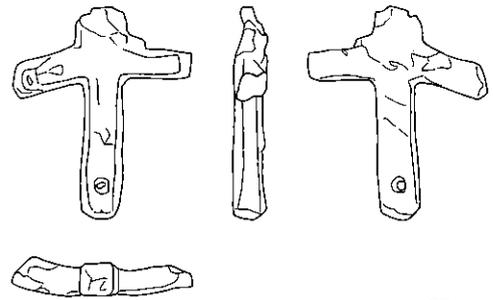
6



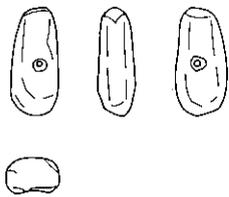
9



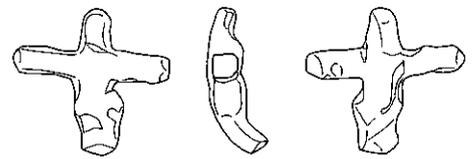
28



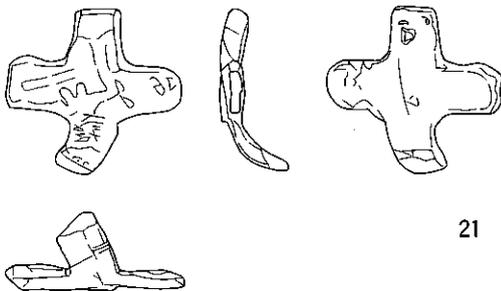
30



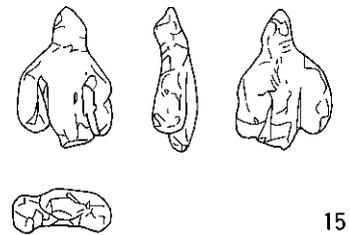
14



3



21

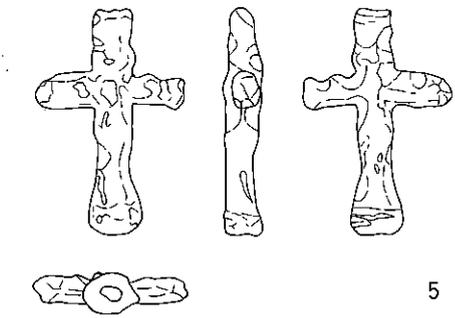


15

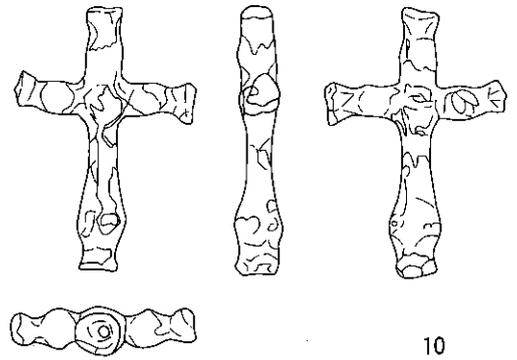


第2圖 十字架②

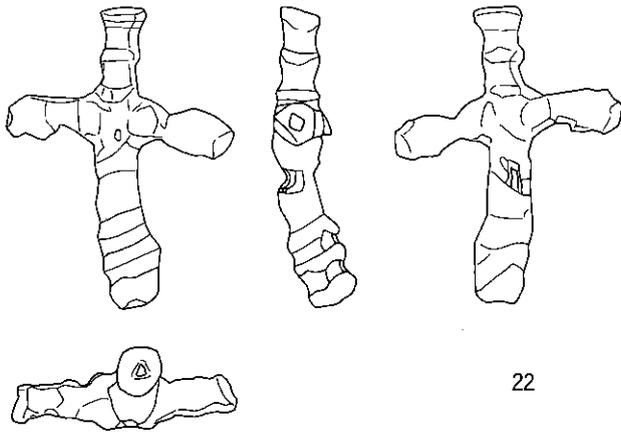
II-A



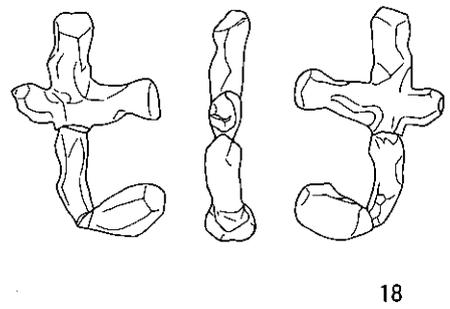
5



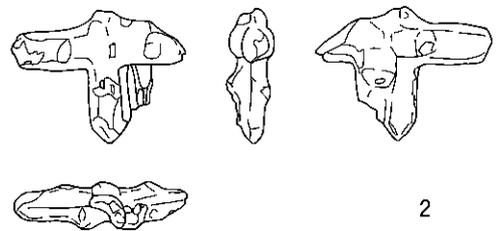
10



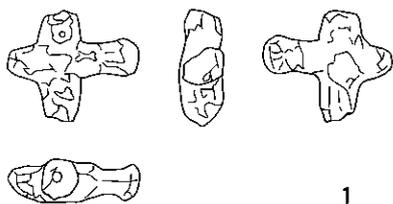
22



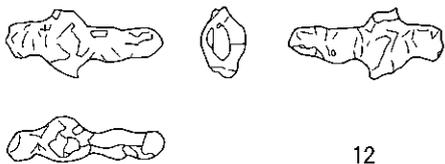
18



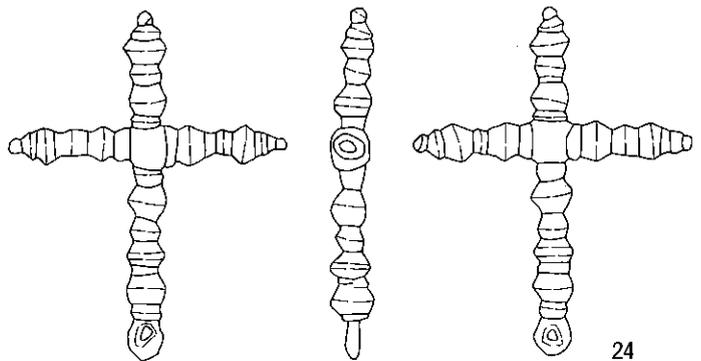
2



1



12

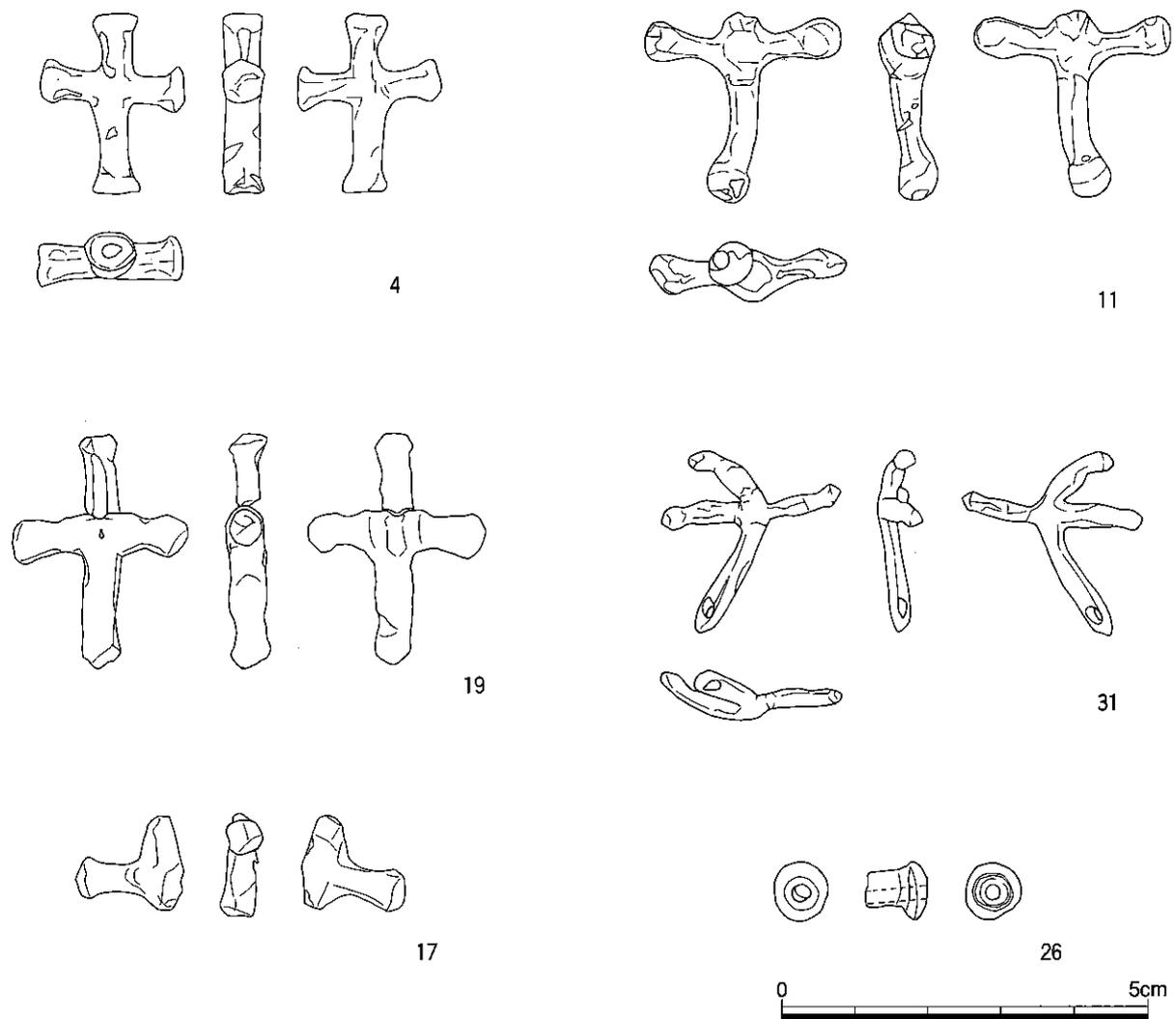


24



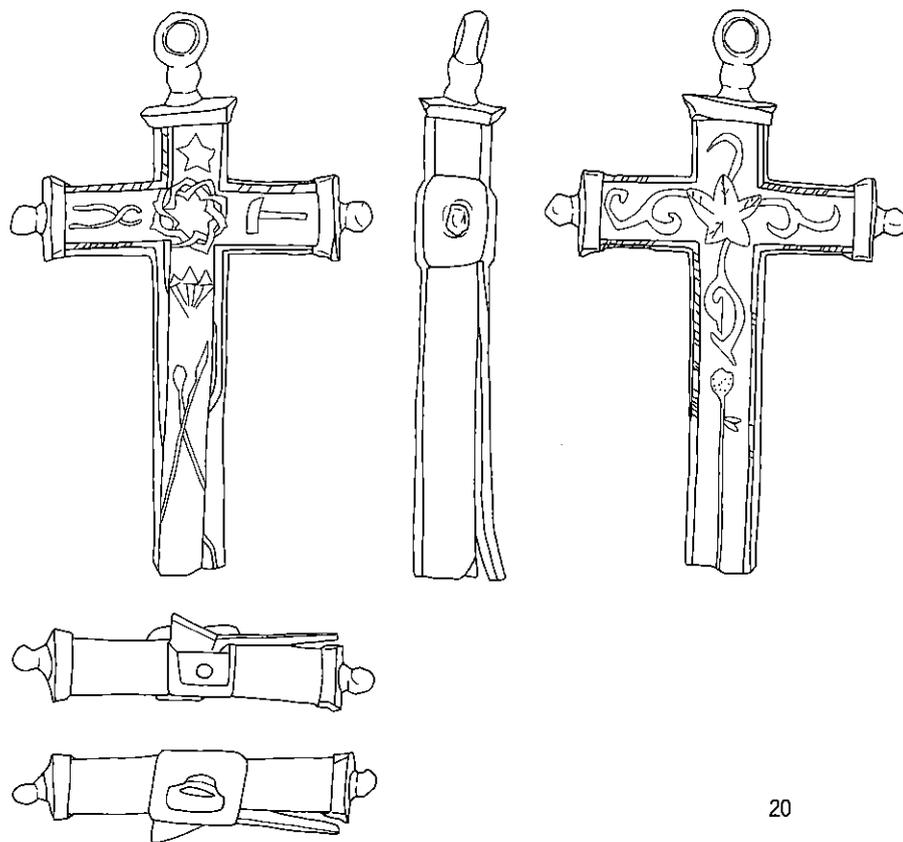
第3图 十字架③

II-B



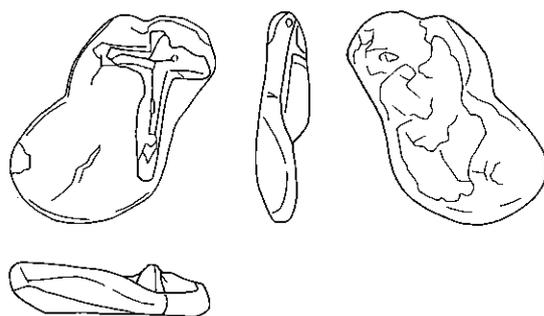
第4图 十字架④

十字架 聖遺物容器



20

レリーフ 十字架



26

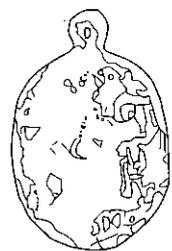


第5図 十字架⑤

I-A

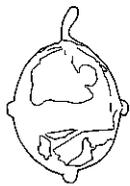


5

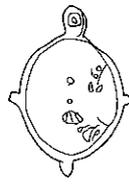
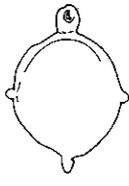


9

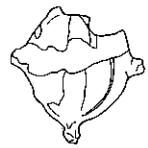
II-A



3

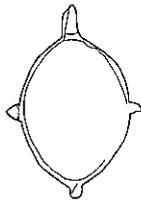
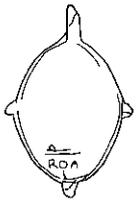


4



6

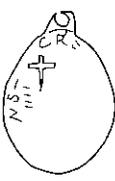
II-B



7

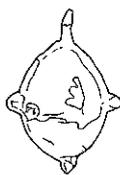


12

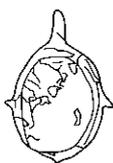
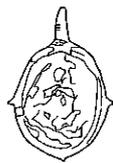


11

III-A



2



8

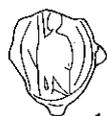


10

III-B



13



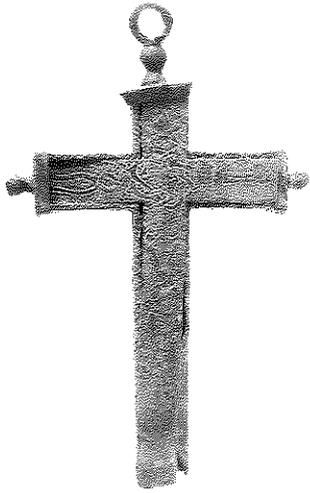
14



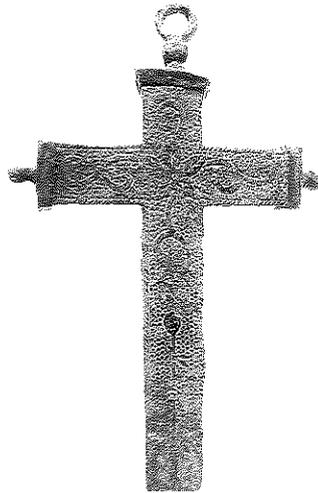
1

第6図 メダイ

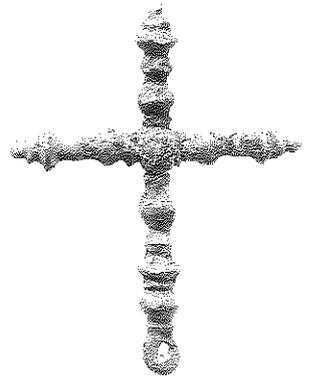
十字架



1. 「受難の道具」 模様



2. 「蔦」 模様



3. 十字架

メダイ



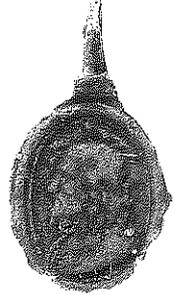
4. M-5 フランシスコ・ザビエル像



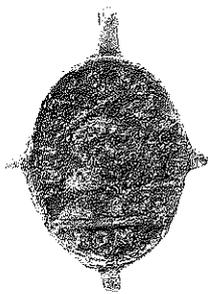
5. M-5 イグナチオ・デ・ロヨラ像



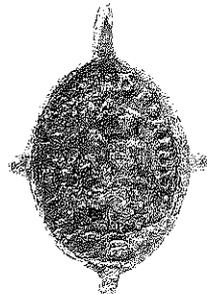
6. M-1 マリア像



7. M-1 キリスト像



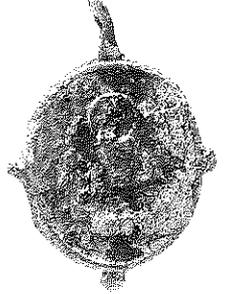
8. M-7 文字



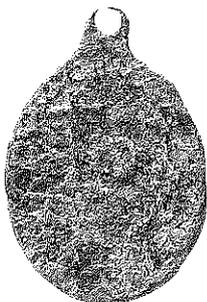
9. M-7 文字人物像



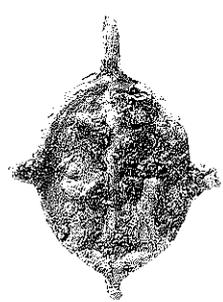
10. M-2 無原罪の聖母像



11. M-13 天使聖体礼拝図



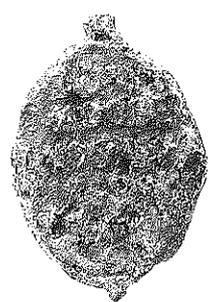
12. M-11 十字架



13. M-10 磔刑像



14. M-12 聖人立像



15. M-13 文字

表1 十字架観察表

番号	種別	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重さ(g)	材質	出土地点	備考
1	十字架	—	—	0.53	2.465	鉛	17	上下筒状
2	十字架	—	—	0.60	4.740	鉛	17	上下筒状
3	十字架	2.20	2.30	0.20	6.646	鉛	22	
4	十字架	2.50	2.00	0.50	4.648	鉛	17	上下筒状
5	十字架	2.90	1.95	0.40	4.197	鉛	17	上下筒状
6	十字架	2.80	2.20	0.50	6.029	鉛	20	下部穿孔あり
7	十字架	2.90	2.40	0.50	4.751	鉛	19	上下筒状
8	十字架	3.18	1.88	0.42	3.628	鉛	20	上下筒状
9	十字架	3.05	1.60	0.40	4.607	鉛	19	下部穿孔あり
10	十字架	3.50	2.35	0.50	7.274	鉛	19	上下筒状
11	十字架	2.50	2.65	1.75	6.646	鉛	17	上下筒状
12	十字架	—	—	0.56	2.386	鉛	15	上下筒状
13	十字架	2.15	2.30	0.30	5.368	鉛	20	上下筒状
14	十字架	—	—	0.60	2.445	鉛	18	下部穿孔あり
15	十字架	—	—	0.60	4.338	鉛	17	
16	十字架	—	2.00	0.20	1.584	鉛	28	上部穿孔あり
17	十字架	—	—	0.49	2.204	鉛	30	上下筒状
18	十字架	—	—	0.35	4.648	鉛	30	上下筒状
19	十字架	—	2.42	0.40	5.077	鉛	30	上下筒状
20	十字架	7.45	4.70	1.07	25.813	青銅	38	(両面) 魚子(ななこ)文様・箱形
21	十字架	1.98	2.10	0.40	3.244	鉛	38	
22	十字架	4.00	3.00	0.79	7.999	鉛	38	上下筒状
23	十字架	3.00	2.11	0.61	7.658	鉛	39	上下筒状
24	十字架	4.61	3.70	0.55	6.295	青銅	39	下部穿孔あり
25	十字架	2.94	2.26	0.40	5.274	鉛	39	上下筒状
26	十字架	0.80	0.75	0.80	0.439	ガラス	30	筒状
27	十字架	2.80	1.80	0.62	13.446	鉛	50	レリーフ状
28	十字架	2.78	2.00	0.40	5.892	鉛	50	下部穿孔あり
29	十字架	2.80	2.00	0.40	4.684	鉛	56	上下筒状
30	十字架	—	2.32	0.41	4.436	鉛	56	穿孔あり
31	十字架	2.50	2.40	0.30	2.845	鉛	59	穿孔あり
32	十字架	—	—	0.35	0.807	鉛	73	
33	十字架	1.90	1.10	0.42	2.094	鉛	81	
34	十字架	2.95	2.20	0.65	6.170	鉛	59	上下筒状
35	十字架	1.65	1.81	0.70	2.505	鉛	59	
36	十字架	2.40	2.30	0.40	3.476	鉛	64	上下筒状
37	十字架	3.25	1.20	0.52	3.677	鉛	64	下部穿孔あり
38	十字架	4.05	1.51	0.70	6.612	鉛	64	上下筒状

表2 メダイ観察表

番号	種別	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重さ(g)	材質	出土地点	備考
1	メダイ	2.10	1.10	0.10	0.848	真鍮	17	キリスト像/聖母像
2	メダイ	2.10	1.50	0.20	0.934	真鍮	17	無原罪の聖母像
3	メダイ	2.30	1.60	0.15	1.737	真鍮	20	天使聖体礼拝図
4	メダイ	2.25	1.65	0.15	1.391	真鍮	20	天使聖体礼拝図
5	メダイ	3.15	2.05	0.20	4.356	真鍮	20	副者
6	メダイ	1.70	1.85	0.20	0.908	真鍮	20	無原罪の聖母像
7	メダイ	2.60	1.75	0.10	1.396	真鍮	22	文字
8	メダイ	1.90	1.30	0.20	1.378	真鍮	20	無原罪の聖母像
9	メダイ	3.00	2.05	0.20	3.536	真鍮	19	聖杯とホスティアを捧ぐ天使の絵/文字
10	メダイ	2.10	1.50	0.20	0.806	真鍮	20	無原罪の聖母像
11	メダイ	2.10	1.40	0.10	1.266	真鍮	25	十字架と文字
12	メダイ	2.30	1.40	0.20	1.082	真鍮	28	聖人立像
13	メダイ	1.80	1.20	0.15	0.757	真鍮	30	聖杯とホスティアを捧ぐ天使の絵
14	メダイ	1.40	1.20	0.10	0.612	真鍮	39	人物像
15	メダイ	3.45	2.30	1.00	5.311	純銅	77	聖遺物容器
16	メダイ	2.52	1.60	0.42	1.546	真鍮	59	

第7節 原城跡出土人骨について

キリシタン遺物の出土で注目すべきことは、必ず人骨が伴って出土していることであり、籠城中の信者が最後まで握りしめていたのであろう。乱の壮絶な最後の様子が窺えるものである。出土した人骨は、各虎口跡及び破壊された石垣の下、本丸広場一帯から出土している。完全に揃った骨はほとんど無く、みな部分的な骨であり、頭部がない上半身部、下半身部、腕、足、頭だけが散乱している。

なかには、大腿骨に刀などの鋭利な利器による殺傷痕がみられるものもある。それらの人骨の調査・整理は、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・生命医科学講座で行われており、整理調査を行った分部哲秋氏が、2006年日本人類学会及び2007年日本解剖学会において発表された。その内容を見てみると、1993年から1997年の調査では320点の散乱人骨を調査された。そのうち約270点が本丸内から、約50点が本丸西側の櫓台石垣の下から出土したものである。人骨約320点について、クリーニングおよび復元作業を行い、各骨の残存部位を同定し、性別と年齢を推定された。

主要な四肢骨（上腕骨、大腿骨、脛骨）について、成人男性、成人女性、未成人に分け、未成人については分部（1981）の年齢区分に従って青年（成年、16～20才）、小児Ⅱ（13～15才）、小児Ⅰ（7～12才）および幼児（6才まで）に更に分類し、重複部位から確認できる人骨数（最少数）を出された。

確認できる人骨数は計36体で、そのうち成人男性は16体（44%）、成人女性は6～8体（17～22%）、未成人は12～14体（33～39%）であった。未成人の多くは13才以上（小児Ⅱと青年）で、12才以下は小児Ⅰが1体、幼児が1体と少数しか認められていない。主要な四肢骨には成人のみならず未成人の骨もかなり認められている。また、比較的残存状態のよい頭蓋一例は、成人男性で長頭傾向が認められる。

1998年から2003年の調査では、本丸正面の連続した枡形出入口から主に出土した351点の人骨について調査された。頭蓋および主要な四肢骨について、成人男性、成人女性、未成人に分類し、重複部位から確認できる人骨数（最少数）を出された。

頭蓋は、脳頭蓋が大部分で計16個体が確認された。内訳は、成人男性7体、成人女性1体、性別不明6体、未成人2体であった。四肢骨は骨体中央部を基に、右、左側別に集計したが、右、左を合わせた本数は、大腿骨（149本）で最も多く、次いで上腕骨、脛骨で、頭蓋、橈骨、尺骨、および腓骨は少ない。側別に集計した結果では、左側の大腿骨が七八体分と最も多く、女性および未成人と推定される例も合計20体分存在した。骨種別では、椎骨、肋骨がほとんど遺存しないこともあり、緻密質の厚くて頑丈な骨の遺存率が高いものと考えられる。また、頭蓋については、四肢骨に比べて遺存数が極端に少ないため持ち去られた可能性も考えられる。

なかには、刀などの鋭利な利器による受傷痕がみられるものがあった。

1993年から1997年までの出土分では、四例に認められており、受傷部はいずれも右側大腿骨の骨幹部で、刀などの鋭利な利器による傷と考えられる。

1998年から2003年までの出土分で受傷痕が認められるものは、頭蓋2例、左側上腕骨1例（骨体部）、左側寛骨1例（寛骨臼の後部）、右側大腿骨7例（骨体部6例、骨頭1例）、左大腿骨2例（骨体部）である。これらのうち右側大腿骨骨体部一例が青年期、左大腿骨骨体部1例が女性、他11例は男性と推定されている。受傷痕は頭蓋に高頻度で存在し、四肢骨では特に大腿骨に多く認められるという報

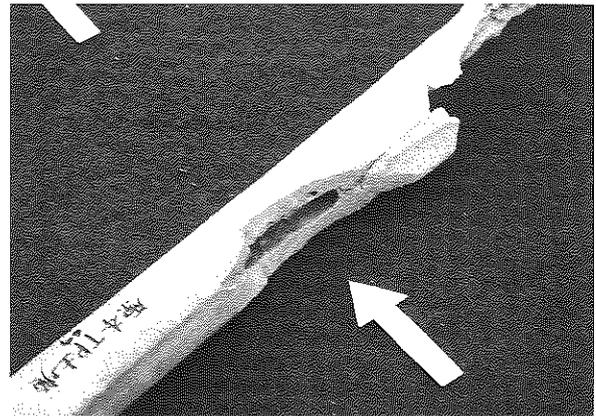
告であった。

また、これらの受傷痕は、右側に集中しているとの報告があり、非常に興味深い事例であった。

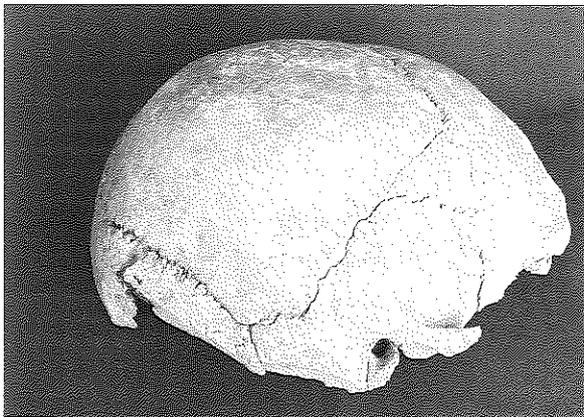
幕府の記録の中にも、乱鎮圧後わずか2日後に石垣を壊し始めている様子が伺え、一揆勢の遺体は早い時期に埋められたことが伺える。幕府軍は、一揆後の現地処理の時、周りに散乱する一揆軍の遺体を集め、石垣の下や門の空間に投げ込み、石垣の石材である巨石を上から壊して落とし、さらに土で覆い埋め尽くしたと思われる。幕府軍は籠城した一揆軍やキリシタンに対し、かなりの憎しみや恐怖感があったのではないか、それを封じ込めるかのように、原城本丸を封印した。原城本丸はまさしく巨大な墓ともいえる。この骨の出土は、乱の悲惨さをあらためて再認識させられた。



1 一刀傷 大腿骨

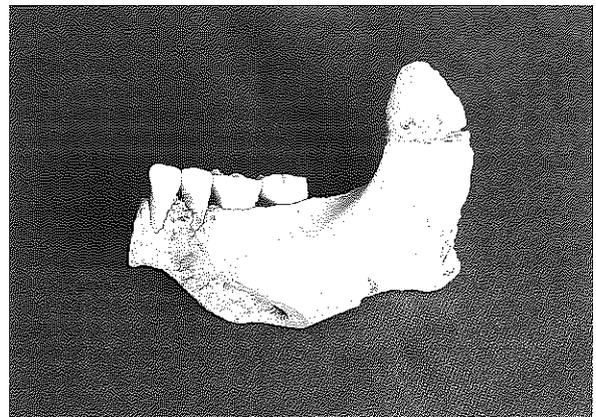


2 一刀傷 大腿骨



3 一刀傷 頭蓋

(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科撮影)



4 一刀傷 下顎

(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科撮影)

第8節 原城跡の保存と整備

原城跡は昭和13年5月30日に国指定史跡となったが、本格的な保存管理としては、昭和48年度に「原城跡整備委員会」を開催し、昭和52年度「原城跡保存管理計画」を策定した。平成元年には、「史跡原城跡環境整備計画」を策定し、平成4年（1992）度からは本丸地区を中心に発掘調査を開始した。

発掘調査では、これまでに多くの遺構、遺物が出土しており、特に十字架、メダイ、ロザリオの珠などのキリシタン関係遺物は島原の乱にまつわる資料である。また、乱後の幕府による現地処理で、壊され埋め込まれた出入口や櫓台石垣、原城本丸の正面玄関に相当する出入口などが検出され、原城築城時の遺構や「島原の乱」に対する幕府の対応を示す資料を発見した。

遺構保存の現状と課題

発掘調査において、検出した遺構は破却により破壊された石垣や門などがあり、調査後の遺構保護のための工事を行った。また、畑化による耕作で地形が改変された場所や、自然崩壊の場所が石垣に及ぼす影響が懸念される場所なども行った。

平成8年度は、石垣4および石垣7において、畑化による耕作などで石垣下が削平され、根石下が空洞となり、石垣に及ぼす影響が懸念されたため法面の保護をおこなった（図版1・2）。また、石垣18では、法面が崩れ一部が石垣の根石まで達しており、石垣崩壊の恐れがあたため法面の保護を行った（図版3）。

平成9年度は、石垣18下の法面と同様、石垣16下の法面が崩れ石垣に及ぼす影響が懸念されたため法面の保護をおこなった（図版4）。

平成10年度は、石垣4及び石垣18の上端部の保護を行った。石垣は破却により壊されており、築城時にどれだけの高さがあったかは不明であるため、根拠ある高さまで植生土嚢を積み上げた（図版5・6）。石垣7・8・9下法面においては、石垣保護のため法面の保護を行った（図版7）。

平成12年度は、発掘調査によって検出した石垣14の保護のため、石垣上端部の保護を行った。（図版8）。

平成13年度は、石垣14下の法面を平成9年度石垣16下法面保護と同様に行った（図版9）。

平成14年度は、発掘調査で検出した、本丸門の検出遺構保護のため、門空間には真土を入れ、門を構成する石垣においては、根拠ある高さまで植生土嚢を積み上げた（図版10）。石垣14下で検出した竪穴建物跡群遺構も、保護のため埋め戻しを行った（図版11）。

平成15年度は、本丸櫓台石垣の保存修理事業のため、仮設道路を設置した。本丸上部までは石垣修理に対応する大型重機が通る道路がなく、本丸西側のトイレ横に取り付くように設置した。これに伴い、発掘調査で検出した石垣14の中央部に位置する「鏡石」のハラミによる解体積み直しを行った。（図版13・14）

平成16年度は、本丸櫓台石垣、石垣15と石垣16の隅角部に後世に構築された石垣があり、その撤去を行った。（図版15）

平成17年度は、平成16年度に行った、本丸櫓台石垣、石垣15・石垣16隅角部の保護のため、土嚢による保護を行った（図版16）。また、発掘調査で検出した本丸正門の遺構保護のため、根拠ある高さまで真土で埋め戻しを行った（図版17）。

平成18年度は、本丸櫓台石垣、石垣16・石垣17隅角部の保護及び、櫓台石垣上部広場の保護のため植生土嚢を根拠ある高さまで積み、内部は真土を使用した（図版18）。

保護整備箇所の現状と課題

石垣下の法面に関しては、崩れなども見られず斜面も植栽等で安定している。石垣上端に施した植生土嚢も安定しており、崩壊の恐れはない。検出した遺構では、保護のための盛土が雨水による土砂の流れ出しが激しく、遺構面が露出する箇所もある。遺構については、豪雨時による流水の影響が大きく遺構の保護をしていく上で十分な排水対策が必要である。

整備について

原城という城郭としての特性や、「島原の乱」としての特性を十分踏まえた整備を進めるためには、本丸の未調査部分を含めた、二の丸地区、三の丸地区の発掘調査を行い、原城築城時期から島原の乱期の形状を明らかにし、わかりやすい史跡となる整備が必要である。

整備にあたっては、発掘調査の成果に基づき遺構の保存を第一として、できるだけ「島原の乱」後の破却時の姿での整備を行う。また、原城跡は広範囲にわたるため、整備については史跡の現状をふまえ、段階的な整備公開を行う上で各曲輪ごとにゾーン別の整備方針を定め、現状保存、補修、復元などのランクづけを行い短期計画、長期計画で整備する。

遺構整備については、発掘調査によって検出した主な遺構として、築城時の遺構と捉えた石垣、門、階段、水路や、島原の乱期の遺構である竪穴建物跡群があり、それぞれの遺構でさらなる調査研究や保存状況等についての現況調査を行い、その結果に基づき各遺構の特性を十分に考慮して整備を行うものとする。

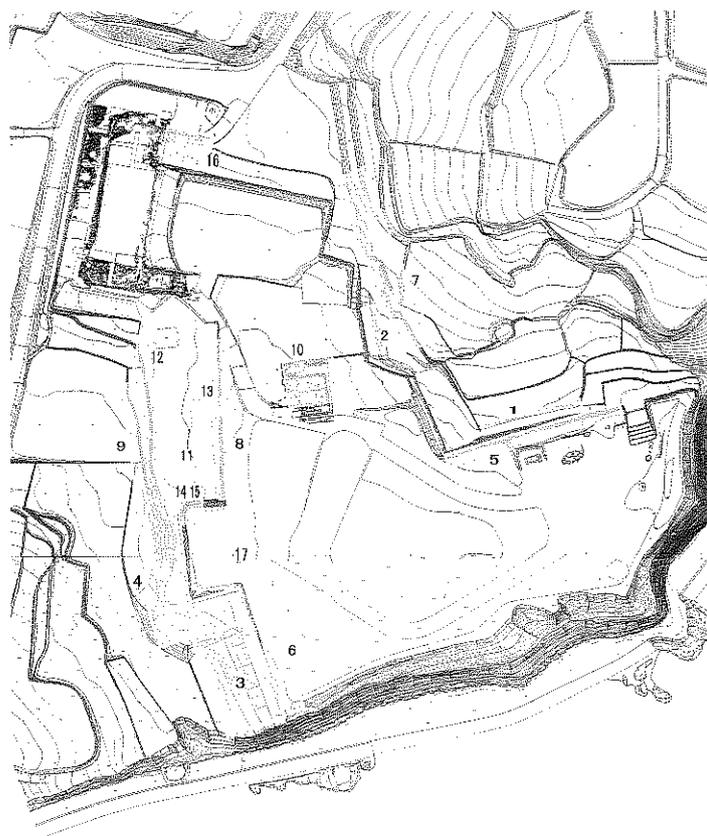
特に早期の段階で着手すると思われる石垣については、築城時の石垣を保存することを基本とし、破却での石垣状態を主に整備を進め、石垣のハラミ等により崩壊する恐れがある場合は解体積み直しを行う。

整備の課題

これまでの発掘調査によって、学術的成果など多くの成果があった。しかし、発掘調査は本丸と三の丸地区の大手門の一部を行ったに過ぎず、二の丸、三の丸、天草丸、鳩山出丸、出丸など調査は行なっておらず原城の全貌は解明できていない。また、「島原の乱」期の遺構として、対岸の幕府陣跡などの周辺環境も含めて、今後もさらなる文献調査も含めた総合的な研究が必要である。

環境整備についてこれまでは、発掘調査で検出した遺構の保護のための整備を行ってきたわけだが、本格的な整備はこれからである。長期の整備にあたっては、各専門的分野から構成する組織をつくり、当初段階での綿密な整備計画を立てることが必要であるとともに、一貫した整備方針を維持する体制づくりが必要である。

(松本)



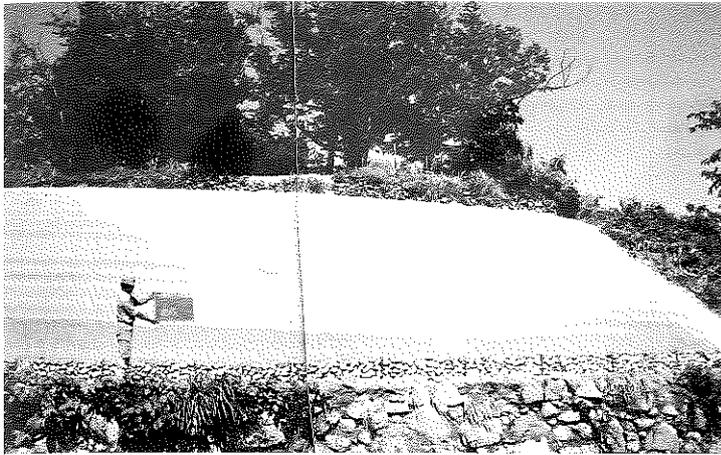
本丸跡保護工事実施状況平面図



1 - 平成 8 年度
石垣 4 保護工事



2 - 平成 8 年度
石垣 7 保護工事



3 一平成 8 年度
石垣18保護工事



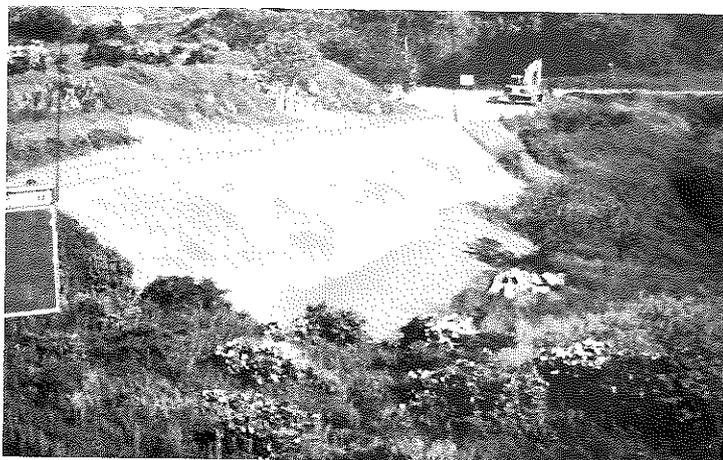
4 一平成 9 年度
石垣16・17法面保護工事



5 一平成10年度
石垣 4 保護工事



6 一平成10年度
石垣18保護工事



7—平成10年度
石垣7・8法面保護工事



8—平成12年度
石垣14法面保護工事



9—平成13年度
石垣14広場法面保護工事



10—平成14年度
本丸門保護工事



15—平成16年度
檜台石垣隅角部保護工事



16—平成17年度
檜台石垣隅角部保護工事



17—平成17年度
本丸正門遺構保護工事

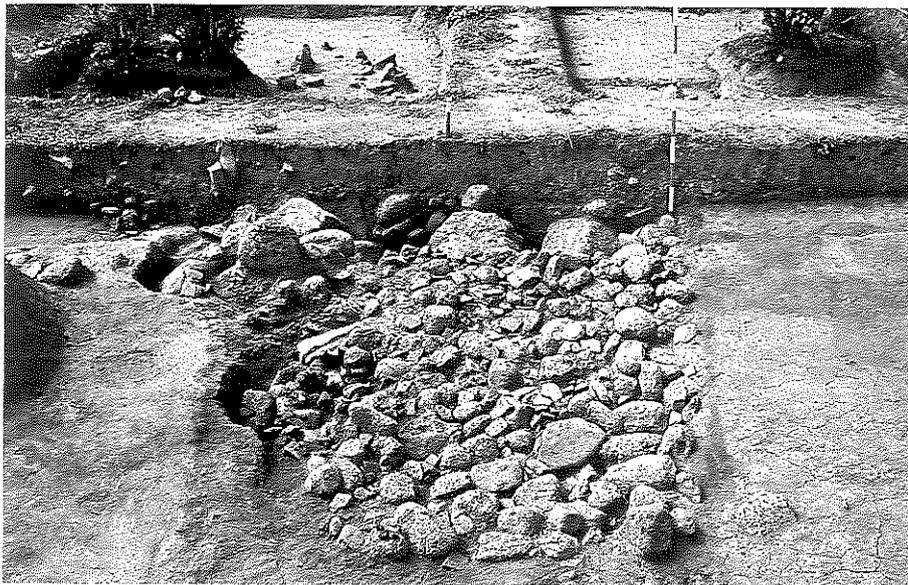


18—平成18年度
本丸檜台保護工事

写真図版



1 TP67~69調査区



2 土坑遺構検出状況



3 土坑遺構石材検出状況

平成13年度～19年度の調査（本丸地区／三の丸地区）①



1 土坑遺構検出状況

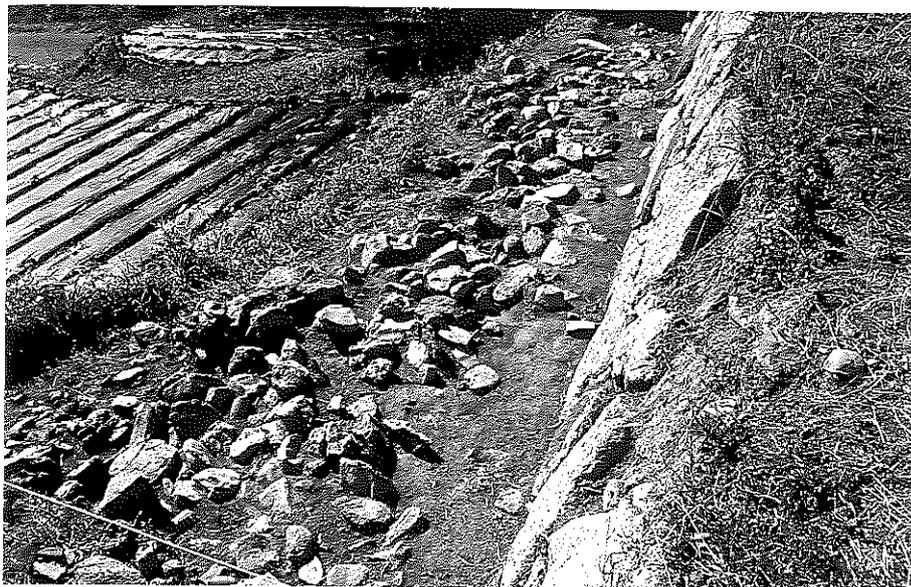


2 土坑遺構石材検出状況



3 土坑遺構全景

平成13年度～20年度の調査（本丸地区／三の丸地区）②



1 TP73石垣石材堆積状況



2 陶磁器出土状況



3 TP73完掘状況

平成13年度～21年度の調査（本丸地区／三の丸地区）③



1 本丸正門一第二門
破却状況（航空写真）



2 本丸正門一第二門
石垣石材堆積状況



3 本丸正門一第二門
石垣石材堆積状況

平成13年度～22年度の調査（本丸地区／三の丸地区）④



1 本丸正門—第二門
破却石垣石材検出
状況



2 本丸正門—第二門
破却石垣石材除去
状況



3 本丸正門—第二門
階段遺構及び水路状
遺構検出状況

平成13年度～23年度の調査（本丸地区／三の丸地区）⑤



1 本丸正門破却状況
(航空写真)



2 本丸正門石垣石材
堆積状況



3 本丸正門石垣石材
堆積状況

平成13年度～24年度の調査（本丸地区／三の丸地区）⑥



1 本丸正門破却石垣
石材検出状況



2 本丸正門破却石垣
石材検出状況



3 本丸正門石垣石材
堆積状況

平成13年度～25年度の調査（本丸地区／三の丸地区）⑦



1 本丸正門水路遺構
検出状況



2 本丸正門水路遺構
瓦敷検出状況



3 本丸正門礎石検出
状況

平成13年度～26年度の調査（本丸地区／三の丸地区）⑧



1 本丸正門隅角石利用
宝篋印塔



2 本丸正門石垣10隅
角部破却状況



3 三の丸石垣検出状況

平成13年度～27年度の調査（本丸地区／三の丸地区）⑨



1 本丸正門人骨出土状況

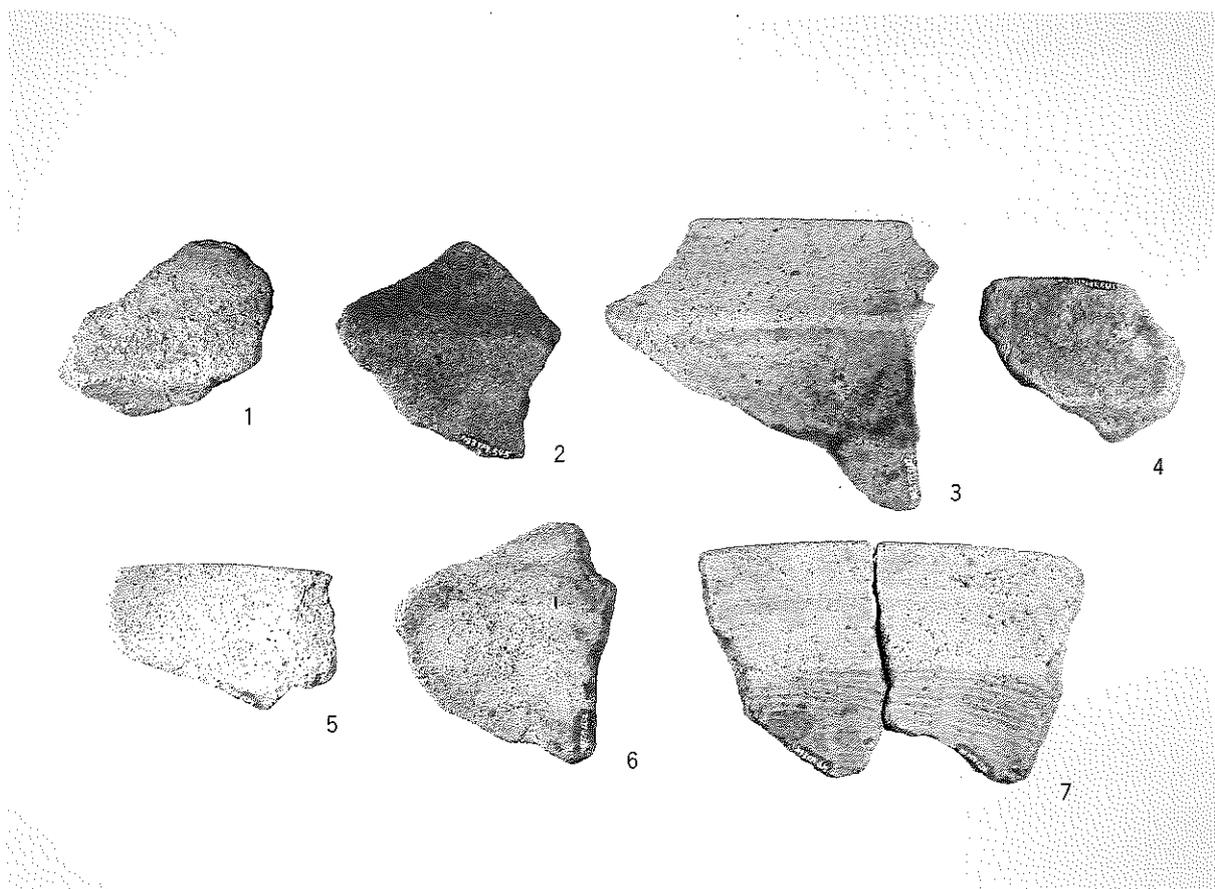
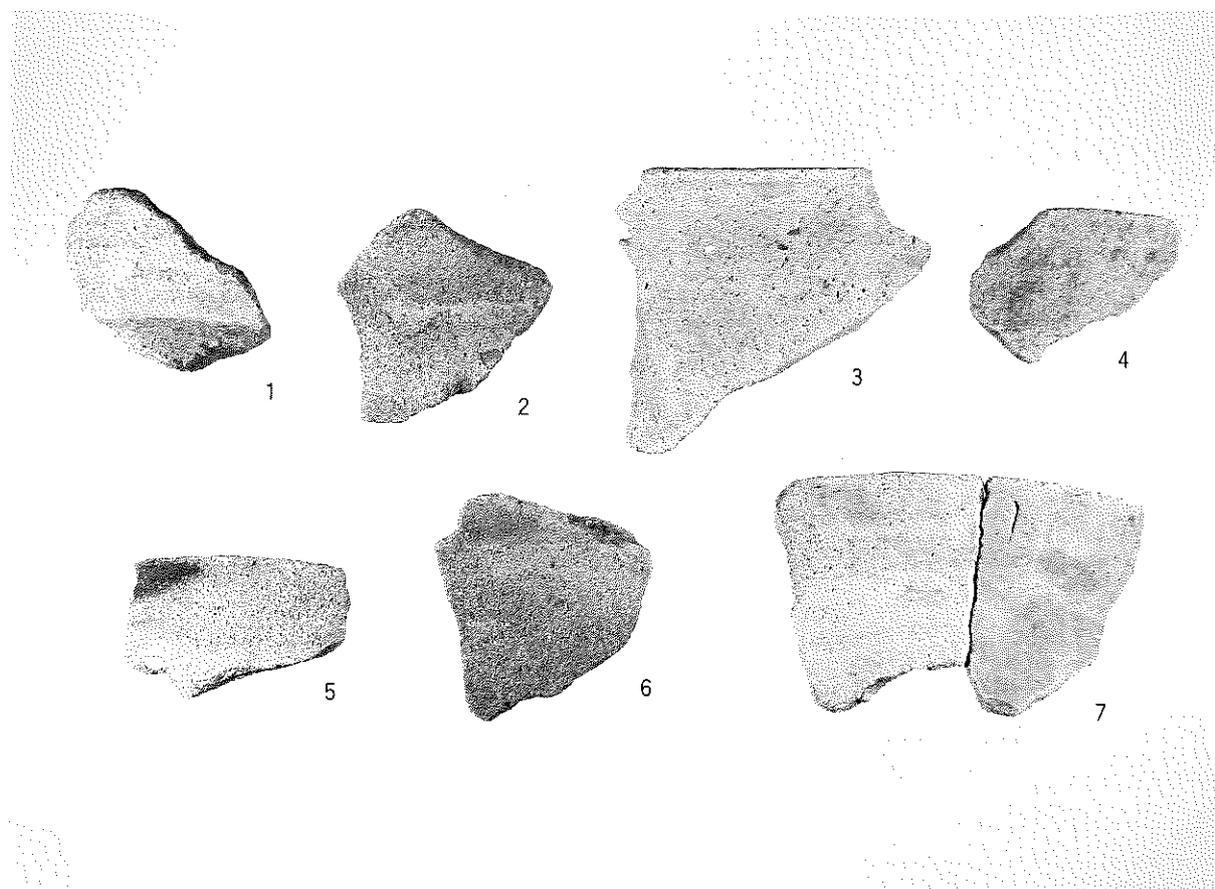


2 本丸正門人骨出土状況

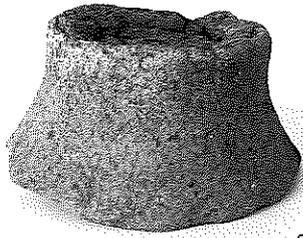


3 本丸正門出土日本陶器

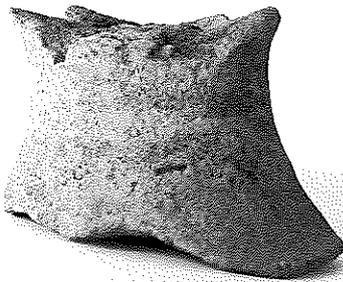
平成13年度～28年度の調査（本丸地区／三の丸地区）⑩



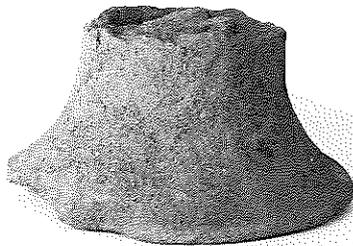
平成13年度～19年度の出土遺物（土器類）①



8



10



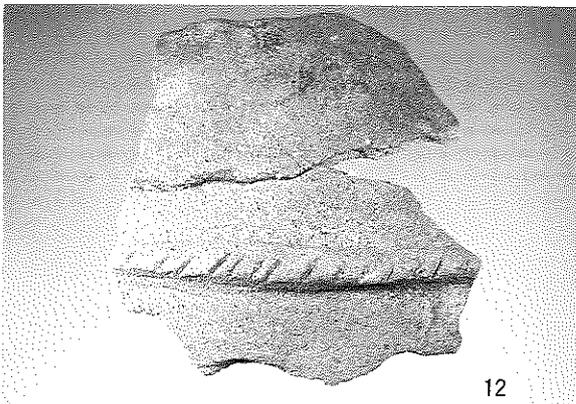
11



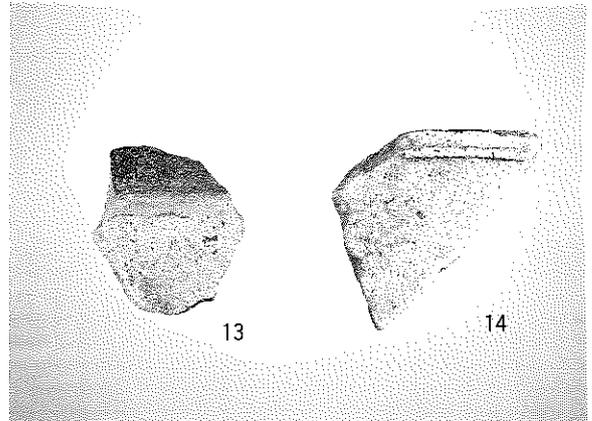
9



9



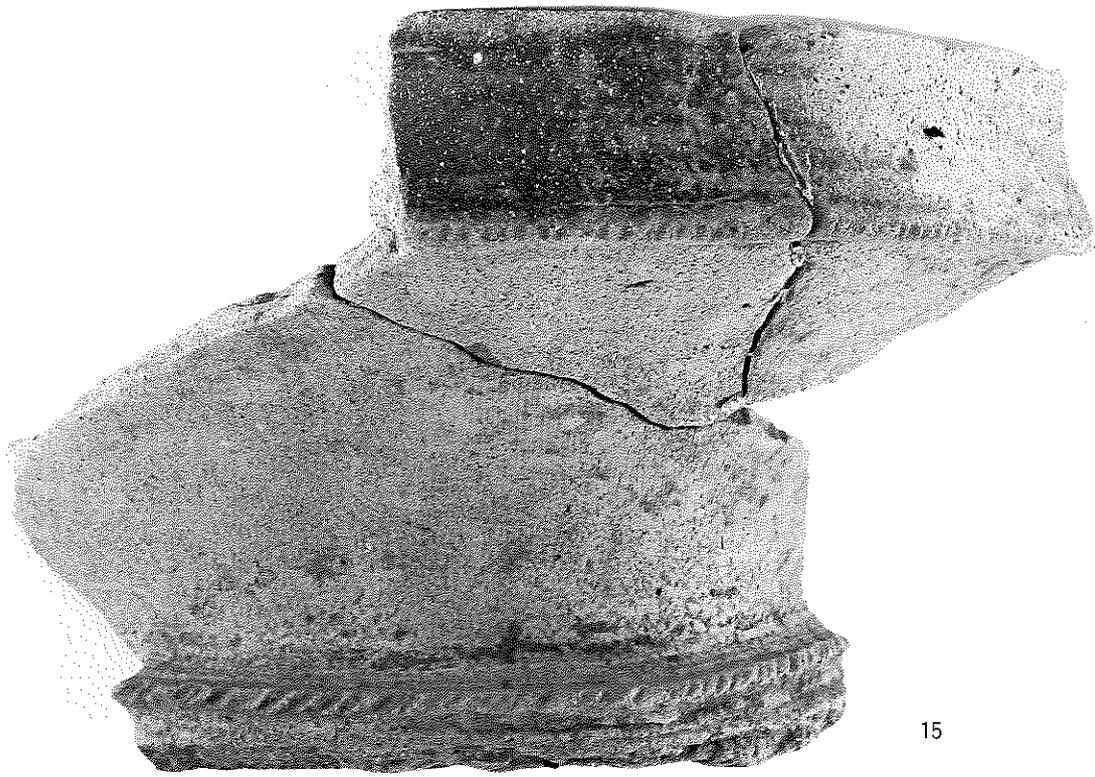
12



13

14

平成13年度～19年度の出土遺物（土器類）②

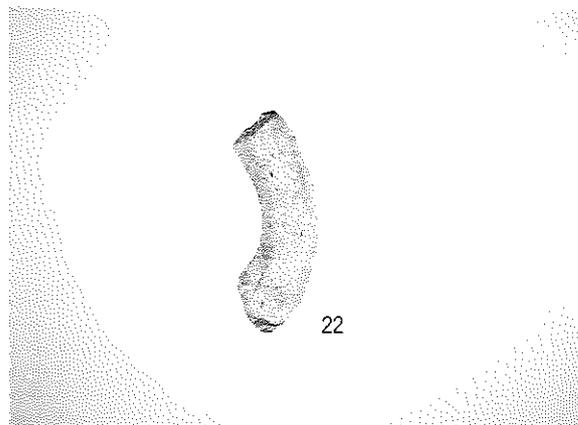
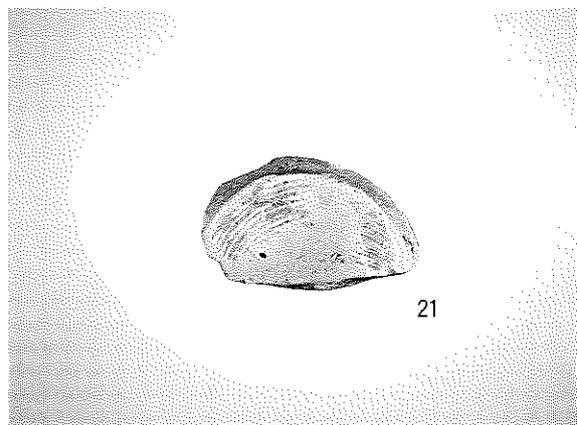
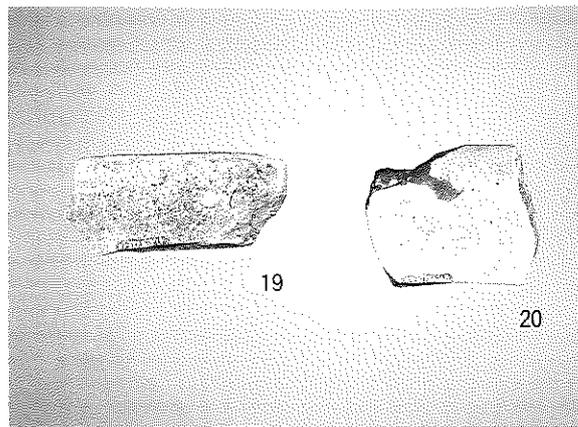
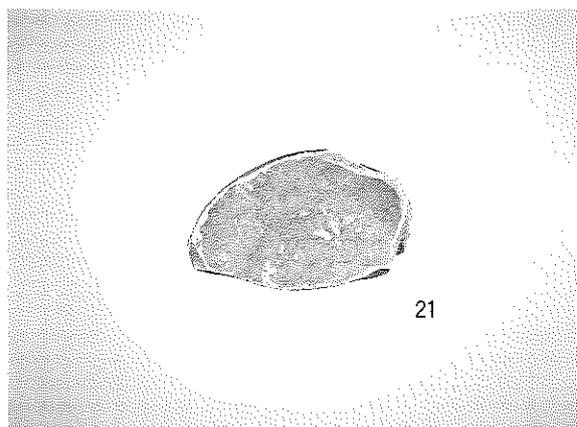
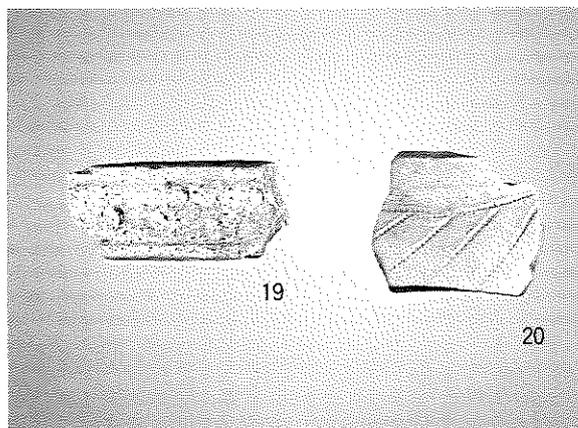
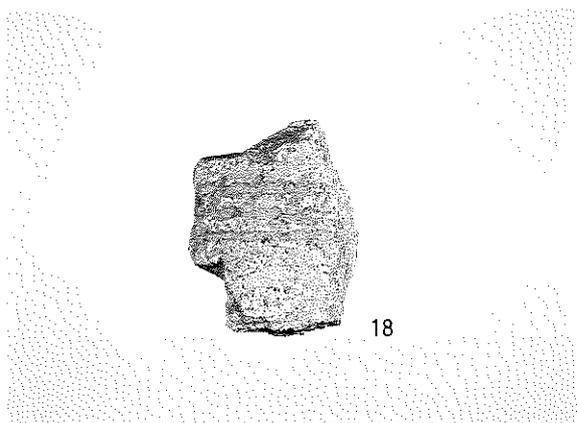
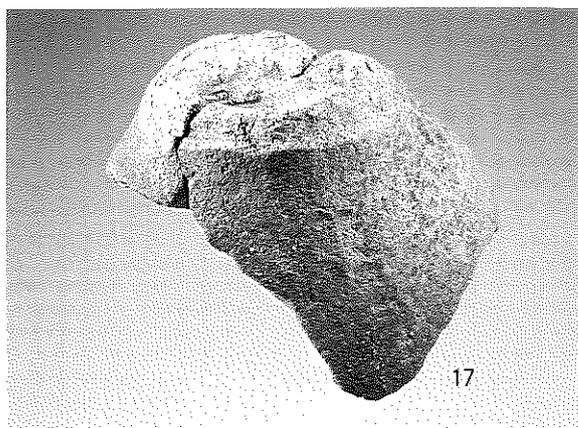
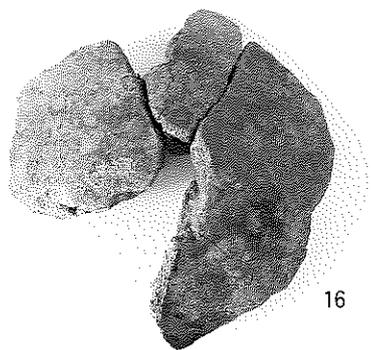


15



15

平成13年度～19年度の出土遺物（土器類）③



平成13年度～19年度の出土遺物（土器類）④



1

2



3

4



5

6



7

8



9

10

平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）①



11

12



13

14



15

16



17

18



19

20

平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）②



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）③





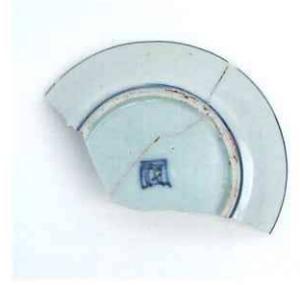
31



32



33



34



35



36



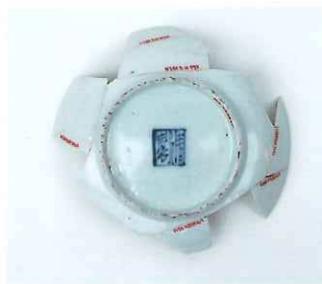
37



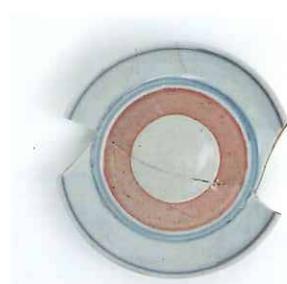
38



39



40



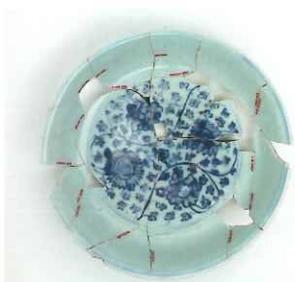
平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）④



41



42



43



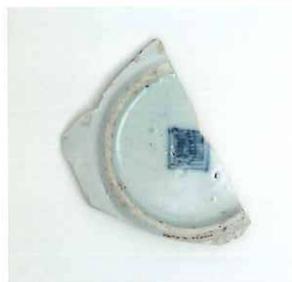
44



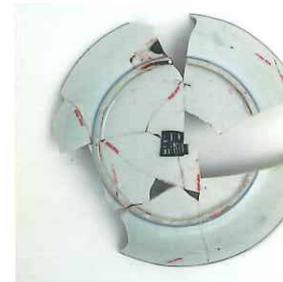
45



46



47



48

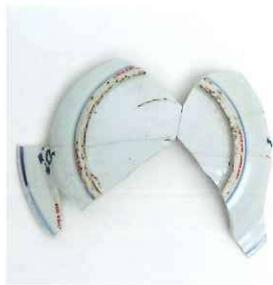


49



50

平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑤



51

52



53

54



55

56



57

58



59

60

平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑥



61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



74



平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑦



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80

平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑧



81



82



83



84



85



86



87



88



89



平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑨



90

91



92

93



94

95



96

97



98

99

平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑩



100

101



102

平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶磁）⑪



8

平成13年度～19年度の出土遺物（貿易陶器）



1

2



3

4



5

6

日本陶器



1

2



3

4

平成13年度～19年度の出土遺物（日本磁器）



5

6



7

8



9

10



11

12



13

14

平成13年度～19年度の出土遺物（日本陶器）①



15

16



17

18



19

20



21

22



23

24

平成13年度～19年度の出土遺物（日本陶器）②



25



26

27



28



29



30

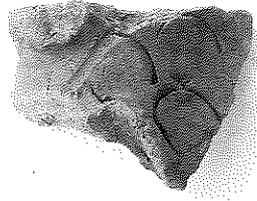


31

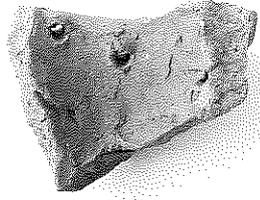


32

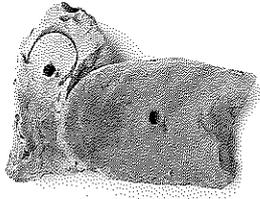
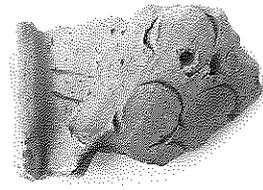
平成13年度～19年度の出土遺物（日本陶器）③



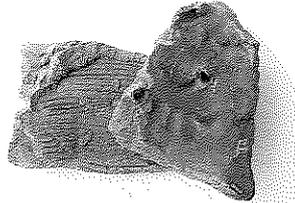
1



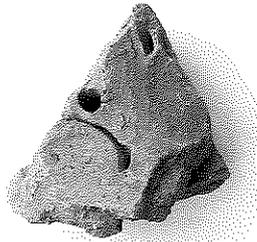
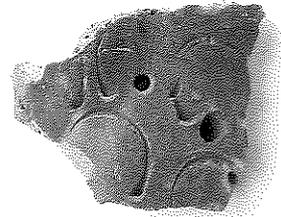
2



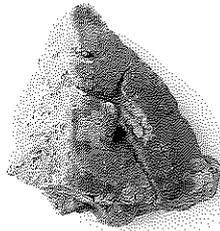
3



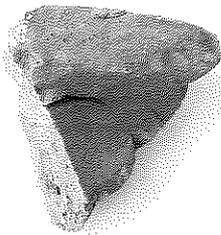
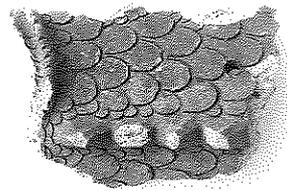
4



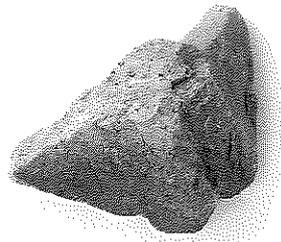
5



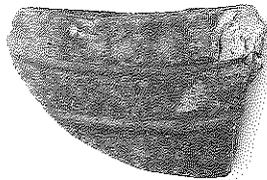
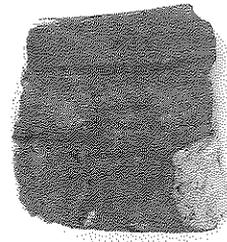
6



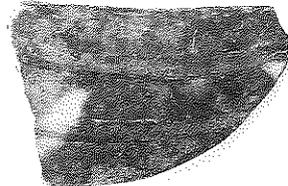
7



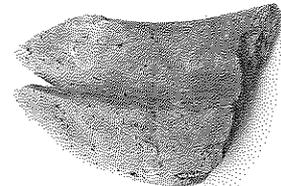
8



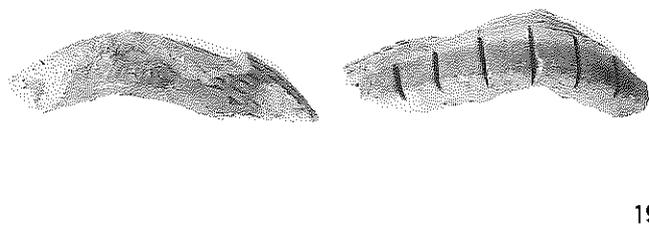
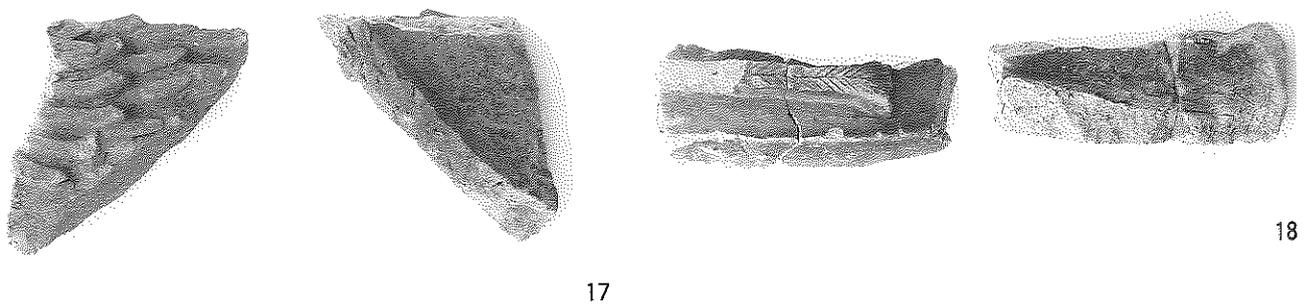
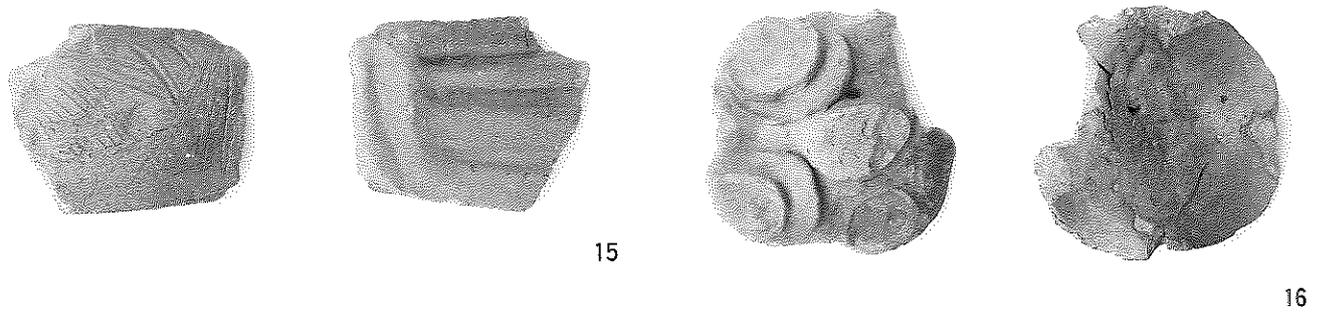
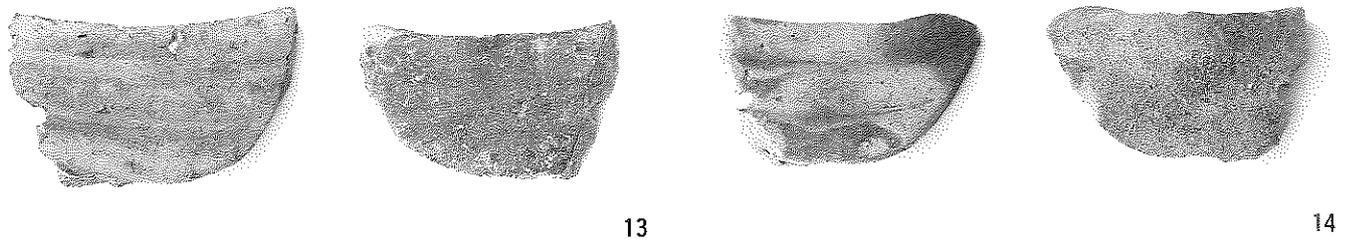
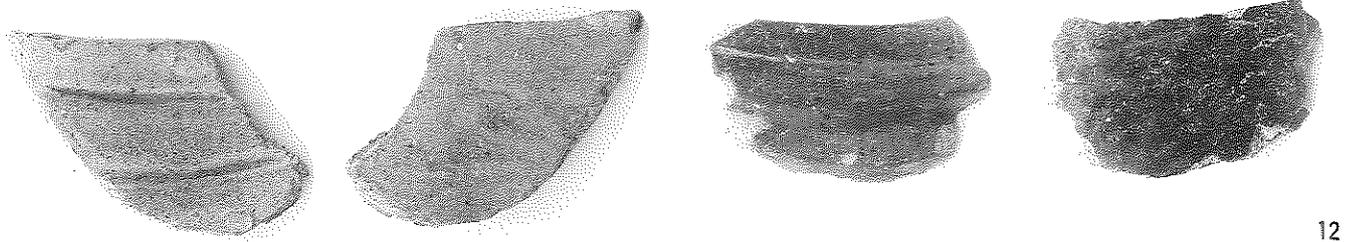
9



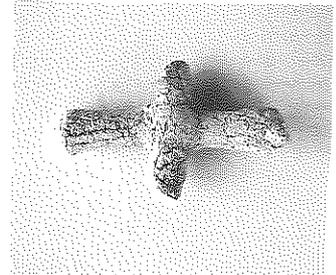
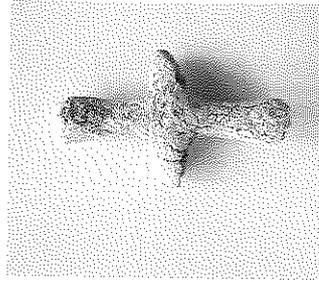
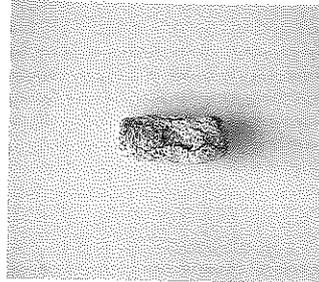
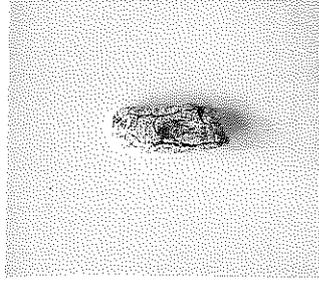
10



平成13年度～19年度の出土遺物（鯨瓦）

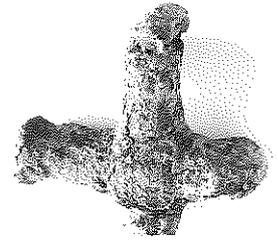
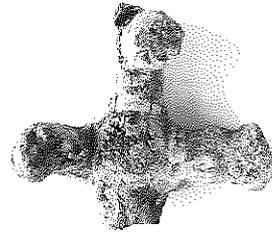
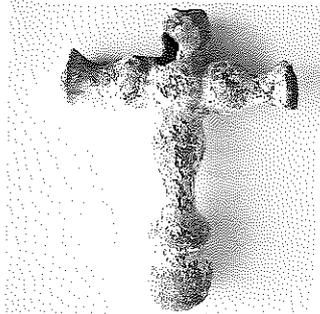
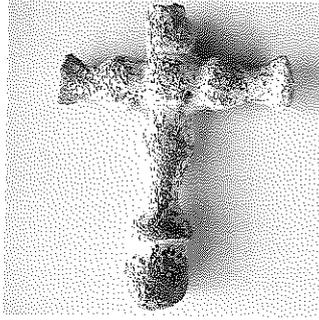


平成13年度～19年度の出土遺物（鯨瓦／飾り瓦）



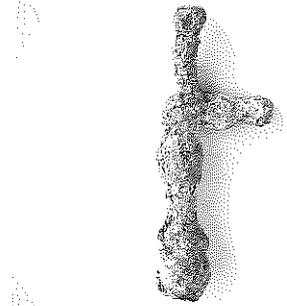
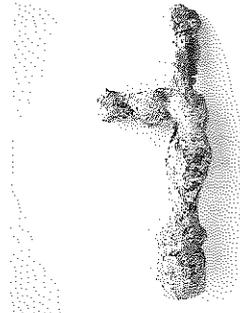
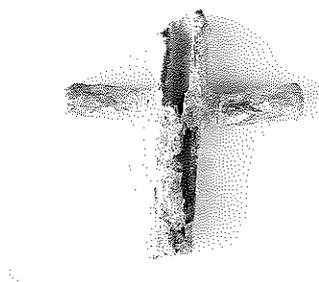
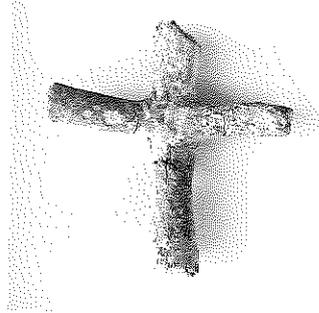
1

2



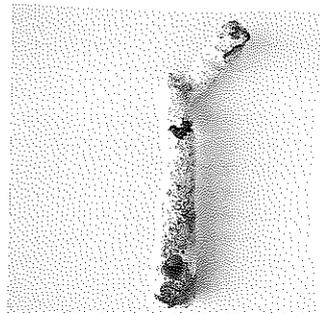
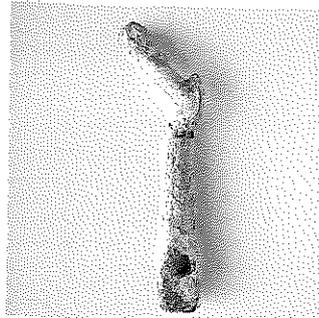
3

4



5

6



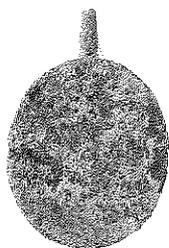
7

平成13年度～19年度の出土遺物（十字架）

図版34
メダイ

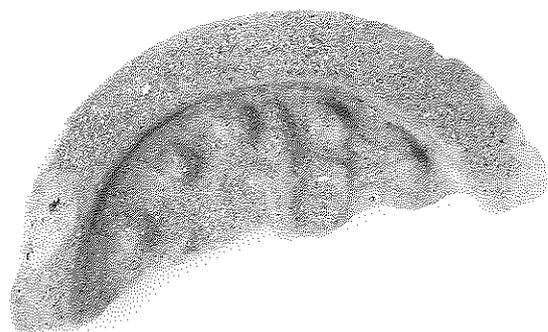


1



3

花十字紋瓦



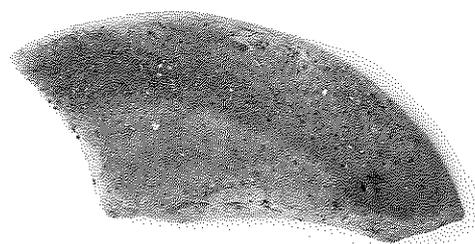
5



6

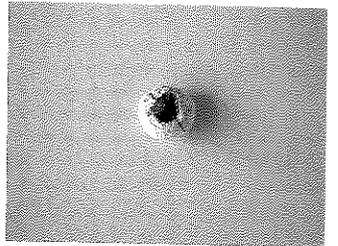
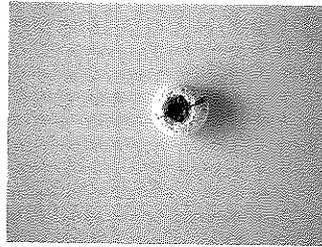
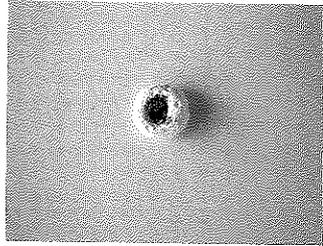
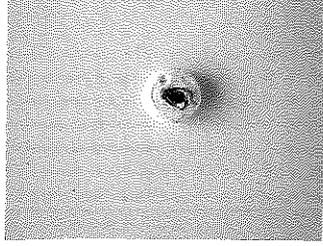


7



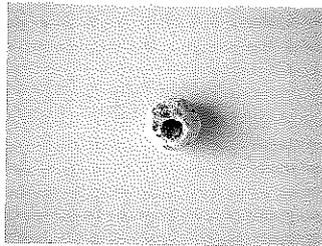
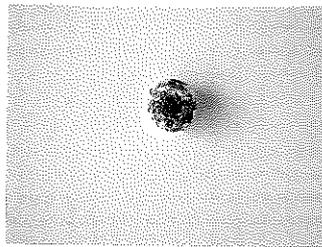
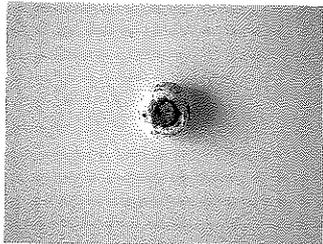
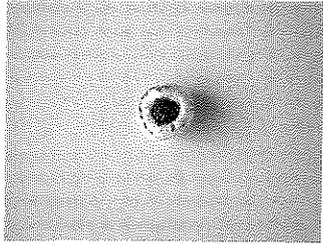
8

平成13年度～19年度の出土遺物（メダイ・花十字紋瓦）



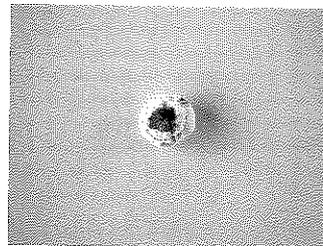
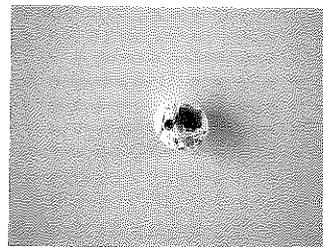
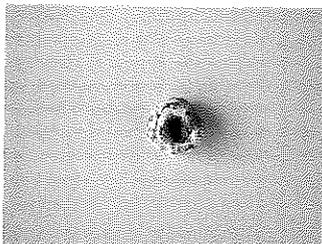
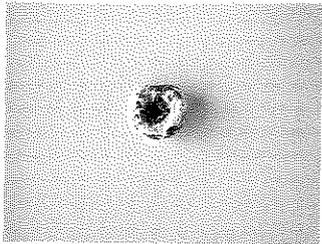
1

2



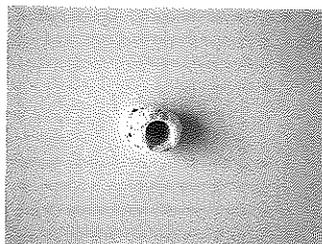
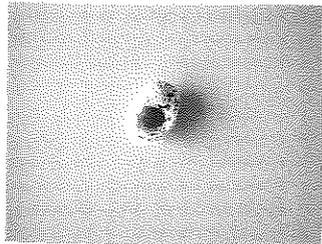
3

4



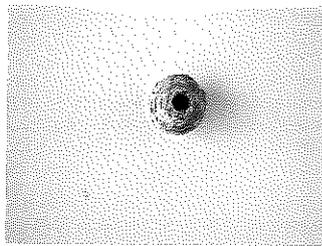
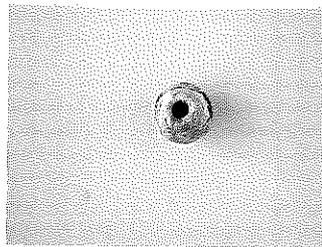
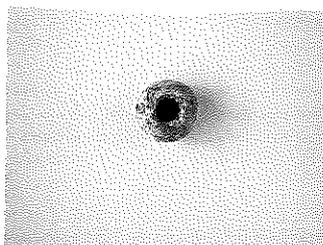
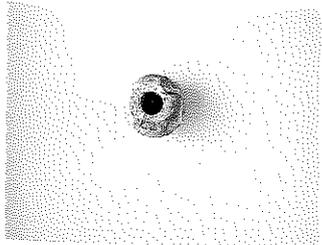
5

6



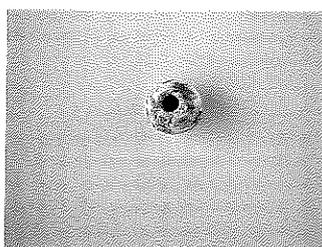
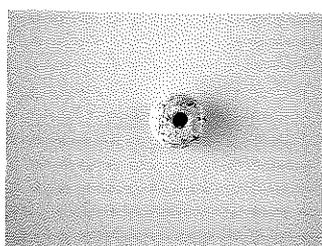
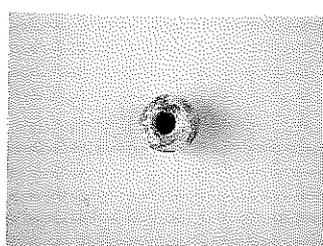
7

8



9

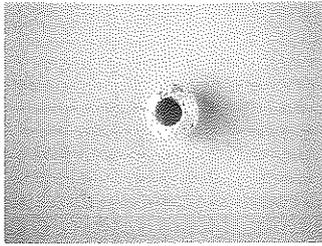
10



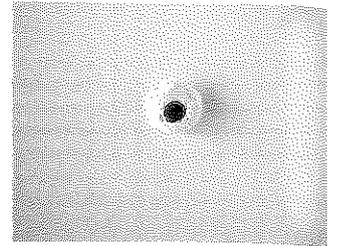
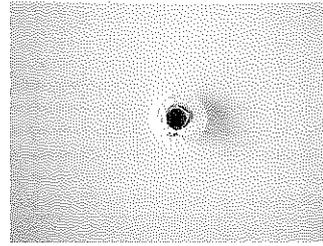
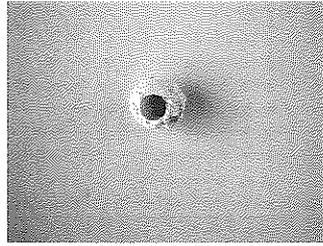
11

12

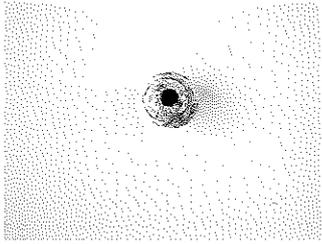
平成13年度～19年度の出土遺物（ロザリオの珠）①



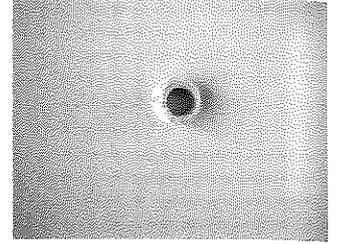
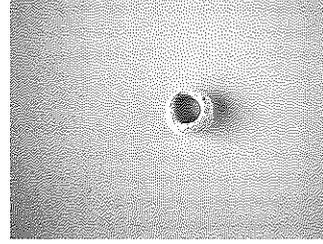
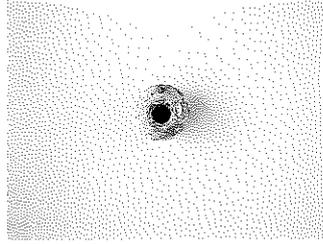
13



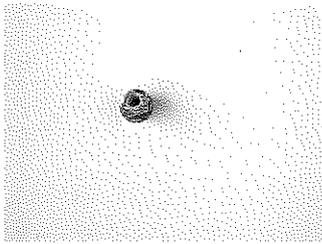
14



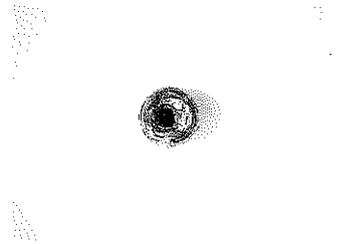
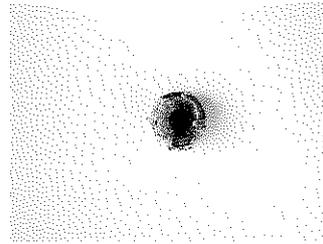
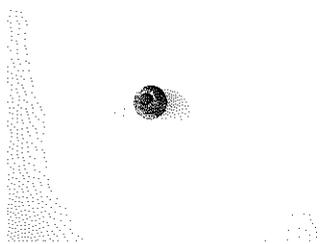
15



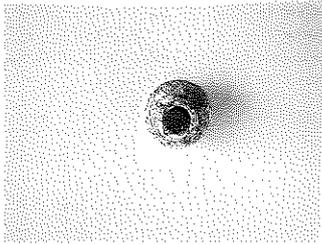
16



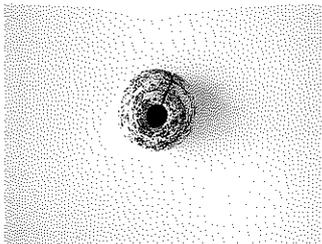
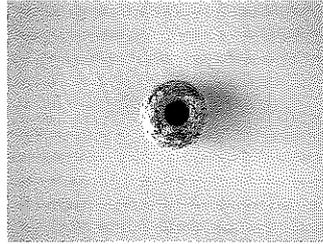
17



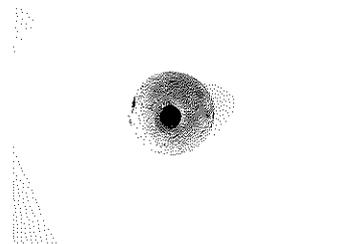
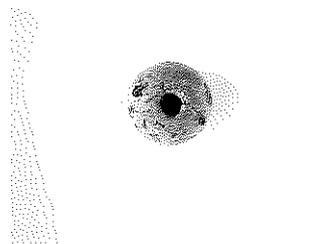
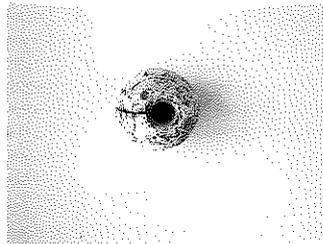
18



19



20

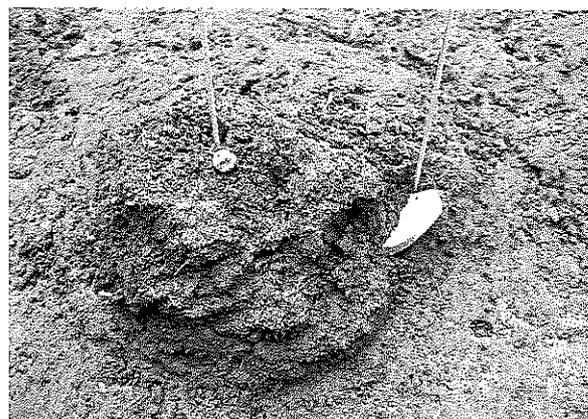


21

平成13年度～19年度の出土遺物（ロザリオの珠）②



調査前風景



遺物出土状況



作業風景



先行掘削による集石遺構検出

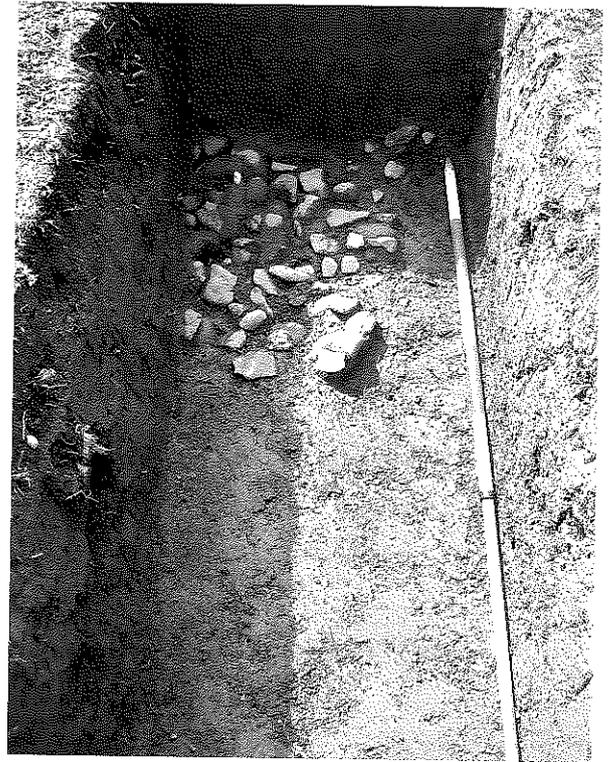


A-1区 集石遺構検出状況（南より）

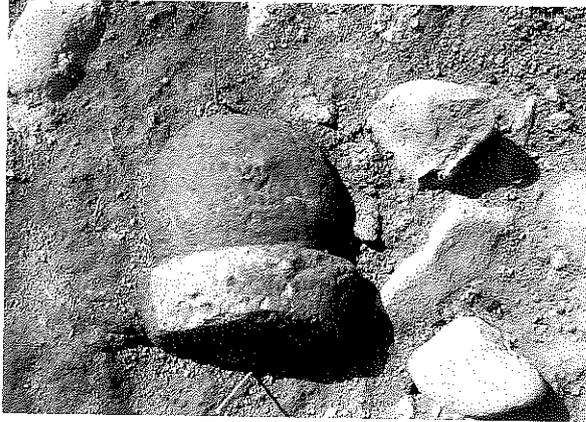
平成20年度の調査（大手地区）①



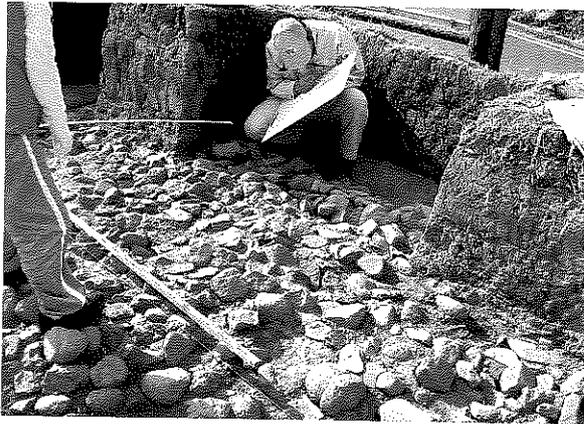
A-1区集石遺構検出状況（東より）



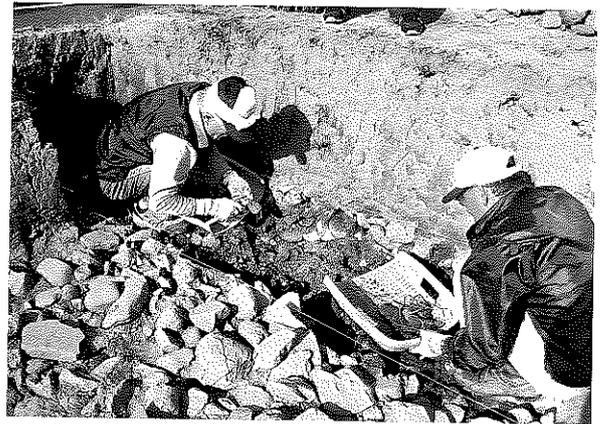
A-2区集石遺構検出状況



集石遺構上面 空風輪出土状況



作業風景（遺構測量）



作業風景（集石遺構断割り）



A-1区東壁断面（集石断割り時）



集石遺構断ち割り断面の人骨

平成20年度の調査（大手地区）②



A-1区サブトレンチ集石遺構下層での石畳検出（南より）



A-1区サブトレンチ2調査状況（北より）

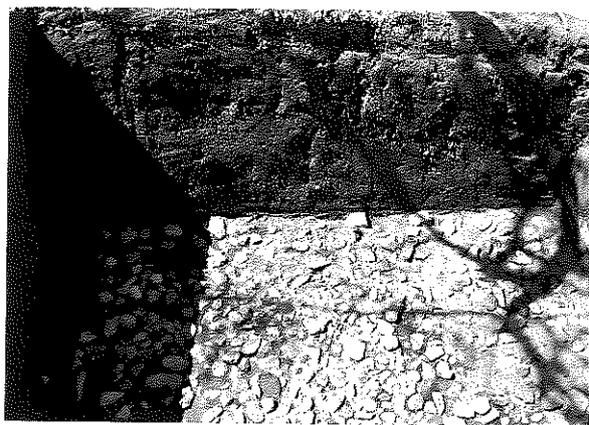


A-1区サブトレンチ3調査状況（東より）



A-2区集石遺構断割りによる石畳検出（東より）

平成20年度の調査（大手地区）③



A-3区遺構検出状況（東より）



A-4区遺構検出状況（南より）



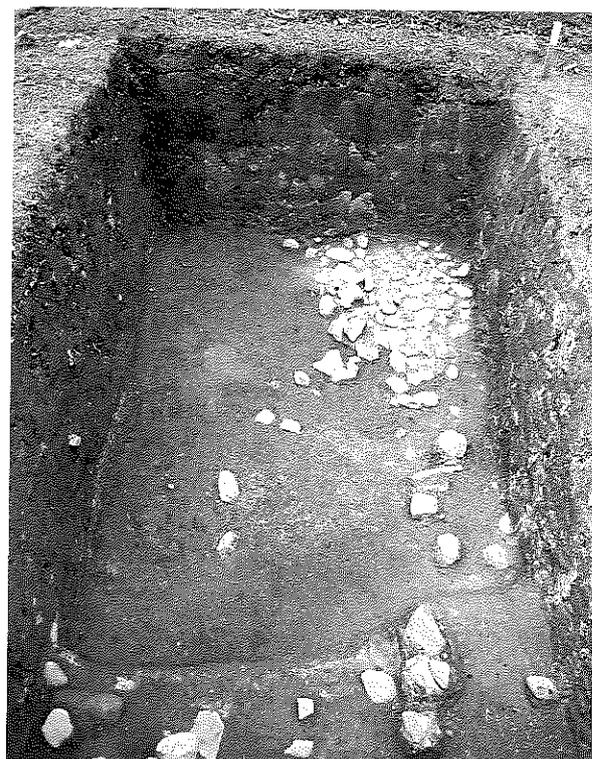
A-4区南側溝状遺構検出状況（東より）



A-4区南側溝状遺構断面



A-5区遺構検出状況（東寄り）



A-5区遺構検出状況（東寄り）



A-6区遺構検出状況（南より）



A-7区遺構検出状況（西より）



A-7区西側断割り状況（東より）



A-8区遺構検出状況（南より）



A-8区土層堆積状況（東より）

平成20年度の調査（大手地区）⑤



B-1区調査状況（西より）



B-2区調査状況（北より）

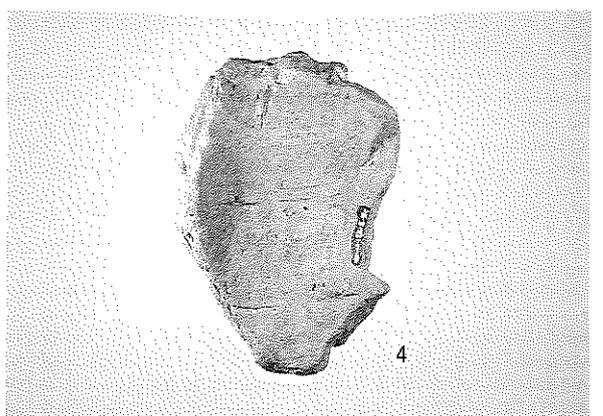
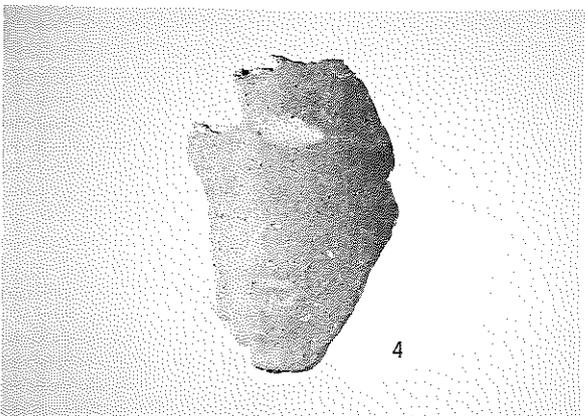
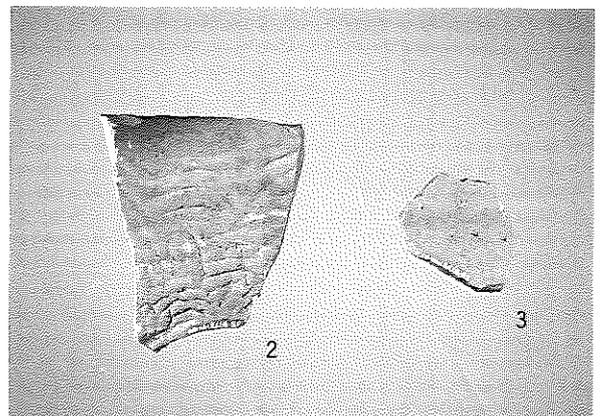
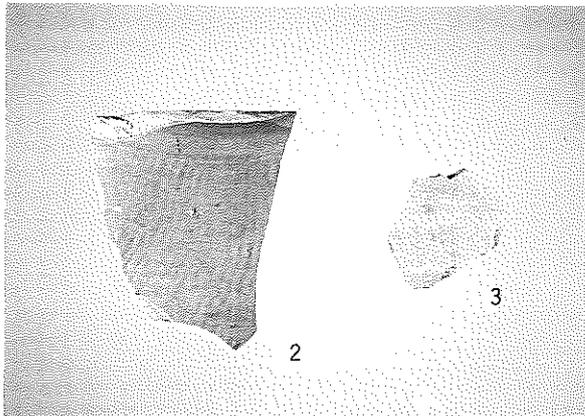
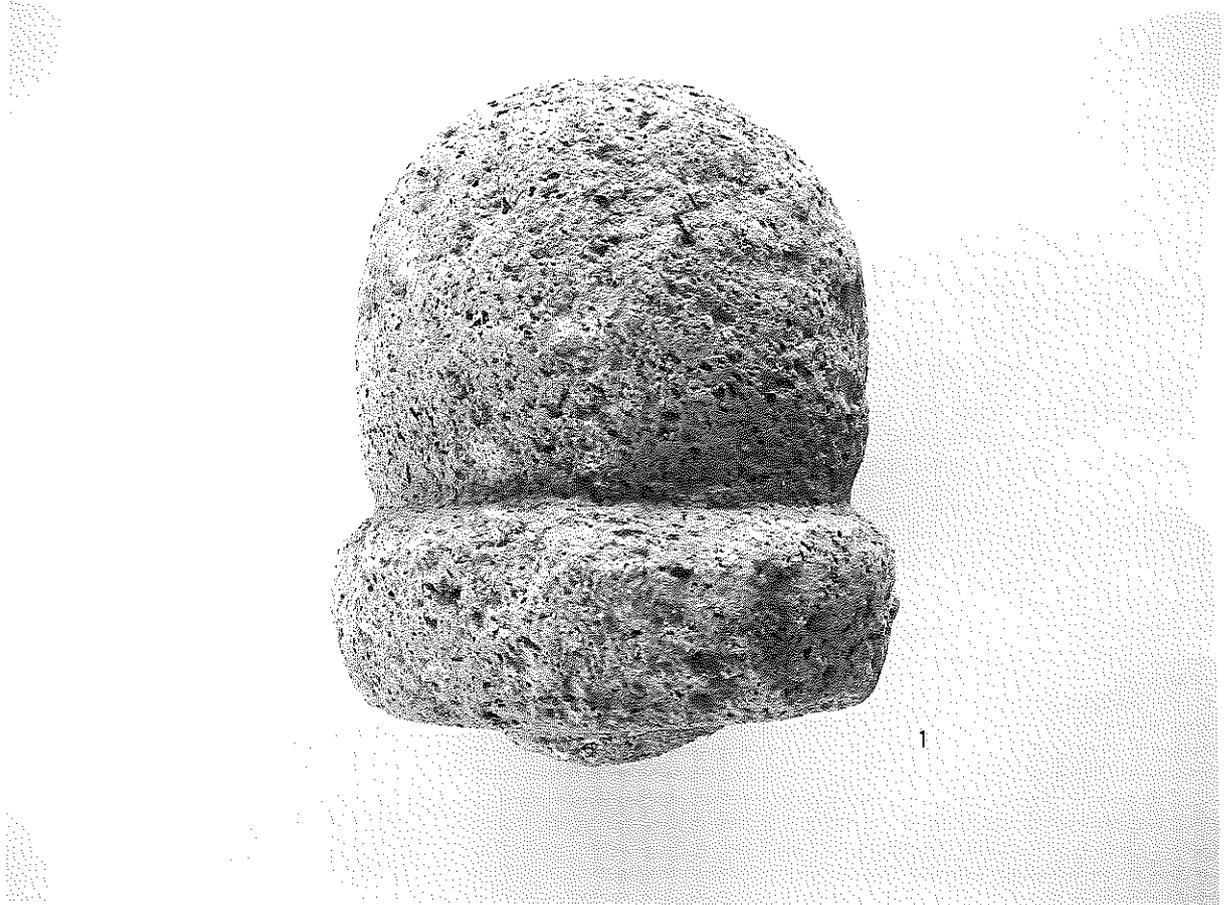


まさ土による遺構保護作業

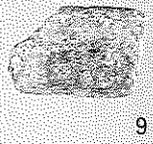
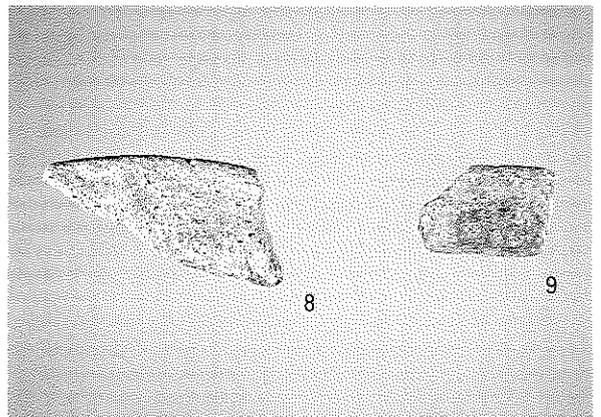
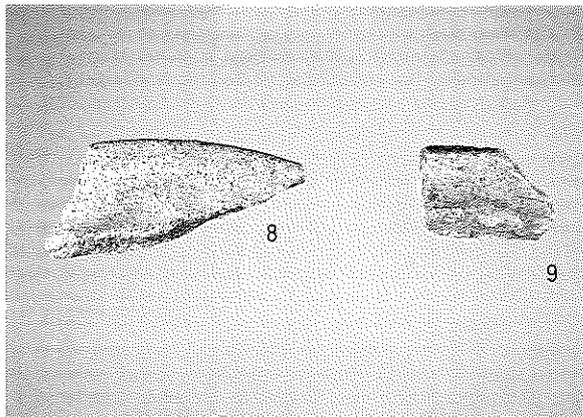
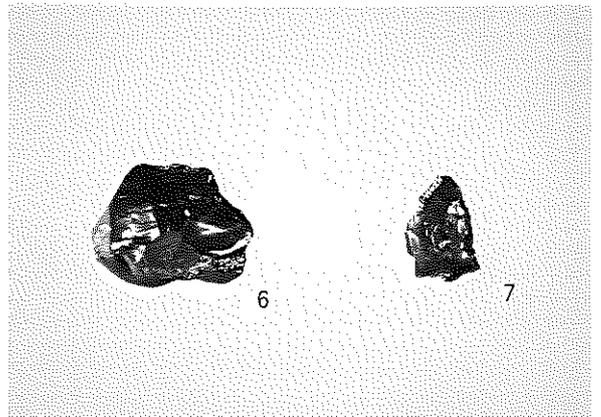
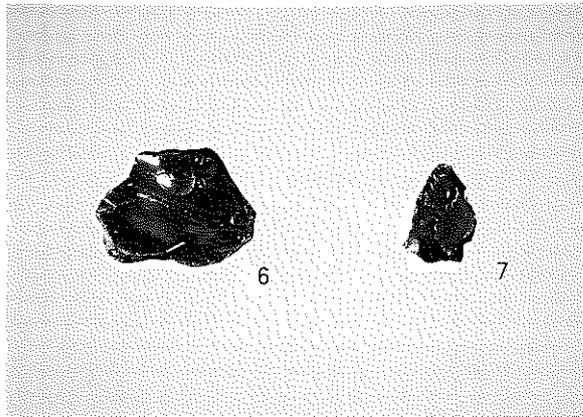
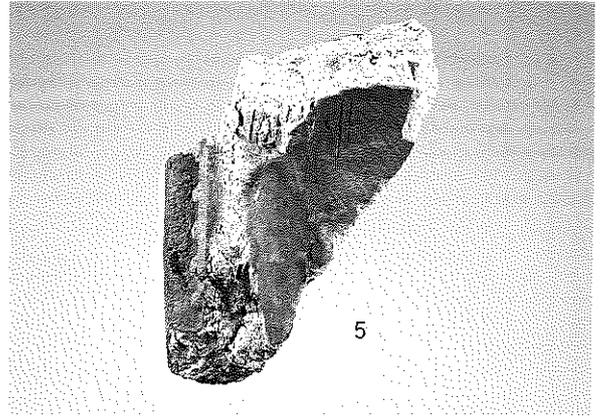
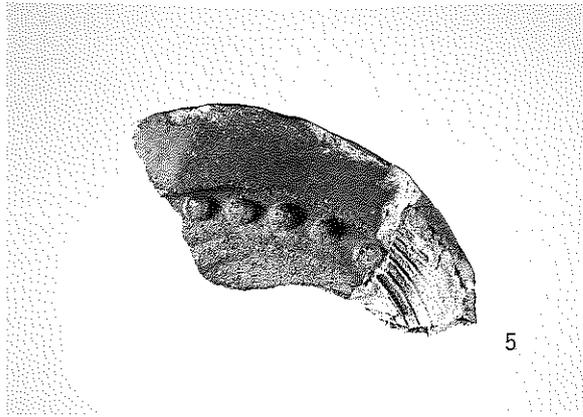


埋め戻し作業

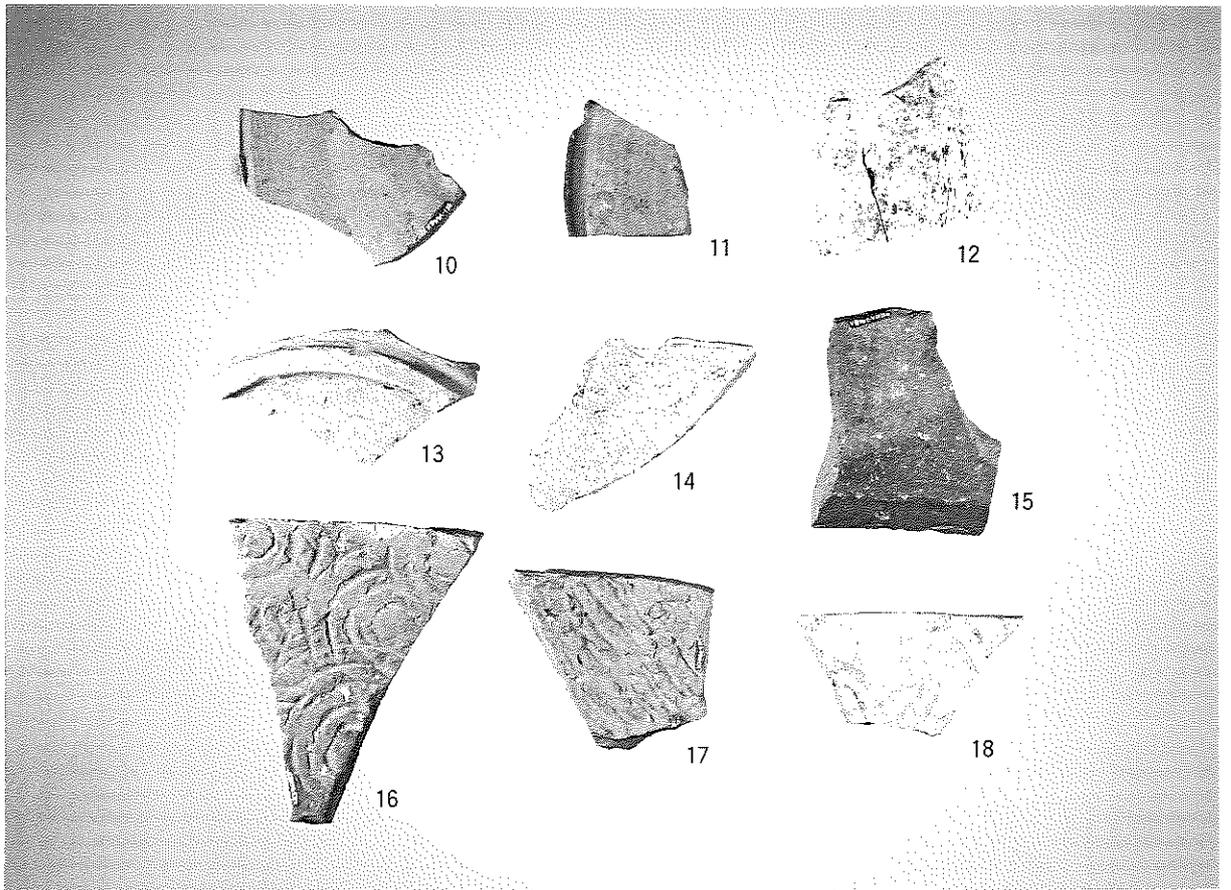
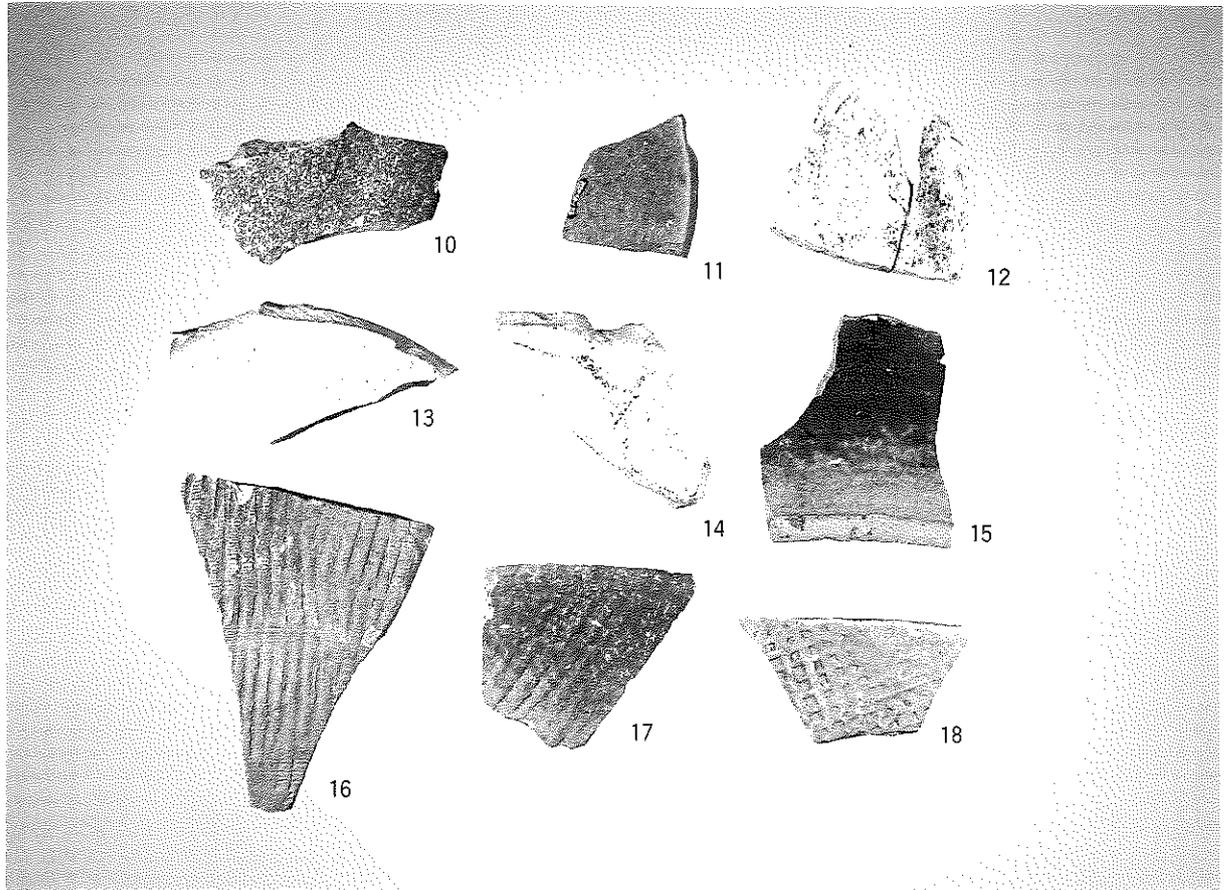
平成20年度の調査（大手地区）⑥



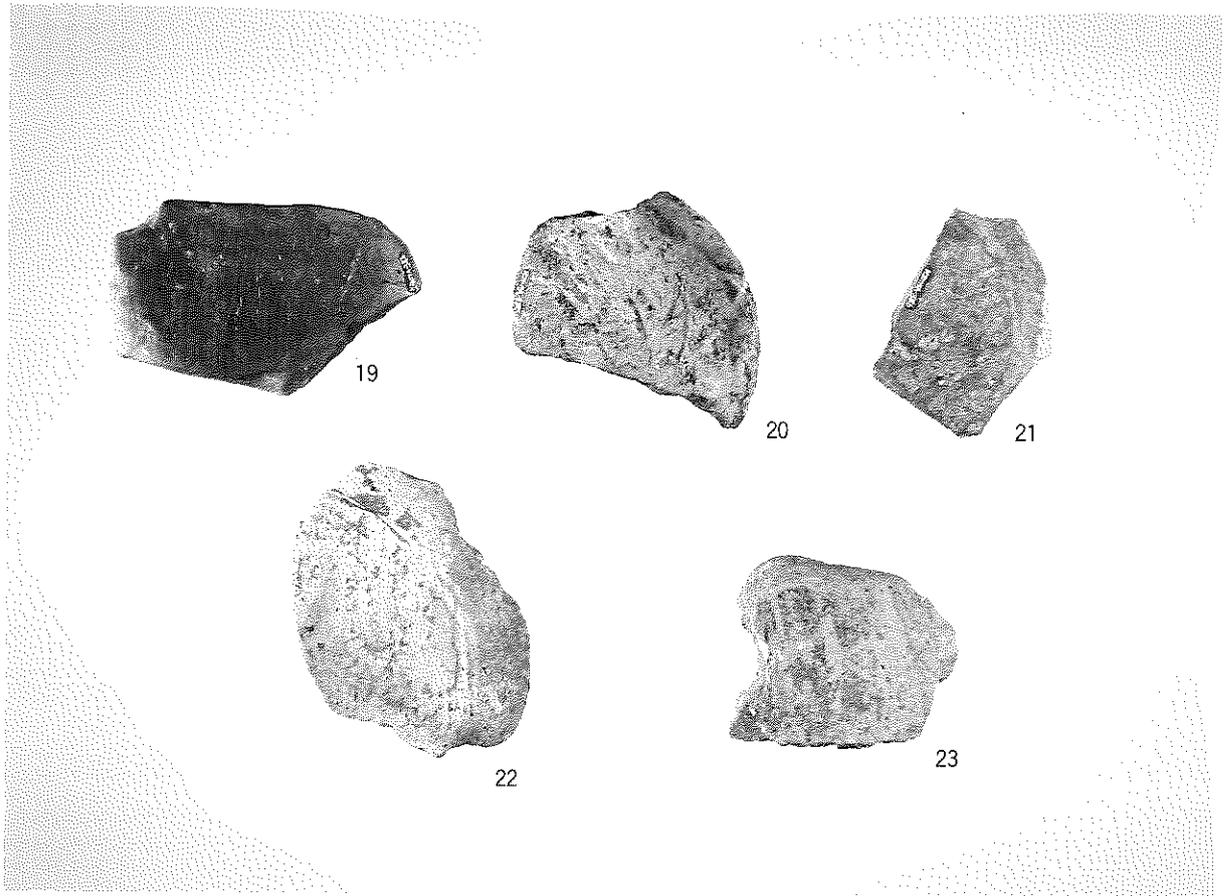
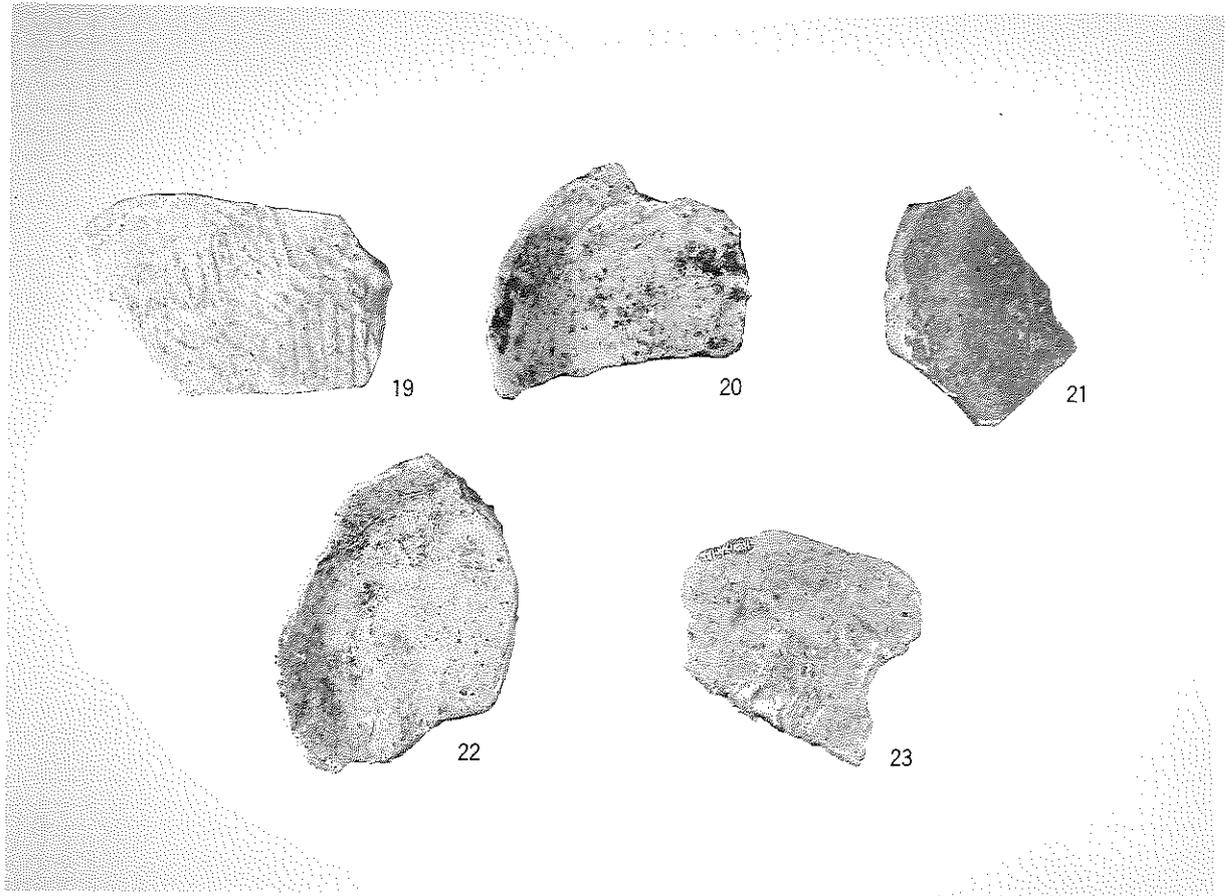
平成20年度の出土遺物（集石遺構に伴う遺物）



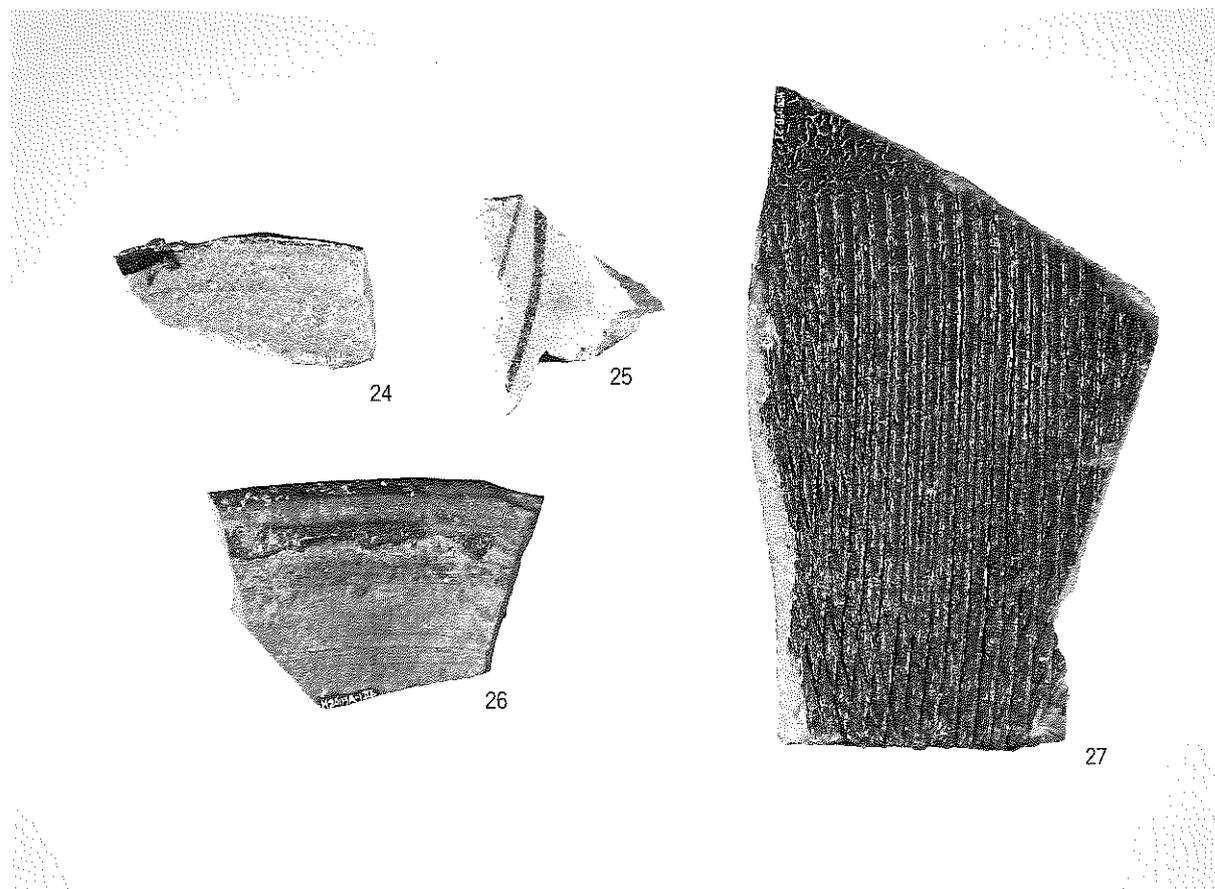
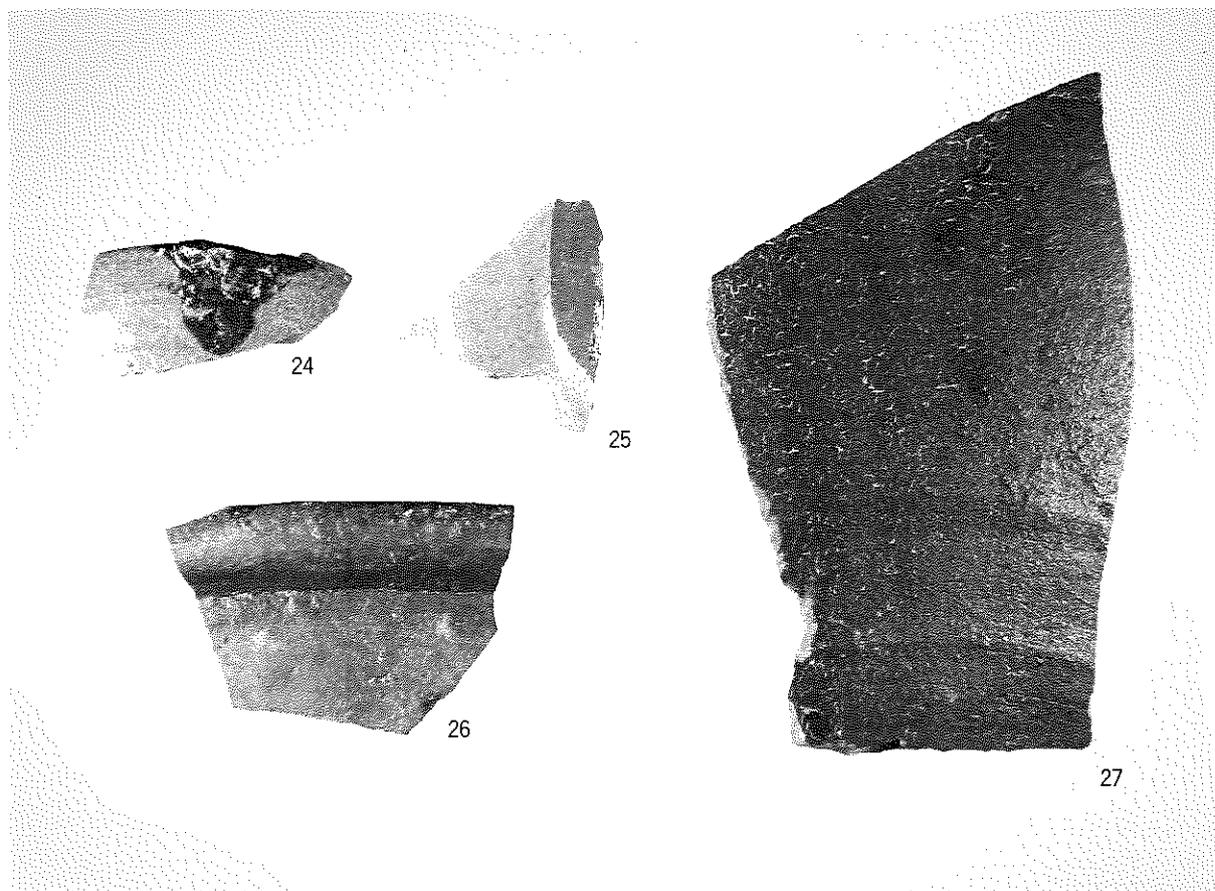
平成20年度の出土遺物（集石遺構に伴う遺物／石器・弥生土器）



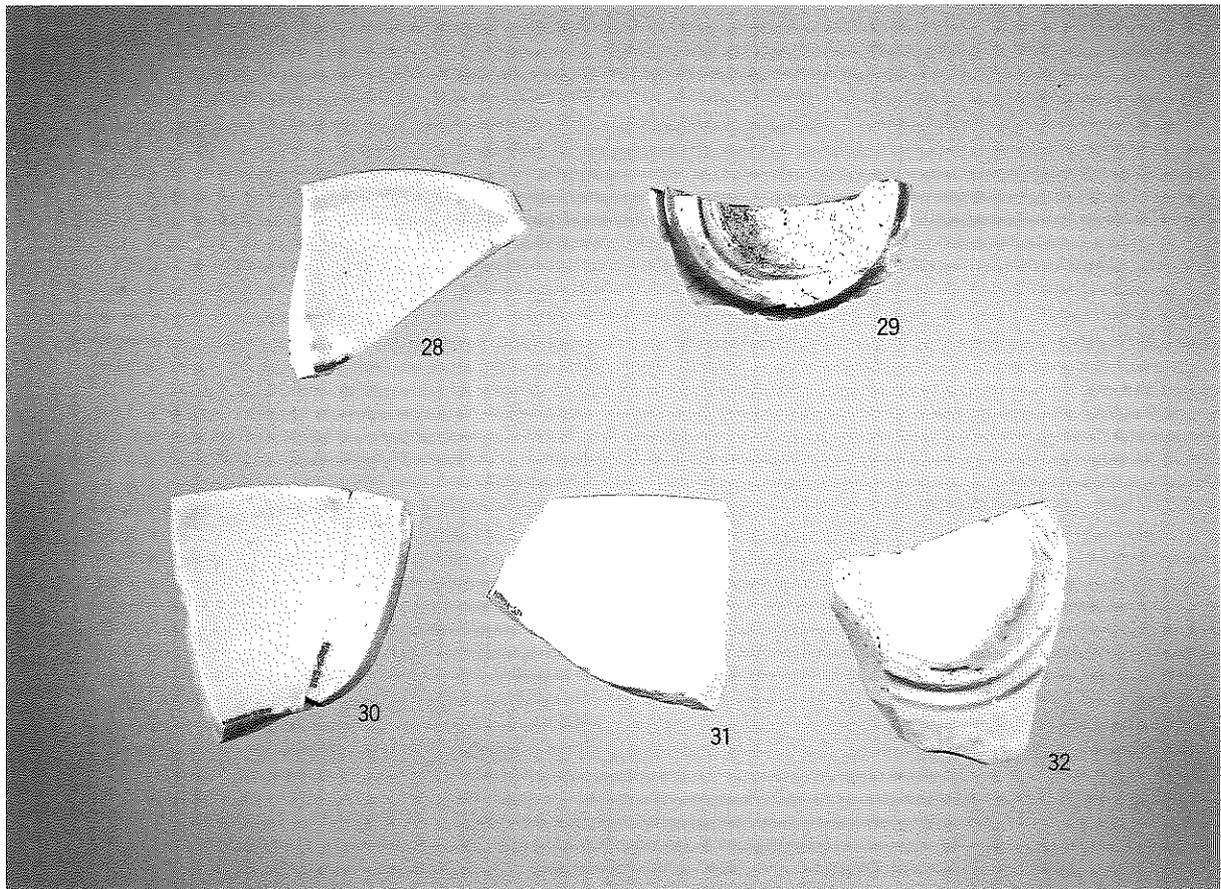
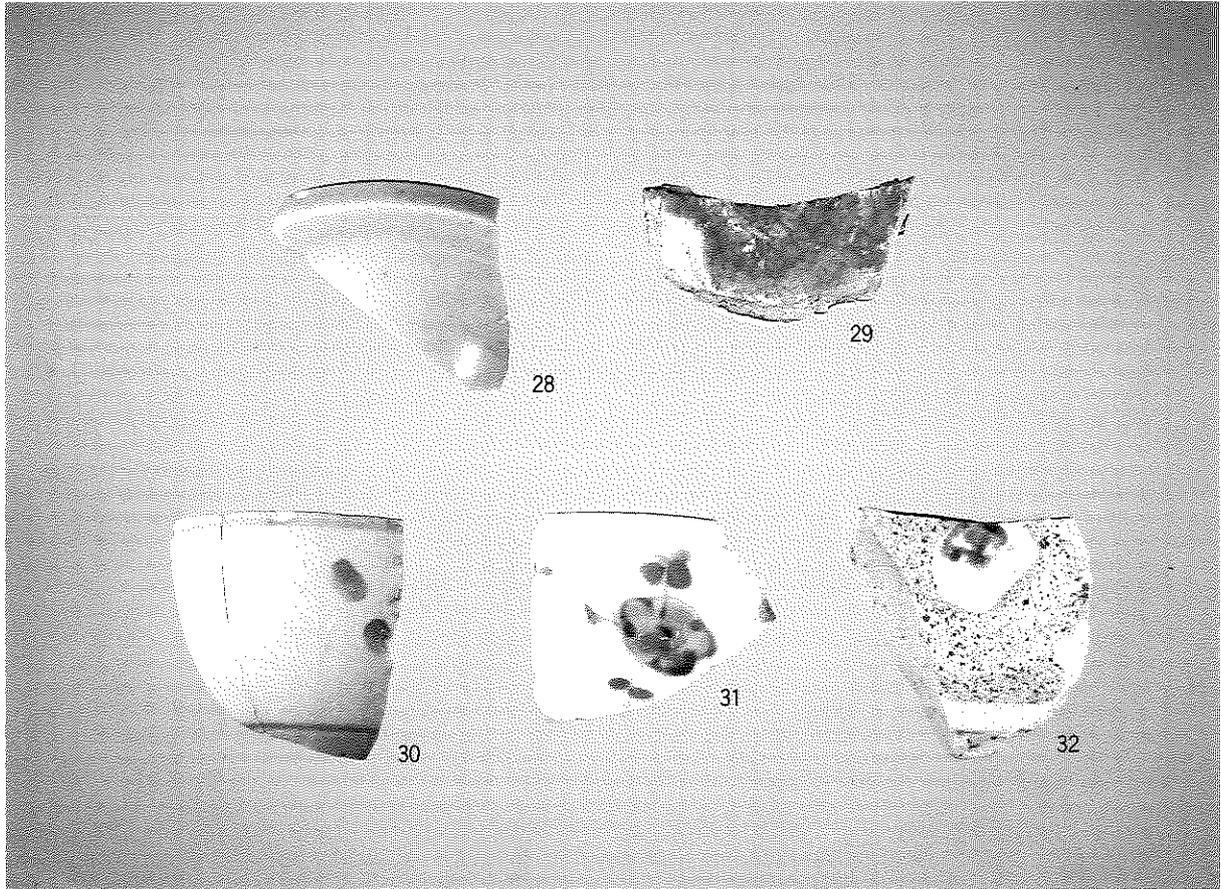
平成20年度の出土遺物（須恵器）



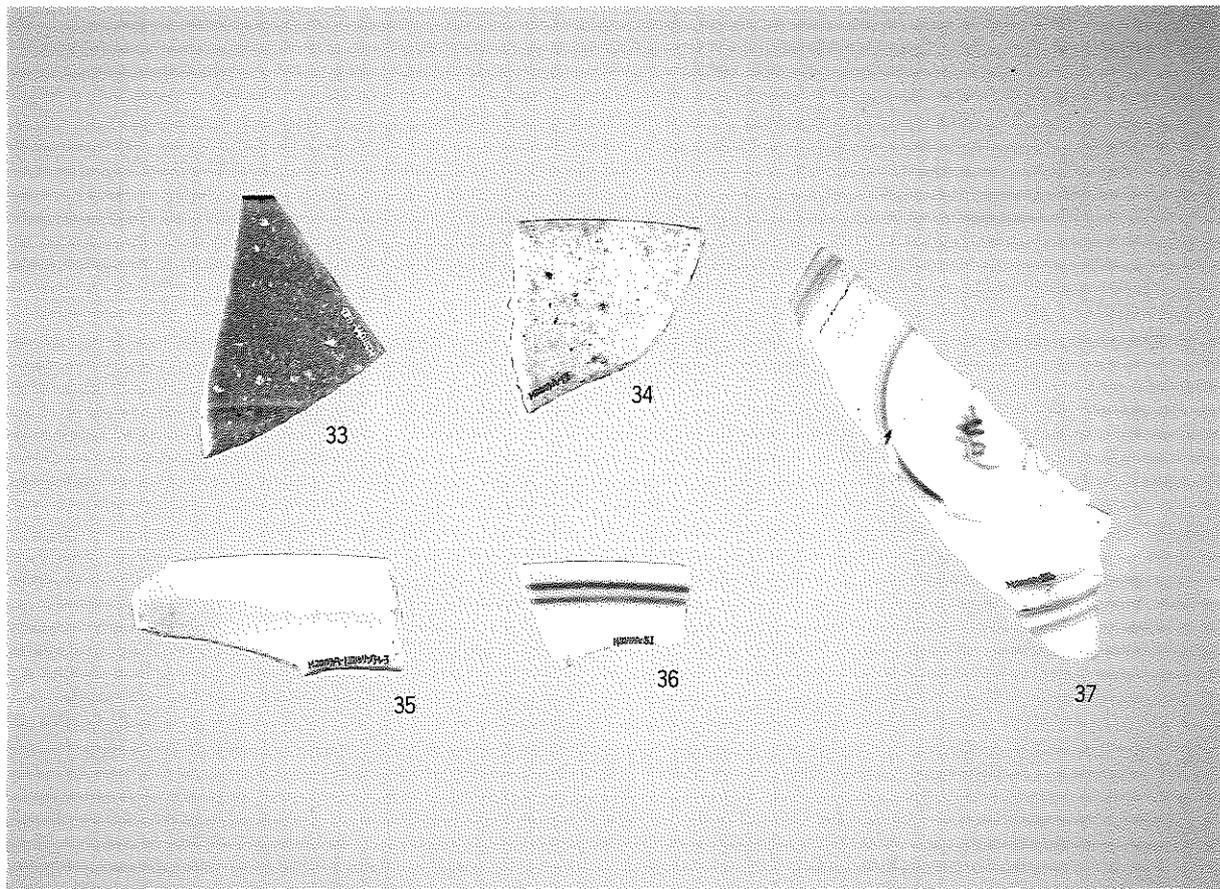
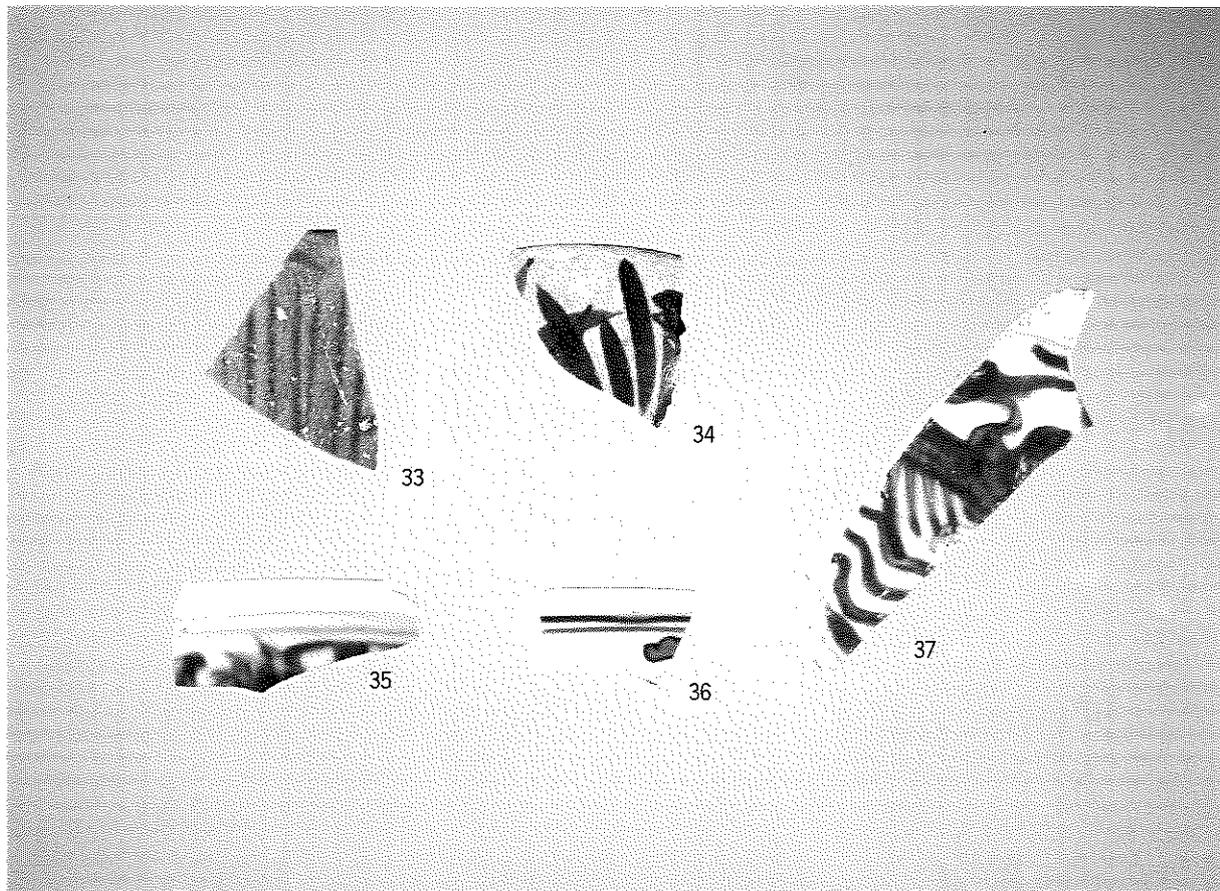
平成20年度の出土遺物（土師質土器・土師器）



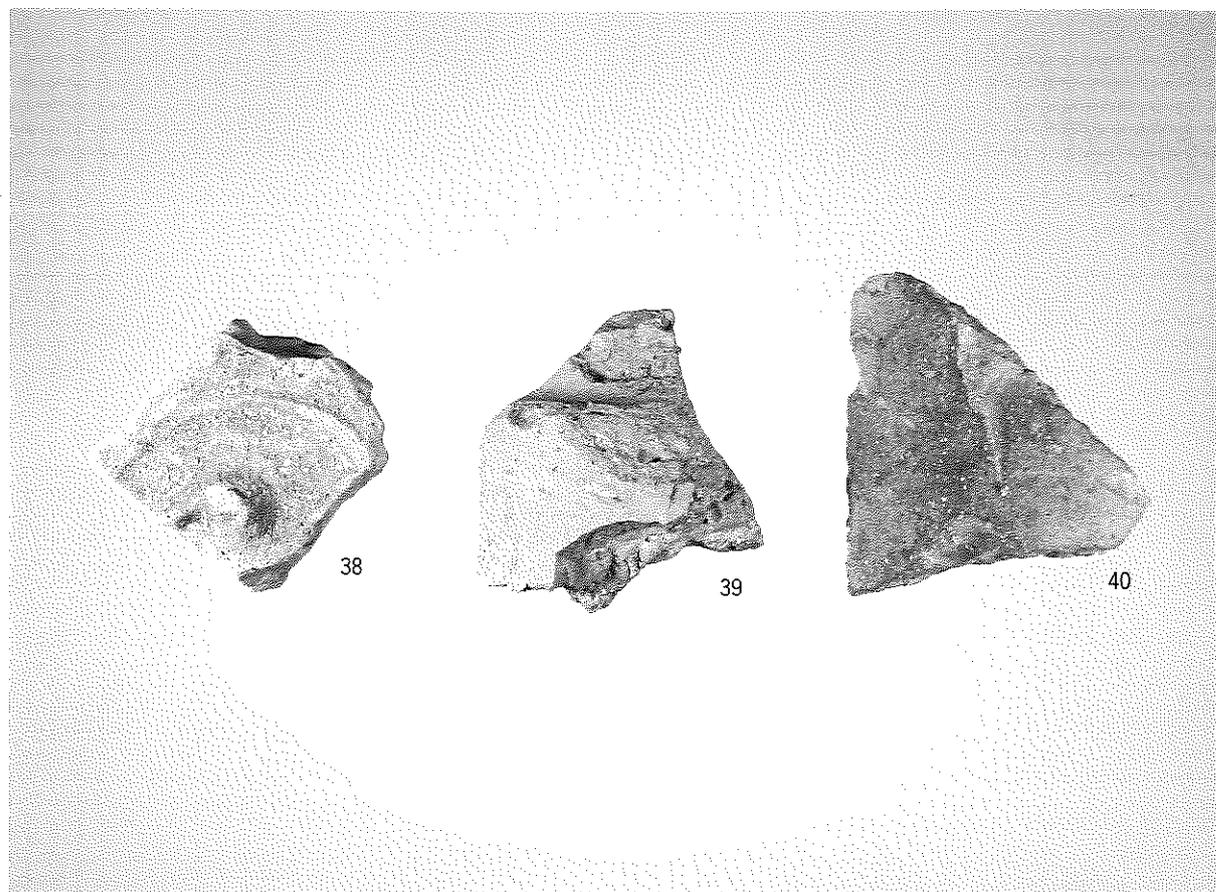
平成20年度の出土遺物（陶器）



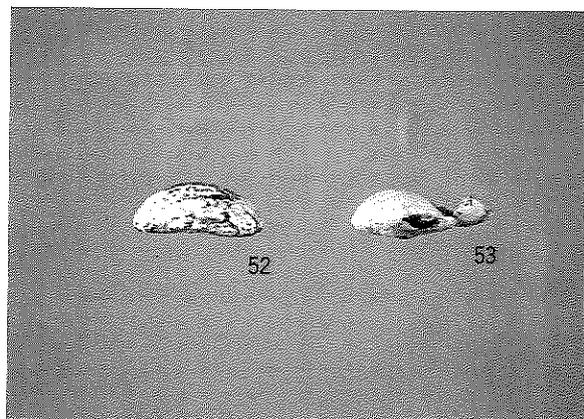
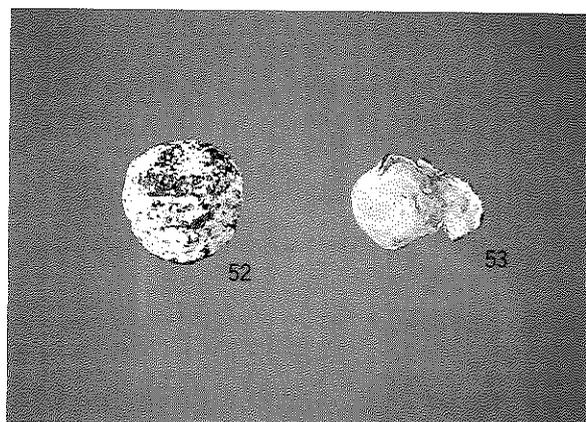
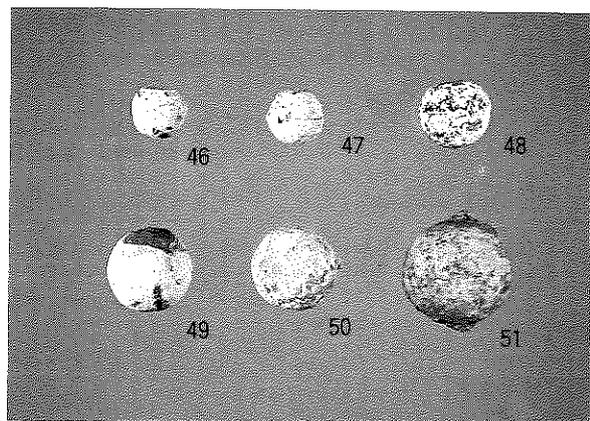
平成20年度の出土遺物（国産磁器）



平成20年度の出土遺物（貿易磁器）



平成20年度の出土遺物（瓦）



平成20年度の出土遺物（土錘／銃弾）

原城跡出土のキリスト教関連製品の鉛同位体比分析

魯 禔玟・平尾良光

1. はじめに

長崎県島原半島の南部に位置する原城は1637年に勃発した「島原・天草の乱」の舞台となった遺跡である。島原・天草の乱は日本唯一のキリスト教徒が絡む宗教戦争で、この乱をきっかけに鎖国政策へと転換されたことで、日本歴史の上に非常に大事な意味を成している。

原城跡は平成4年から発掘調査が行われており、島原・天草の乱の当時の状況を示すような多数の人骨、火縄銃の一部分や鉛玉が数多く発見されている。また、宗教戦争であったことを示すように、十字架、メダイ、ロザリオのようなキリスト教関連遺物も出土している。また、外国との活発な交流があったことを示す中国、韓国、東南アジア産の陶磁器なども確認されており、日常生活用品も多く出土していることなどから、当時の生活様相や貿易関係、乱の実態などを把握することができる¹⁻²⁾。

本研究では南島原市教育委員会のご協力を得て、原城跡から出土した遺物の中で、メダイや十字架などのキリスト教関連遺物に関して鉛同位体比分析を行い、その原料の産地を推定することにした。原料産地を推定することから、当時に行われた貿易や交流などをより具体的に理解することができる。また、歴史学や文献史学、考古学などからの研究成果を科学的に証明することもできる。これまで日本出土のキリスト教関連遺物に関する鉛同位体比分析は大分県出土の遺物を中心に行われ、東アジアと東南アジアの原料が利用されたことが確認されている。本研究で原料の産地を推定してみることで、当時の貿易関係や物資の供給などがより理解できることが期待される。

2. 資料と分析方法

本研究の資料となったのは原城跡から出土したメダイや十字架などのキリスト教関連遺物42点である。これらの資料に関しては鉛同位体比分析を行うため、少量の鏝を遺物の表面から採取し、分析用の試料とした。採取した試料に関しては分析のために次のような処理を行った。

まず、試料をアルコールで洗浄した後、石英製ビーカーに入れ、硝酸で溶解した。これを蒸留水で約5 mlに希釈し、直流2 Vで電気分解した。約1日の時間をかけて電気分解を続け、析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。

この溶液から0.2 μgの鉛を分取し、これにリン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上に乗せた。以上のように準備したフィラメントを質量分析計（別府大学に設置されているサーモエレクトロン社の表面電離型質量分析計 MAT262）の中にセットし、条件を整え、鉛同位体比を1200℃で測定した。また、同一条件で標準鉛試料 NBS-SRM981を測定し、規格化した。

3. 鉛同位体比分析の原理

地球が誕生したのは45.6億年前とされている。そして、この時にすべての元素の同位体組成は地球上で各元素毎にある値になっていて、その値は地球のどこでも同じ値であったとされている。ほとんどの元素の同位体比は時間が経っても変化しなかったが、例外的ないくつかの元素は変化した。鉛は

その例外的な元素の一つである。

鉛 (Pb) には ^{204}Pb , ^{206}Pb , ^{207}Pb , ^{208}Pb の同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた ^{238}U は ^{206}Pb に、 ^{235}U は ^{207}Pb に、 ^{232}Th は ^{208}Pb に変化する。よって、U (ウラン) と Th (トリウム) が減少した量だけ鉛の量は増えてくる。各鉛同位体の量は岩石中の U, Th, Pb の量比および岩石中で Pb と U, Th が共存していた時間の長さによって、それぞれの増加量が異なるため、鉛同位体比の違いとして表わすことができる。

それ故、考古学的資料に含まれる同位体の量が地球の誕生から変わっていない ^{204}Pb 量と、変化した ^{206}Pb , ^{207}Pb , ^{208}Pb 量との比を測定し、これを世界の鉛鉱山の同位体比と比較することによって鉛の産地の違いを判別することができる³⁾。

4. 分析値の表し方

鉛同位体比測定の結果を理解するため、資料の同位体比を次のように示した。鉛には ^{204}Pb , ^{206}Pb , ^{207}Pb , ^{208}Pb の独立した4つの同位体があり、同位体比は $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$, $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$, $^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$, $^{204}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$, $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$, $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$, $^{204}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$, $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$, $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$, $^{204}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$, $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$, $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ という12の方法で表現される。この方法の中で一番整った図で表現でき、4種類の同位体を含む $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}-^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ (B式図) と $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}-^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ (A式図) という2つの図を用いた表現方法を利用して測定結果を図化した。

中国の前漢時代、後漢時代・三国時代の銅鏡を分析して、これらを図1と図3の中にプロットすると、前漢時代の銅鏡と後漢・三国時代の銅鏡の材料が、はっきり区分されて分布した。そこで前漢時代の銅鏡が分布した領域を、他の出土資料と比較して華北産材料の領域 (AとA') と表し、後漢時代・三国時代の銅鏡が分布する領域を華南産材料の領域 (BとB') と表した。

日本産材料の領域を設定する場合、西暦6世紀頃までの遺物で日本産の材料を用いたと断定できる資料は今のところ確認できていないので、8世紀以降に作られた銭貨と現代の鉛鉱山が示す分布を日本産材料の領域 (CとC') とした。

朝鮮半島産材料の領域には、朝鮮半島で製作されたと考えられる多鈕細文鏡を用い、それらが示す分布領域を朝鮮半島産材料の範囲 (DとD') とした。

N領域はこれまで知られていない材料、東アジアではない材料で、日本出土のキリスト教製品から多く確認された材料の産地である。今のところ、その産地がどこであるかはわからないが、キリスト教が日本に至るまでに経由した地域のどこかである可能性が高い⁴⁾。

鉛材料の産地は当然鉛鉱山が示す値から設定するべきであるが、文化財資料が製作された当時に利用された鉱山を探すことは無理であり、現実的にも限界がある。そのため、文化財資料が製作された当時の資料から鉛材料を取り、それを基準に領域を仮定し、設定した。この仮定した領域は弥生時代資料に関して利用していたが他の時代に関しても、新しい鉱山が加わることを考慮すると、かなりの場合に応用できることがわかった。

5. 分析結果と考察

原城跡から出土した42点の資料に関して鉛同位体比分析を行い、得られた結果を表1にまとめ、図1～図6に図化した。42点の資料は日本、華南、N領域など幅広く分布し、また、両図式で分布位置

が異なる資料もかなり確認された。

まず、日本産材料の領域に分布する資料は9点(番号7, 8, 10, 19, 23, 25, 37, 38, 39)であり、資料が一番多く分布した。日本産材料の領域の次に資料が多く分布する領域はN領域で、7点の資料(番号1, 13, 27, 28, 31, 33, 34)がN領域の材料であることを確認した。中国の華南産材料の領域に分布する資料は6点(番号15, 16, 21, 26, 40, 41)で、朝鮮半島産材料の領域に分布する資料は1点(番号12)である。

今回の資料の中では両図式で分布位置が異なる例が多かったが、その中でA式図では華南領域の下部に分布し、B式図では華南領域の境界付近に分布する資料をグループ1とした。また、A式図では華南領域より下部(グループ1が示す位置とは異なる)に位置し、B式図では華南領域の中に位置する資料をグループ2とした。グループ1に含まれる資料は6点(番号3, 5, 9, 11, 20, 24)、グループ2に分布する資料は3点(番号6, 30, 36)である。これらのグループは各々異なった原料を意味する可能性があるが、原料の混合の可能性も考えられる。また、両図式では分布位置が完全に一致しないが、華南産材料の可能性のある資料が3点(番号14, 17, 29)、日本産材料の可能性のある資料が2点(番号32, 42)確認された。

それ以外に資料番号1, 4, 18, 22, 35は両図式で分布位置が完全に異なるために今のところではその産地を推定することは不可能である。しかし、資料番号18, 22, 35は直線状に分布するようにもみられるので、2つ以上の材料を混合した可能性もあり得る。

以上の分析結果をまとめてみると、日本産材料およびその可能性のある資料は約25%で、中国華南産材料あるいはその可能性のある資料が約21%を成していることが分かった。また、N領域の材料は全体の約17%を成しており、グループ1が約14%、グループ2が約7%であった。朝鮮半島産材料の資料は1点のみで全体の約2%であり、材料の産地推定ができない資料は約12%を成している。このことから、原城跡出土のキリスト教関連製品のほとんどは日本か中国華南の材料と共にN領域の材料もかなり利用されていることが分かった。原城跡出土のキリスト教関連製品は日本国内で製作された可能性が高く、材料も日本産材料が多かったことが注目される。また、華南産材料もかなり高い頻度で確認されていることから、当時中国との交流の様相を推測することができる。それと共にN領域の材料もかなり確認されているが、現在のところではその産地がどこにあるかはまだ分かっていない。ただし、N領域の材料は16~17世紀の遺物の中で、特に南蛮貿易と関わっている遺物から確認されていることや東南アジア出土の遺物からもN領域が確認されていることなどから、南蛮船が日本に至るまでの海路にあるところ、特に、東南アジアにその産地がある可能性が考えられる⁵⁻⁹⁾。原城跡出土のキリスト教関連製品からN領域の材料が頻繁に確認されていることは、当時、島原半島を通して行われた南蛮貿易の史実を科学的に証明する証拠にもなるであろう。

原城跡と同じようにキリスト教と深い関係がある大分県の大友府内町跡の場合を参考にしてみると⁷⁻¹⁰⁾、16世紀の大友府内町跡出土の遺物からはメダイあるいは鉛玉、ロザリオなどのキリスト教関連製品に主としてN領域の材料が確認されている。17世紀の原城跡出土の遺物の場合はキリスト教関連製品と共に青銅製品からも高い頻度でN領域の材料が確認されたことから¹²⁾、17世紀になってもN領域の材料が使われていることが確認できた。このことは南蛮貿易の規模や頻度数とも関連しているであろう。

6. まとめ

以上で原城跡から出土したキリスト教関連製品42点に関して鉛同位体比分析を行い、その結果から材料の産地を推定し、その内容を次のようにまとめた。

- ① 42点の資料は東アジアとN領域に幅広く分布した。その中で、日本産材料の領域に分布する資料が一番多かったが、華南産材料とN領域の材料を利用した可能性がある資料も数多く確認された。中国の華南産材料とN領域の材料が全体の約半分を成していることは当時の交流や貿易の様相などを把握する際に大変重要な意味を示している。
- ② 資料の中には両図式で分布領域が異なり、材料の産地を推定できない資料も含まれている。これらの資料は別の新材料の可能性あるいは材料の混合の可能性が考えられるが、データ不足のため、今後、より多くのデータが蓄積された後に考え直す必要がある。
- ③ 原城跡遺跡から出土した遺物の中でかなりの頻度でN領域の材料が確認されているが、既研究結果を参考にすると、キリスト教関連資料だけではなく、青銅製品からもN領域の材料が頻繁に確認されていることが注目される。これまで確認されたN領域の材料は16世紀のメダイやロザリオ、鉛玉などのキリスト教関連遺物あるいは南蛮貿易関連のものがほとんどであったが、17世紀の原城跡出土の遺物からはキリスト教関連製品だけではなく、日常生活品としての青銅製品からもN領域の材料が確認された。

【参考・引用文献】

- 1) 長崎県南有馬町教育委員会, 2006「原城跡Ⅲ」南有馬町文化財調査報告書第4集
- 2) 長崎県南有馬町教育委員会, 2004「原城跡Ⅱ」南有馬町文化財調査報告書第3集
- 3) 平尾良光編, 1999「古代青銅の流通と铸造」鶴山堂(東京), p31~p33
- 4) 平尾良光編, 1999「古代青銅の流通と铸造」鶴山堂(東京), p35~p39
- 5) 魯 禔玆・後藤晃一・平尾良光, 2008「日本の中世キリスト教関連遺物に関する自然科学的な研究」『考古学と自然科学第58号』日本文化財科学会, p.21~p.35
- 6) 角川 茂・稗田貞臣・平尾良光, 2008「カンボジア王国プンスナイ遺跡から出土した青銅製腕輪などの化学組成と産地」『カンボジア王国プンスナイ遺跡2007年度発掘調査報告書』国際日本文化研究センター, p.69~p.86
- 7) 魯 禔玆, 2007「南蛮貿易と金属材料—自然科学的方法を用いた中世キリスト教関連遺物の研究」『キリシタン大名の考古学』九州考古学会夏季(大分)大会, p.97~p.107
- 8) 魯 禔玆・平尾良光, 2006「中世大友府内町跡出土金属製品・ガラス玉の鉛同位体比分析」『豊後府内4』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第9集, p.205~p.212
- 9) 魯 禔玆・平尾良光, 2008「中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査」『豊後府内8』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第23集, p.291~p.298
- 10) 魯 禔玆・平尾良光, 2007「中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査」『豊後府内7』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第16集, p.324~p.331
- 11) 魯 禔玆・平尾良光, 2007「中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査」『豊後府内6』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第15集, p.303~p.310
- 12) 2009年12月にて長崎県南島原市教育委員会に報告済み

表1 原城跡出土のキリスト教関連遺物の鉛同位体比值

番号	資料名	資料番号	出土位置	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
1	十字架	—	20	18.245	15.741	38.515	0.8628	2.1110	BP1289
2	メダイ	M-16	77	18.125	15.634	38.261	0.8626	2.1110	BP1290
3	メダイ	M-13	30	18.383	15.680	38.622	0.8530	2.1020	BP1291
4	メダイ	M-14	39	18.403	15.666	38.544	0.8513	2.0944	BP1292
5	メダイ	M-01	17	18.385	15.671	38.543	0.8524	2.0964	BP1293
6	十字架	C-02	17	18.299	15.678	38.573	0.8568	2.1079	BP1294
7	十字架	C-12	17	18.545	15.664	38.780	0.8446	2.0911	BP1295
8	十字架	C-15	17	18.351	15.602	38.641	0.8502	2.1057	BP1296
9	メダイ	M-06	20	18.385	15.667	38.518	0.8522	2.0950	BP1297
10	十字架	C-08	20	18.361	15.609	38.670	0.8501	2.1061	BP1298
11	メダイ	M-10	22	18.385	15.675	38.562	0.8526	2.0975	BP1299
12	十字架	C-18	30	18.700	15.736	39.168	0.8415	2.0957	BP1300
13	十字架	C-19	30	18.252	15.728	38.488	0.8617	2.1087	BP1301
14	十字架	C-21	38	18.379	15.732	38.748	0.8560	2.1083	BP1302
15	メダイ	M-03	20	18.387	15.712	38.762	0.8545	2.1082	BP1497
16	メダイ	M-09	20	18.418	15.711	38.804	0.8530	2.1068	BP1498
17	メダイ	M-08	20	18.409	15.674	38.781	0.8514	2.1067	BP1499
18	メダイ	M-11	25	18.402	15.652	38.603	0.8505	2.0977	BP1759
19	聖骨箱	M-15	59	18.415	15.630	38.735	0.8488	2.1034	BP1760
20	メダイ	M-07	22	18.373	15.666	38.524	0.8527	2.0968	BP1761
21	メダイ	M-05	20	18.487	15.700	38.814	0.8493	2.0995	BP1762
22	十字架	C-03	17	18.422	15.664	38.620	0.8503	2.0965	BP1931
23	十字架	C-14	18	18.346	15.595	38.618	0.8501	2.1050	BP1932
24	十字架	C-16	28	18.379	15.684	38.499	0.8534	2.0947	BP1933
25	十字架	C-17	39	18.634	15.679	38.820	0.8414	2.0832	BP1934
26	十字架	C-23	39	18.515	15.714	38.900	0.8487	2.1010	BP1935
誤差				± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006	

番号	資料名	資料番号	出土位置	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
27	十字架	C-25	39	18.255	15.746	38.521	0.8626	2.1102	BP1936
28	十字架	C-26	30	18.254	15.749	38.504	0.8627	2.1093	BP1937
29	十字架	C-29	56	18.340	15.667	38.599	0.8542	2.1046	BP1938
30	十字架	C-36	64	18.290	15.685	38.549	0.8576	2.1076	BP1939
31	十字架	—	20	18.242	15.745	38.481	0.8631	2.1095	BP1940
32	十字架	C-38	64	18.636	15.702	38.939	0.8426	2.0847	BP1941
33	十字架	C-37	64	18.249	15.755	38.509	0.8633	2.1102	BP1942
34	十字架	C-11	17	18.241	15.745	38.476	0.8631	2.1093	BP1943
35	十字架	C-07	19	18.362	15.645	38.564	0.8520	2.1002	BP1944
36	十字架	C-28	50	18.290	15.694	38.555	0.8581	2.1080	BP1945
37	十字架	C-30	56	18.455	15.651	38.691	0.8480	2.0965	BP1946
38	十字架	C-31	59	18.640	15.682	38.831	0.8413	2.0832	BP1947
39	ロザリオの珠	R-5	19	18.625	15.685	38.838	0.8422	2.0853	BP1952
40	ロザリオの珠	R-3	19	18.501	15.694	38.919	0.8483	2.1037	BP1953
41	十字架・聖骨箱	C-20	38	18.467	15.686	38.870	0.8494	2.1048	BP1954
42	十字架	C-24	39	18.556	15.651	38.560	0.8435	2.0781	BP1955
誤差				±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	

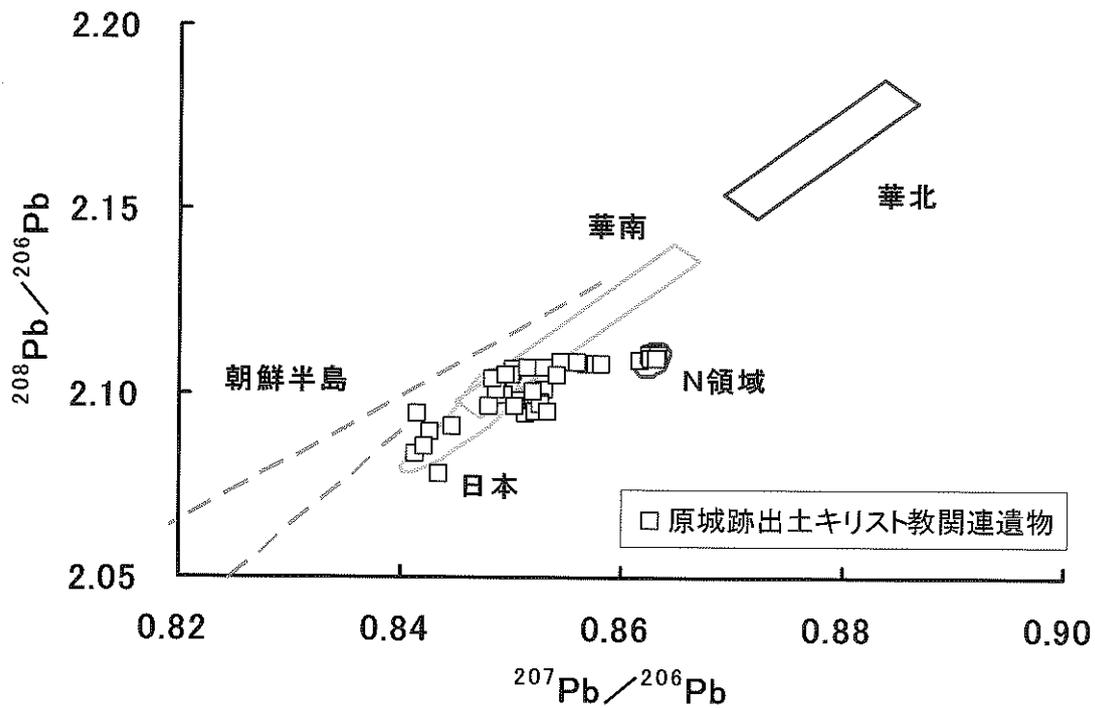


図1 原城跡出土キリスト教関連製品の鉛同位体比
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

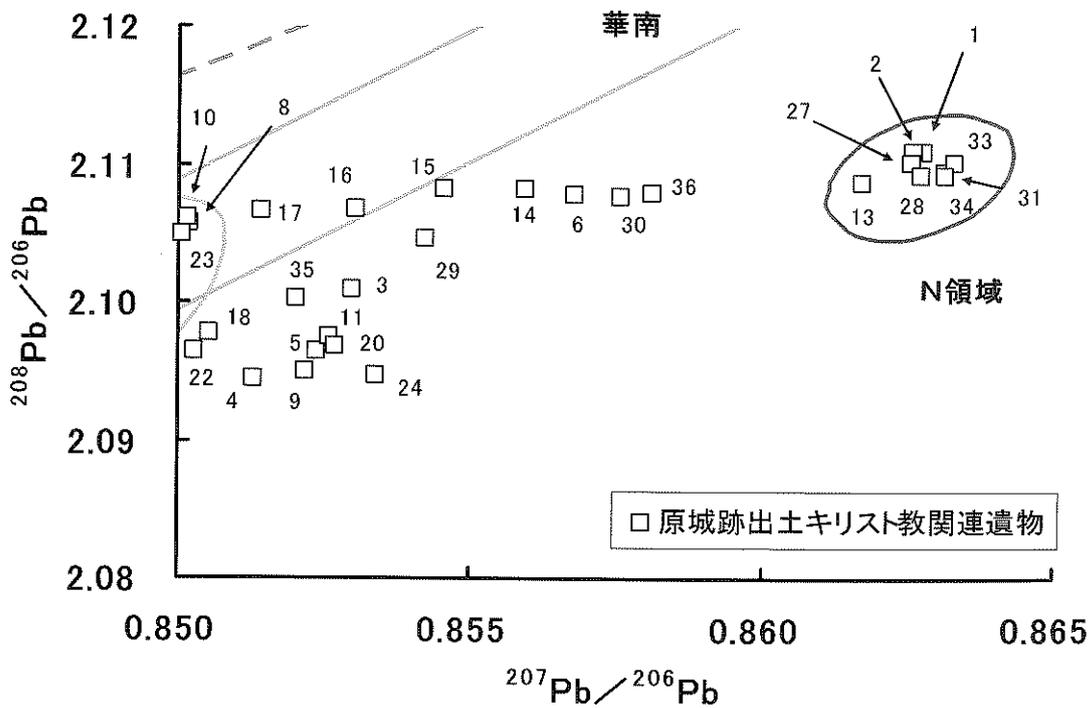


図2 図1の拡大図1
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

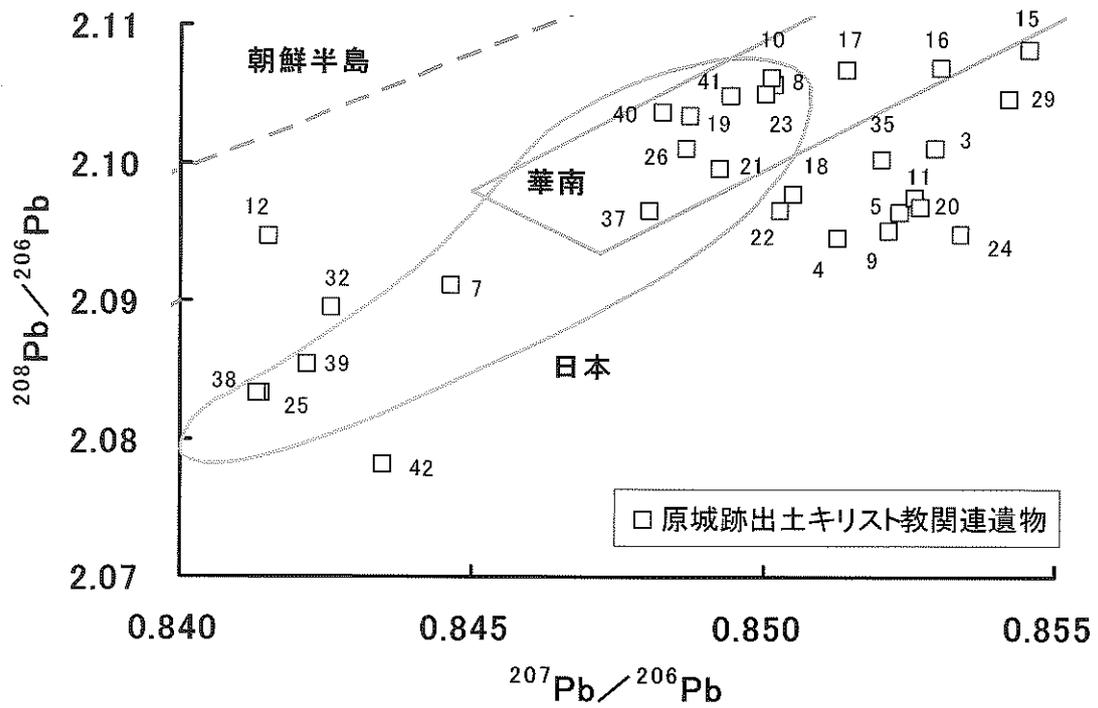


図3 図1の拡大図2
 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

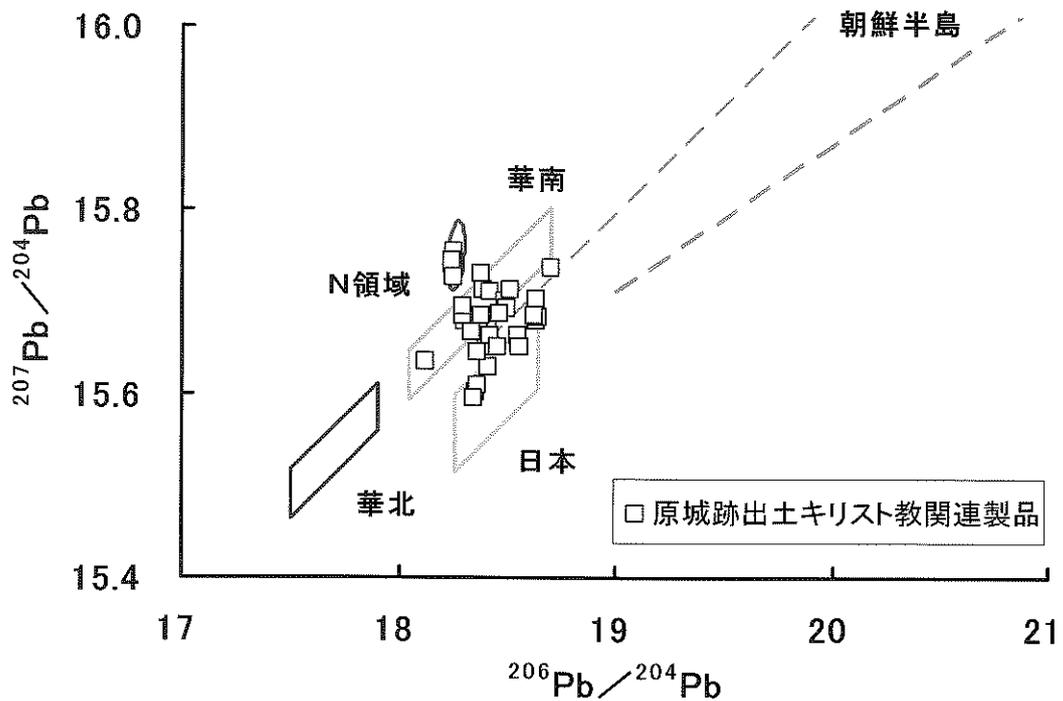


図4 原城跡出土キリスト教関連製品の鉛同位体比
 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

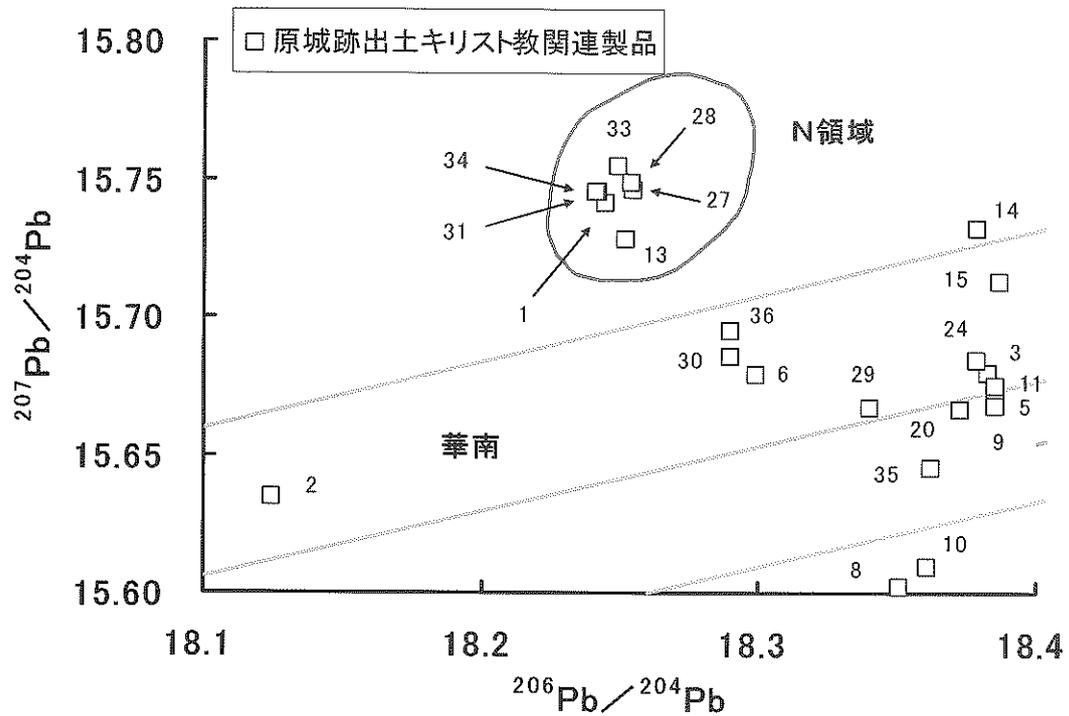


図5 図4の拡大図1
 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

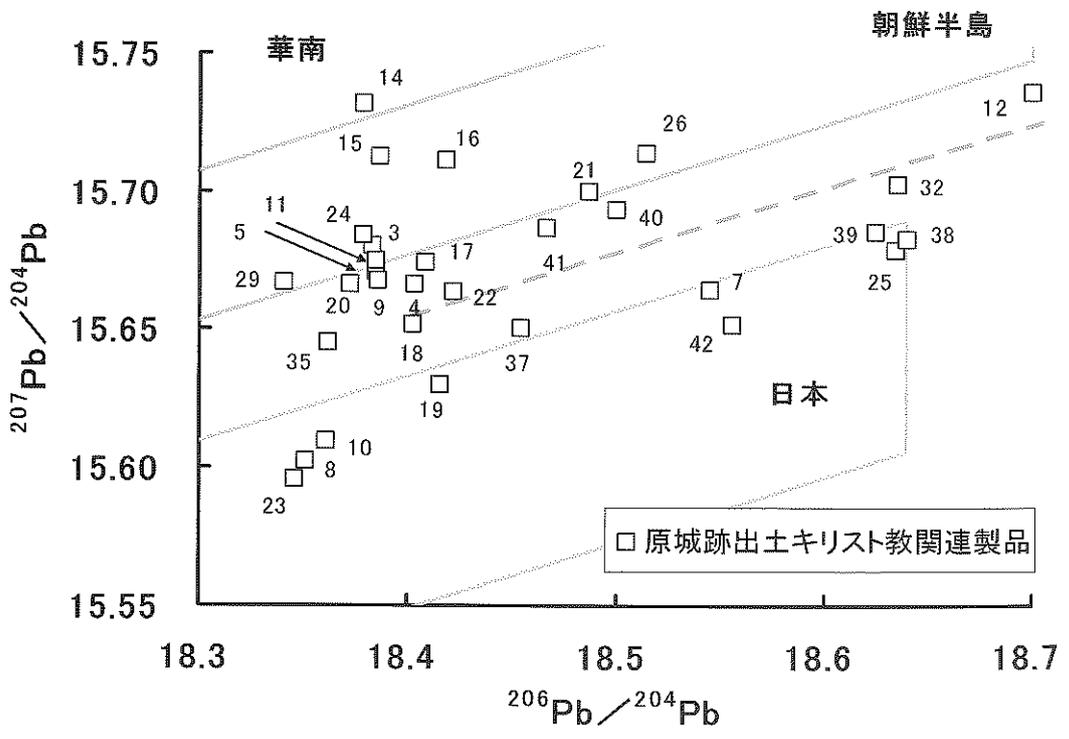


図6 図4の拡大図2
 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

原城本丸の石垣について

田島 俊彦

I. はじめに

原城の発掘調査は1977年策定の「管理保存計画」にもとづき保存環境整備事業の一環として、1992年から本丸地域を中心に毎年行われてきた。筆者は1994年頃から、南有馬町教育委員会の要請により、本丸石垣石の調査を実施してきた。1996年頃より、本丸石垣石の測量図が一部完成（No.05,06,08,13は未完成）したので、それらをもとに調査を行った。

原城は有馬晴信によって機密裏に築城され、本丸の阿蘇4火砕流堆積物*の中位段丘面上にだけ石垣が築かれている。本丸の石垣石総数は間詰石を除いて3450個であった。その内最も多かったのは雲仙火山産のデイサイトで全体の約64%、つぎに多かったのは南有馬地方産の玄武岩で約33%を占めている。

西有家竜石～布津大崎海岸の波食台にはデイサイト石垣石の取残石が多数見られ、南有馬山洞南～貴船神社海岸の波食台には玄武岩石垣石の取残石が散在している。山野に散在している岩石の表面には、黄褐色風化殻が発達しているが、原城石垣石には風化殻の見られるものはほとんどない。また多くの石垣石や間詰石の表面からカキ殻、フジツボ、藻類等の付着跡が見つかった。このような事から原城石垣石は大部分が海から引き上げられたものではなかろうかと推定される。

調査がNo.17本丸櫓台付近まで進んだ頃、天草地方にしか産出しない“古第三紀の礫岩・砂岩”や“三角石（Misumi-ishi）”がたくさん使用されていることが判明した。これらの石垣石の産地特定のため地質調査も行い2005年に“島原半島南部地方の地質図”を完成した。その結果、天草産と推定していた“古第三紀の礫岩・砂岩の巨大岩塊”石垣石は向小屋《最近、No.10南石置場から天草下島西海岸に分布する新鮮で角張った古第三紀砂岩岩塊が9個が見つかった》に、“三角石”に酷似した石垣石は鼻崎に産出することなどが判明した。

*阿蘇4火砕流堆積物：約9万年前阿蘇カルデラより瞬時に放出され、ホバークラフトのように100km/hくらいの速さで有明海を渡り、降下してきた高温（約400℃）の軽石・火山灰質イグニブルライト（弱溶結した灰石）で黒曜石小片をとめない、本丸東には層厚22mの断崖をつくり、鳩山出丸南部ではルーズな柱状節理が見られる。

II. 原城石垣について

原城の石垣石は、第1表、No.01～29に区分して調査を進めた。No.01～29までの石垣石の観察には、石垣ごとの観察一覧表を準備し、①岩質、②石垣石（間詰石＝岩塊～礫）の形体、③体積《高さ×幅×奥行き（推定）》、④割り方（割面数）、⑤矢穴（楔跡）、⑥付着物（カキ殻、フジツボ、セルブラ、サンゴ、海綿、石灰藻、海藻）、⑦石垣石の色、⑧自然石か割石かの判定、⑨特徴、⑩産地の推定等について記載した。さらに、岩石鑑定、比重測定、岩石薄片作成にあたっては南有馬町教育委員会が廃棄した新鮮な試料を使用し、国の重要文化財である石垣石の破壊や現状変更等は一切しなかった。

Ⅲ. 原城石垣石の構成岩石と産地の推定

原城の石垣石は、表1・図1のとおり、デイサイトD（桃色）、玄武岩B（紫色）、複輝石安山岩A（緑色）、黒雲母角閃石安山岩A（緑色）、イグニンプライト（灰石）O（青色）、古第三紀礫岩・砂岩P（黄色）、各種岩塊～礫岩C（赤色）に分類し、記号を付けて色分けした。また、同じ名称の岩石であっても産地が異なることがあるので地質と層序を検討しながら調査を進めた。

構成岩石（岩塊）の産地とその略号

- ① デイサイト類 *Dacites-andesites* 雲仙火山岩類 D（桃色）
黒雲母角閃石デイサイト～安山岩 D: *Biotite hornblende dacite-andesite* 高岩山・野岳
角閃石デイサイト～安山岩 D: *Hornblende dacite-andesite* 高岩山・野岳
複輝石角閃石デイサイト～安山岩 D: *Cpx-opx dacite-andesite* 高岩山・野岳
高岩山や野岳溶岩ドーム等から崩落したもので、初期の雲仙火山麓扇状地（竜石層）を構成して、竜石～西之浦、須川～中須川、石田～貝崎～大崎の波食台（潮間帯）に多数分布している。
- ② 玄武岩類 *Basalts* B（紫色）
カンラン石玄武岩 B *Olivine basalt* 吉川南海岸・上原・白木野・大峯・西正寺・早崎半島
ドレライト B *Dorelite* 宮崎鼻・吉川貴船神社海岸
吉川貴船神社海岸～山洞南海岸に産出するものは上原玄武岩が地滑りで流下して来たもので、有馬川流域～デルタにも多数分布している。古い玄武岩は宮崎鼻や早崎半島にも分布している。
- ③ 複輝石安山岩類 *Two pyroxene andesites* A（緑色）
塔ノ坂安山岩 A *Tohnosaka andesite* 塔ノ坂安山岩類
高峯安山岩 A *Takamine andesite* 塔ノ坂安山岩類
折木安山岩 A *Oriki andesite* 南串山層
国崎安山岩 A *Kunisaki andesite* 南串山層
田中安山岩 A *Tanaka andesite* 南串山層
中ノ場安山岩 A *Nakanoba andesite* 加津佐層
駒崎鼻海岸の複輝石安山岩巨大円礫岩 A *Boulder gravels of Two pyroxene andesites* 加津佐層
- ④ 黒雲母角閃石安山岩 *Biotite hornblende andesites* A（緑色）
葛蒲田安山岩 A *Shomuta andesite* 南有馬葛蒲田
- ⑤ 角閃石デイサイト類 *Hornblende dacites* D（桃色）
向小屋デイサイトDは、向小屋海岸に水底火砕岩類として分布している。
- ⑥ 火山碎屑岩類 *Pyroclastic rocks* D（桃色）
火山角礫岩 Vbr: *Volcanic breccia* 向小屋海岸の水底火砕岩類中のもの。すべて向小屋デイサイトDに含めた。
- ⑦ イグニンプライト（灰石＝軽石質溶結凝灰岩） *ig (wt); Igunimbrite* ig（青色）
小利イグニンプライト（灰石＝軽石質弱溶結凝灰岩） *O ig (wt); Otoshi igunimbrite* 小利・露田・宇土・矢竹・上揚・天草丸海岸等に分布する。

- ⑧ 口之津層群向小屋礫岩層，永瀬礫岩層，吉川礫岩層，大屋層，加津佐層，南串山層，北有馬層，前谷層等に含まれる硬質の礫岩・砂岩円礫 …………… P (黄色)
 古第三系礫岩大礫 P: Paleogene conglomerate (Pcg) …………… 南有馬・北有馬・口之津・加津佐
 礫岩巨礫 (古第三系) P: Paleogene conglomerate block (Pcg) …………… 巨大なものは向小屋に産出
 砂岩巨礫 (古第三系) P: Paleogene sandstone block (Pss) …………… 巨大なものは向小屋に産出
- ⑨ 口之津層群永瀬礫岩層，向小屋礫岩層，吉川礫岩層，大屋層，南串山層，北有馬層，前谷層に含まれる円礫大礫はCのつぎにその礫質岩の略語をつけて表した。…………… C (赤色)
 チャート大礫 Cch: Cherts conglomerate …………… 南有馬・北有馬・口之津・加津佐に産出
 ホルンフェルス大礫 Chr: Hornfels conglomerate …………… 〃
 花崗岩大礫 Cgr: Granites conglomerate …………… 〃
 アプライト大礫 Cap: Aplites conglomerate …………… 〃
 蛇紋岩大礫 Csp: Serpentinites conglomerate …………… 〃
 緑色片岩大礫 Cgs: Green schists conglomerate …………… 〃
 黒色片岩大礫 Cbs: Black schists conglomerate …………… 〃
 片麻岩大礫 Cgn: Gneiss conglomerate …………… 〃

IV. 石垣石構成岩石の特徴および比重

(1) 石垣石構成岩石のつくり (岩石顕微鏡による観察)

岩石薄片の顕微鏡写真を配列し，それぞれの岩石名を記載した。単ニコルは偏光で撮影し，直交ニコルは普通光で撮影したものである。含まれている造岩鉱物の屈折率の違いから岩石の種類が判る。

どの火山岩にも含まれている斜長石は，写真02のように白色の四角形や細長い長方形をしている。角閃石は，黒色短冊状の鉱物で雲仙火山岩類に多く含まれている。普通輝石は，写真16，18の虹色のきれいな鉱物で斜消光する。紫蘇輝石は，写真20に含まれる周りを鉄鉱物で包まれた小鉱物で直消光する。黒雲母は，雲仙火山岩類にたくさん含まれている黒～金色，六角形の鉱物で写真14にも含まれている。カンラン石は，玄武岩や複輝石安山岩に含まれているもので，写真10，12に見られるように虹色～トルコ石色のきれいな鉱物で直消光する。石英と二酸化珪素は，写真22，24のように単ニコルで透明で直交ニコルで黒くみえる。写真01，10，16，18に含まれている黒い鉱物は，磁鉄鉱で磁性がある。マグマが冷え固まる時に当時の地磁気を保存している鉄鉱物である。写真02，04には黒い部分が見られるがこれは火山ガラスであり，斑晶にまで成長しえなかった多数の微斑晶を包含している。写真21-22，23-24は，天草丸の小利イグニブライトに取り込まれた石灰質ノジュールの薄片であり，高温 (約800℃以上) のイグニブライトで加熱されながらも写真21-22には，二酸化珪素 SiO₂ 成分の針状～球形プラクトン(?)の一部が保存 (球形部分は炭酸塩鉱物で充填) されている。写真23-24には，二酸化珪素 SiO₂ 成分をもつ藻類(?)らしき生物体の一部がみられる。岩石顕微鏡写真の横幅は約3.5mmである。

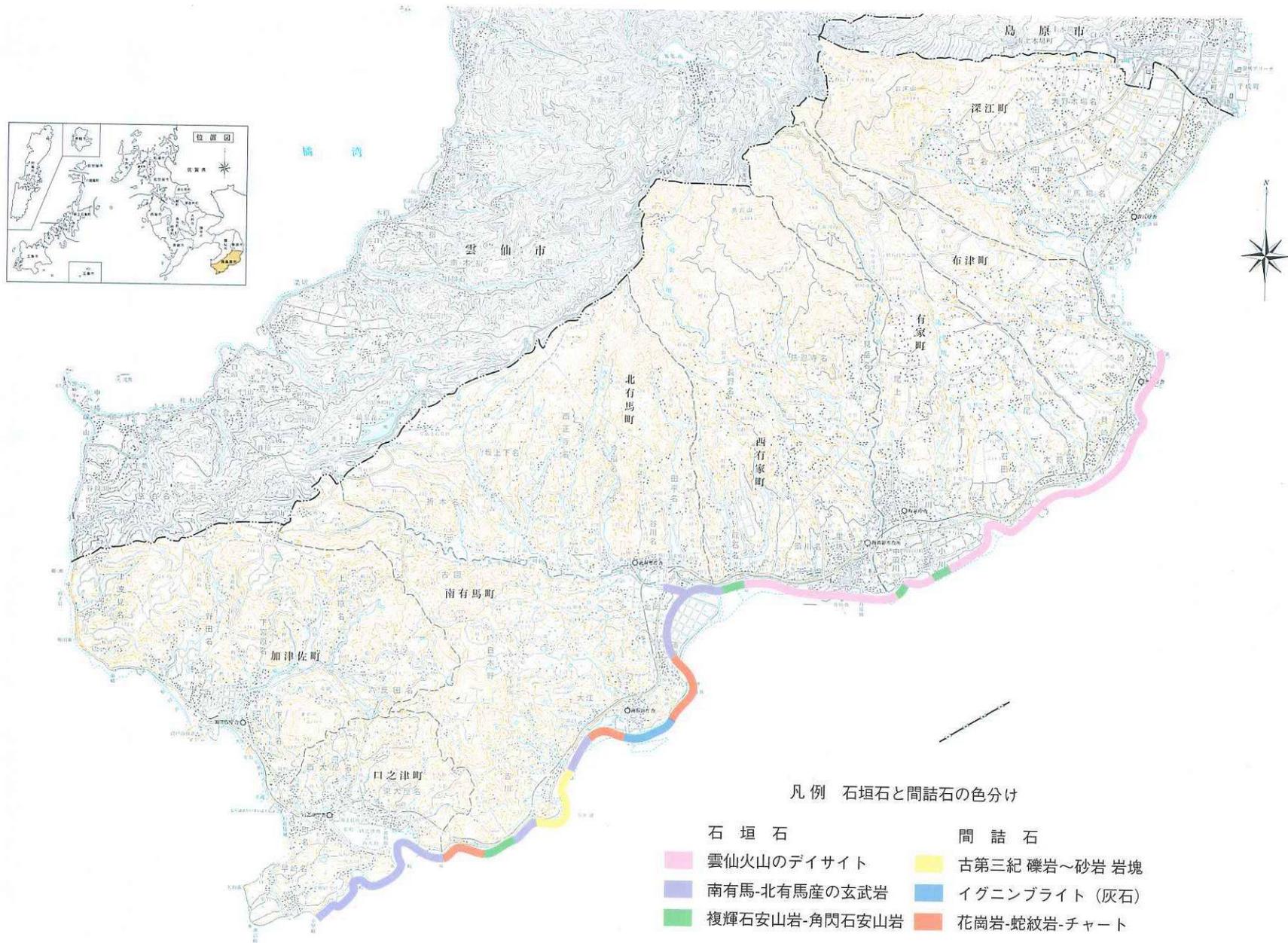
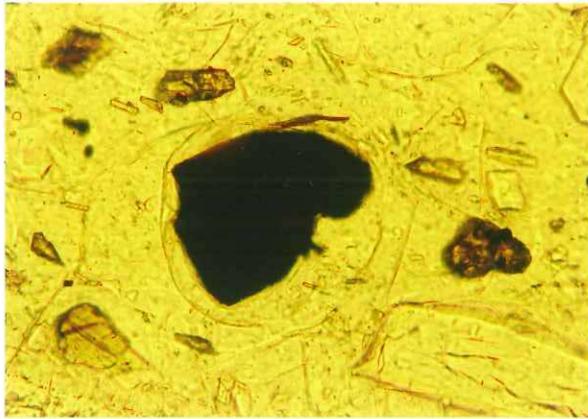


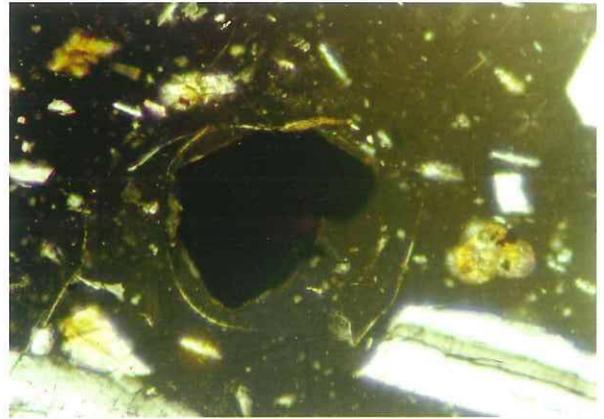
図1. 原城築城時における取残し石垣石 (残石=岩塊・巨礫) の分布図

表1 島原半島南部の火山層序表

地質時代	井上正昭 (1953) (抄)	有明海研究 グループ (1965) (抄)	大塚裕之 (1966) (抄)	鎌田泰彦 (1977) (抄)	渡辺一徳 (1982) (抄)	大塚裕之・ 古川博恭 (1988) (抄)	大塚・外間・田中・ 後村・竹之内・上野 (1995) (抄)	田島俊彦 (2009) (抄)	
完新世	沖積層	沖積層 白色火山灰層	砂丘砂 沖積層	海浜・砂丘砂 沖積低地～ 扇状地堆積層	Alluvium	Terrace deposit	沖積層 阿蘇火砕流堆積物	吾妻層 (扇状地堆積物) Aso-4 火砕流堆積物	
後期 更新世	×	大江層 = (大江貝層)	大江層 (貝層)	大江貝層 =大江層	Lower Terrace Gravel	Ōe Formation	中位段丘大江層 堆積物	大江貝層 (海成層)	
	阿蘇火山灰石	新期阿蘇溶岩	新期阿蘇溶結凝 灰岩	阿蘇火山灰	Aso-4 Pyroclas- tic Flow Dep.	Aso Pyroclastic flowdeposit	竜石層 高峯安山岩	竜石層 (扇状地堆積物) 尾登層 (扇状地堆積物)	
中期 更新世	南有馬層 (介化 石砂質礫岩)	口之津層群	×	×	Ōe Formation	Tatsuishi Formation	前谷層 出口層 諏訪池玄武岩	塔ノ坂安山岩 (高峯A.) 前谷層 (河成～海成層)	
	小浜層		竜石層	雲仙基底 火山砕屑岩	×	×	Tonosakaandesite	諏訪池玄武岩 上原・愛宕山玄武岩 岩戸山玄武岩 (白木野)	
前期 更新世	大屋層 火山礫岩部	×	南串山層 北有馬層	南島原安山岩 南串山 凝灰角礫岩 北有馬層	Minamikushi- yama For. Kitaarima Formation	Uwaharu basalt Atagoyama basalt Hachirao basalt Kitaarima For. Ōmine basalt Saishoji Formation Kunisaki andesite Minamikushiyama Formation	前谷層 北有馬層 八良尾玄武岩 大峯玄武岩 西正寺層 上原玄武岩 愛宕山玄武岩 鳳上岳凝灰角礫岩 女島凝灰角礫岩 南串山層	南串山層～北有馬層 加津佐層 (海成層) 大峯玄武岩 地滑り堆積物 夏吉層 (湖成～海成層)	
	複輝石 安山岩灰石		加津佐層 上部層 中部層 下部層	大屋層 上部層	大屋層 上部層	Up. Member of Ōya Formation	Mejima tuff breccia Kazusa Formation Oya For. Up. Mem. Otoshi pfd	加津佐層	小利イグニンプライト
	大屋層 砂質礫岩～ 砂・シルト岩		上部大屋層 灰黒色軽石質 tff 下部大屋層	大屋層 下部層	大屋層 下部層	Goryo Tuff (Ōya Tuff)	Low. Member of Ōya For.	大屋層上部層 小利 pfd. 大屋 pfd. 大屋層下部層	大屋層 (河成～海成層) 早崎玄武岩 吉川礫岩層 (河～海成層) 菖蒲田安山岩 永瀬礫岩層 (河～海成層) 真米玄武岩
古第三紀	志岐山層	×	基盤岩	始新世 坂瀬川層	Palaeogene System	Palaeogene	坂瀬川層	向小屋デイサイト 土瀬戸泥岩 (凝灰岩) 向小屋礫岩層	



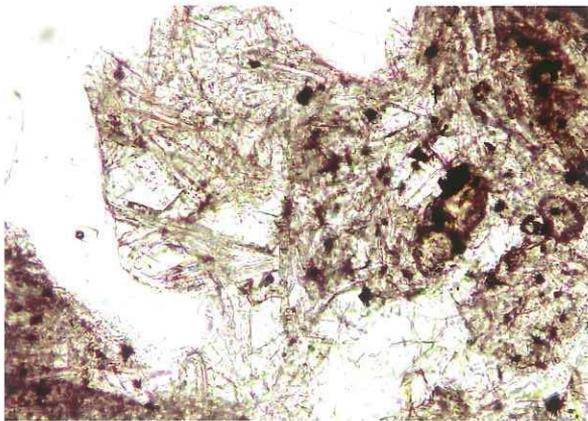
01. 加倉公園崖の高岩山デイサイト (単ニコル)



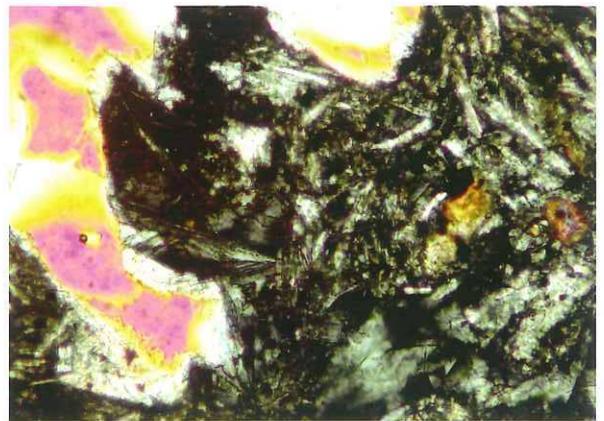
02. 加倉公園崖の高岩山デイサイト (直交ニコル)

普通輝石角閃石デイサイト

※本デイサイトは雲仙火山岩類で竜石層 (火山麓扇状地) を構成していたものである。



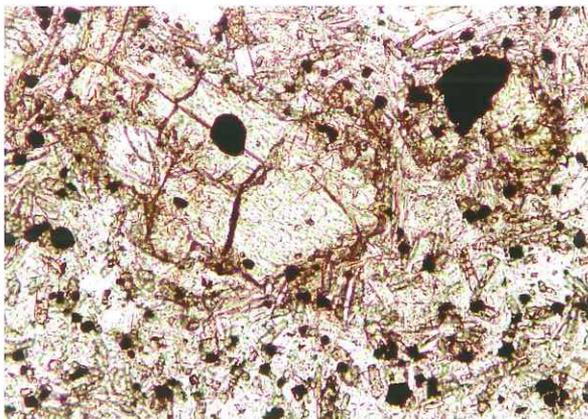
03. 高岩山西崖の高岩山デイサイト (単ニコル)



04. 高岩山西崖の高岩山デイサイト (直交ニコル)

普通輝石角閃石デイサイト

※本デイサイトは雲仙火山岩類で竜石層 (火山麓扇状地) を構成していたものである。



05. 原城石垣石のデイサイト (単ニコル)



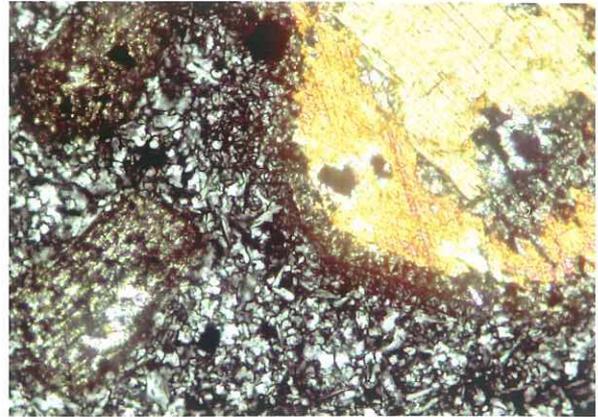
06. 原城石垣石のデイサイト (直交ニコル)

普通輝石角閃石デイサイト

※本デイサイトは雲仙火山岩類で竜石層 (火山麓扇状地) を構成していたものである。



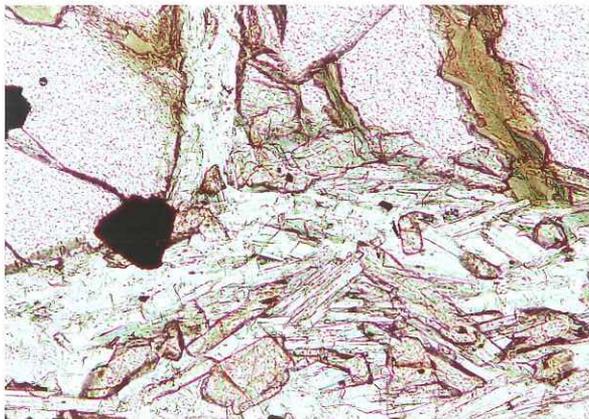
07. 竜石海岸のデイサイト (単ニコル)



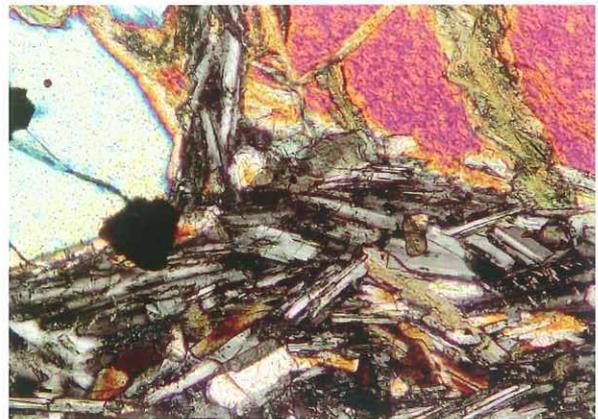
08. 竜石海岸のデイサイト (直交ニコル)

黒雲母角閃石デイサイト

※本デイサイトは雲仙火山岩類で竜石層 (火山麓扇状地) を構成していたものである。



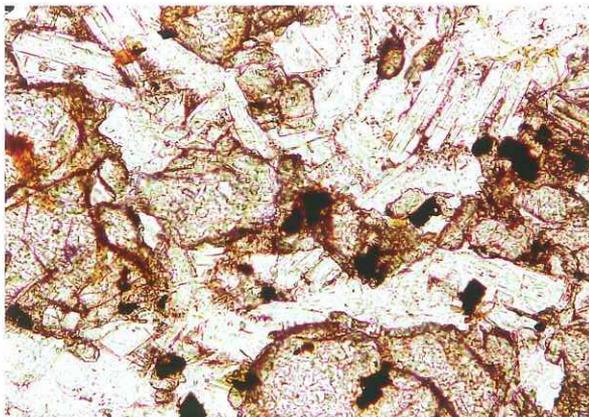
09. 菫蒲田東海岸の玄武岩 (単ニコル)



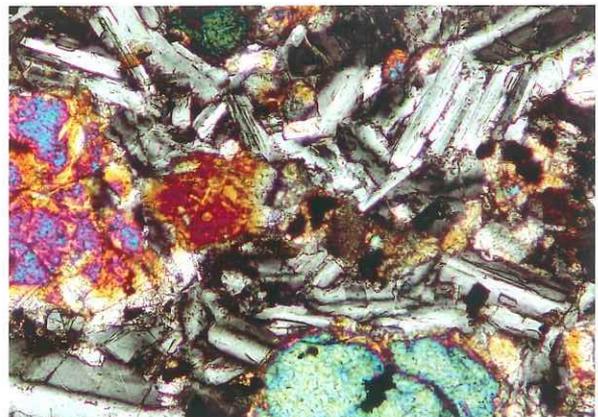
10. 菫蒲田東海岸の玄武岩 (直交ニコル)

カンラン石普通輝石玄武岩

※本岩は鮮新世上原玄武岩類の溶岩流で上原台地から地滑りで滑落してきたものである。



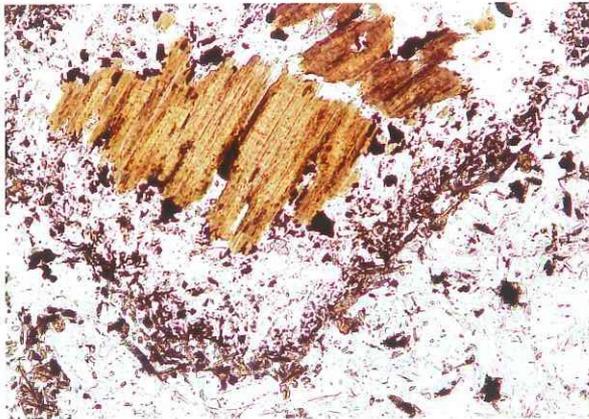
11. 貴船神社海岸の玄武岩 (単ニコル)



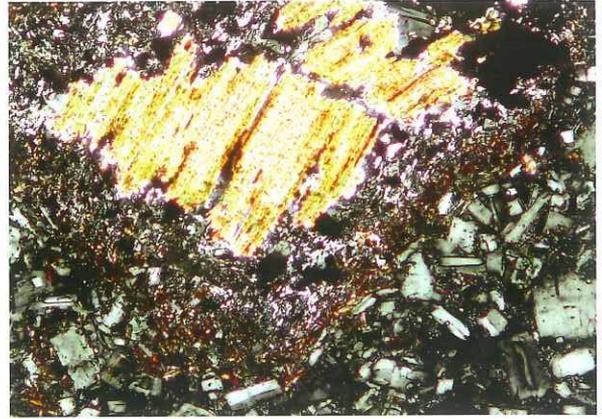
12. 貴船神社海岸の玄武岩 (直交ニコル)

カンラン石普通輝石玄武岩

※本岩は鮮新世上原玄武岩類の溶岩流で上原台地から地滑りで滑落してきたものである。



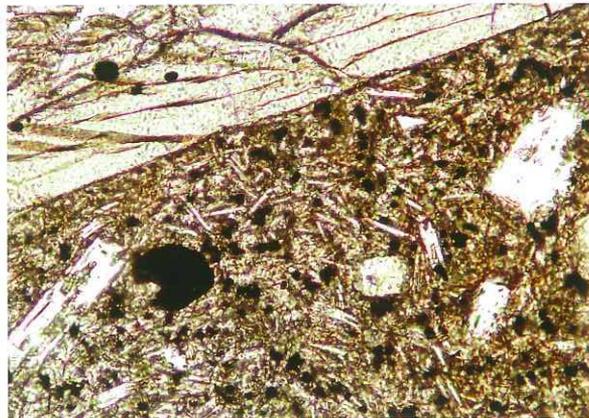
13. 菅蒲田の菅蒲田安山岩 (単ニコル)



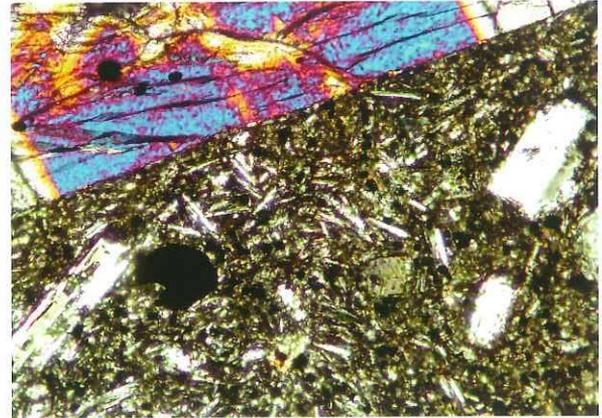
14. 菅蒲田の菅蒲田安山岩 (直交ニコル)

黒雲母角閃石安山岩

※菅蒲田安山岩は前期鮮新世の海底火山によって形成された溶岩ドームである。



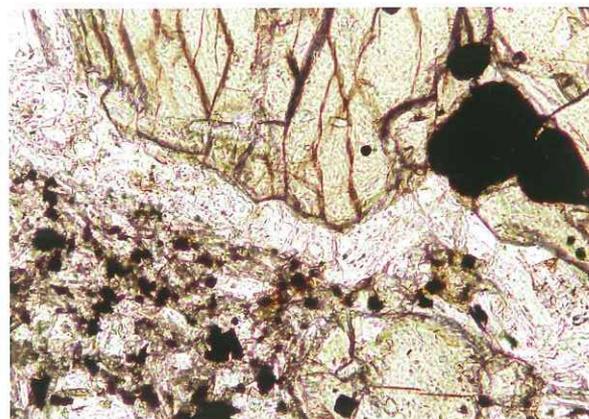
15. 戸の隅滝の塔ノ坂安山岩 (単ニコル)



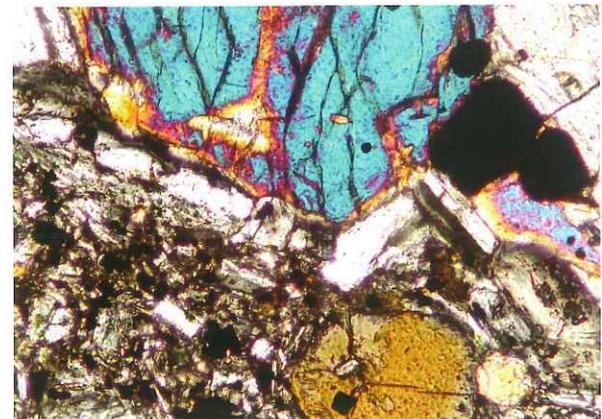
16. 戸の隅滝の塔ノ坂安山岩 (直交ニコル)

カンラン石輝石安山岩

※本岩は雲仙火山の活動直前に雲仙地獄付近から島原半島全域に洪水のように流出した。



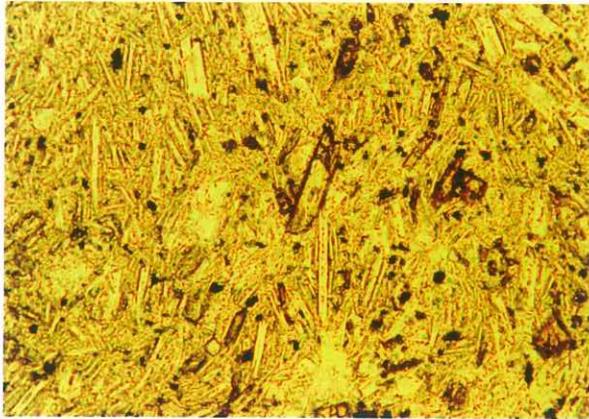
17. 今福高峯の高峯安山岩 (単ニコル)



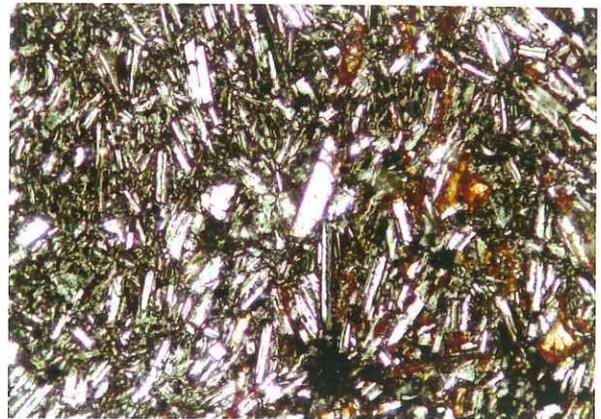
18. 今福高峯の高峯安山岩 (直交ニコル)

カンラン石輝石安山岩

※本岩は雲仙火山の活動直前に雲仙地獄付近から島原半島全域に洪水のように流出した。



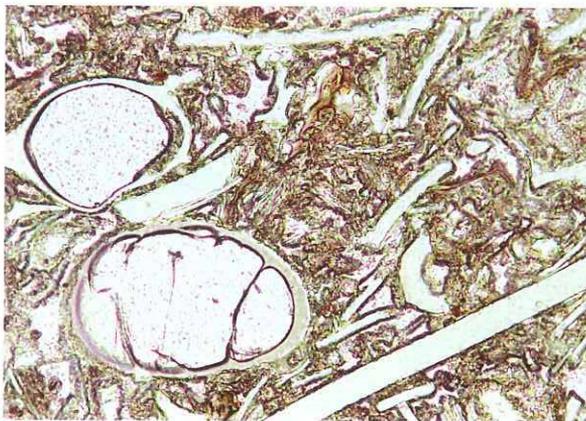
19. 鮎帰滝の高岩山デイサイト (単ニコル)



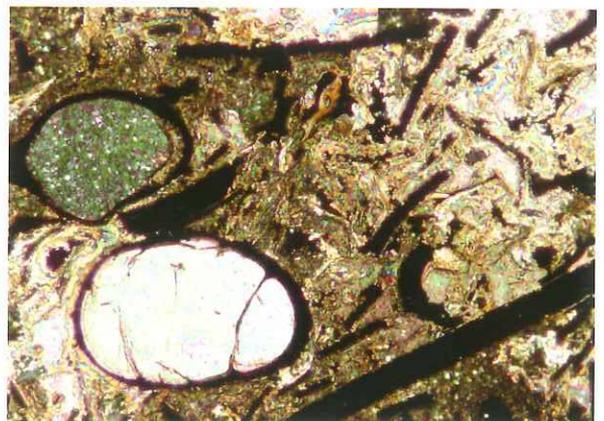
20. 鮎帰滝の高岩山デイサイト (直交ニコル)

普通輝石デイサイト

※高岩山東山麓から東方へ流出し有家川をせき止めたマグマが冷却して鮎帰滝をつくった。



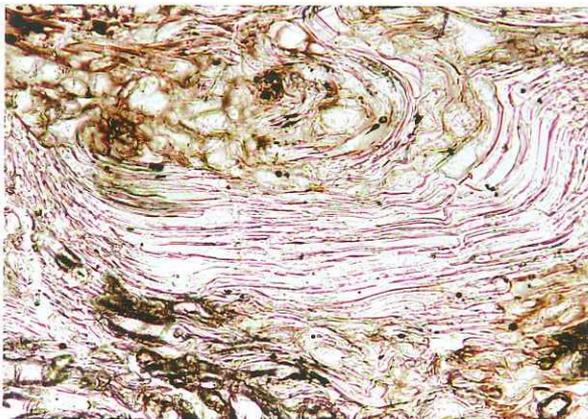
21. 天草丸海岸の小利イグニブライト(灰石)(単ニコル)



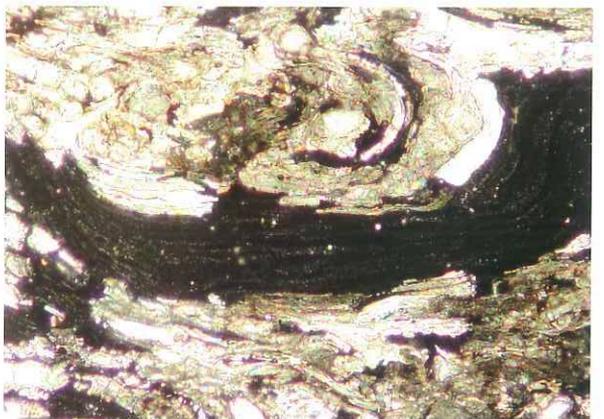
22. 天草丸海岸の小利イグニブライト(灰石)(直交ニコル)

角閃石紫蘇輝石普通輝石を含むイグニブライト(灰石)

※橘湾南部の所在不明(?)のカルデラから放出されたもので骨針・藻類化石をふくむ。



23. 天草丸海岸の小利イグニブライト(灰石)(単ニコル)



24. 天草丸海岸の小利イグニブライト(灰石)(直交ニコル)

角閃石紫蘇輝石普通輝石を含むイグニブライト(灰石)

※橘湾南部の所在不明(?)のカルデラから放出されたもので骨針・藻類化石をふくむ。

〔2〕吉川礫岩層に含まれる古第三紀堆積岩の巨大岩塊



25. 向小屋砂利取場の吉川礫岩層



26. 吉川礫岩層に含まれていた巨大岩塊

※島原半島南部の古第三紀坂瀬川層は頁岩や細粒砂岩であるが、向小屋砂利取場に露出するものは礫岩や粗粒砂岩の巨大岩塊である。



27. 吉川礫岩層に含まれていた砂岩巨大岩塊



28. 吉川礫岩層に含まれていた砂岩巨大岩塊

※吉川礫岩層基底部分にあたるこの砂利取場は、下部に向小屋デイサイトの海底火山があり、その噴火の際にこれらの巨大岩塊を噴出したと推定される。

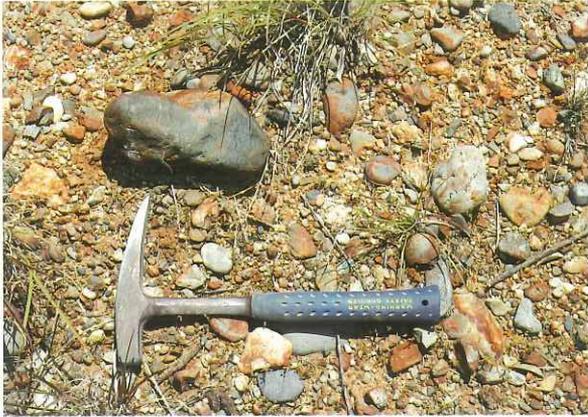


29. 吉川礫岩層の古第三紀砂岩巨大岩塊



30. 吉川礫岩層に含まれているチャート巨礫

※吉川礫岩層には花崗岩、チャート、ホルンフェルス、片麻岩、砂岩、礫岩等の巨礫が含まれるが、その中に九州山地に分布する肥後片麻岩が混じっている。



31. 吉川礫岩層のホルンフェルス巨礫



32. 吉川礫岩層の花崗岩類巨礫

※吉川礫岩層には花崗岩、チャート、ホルンフェルス、片麻岩、砂岩、礫岩等が含まれるが、その中に九州山地に分布する肥後片麻岩が混じっている。

※向小屋砂利取場一帯には吉川礫岩層があり、その中に古第三紀の礫岩、砂岩の巨大岩塊が多数散在しているが、これは鼻崎付近にあった向小屋デイサイトの海底火山の活動によって地下からもたらされたものと考えられている。

V. 石垣石構成岩石の比重

① 比重の測定法

原城石垣石の新鮮な試料小片を選びオーハウス電子天秤 (CS-200) で、 $W =$ (石の重量)、 $W_1 =$ (水の重量+容器の重量)、 $W_2 =$ (水の重量+容器の重量+石の重量) を測定し、 $W/W_2 - W_1$ 式により比重を求めた。試料には、南有馬町教育委員会が廃棄した新鮮な石垣石小片を使用した。

② 比重から石垣石の重さを概算する

比重の値は、試料1立方センチの重さを表した数値であり、 $[\text{体積}] \times [\text{比重}] = [\text{重さ}]$ なので、例えば…10センチ立方の玄武岩Bであれば、その体積は10センチ×10センチ×10センチ=1000立方センチであるから、その重さは1000立方センチ×2.94 (比重) =2,940グラム・重≒2.9キログラム・重となる。石垣石にはいろいろな形のものがあるが、すべて直方体、立方体、四角錐、球体、六面体等のように体積の算定がしやすい形になぞらえて測定した。例えば、縦125センチ、横168センチ、奥行き89センチの直方体デイサイトD石垣石の体積は約 $12 \times 16 \times 8 = 1,536$ リットルとなり、この値にデイサイトの比重2.46を乗じると $1,536 \times 2.46 = 3,779$ トン≒3.8トンと概算され、およその推定重量が求められる。

表2 原城石垣石に使用されている岩石の比重

原城 石垣石に使用されている巨礫岩の比重

原城石垣石の新鮮な試料小片(石)†を選び、オーハウス電子天秤(CS-200)で、W(石の重量), W1(水+容器の重量), W2(水+容器+石の重量)を測定し、 $W/W2 - W1$ 式により…比重を求めた。*印は、同方法により別試料を測定したものの。†石垣石(廃棄石)を試料にした。

試料記号	原城 デイサイト D	西之浦 デイサイト D	向小屋安山岩 A	上原玄武岩 B	複輝石安山岩 A	小利火砕流 堆積物 O	向小屋 砂岩・礫岩 P
W 重量 g	6.4	5.9	5.8	10.5	3.3	3.6	7.4
W2 - W1 体積 g (cm ³)	2.6	2.4	2.3	3.8	1.2	2.9	3.6
W2 (水+容器+石) g	137.3	136.3	135.9	132.2	134.4	135.4	136.5
W1 (水+容器) g	134.7	134.2	133.6	128.4	133.2	132.5	132.9
比重	2.45*~		2.48*~		2.17*~		
	2.46	2.46	2.52	2.76~	2.75	1.24	2.06~
				2.94*			2.52*

③ 原城本丸の石垣石を造る岩石について

礎石を含めない原城本丸の石垣石総数は3413個であった。その内、約64%の2203個が軽くて(比重小)加工・運搬のしやすい【1】雲仙火山のデイサイトが使用されていて、約33%の1124個が南有馬・有馬川流域に分布する黒くて重い【2】玄武岩であった。【3】複輝石安山岩~角閃石安山岩は約1.3%の44個が使用されている。【4】古第三紀礫岩~砂岩塊は約1.06%の36個が使用されている。【5】イグニンプライト(灰石)は約0.12%の4個が使用されているが風化・崩壊している。【6】その他として花崗岩角礫1個、蛇紋岩角礫1個、合計約0.06%の2個が認められた。

- 【1】 雲仙火山のデイサイトは竜石~須川~小川~石田~貝崎~大崎までの波食台に分布していたものである。雲仙山麓扇状地をつくる約40~8万年前に活動した高岩山火山、矢岳火山、野岳火山等から放出された巨大岩塊が波食台まで運搬されたもので、古い感じのする淡赤色デイサイトで径10mm内外の斜長石を伴っている。軽くて原城石垣に多用されている。
- 【2】 玄武岩は南有馬の菖蒲田東汀~貴船神社海岸~有馬川河口域に産出する。ほとんどが約110万年前に活動した上原玄武岩であり、上原台地から地滑りで海岸~有馬川流域まで滑落してきたものである。重くて割れにくいがデイサイトに次いで多用されている。また、間詰石のほとんどは玄武岩角礫・円礫である。
- 【3】 複輝石安山岩~角閃石安山岩の内、複輝石安山岩は塔ノ坂安山岩~高峯安山岩と呼ばれ、高峯

～清水川上流～塔ノ坂～丸尾～城平等に産出する。塔ノ坂安山岩（高峯安山岩）は雲仙火山が活動を開始する直前の約50万年前頃に活動したものである。また角閃石安山岩は菖蒲田安山岩と呼ばれ菖蒲田に産出する。菖蒲田安山岩（黒雲母含有）は約420万年前頃の海底火山として噴出した淡赤褐色の安山岩であり、小さな溶岩ドームを造っている。島原地方では本安山岩を古くから採掘し、鳥居、恵比寿像、地藏像、墓石、キリシタン墓碑等に利用している。

駒満鼻に産出する複輝石安山岩円礫～偏平礫は約145万年前の加津佐層に属し、間詰石として玄武岩について多用されている。

- 【4】古三紀礫岩～砂岩塊は、坂瀬川層に所属するやや丸みをおびた堆積岩で、約420万年前に活動した向小屋海底火山により地下深所より捕獲されてきたものであり、吉川～向小屋海岸に分布している。最近 No. 10南広場に配列された73個の石垣石の中から古第三紀砂岩の9岩塊が識別された。この砂岩岩塊は約90cm×50cm×40cm大から約40cm×30cm×20cm大のものですべて岩塊の角が尖っていて新鮮で吉川～向小屋海岸産とは考えられず、天草下島西海岸（坂瀬川層の分布地）から運搬されたものではないかと思われる。
- 【5】イグニブライト（灰石）は、小利イグニブライトと呼ばれる黒灰色の溶結した軽石質火砕流堆積物で、約180万年前、橘湾南部の所在不明カルデラから放出されたもので、島原地方では“灰石 Hya-ishi”と俗称され、小利、露田、宇土、矢竹、天草丸に産出する。軽くて軟らかいので加工がしやすく、灯籠、挽き臼、石垣石、階段石、墓石、キリシタン墓碑等にも活用されているが風雨にさらされたものには崩壊しかけているものもある。
- 【6】その他、花崗岩角礫1個、蛇紋岩角礫1個はともに新鮮で口之津層群中のものとは思えず産地も特定できない。また、小花崗岩角礫は新鮮なものが“小ぐり石”としてあと7個くらいあるが“岩質一覧表”には計上しなかった。

原城石垣石は、デイサイトと玄武岩がほとんどを占めているが、それらの最大重量はデイサイトで約4.4トン、玄武岩で約3.2トンのものがあつた。比重が小さく運搬しやすいデイサイトは大きいものが多用され、比重の大きい玄武岩や複輝石安山岩は小形のものが多用されている。

VI. 自然石の断面に見られる赤～黄褐色風化殻

山野に散在する玄武岩、複輝石安山岩、デイサイト等の巨礫や岩塊を割ると周縁に厚さ約0.5～3.0センチの赤～黄褐色風化殻 (reddish-ochre weathering crust) が形成されているが、原城石垣石には赤～黄褐色風化殻をもった石垣石がほとんど見られない。赤～黄褐色風化殻は“山野・田畑の表層石”に形成されていて、川・海中にあるものには侵食されて摩耗・流失するので見られない。この事からも原城石垣石は、有明海の波食台（潮間帯）に散在していた石材を採取してきたのではないかと考えられる。また、塊状岩（砂岩）や玄武岩の階段石～石垣石の表面に赤～黄褐色褐鉄鉱皮膜が付着したものが見られる事があるが、これは塊状岩に生ずるリーゼガングリング (Liesegang rings) と同様に川や湧泉に溶け出した鉄イオンが“湿ったり～乾燥したり”を繰り返している内に縞状に染み着いて形成されるもので

$2\text{Fe}(\text{OH})_3 \rightarrow \text{Fe}_2\text{O}_3 + 3\text{H}_2\text{O}$ …の反応によって生ずる縞状褐鉄鉱皮膜であつて、淡水域の“岸辺の石”に付着している事が多く“潮間帯の石”には見られない。



33. 大峯の玄武岩礫に見られる黄褐色風化殻
大峯玄武岩の柱状節理側面に生じた黄褐色風化殻。



34. 日原の玄武岩礫に見られる黄褐色風化殻
諏訪池玄武岩の楕円礫表面に生じた黄褐色風化殻。



35. 京泊の石垣に見られる黄褐色風化殻
南串山層中の複輝石安山岩礫に生じた黄褐色風化殻。



36. 京泊の石垣に見られる黄褐色風化殻
南串山層中の複輝石安山岩礫に生じた黄褐色風化殻。



37. 京泊の石垣に見られる黄褐色風化殻
南串山層中の複輝石安山岩礫に生じた黄褐色風化殻。



38. 日原の石垣に見られる黄褐色風化殻
諏訪池玄武岩礫の表面に見られる黄褐色風化殻。

Ⅶ. 潮間帯の残石に見られる矢穴（楔跡）

吉川～貴船神社海岸の波食台（潮間帯）には、矢穴（楔跡）のある玄武岩の残石が散在している。西有家～布津海岸の波食台（潮間帯）には、矢穴（楔跡）のあるデイサイト岩塊の残石が散在している。

潮間帯の残石に穿たれた矢穴（楔跡）は、マグマが固結してできた溶岩にしか見られない。一般的に玄武岩や複輝石安山岩は緻密で黒っぽくて比重が大きく（3.3～2.7）、流紋岩やデイサイトは粗鬆な溶岩で白っぽくて比重が小さい（2.5～2.2）傾向にある。ただし縄文時代の石器に使用されている黒曜石はガラス質で黒～灰色であるが流紋岩の仲間であり比重は小さい（2.6）方である。

緻密な溶岩（玄武岩・複輝石安山岩）に見られる矢穴（楔跡）は、2～3個（割れやすい）のものが多く、粗鬆な溶岩（角閃石安山岩～デイサイト）には3～10個（割れにくい）くらいのものであった。なお、これらの残石は波食を受けて丸みを帯びている。



39. 竜石海岸の残石に見られる矢穴
軟らかいデイサイトに刻まれた3矢穴。



40. 竜石海岸の残石に見られる矢穴
軟らかいデイサイトに刻まれた3矢穴。



41. 竜石海岸の残石に見られる矢穴
軟らかいデイサイトに刻まれた3矢穴。



42. 竜石海岸の残石に見られる矢穴
軟らかいデイサイトに刻まれた3矢穴。



43. 吉川海岸の残石に見られる矢穴
硬い玄武岩に刻まれた3矢穴。



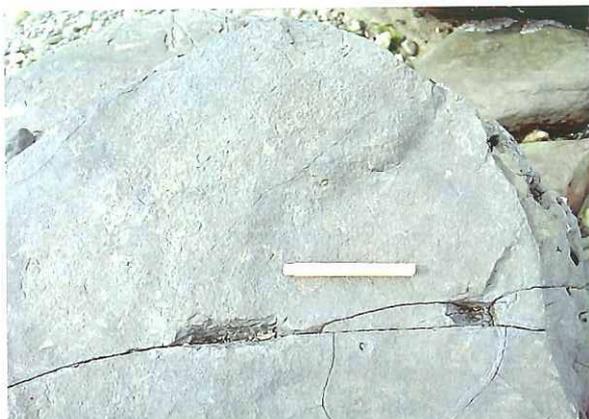
44. 吉川海岸の残石に見られる矢穴
硬い玄武岩に刻まれた4矢穴。



45. 吉川海岸の残石に見られる矢穴
硬い玄武岩に刻まれた3矢穴。



46. 菖蒲田海岸の残石に見られる矢穴
菖蒲田安山岩に刻まれた2矢穴。



47. 吉川海岸の残石に見られる矢穴
硬い玄武岩に刻まれた2矢穴。



48. 吉川海岸の残石に見られる矢穴
硬い玄武岩に刻まれた3矢穴。



49. 有家海岸に見られる塔ノ坂安山岩

塔ノ坂安山岩は、塔ノ坂から慈恩寺付近にあったものが清水川によって運搬された。



50. 有家海岸の巨大残石に見られる矢穴

軟らかいデイサイト岩塊が半分はすでに取り去られ残石に9矢穴が残されている。



51. 石田海岸の残石に見られる矢穴跡

軟らかいデイサイトに刻まれた矢穴。



52. 石田海岸の残石に見られる矢穴跡

軟らかいデイサイトに刻まれた3矢穴。



53. 石田海岸の残石に見られる矢穴跡

軟らかいデイサイトに刻まれた矢穴。



54. 石田海岸の残石に見られる矢穴跡

軟らかいデイサイトに刻まれた矢穴。

VIII. 石垣石の形体

石垣石には、巨大な火山岩塊（大礫－巨礫）が使用されている。火山学では直径64mm以上のものを火山岩塊と呼び堆積学では直径256mm以上のものを巨礫と呼んでいる。石垣石には、縦40cm×横60cm×奥行き50cm大（重量300kg・重）以上の自然石や割石（間知石）が多いので、本報告ではこれらの石垣石を火山岩塊や巨礫と呼ばないで“岩塊（block＝ブロック）”と記載する。

石垣石には自然石および割石（間知石）がある。

自然石*

球体岩塊
直方体岩塊

楕円体岩塊（俵形岩塊）
板状節理岩塊

立方体岩塊
柱状節理岩塊

割石（間知石）*

直方体岩塊
三角柱岩塊
六角柱岩塊
球体岩塊

立方体岩塊
四角柱岩塊
三角錐岩塊
楕円体岩塊

六面体岩塊
五角柱岩塊
四角錐岩塊



55. 立方体岩塊



56. 直方体岩塊



57. 直方体岩塊 2



58. 長直方体岩塊



59. 六面体岩塊＝（直方体）



60. 三角錐岩塊



61. 三角錐岩塊 2



62. 三角錐岩塊 3



63. 四角錐岩塊



64. 三角柱岩塊



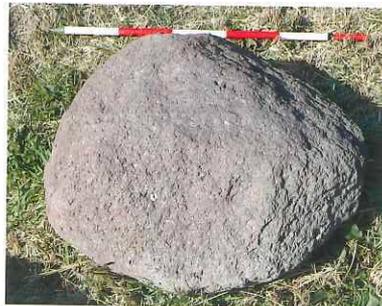
65. 四角柱岩塊



66. 五角柱岩塊



67. 六角柱岩塊



68. 球体岩塊



69. 橢円体岩塊



70. 橢円体岩塊 2



71. 半橢円体岩塊



72. 板状橢円体岩塊

間詰石（小詰め） 石垣石（自然石・割石岩塊・間知石）の間に詰める石を間詰石（小詰め・栗石・胴介石・鱸介石）と呼んでいる。間詰石には、10cm×15cm×20cm大前後の円礫，亜円礫，楕円礫，角礫，垂角礫等の形体のものが多い。

* 牧野富太郎（1989）改訂増補牧野新日本植物図鑑．北隆館の一部を参考にした。

※ 石垣石岩塊の測定と体積の概算方法

石垣石の“岩塊・礫の形体”から体積を概算しやすいように“高さ×幅×奥行き”の項をつぎのように立方体，直方体，角錐，角柱などになぞらえて測定した。

1. 立方体，直方体岩塊の体積＝底面積×高さで求めた。

2. 三角錐，四角錐岩塊の体積＝ $1/3 \times$ 底面積×高さで求めた。

岩塊・礫の形体が三角錐の場合，〔高さ×幅×奥行き〕の欄で測定値が〔40cm×30cm×20cm〕と記載されていたとすれば最初の40cmは底面三角形の底辺を測定し，30cmは底面三角形の高さを測定したものであるから， $1/2 \times 40\text{cm} \times 30\text{cm}$ で底面三角形の面積を求めた後に，〔三角錐，四角錐岩塊の体積＝ $1/3 \times$ 底面積×高さ〕で…三角錐の体積＝ $1/3 \times 600\text{cm}^2 \times 20\text{cm} = 4000\text{cm}^3$ …と概算して戴きたい。

3. 三角柱岩塊の体積＝底面積×高さで求めた。

岩塊・礫の形体が三角柱の場合，〔高さ×幅×奥行き〕の欄で測定値が〔40cm×30cm×20cm〕と記載されていたとすれば最初の40cmは底面三角形の底辺を測定し，30cmは底面三角形の高さを測定したものであるから， $1/2 \times 40\text{cm} \times 30\text{cm}$ で底面三角形の面積を求めた後に，〔三角柱岩塊の体積＝底面積×高さ〕で…三角柱の体積＝ $600\text{cm}^2 \times 20\text{cm} = 12000\text{cm}^3$ …と概算して戴きたい。

4. 五角柱，六角柱岩塊の体積＝底面積×高さで求めた。五角柱，六角柱岩塊の底面積は最も近い形の長方形になぞらえて測定した。

5. 球体岩塊の体積＝外接する立方体と内接する立方体の各辺の長さの平均値を目分量で測定して概算した。

6. 楕円体岩塊の体積＝外接する直方体と内接する直方体の各辺の長さの平均値を目分量で測定して概算した。

Ⅷ. 原城石垣石に付着した海棲生物痕

原城石垣石（間知石）や間詰石の表面には海棲生物の居住痕や石灰藻～藻類，海綿動物，節足動物，軟体動物等の潮間帯に生息する生物群の付着跡等が見られる。

ヒトエカンザシ（カンザシゴカイ科）：*Serpula vermicularis* Linnaeus

カサネカンザシ（カンザシゴカイ科）：*Hydroides norvegica* Gunnerus

ウズマキゴカイ（カンザシゴカイ科）：*Dexiospira foraminosus* (Bush)

オオヘビガイ（ムカデガイ科）：*Serpulorbis (Cladopoda) imbricatus* (Dunker)

フナクイムシ（フナクイムシ科）：*Teredo navalis japonica* Clessin

シロスジフジツボ（フジツボ科）：*Balanus amphitrite albicostatus* Pilsbry

以上の付着跡が見られるところから現地の波食台に散在する約2～3トン以上の巨大岩塊に矢穴を穿ち矢（楔）を打ち込んで0.2～0.3トン大に割って運搬し，築城したのではなかろうかと推定される。



73. 原城石垣石に見られる藻類付着跡



74. 間詰石に付いたカンザシゴカイ類



75. フジツボ・セルプラ類の付着跡



76. 間詰石に付いた海藻類付着跡

X. 天草丸海岸の船寄せ・陸揚場の推定

1960年頃の天草丸海岸（現擁壁下部）には、青緑色泥土中に木造船の船底や樹枝片等が埋没していて、その横にはゆるやかな勾配の小径があって田町御門の方へ往來することができた。この汀には59～62のように原城石垣石と同じような石が多数散在している。この石垣石は天草丸汀がかつて大型帆船、石釣船、団平船、筏等で運搬されてきた石垣石の荷揚場であって、その時海中にこぼれ落ちた石がそのまま放置されていたものではないかと推定される。また、青緑色泥土に埋まった木造船の残骸は当時の石垣石運搬に使用されていた船舶の一部ではないかと想像される。

周囲を浅海と水田に囲まれ、築城用の石垣石の少ない地盤の悪い原城の築城は困難を極めたものと思われるが、この築城にはその専門集団である“穴太衆”が関与して海上運搬班と陸上運搬班を組織して約3450個の石垣石を天草丸汀（間詰石は別の汀）より陸揚して機密裏に築城したのではないかと推定される。



77. 天草丸汀に放置された多数の石垣石



78. 天草丸汀に放置された石垣石



79. 天草丸汀に放置された多数の石垣石



80. 天草丸汀に放置された石垣石



81. 天草丸汀に放置された多数の石垣石



82. 天草丸汀に放置された石垣石

Ⅺ. 石垣を造る自然石・割石（間知石）岩塊の産地と形体

石垣石には自然石および割石（間知石）岩塊が使用されている。原城本丸の石垣石（間知石）岩塊の内約64.2%を占める雲仙火山産のデイサイトは西有家竜石～布津大崎の波食台（潮間帯）に散在していたものである。それらの形体はおもに直方体岩塊，立方体岩塊，三角錐岩塊，四角錐岩塊等である。つぎに多いのは約33.1%を占める玄武岩で南有馬の波食台（潮間帯），有馬川流域～デルタに分布する球体岩塊，楕円体岩塊（俵形岩塊），扁平楕円体岩塊，板状節理岩塊，柱状節理岩塊等であり，残り2.7%は複輝石安山岩，古第三紀砂岩・礫岩，イグニンプライト（灰石），花崗岩，蛇紋岩等で角礫状岩塊が多かった。

割石岩塊は，自然石を加工して割石にしたもので，割面は1～6面のものが多いが中には8面以上に割られているものもあり，その形体は，直方体岩塊，立方体岩塊，六面体岩塊，三角柱岩塊，四角柱岩塊，五角柱岩塊，三角錐岩塊，四角錐岩塊，多面体岩塊等が見られる。

石垣石岩塊はデイサイトの自然石を1～2面割ったものが最も多く，玄武岩は板状節理の見られる自然石が多用されている。また，小さい石垣石や間知石は城郭建設中に大石を割って“角礫”にして使用したものも多いと思われる。石垣石一覧表の岩塊・礫の欄では，自然石か加工石かを識別し，さらに加工石は割面数を，1，2，3面…と記載したが，観察できなかった6面体の奥の面は記載していない。従って，真の割面数は表に記載した数より1～2面増加する。

Ⅻ. 巨大石垣石の運搬方法

原城の築城方法や石垣石の運搬方法等は，高度な軍事機密であったので文書としては一切残されていないが，慶長年間の屏風絵や図絵など〔田中（1999）・西ヶ谷（2008）〕に当時の“作業風景”が描かれているので，それらから“採石方法と採石用具”“海上運搬方法と石釣船・筏・帆掛船”“陸上運搬法と修羅・轆轤”等についての概略を知ることができる。

築城当時の原城は，周囲を海と水田に囲まれていたので，石垣石のほとんどが海上運搬班によって“運搬”されて来たと推定される。田中（1999）は《運搬は，山出し－舟積み－浜出し（水上運搬）－水上げ－堀川－修羅引き（陸上運搬）の工程で進められる。》としている。原城の場合は，水揚げ－船積み－浜出し（水上運搬）－修羅引き（陸上運搬）の工程で築城されたのではないと思われる。

原城石垣石最大の石材は、雲仙火山のデイサイトで約4.4トンのものが概算されているので、それくらいまでの巨大石材が修羅引き道路（斜面）を“修羅”や“轆轤”などを使用して引き上げられたものと想像される。原城石垣石のほとんどは浅海底（潮間帯）にあったものを陸上げしている。海中での石垣石は…例えば、陸上で約2.7トンあったデイサイト石垣石は、海中では“浮力”が働くために約1.7トンと軽くなる。海中での浮力を利用した採石・運搬法としては石釣船の屏風絵〔西ヶ谷（2008）〕に示されているが、デイサイト石垣石の場合は約37%軽くなるので、陸上で100人がかりの仕事が海中では63人の力で済むことになる。

Ⅷ. おわりに

原城は浦田から大江にかけて南東―北西500m、北東―南西1200m、標高31.3～5mの阿蘇4火砕流堆積物に被われた中位段丘からなる細長い島であり、西川向～築山～東築山～浦田にかけて浅い海と水田に隔てられた要害の地であった。原城は古くは“志自岐原の城”と呼ばれ、有馬晴信によって1599（慶長4）年に着工され1604年に完成した〔五野井（1980）〕とされている。

原城本丸の石垣は、有馬領内の火山岩を使用して築城されている。この石積み法は一種の野面積みであるが“矩面”から“反り面”下までの約70%位までは石垣石を積み上げ、その上の“反り面”の部分は間詰石を多用している。当初は5000個以上の石垣石が使用されているのではないかと想定していたが、算定して見ると以外に少なく3450個であった。しかし、各石垣には埋没した礎石部があるのでこれらを含めると4000個以上に達するものと思われる。

原城の石垣を取り壊して“石垣石を島原まで運び森岳城築城に使用した”という記述〔渋江（1981）〕があり、またそういう言い伝えも残っているが、原城石垣を調査して見て、“原城本丸”にはほとんどの石垣が備わっていて運び去った形跡がない。鳩山出丸、二の丸、三の丸の石垣を取り壊したのではないかと考えたが、そこには当初から石垣はなかったと言う〔松本（1998）〕。また“森岳城”内の石垣石（礎石を除く）を概観して“原城に特徴的な石垣石（淡赤色デイサイト）”は見いだせないで、このことは“原城―森岳城”築城にまつわる“うわさ”であったものと思われる。

地質学的には、本丸東側の断崖と二の丸東側の崖を構成する大屋層、北有馬層と阿蘇4火砕流堆積物の造る中位段丘面や大江貝層などの再検討が必要であり、大手～駒満～二の丸～蓮池門～本丸～田町御門～天草丸の地史と原城史を散策する時計周りの遊歩道の開通が望まれる。

以上、断片的に行ってきた“記録に残されていない築城史”の1ページであるこの石垣石の調査・研究が“原城築城史”の解明に少しでも役立てば幸いです。

謝辞 本調査を行うにあたり南島原市教育委員会世界遺産登録推進室の松本慎二室長には本丸石垣No.1～29の精密石垣図ならびに岩石試料の提供を受け、多数の石垣写真撮影を許可された。また、城郭や石垣の参考文献をご恵与くださると共に研究上の便宜をおはかり戴いた。ここに銘記して衷心より感謝申し上げます。

XV. 参考文献

- 広島大学文化財学研究室編(2009) すぐわかる日本の城. 東京美術.
- 五野井隆史(1980) 有馬晴信の新城経営と原城について. キリシタン文化研究会報.
- 鎌田泰彦(1990) 出島オランダ商館跡の護岸に用いられた石材の地質学的考察. 長崎県地学会誌, 51号.
- 北垣聡一郎(1987) 石垣普請. 法政大学出版局.
- 松本慎二編(1996) 原城跡. 南有馬町文化財調査報告書第2集, 南有馬町教育委員会.
- 松本慎二編(1998) 原城と日野江城の発掘調査. 長崎県南有馬町監修, 石井進・服部英雄編(2000), 原城発掘. 新人物往来社, pp.29-38.
- 南有馬町教育委員会(1969) 南有馬町郷土誌. 南有馬町教育委員会.
- 南有馬町教育委員会(1998) シンポジウム『原城発掘』. 南有馬町, 南有馬町教育委員会.
- 中山良昭(2007) もう一度学びたい日本の城. 西東社.
- 長崎県南有馬町監修, 石井進・服部英雄編(2000) 原城発掘. 新人物往来社.
- 西ヶ谷恭弘編(2008) 城郭の見方・調べ方ハンドブック. 東京堂出版.
- 岡田要・内田清之助・内田亨編(1988) 新日本動物図鑑 [上], [中]. 北隆館.
- 洪江鉄郎(1981) 鳥原城の話. 昭和堂印刷.
- 田島俊彦(2006a) 長崎県南島原市向小屋の角閃石安山岩質水底火砕流堆積物. 日本地質学会西日本支部第152回例会, 講演要旨集, O4.
- 田島俊彦(2006b) 長崎県南島原市口之津町永瀬および浜海岸に分布する安山岩質火砕岩類と玄武岩. 日本地質学会西日本支部第152回例会, 講演要旨集, P5 (鳥原半島南部の地質図).
- 田中哲雄(1999) 城の石垣と堀. 日本の美術12 No.403, 至文堂.

報告書抄録

ふりがな	はらじょうあと							
書名	原城跡Ⅳ							
副書名	—平成13～20年度の調査— —過年度調査のまとめ—							
巻次	—							
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
執筆者名	松本慎二 橋本幸男 伊藤健司 平尾良光 魯禎玢 田島俊彦							
編集者名	伊藤健司							
編集機関	南島原市教育委員会							
所在地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	〃〃	〃〃			
はらじょうあと 原城跡	ながさきけんみなしまげら 長崎県南島原 しみなみあり まちうらおお 市南有馬町大 えみとう 江名および うらだみとう 浦田名	42214	101-7	32° 37′ 30″ ∟ 32° 37′ 36″	130° 15′ 18″ ∟ 130° 15′ 27″	例言記載	3,800m ²	史跡整備
収録遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
原城跡	城跡	中世 近世		石垣 虎口跡 櫓台跡		国産陶磁器 貿易陶磁器 砲弾・銃弾 十字架 メダイ ロザリオ		国指定史跡

南島原市文化財調査報告書 第4集

原 城 跡 IV

—平成13～20年度の調査—

—過年度調査のまとめ—

平成22年3月31日

発行 長崎県南島原市教育委員会

〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷 株式会社 昭和堂